The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スペイン語前置詞の認知意味論的分析 ―enを中心に―
Author(s)	長縄, 祐弥
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69636
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博　士　論　文

スペイン語前置詞の認知意味論的分析
―en を中心に―

提出年月　2017 年 12 月

言語文化研究科言語社会専攻

長縄祐弥

スペイン語前置詞の認知意味論的分析―enを中心に―

長縄祐弥

本論文は、スペイン語の前置詞enの中心的意味である空間的意味に焦点をあて、前置詞が語彙的意味を有していることは認められるものの、前置詞の意味がそれ自身で表されるのではなく、共起する動詞や名詞などの語句が有する百科事典的知識によってその意味がより明確になることを示しながら、en 自体が表しうる空間的意味の範囲を記述することを目的としたものである.

第 1 章は導入部分にあたり、本論文の目的について述べている. enの空間的意味は「内部」、「表面の上」、「隣接」の 3 つに大きく分けられるが、これらの解釈は動詞だけではなく、共起する名詞の百科事典的知識が影響すると考えられる. これらの 3 つの意味を 1 つの「空間的意味」としてまとめることは可能ではあるものの、3 つの意味に対して、dentro de, sobre, a というそれぞれの表現が交替可能である場合がみられるため、これらの意味を多義的別義として認める立場をとる. これまで、en と dentro de、en と sobre、en と a の意味について比較考察をおこなう研究は存在したが、そこでは en が有する広い空間的範囲をより明確にするために dentro de や sobre が用いられ、これらの表現が en と交替可能な場合には意味的差異はみられないと述べるものがほとんどであった. そこで、「形式が異なれば、意味も異なる」という認知意味論の立場に基づいて、en の空間的意味とそれと交替可能な前置詞(句)を比較し、交替可能な場合の意味的差異およびその要因、そしてそれらを踏まえて en が示しうる空間的意味を体系的に記述するという目的を示した.

第 2 章では、本論文における理論的枠組みとして認知言語学、とりわけ認知意味論を援用することを述べ、そのなかで認知言語学の基本となる考え方であるカテゴリー化、プロトタイプ理論、そして百科事典的知識について概観し、スペイン語においてもこれらの理論が援用可能であることを確認した. さらに、多義語の意味分析に先立ち、メタファーとメトニミーの理論、トラジェクターとランドマークの概念、イメージ・スキーマの概念、そしてこのイメージ・スキーマの概念を批判的に検討している Vandeloise(1991)の主張についても同様に確認した. また本章の後半部では、スペイン語の前置詞の意味について論じている先行研究の記述を概観し、前置詞は語彙的意味を有することを主張した. そして、前置詞の語彙的意味は前置詞と共起する表現の百科事典的知識に応じて変化するという仮説を提示し、そのひとつの根拠となりうる荒川(1992)の日本語の「トコロ性」の概念を確認した.

第 3 章では、スペイン語の前置詞の意味について体系的に記述された López(1972)および Morera Pérez(1988)を確認し、その方法論における問題点を検討した. その問題点のなかでも、前置詞(句)が交替可能である場合には 2 つの表現の間に意味的差異がないものとしている点、また前置詞の意味を共起している動詞の意味にしたがって記述している点を指摘した. 続いて、en の意味を記述している先行研究を観察し、プロトタイプ理論に基づいて en の中心的意味は空間的意味であることを確認した.

第 4 章では、en と a、en と sobre、en と dentro de のペアをそれぞれ比較し、2 つの表現の間にみられる意味的差異を考察した. まず最初に a と en をとりあげ、主に先行研究の記述をもとに a が位置を表すときの特徴を観察した. a は移動動詞と共起することで基本的に「方向」を表す前置詞であるが、移動を表さない動詞と共起する場合には「隣接」の意味で解釈される. この意味で用いられる際に共起するランドマークは限定的であることを確認したうえで、共起しやすいランドマークのなかから平面を有する名詞である mesa『テーブル』、入り口や出口を表す名詞である puerta『ドア』、隣接することで利用することを示唆する名詞である piano『ピアノ』や volante『ハンドル』、そして作用性を有する名詞である sol『日光』や fuego『火』という 4 種類の名詞を選択し、en と共起する場合と a と共起する場合でその差異を比較しながら考察をおこなった. その結果、a は本来の「方向」の意味から、移動を表さない動詞と共起することで「隣接」の意味を表すようになり、そこからメトニミー的意味が拡張し、共起する名詞を利用することで何らかの動作をおこなう目的が示唆されるようになったことを明らかにした. このように、「方向」から「隣接」、「隣接」から「メトニミー」と意味間の関連を記述しながら、mesa や puerta といった名詞が a と共起可能である要因について考察した. そのうえで、a と en の差異について、en はもっぱら空間的意味が表される一方で、a は空間的意味に加えてメトニミー解釈がなされることが多いと述べ、これは共起するランドマークに対する百科事典的知識によるものであると主張した. 続いて、en と sobre について考察をおこなった. 最初に先行研究の記述を確認した後、en と sobre のランドマークとして cama『ベッド』、silla『椅子』、mesa『テーブル』、suelo『床』を選択し、2 つの前置詞が交替可能である場合における意味的差異を観察した. cama, silla, mesa については、それぞれのランドマークに対してふさわしい行為、つまりプロトタイプ的である場合には en と共起しやすく、可能ではあるがふさわしくない行為、つまり非プロトタイプ的である場合には sobre と共起しやすいことが観察された. 一方で、suelo は、先の 3 つの名詞とは異なり、en と共起する例の数が sobre に比べて著しく多く、sobre と en の間に大きな意味的差異が認められないことがコーパスによって明らかになった. これは suelo が mesa などとは異なり、特定

の用途が想定されないものであるため、プロトタイプ的な行為が見いだしにくいことが要因であると考えられる. 最後のペアである en と dentro de の意味的差異についても、これまでと同様の手法で考察をおこなった. ここでも先行研究の記述を確認した後、日本語の「中」の概念をもとにスペイン語の「中」の概念について観察をおこない、日本語の「～に」と「～の中に」の対立がスペイン語の en と dentro de の対立に類似していることを指摘し、3 次元の名詞に対しては「中」や dentro de を共起させなくても「内部」の意味が表れることが多いことを確認した. そして、en と dentro de の意味的差異について考察をおこなっている Hernández(2013)の記述を確認し、本論文ではこれとは別の観点からの考察、具体的には、en と dentro de の使用頻度およびその意味的差異について、ランドマークとして用いられている名詞の百科事典的知識と、共起している動詞やその他の表現が見合うものであるかどうかを観察した. コーパスによる検証の結果、空間的意味で用いられる dentro de の出現数は en の出現数に比べずっと少ないことが明らかになったが、これは「中」の概念がすでに名詞に含まれていることが多いこと、そして dentro de は空間的意味よりも時間的意味で用いられることが多いことが要因としてあげられる. しかしながら、出現数が少ないことと意味的差異がないことは等価ではないため、本論文では agua と coche をランドマークとして選択し、en と dentro de で意味的差異がみうけられる場合があることを示した. これら 2 つの名詞に関しても dentro de よりも en と共起する例が多く観察されたものの、ランドマークに対する行為がプロトタイプ的である場合には en と共起しやすく、そうでない場合には dentro de と共起しやすいことが観察された.

第 5 章では、前章での考察に基づき、本来 en がどのような空間的意味を有しており、それがどのように明確になるか、さらに類義語と交替可能な場合はどのような場合であるのかを考察した. 前置詞 en はランドマークに対してトラジェクターを位置づける語であり、その空間的意味は 1. 隣接、2. 表面の上、3. 内部の 3 つを有していると定義したうえで、この 1～3 の en の意味を明確にする主な要素には、en を要求する動詞、ランドマークの大きさと形状、ランドマークとトラジェクターに対する百科事典的知識があることを示した. en を要求する動詞にはその動詞の意味に「内部」の意味が含まれていることが多いため、共起する en に意味があるというよりもむしろ動詞がその意味を担っており、en の語彙的意味は希薄になると考えられる. これまでの先行研究ではこのように、動詞の意味にしたがって前置詞の意味が記述されることがほとんどであった. そこで本論文では、動詞以外の要素としてランドマークの大きさ、すなわちランドマークが 3 次元か 2 次元かによって意味が変化しうることを述べた. また、ランドマークの形状も大きな要素であり、ランドマークが平面的であれば en が、モノ的であれば sobre が共起する傾向があることを明

らかにした．ただし、これらの要因だけでは en の意味が明確にならない場合もあり、その場合にはランドマークとトラジェクターに対する百科事典的知識によって en の意味が変化することを指摘した．一方で、トラジェクターとランドマークが接触しない場合には en は隣接を表すが、このとき a が交替する場合がみられる．しかしながら、隣接を表す a と共起可能なランドマークは限定的であり、その場合には概してメトニミー的解釈がなされ、隣接しているランドマークによって想起される行為が表されることが多い．

最後の第 6 章では総括をおこない、動詞の意味だけではなく、前置詞と共起するランドマークやトラジェクターの性質によっても表される意味が変化しうることを本論文では主張した．これに加えて、en の類義語とされる前置詞（句）は en と常に交替可能であるとは限らず、交替する場合には第 5 章で観察したような、ランドマークの大きさと形状、ランドマークとトラジェクターに対する百科事典的知識などといったさまざまな要因が考えられ、さらには同じ空間的位置を表している場合であっても意味差異がみられることを本論文の結論とした．

Análisis semántico-cognitivo del uso de las palabras polisémicas de la lengua española combinadas con la preposición en

Yuya NAGANAWA

En esta tesis, nos centramos en analizar el sentido espacial de la preposición en, una de las palabras más polisémicas del español. Concretamente, fijamos la red de sentidos espaciales de dicha preposición partiendo de la hipótesis de que no es la preposición en sí la que representa diferentes valores intrínsecamente. Por el contrario, consideramos que es el conocimiento enciclopédico relativo a las palabras que aparecen junto a en —como verbos y sustantivos— el que define el sentido espacial de la preposición. Aun así, admitimos que las preposiciones tienen un valor léxico además de uno funcional.

El primer capítulo de esta tesis se corresponde con la introducción, en que establecemos el objetivo de nuestra investigación y describimos la polisemia de la preposición en. El significado espacial de en se clasifica en tres significados relacionados: interioridad, superficie y contigüidad. A su vez, podemos unificar los significados relacionados como "significado espacial"; sin embargo, como los tres se pueden expresar no solo con en, sino también con dentro de, sobre y a, respectivamente, en un contexto específico, admitimos que cada significado relacionado es independiente. En esta tesis, basándonos en la teoría de la semántica cognitiva, que parte de la máxima «si la forma es distinta, también el sentido es distinto», comparamos el sentido espacial de en con sus expresiones y preposiciones sinónimas. Además, examinamos las diferencias de sentido cuando en y el sinónimo pueden alternar en un contexto, así como los factores que propician dicha alternancia.

A continuación, en el segundo capítulo, exponemos el marco teórico de esta tesis, a

saber, la lingüística cognitiva y sus conceptos importantes: la categorización, la teoría de prototipos y el conocimiento enciclopédico. A su vez, para analizar las palabras polisémicas, nos servimos de la teoría de la metáfora y la metonimia conceptual y de las nociones esquemas de imagen, trayector y landmark". Finalmente, resumimos los trabajos más relevantes que defienden el valor léxico de las preposiciones en español.

En el tercer capítulo, nos ocupamos de la preposición en. En primer lugar, buscamos su etimología. Luego, identificamos los puntos problemáticos de los estudios de López (1972) y Morera Pérez (1988), quienes tratan de sistematizar los sentidos de las preposiciones. Uno de los mayores problemas que se detectan en estas obras es que, cuando dos preposiciones o locuciones preposicionales pueden alternar en un contexto, no hay diferencias semánticas entre ambas. Otro conflicto frecuente en dichos estudios tiene que ver con la definición que en ellos se aporta de las preposiciones, definición basada en el sentido de los verbos que tienden a aparecer con ellas. Cerramos este capítulo analizando algunas investigaciones que versan sobre el sentido de en; asimismo, confirmamos que el significado principal de dicha preposición es el espacial según la teoría de prototipos.

En el cuarto capítulo, comparamos los sentidos de en y a; de en y sobre y de en y dentro de. Además, aclaramos la diferencia semántica que existe entre cada uno de los miembros de los pares contrastados. En primer lugar, examinamos el sentido locativo que posee la preposición a en comparación con el de la preposición en. Insistimos en que del valor de desplazamiento de a se extiende el de contigüidad con respecto a una entidad, aunque este último uso está bastante restringido en la actualidad. Además, el valor locativo de la preposición de a aparece debido a un proceso metonímico. Por ejemplo, se sienta al piano se puede implicar que interpreta el piano, esto es, una actividad siempre

se desarrolla en una ubicación, por lo que se puede acceder a la actividad a través de la ubicación. Sin embargo, no se puede utilizar a siempre para expresar contigüidad. Si optamos por en en vez de a, esta última preposición no tiene el sentido metonímico, sino que solo destaca el sentido espacial. Tal vez algún ejemplo sería ilustrativo y ayudaría a tu lector.

A continuación, examinamos los sentidos de en y sobre. En este trabajo, elegimos cuatro sustantivos como landmark: cama, silla, mesa y suelo. Se ha comprobado que, si las acciones de verbos para los tres primeros landmarks apuntados son adecuadas, aparece en con cada sustantivo; en cambio, si se pueden realizar acciones pero son inadecuadas, aparece sobre. En cuanto al cuarto sustantivo, suelo, en aparece de forma mucho más frecuente que sobre. En este caso, consideramos que el suelo es un objeto con una superficie mayor y sin usos específicos como otros sustantivos (como cama, silla y mesa) que sí permiten alternar en y sobre dependiendo de la acción en la que se vean implicados.

Por último, antes de contrastar los sentidos de en y dentro de, nos centramos en el concepto de la "interioridad". Esta noción hace referencia a que algunos sustantivos españoles en sí ya presentan el rasgo de "tridimensionalidad" en comparación con la "bidimensionalidad". Así pues, si un sustantivo manifiesta "interioridad", como sucede con caja o estación, no hace falta utilizar dentro de para referirse al interior de dichos espacios. Por esta razón, el sentido espacial de dentro de no aparece tanto como en con los sustantivos que tiene interioridad. Sin embargo, no creemos que un pequeño número de ejemplos de esa locución preposicional signifique que no haya diferencia semántica entre las dos expresiones; por ello, elegimos dos sustantivos para poner de relieve los puntos divergentes entre ambas: agua y coche. Tras nuestro estudio, concluimos que, si

los actos para cada landmark son prototípicos, aparece en con estos dos últimos sustantivos; en cambio, si no son prototípicos, aparece dentro de.

A continuación, en el quinto capítulo, definimos los sentidos espaciales de la preposición en. Además, demostramos en qué casos dicha preposición precisa de sus valores espaciales y cuándo puede alternar con sus sinónimos. A su vez, determinamos que en es una preposición que sitúa un trayector en un landmark y que tiene tres sentidos: interioridad, superficie y contigüidad. Pensamos que hay ciertos factores que determinan la selección del significado más adecuado de en en un contexto: los verbos que exigen en, la forma de los landmarks y el conocimiento enciclopédico del trayector y el landmark. En nuestro trabajo, nos centramos en las muestras en que los verbos no exigen en. Tras su análisis, concluimos que, en tales casos, lo más importante es el conocimiento enciclopédico, que lleva a precisar el sentido espacial o a elegir una preposición o locución prepositiva adecuada y parecida a en.

Por último, en el sexto capítulo, hacemos la síntesis de esta tesis.

目次

1．はじめに……1

2．理論的枠組み……5

2.1．はじめに……5

2.2．認知言語学（認知意味論）における基本的な概念……5

2.2.1．カテゴリー化……6

2.2.2．プロトタイプ理論……6

2.2.3．百科事典的知識……9

2.3．多義語の分析にあたって……12

2.3.1．多義とは……12

2.3.2．メタファー……16

2.3.3．概念メタファー……18

2.3.4．メトニミー……20

2.4．前置詞の意味分析に有用とされる概念……22

2.4.1．トラジェクターとランドマーク……23

2.4.2．イメージ・スキーマ……25

2.4.3．前置詞の幾何学的意味と機能的意味……27

2.5．前置詞の意味の分析にあたって……31

2.5.1．認知言語学的観点から見た前置詞の意味……31

2.5.2．スペイン語における前置詞の意味……32

2.5.3．百科事典的知識と前置詞の意味……34

2.5.4．「トコロ性」と前置詞の意味……36

3．先行研究……39

3.1．はじめに……39

3.2．López(1972)……39

3.3．Morera Pérez(1988)……43

3.4．前置詞 en の空間的意味に関する先行研究……47

3.4.1．Moreno y Tuts (1998)……47

3.4.2. RAE (2009)……49
3.4.3. García Yebra (1988)……49
3.4.4. Fernández López (1999)……51
3.4.5. Slager (2010)……51
3.4.6. Bruyne (1999)……52
3.4.7. Salvá (1988)……52
3.4.8. 先行研究におけるenの意味の考察……53

4. enの類義語とされる前置詞あるいは前置詞句との比較考察……56
4.1. はじめに……56
4.2. en の空間的意味―多義的別義の認定……56
4.3. enとその類義語の意味的差異の分析にあたって……59
4.4. enとa……60
4.4.1. 先行研究……61
4.4.2. 隣接を表すa……64
4.4.2.1. sentarse a la mesaとsentarse en la mesa……67
4.4.2.2. a la puertaとen la puerta……71
4.4.3. 隣接することで利用を示唆する名詞……79
4.4.4. 隣接する名詞が作用性を有する場合……84
4.4.5. enとaの意味的差異……87
4.5. enとsobre……89
4.5.1. 先行研究……92
4.5.2. 実例検証……97
4.5.2.1. cama……97
4.5.2.1.1. 定義……97
4.5.2.1.2. CREAによる検証……98
4.5.2.2. silla……101
4.5.2.2.1. 定義……101
4.5.2.2.2. CREAによる検証……101
4.5.2.3. mesa……104

4.5.2.3.1. 定義.....104
4.5.2.3.2. CREA による検証.....105
4.5.2.4. suelo.....116
4.5.2.4.1. 定義.....116
4.5.2.4.2. CREA による検証.....117
4.5.3. en/sobre と sobre/encima de.....121
4.5.4. en と sobre の意味的差異.....125
4.6. en と dentro de.....127
4.6.1. 先行研究.....127
4.6.2. トコロ性と「中」.....130
4.6.3. スペイン語の meter と「中」.....132
4.6.4. Hernández (2013).....135
4.6.4.1. en el país と dentro del país.....137
4.6.4.2. en el restaurant と dentro del restaurant.....139
4.6.4.3. en el avión と dentro del avión.....141
4.6.4.4. Hernández (2013)の結論.....142
4.6.5. 実例検証.....144
4.6.5.1. agua.....147
4.6.5.1.1. 定義.....147
4.6.5.1.2. agua が en および dentro de と共起する場合の特徴.....148
4.6.5.2. coche.....153
4.6.5.2.1. 定義.....153
4.6.5.2.2. coche が en および dentro de と共起する場合の特徴.....154
4.6.6. en と dentro de の意味的差異.....157
4.7. en とその類義語との差異.....159
4.7.1. en と a.....159
4.7.2. en と sobre.....160
4.7.3. en と dentro de.....162

5. 前置詞 en の意味範囲に関する考察.....165

5.1. はじめに.....165
5.2. enの意味を明確にする要素.....165
5.2.1. 動詞がenを要求する場合.....165
5.2.2. ランドマークの形状.....168
5.2.3. トラジェクターとランドマークの関係.....170
5.2.4. ランドマークと動詞の関係.....174
5.3. enの意味範囲.....176

6. 総括.....185
6.1. 第1章のまとめ.....185
6.2. 第2章のまとめ.....185
6.3. 第3章のまとめ.....187
6.4. 第4章のまとめ.....188
6.5. 第5章のまとめ.....194

7. 参考文献.....196

8. 資料体.....200

スペイン語前置詞の認知意味論的分析―en を中心に―

長縄祐弥

1. はじめに

本論文は、スペイン語の前置詞 en の中心的意味であると考えられる空間的意味に焦点をあて、前置詞が語彙的意味を有していることは認められるものの、前置詞の意味がそれ自身で表されるのではなく、共起する動詞や名詞などの語句が有する百科事典的知識によってその意味がより明確になることを示しながら、en 自体が表しうる空間的意味の範囲を記述することを目的としたものである. 前置詞のなかで最も多義的であり、さらに使用頻度の高い語は de であると考えられるが、この前置詞は語彙的要素よりも機能的要素が多い語である. それに対して、前置詞 en もまた使用頻度が高く、多義的な前置詞であるものの、de に比べ空間的意味を多く有しており、語彙的要素が多く観察される. en が多義語であることはこれまでの先行研究で述べられているものの、en の空間的意味の多義性に関しては「表面の上」と「中」の意味を有することのみに記述をとどめている研究がほとんどであり、これらの意味がどのような要因で選択されるのか考察をおこなっている研究は管見によれば乏しい. さらには en が空間的意味を表す場合の類義語とされる sobre や dentro de などの前置詞あるいは前置詞句との用法の比較を考察している研究も同様に数少なく、en の中心的意味である空間的意味のみに限定しても、いまだ en の意味に関する研究は不十分であると思われる.

先に述べたように、前置詞 en はさまざまな意味を有する多義語である. たとえば Espinosa Elorza(2010)は図 1 のように英語の前置詞 in の意味ネットワークをあげ、前置詞 en の意味が(a)～(g)の意味におおよそ対応している様子を述べている.

(e) medio
↑
(d) área ← (a) recinto espacial → (b) tiempo
↓
(c) estado de recinto
↓
(e) modo como estado
↓
(f) circunstancia como estado
↓
(g) causa como estado

図 1　前置詞 in の意味ネットワーク

(a) recinto espacial: en la estación 『空間的範囲: 駅で』

(b) tiempo: en una semana 『時間: 1週間で』

(c) estado como recinto: en quiebra 『状態: 破産状態で』

(d) área: especialista en sintaxis, rico en carbón 『分野: 統語論の専門家、石炭に富んだ』

(e) modo, medio: en voz alta, en inglés 『方法、手段: 大きな声で、英語で』

(f) circunstancia: negociar en sintonía 『状況: 均衡のとれた取引をおこなう』

(g) causa: mucho gusto en conocerlo 『原因: 彼と知りあって大変うれしい』

—Espinosa Elorza (2010: 199)[1]

Espinosa Elorza(2010)のあげる英語の前置詞 in の例とスペイン語の前置詞 en の意味は完全に一致しないと思われるものの、実際に en はさまざまな意味を有していると考えられ、この前置詞の中心的意味と考えられる空間的意味にのみに限定しても、(1)～(3)のようにその下位区分において多義性が観察される. そこで、本論文では en の多義性を分析するよりもむしろ「空間的意味を表す en」の多義性を分析することに重点を置く.

(1) La canica está en la caja.[2] 『ビー玉は箱の中にある. 』

(2) El libro está en la mesa. 『本はテーブルの上にある. 』

(3) El chico está en la puerta. 『少年はドアのところにいる. 』

(1)～(3)で用いられている en はどれも空間的意味として解釈されるが、それぞれが表す空間的位置は異なる. すなわち、(1)は「箱の中」、(2)は「テーブルの上」、(3)は「ドアのところ」とされるのが一般的な解釈である. ここでいう一般的な解釈とは、たとえば(1)は「箱の上」という解釈も可能であるにもかかわらず、「箱の中」という解釈が選択されることを意味する. このような意味的差異が生じる理由を分析する前に、(1)～(3)の意味を多義としてとらえ、それぞれを異なった意味として認定してよいのか、あるいは単義であり、それが文脈によって変容しているだけであるのかを考察する必要がある. この問題に関しては以降で議論をおこなうが、本論文では籾山(1993)が多義的別義の認定基準として提唱している「類義語の違い」を根拠として、前者の立場、つまり多義であるという立場に基づいて意味の分析をおこなう. 実際に、(1)～(3)のそれぞれの en に対応する類義語が存在し、(4)～(6)のように書き換えることが可能である.

[1] 以降、特にことわりがなければ、『 』内の日本語訳は筆者によるものである.
[2] 引用元が記されていない例は、筆者による作例である. なお、作例はすべてネイティブチェックを受けている.

(4) La canica está dentro de la caja.

(5) El libro está sobre la mesa.

(6) El chico está a la puerta.

dentro de, sobre, a はそれぞれ異なる空間的意味を表す前置詞あるいは前置詞句であるため、籾山(1993)が提唱する認定基準を満たすと思われ、en の空間的意味のなかにも多義性が観察されることがいえそうである. さらに、このように交替可能であることが観察される以上、「形式が異なれば、意味も異なる」という立場をとる認知言語学の概念に基づくと、en とそれに対応する類義語の間に何らかの差異がみられると考えられる. このような交替は en の空間的意味が曖昧であるときに、その相対的位置を明確にするためにおこなわれると先行研究において述べられている. つまり、単に空間的位置の差異のみで前置詞あるいは前置詞句が選択されているのである. たとえば、Cifuentes Honrubia(1996)は en, sobre, encima de それぞれの空間的意味における差異を以下のようであると述べる.

encima de: la relación cerrada 『閉じた関係』

sobre: la relación cerrada cohesionada (una superficie no deíctica)
『統合された閉じた関係(直示的でない表面)』

en: la relación cerrada contención (en el interior de los límites de)
『包含された閉じた関係(境界の内部)』

—Cifuentes Honrubia (1996: 114) 筆者により編集

この差異については第 4 章で詳細に扱うが、Cifuentes Honrubia(1996)はこれら 3 つの表現が異なった空間的位置を表すことを示したうえで、sobre と encima de が交替可能である場合における空間的意味以外の差異を述べている. しかしながら、en と sobre あるいは en と encima de についてはその意味的差異に言及していない. そこで本論文では、en の空間的意味とそれと交替可能な前置詞あるいは前置詞句を比較考察し、交替可能な場合の差異、およびその要因、そしてそれをふまえて en が示しうる空間的意味を体系的に記述する.

本論文の第 2 章以降の構成は以下のとおりである. まず、第 2 章では多義語の分析および前置詞の意味を考察するにあたって必要な理論的枠組み、すなわち認知意味論における理論を先行研究をもとに概観する. 具体的には、カテゴリー化、プロトタイプ理論、そして本論文において最も重要な概念であると考えられる百科事典的知識について確認し、さらに、多義語とは

何であるのかを同音異義語と比較しながら定義づけたのち、多義語の意味分析に必要な概念であるメタファーとメトニミーについて概観する. 最後に、前置詞の意味分析をおこなうために有用とされるトラジェクターとランドマーク、そしてイメージ・スキーマについてまとめる. 次に、第 3 章ではスペイン語の前置詞の意味が体系的に記述されている López(1972)および Morera Pérez (1988)を確認し、そして前置詞 en の空間的意味について記述している先行研究を確認する. 続いて、第 4 章では en の空間的意味に多義的別義が存在することを確認したのち、en とその類義語とされる前置詞あるいは前置詞句 a, sobre, dentro de のそれぞれと比較することで、それらの表現の間に観察される意味的差異を明らかにする. そして、第 5 章では en がどのような条件において出現し、どのような意味を有するのか第 4 章で得られた各類義語との比較をまとめながら考察をおこなう. 最後に第 6 章では総括をおこなう.

2．理論的枠組み

2.1. はじめに

本論文では大きな理論的な枠組みとして認知言語学、とりわけ認知意味論における理論を援用するが、ここで認知言語学とはどのような学問分野であるのか、先行研究の記述をもとに確認する.「認知」とはものを見たり聞いたり感じたりする感覚の働きと、それをもとにして記憶、学習、判断をする精神の働きを総称した言葉であり、「認知言語学」はその認知の働きと言語とが密接に関係しているととらえる言語学の一分野である. 言い換えれば、人が身体を基盤として頭や心によっておこなう営みが言語を習得あるいは用いる基盤であるとする立場をとる言語学の一分野が認知言語学とよばれている. そのなかに位置する認知意味論とは、松本(2003a: 3)によれば、『意味の問題を知覚や認識との関連で捉える意味理論』である. そして、この理論における重要な考え方として、松本(2003a: 3)は(1)意味を言語使用者の外界認識の産物としてとらえる、(2)言語的意味と百科事典的知識の無理な区別をしない、(3)意味に経験などからの動機づけを求める、という 3 点をあげている. 本論文では認知意味論の理論に基づいて意味分析をおこなうが、本章では、認知言語学の基本となる考え方、とりわけカテゴリー化、プロトタイプ理論について概観したのち、本論文において最も重要な概念であると考えられる百科事典的知識について記述する. そして、多義語を分析するにあたり、まず同音異義語と比較しながら多義語とは何であるか定義づけたのち、多義語の意味分析に必要な概念とされるメタファーとメトニミーについて概観する. 続いて、前置詞の意味分析をおこなうために有用とされるトラジェクターとランドマーク、そしてイメージ・スキーマとイメージ・スキーマに対する批判的な考察をおこなっているVandeloise(1991)についても先行研究をもとに確認する. これらの概念を概観するなかで、語の意味は人間の経験的知識や経験領域によって想起されるものであることが確認できるものと思われる. なお本章では、松本(編)(2003)と辻(編)(2013)の記述を確認しながら、スペイン語における枠組みを理解するために Ibarretxe-Antuñano y Valenzuela(dirs.)(2012)および Cuenca y Hilferty(1999)の記述を中心にまとめる.

2.2. 認知言語学(認知意味論)における基本的な概念

本節では認知言語学とりわけ認知意味論における基本的な概念であるカテゴリー化、プロトタイプ理論、そして百科事典的知識について概観する.

2.2.1. カテゴリー化

認知意味論では、意味を人間の外界認識の産物であると考えるが、この考え方によれば、語の意味は外界の指示物を決定するものというよりも、認識された外界をカテゴリー化したものであるといえる(松本 2003a: 5). このカテゴリー化とは、『事物や事象の同定(identification)や差異化(differentiation)を行い、共通性や関係性に従って般化(generalization)することで、諸事例を同類であると判断し、まとめる認知過程』(辻(編) 2013: s.v. カテゴリー化)を指す. たとえば、自然数のうち「2 で割り切れる数」を偶数とよび、「2 で割り切れない数」を奇数とよぶように、何らかの共通性に基づいて人間はカテゴリー化をおこなっているとされる.

アリストテレスの古典的カテゴリー観では、あるカテゴリーの成員になるための必要十分条件が存在し、それを満たしていれば、そのカテゴリーに属していると判断される. よくあげられる例に「鳥」カテゴリーがある. このカテゴリーに属するためにはたとえば、(1)空を飛ぶ、(2)翼がある、(3)羽毛がある、(4)足は 2 本、(5)卵を産むといった必要十分条件を満たす必要があると考えられていた. 当然ながら、これらを満たすスズメやツバメは「鳥」カテゴリーに属すが、これらを満たさない鳥は「鳥」カテゴリーに属さないものと考えられてしまう. たとえば、ペンギンは鳥とされるべきであるものの、(1)と(2)に関しては満たしているとはいいがたく、一方でダチョウは陸を走り、飛べないことから(1)を満たしているとはいえないため、鳥であるにもかかわらず、「鳥」カテゴリーの要件を満たさない. このようにカテゴリーに属する条件を無批判に明確にしてしまうと不都合が生じることもあるため、認知意味論ではプロトタイプ理論が採用され、そのカテゴリーに属する条件を満たす数や程度にしたがって、典型的なものは中心的な例として位置づけられ、そうではない、そのカテゴリーの境界付近に属するようなものは周辺的な例として位置づけられる. 次項では、このプロトタイプ理論について詳述する.

2.2.2. プロトタイプ理論

プロトタイプ理論(teoría de prototipos)は、心理学者 Eleanor Rosch によって提唱されたものであり、認知意味論における基本概念のひとつである. 認知言語学におけるプロトタイプとは「カテゴリーにおける典型例」のことを指すとされた. たとえば「家具」といえば、ふつうはイスやテーブルなどの代表例が思い浮かべられるように、その典型例とそれとの類似性によってカテゴリーを形成しようとする考えがプロトタイプ理論である.

スペイン語においてもこの理論は適用されると考えられており、Valenzuela et al.(2012)は、プロトタイプの根底にある考えを以下のように説明し、物事や出来事におけるさまざまな特徴が

それ自身の中で構造化され、互いに関連していると述べている．ここでは、鳥の翼を例としてあげており、翼と最も密接な関係にあるのは皮膚ではなく、羽であると述べている．

> Esta dimensión se basa en el hecho de que las estructuras de conocimiento que tenemos, es decir, los atributos que caracterizan a las cosas y los eventos del mundo que nos rodean, están estructurados y relacionados entre sí. Rosch (1978) nos da un ejemplo muy ilustrativo de lo que realmente significa que existan estas estructuras correlaciones. Si pensamos en un elemento como un ala de pájaro, lo que se va a relacionar más con el ala son las plumas y no la piel.
>
> 『この様相（プロトタイプ）はわれわれが有する知識の構造、つまりわれわれをとりまいている世界の物事や出来事に特徴づけられる特性が、それ自身の間で構造化され、関連づけられているという事実に基づいている．Rosch(1978)はこの相関関係にある構造が実際に存在していることを示すためにとても明解な例をあげている．鳥の翼のようなひとつの要素について考えたとき、翼と最も関連づけられるものは羽であり、皮膚ではない．』

—Valenzuela et al. (2012: 55–56) 脚注は筆者による

また、プロトタイプの特徴について、Valenzuela et al.(2012)は Rosch[3]の記述を引用し、以下のようにも述べている．

> Según Rosch, un prototipo es el elemento de una categoría que más atributos comparte con el resto de los miembros de la misma, el más representativo y distintivo de la categoría, el que se menciona primero y con mayor frecuencia en tareas de listado de miembros de una categoría y el que los niños adquieren antes.
>
> 『Rosch によれば、プロトタイプとはそのカテゴリーに属する他の成員と最も多くの特徴を共有しているカテゴリーの要素、カテゴリーの中で最も代表的かつ特徴的な要素、最初に、そして一番頻繁に言及される要素、そして子どもが以前から習得している要素のことである．』

—Valenzuela et al. (2012: 56)

プロトタイプはカテゴリーにおける最も典型的な例のことであり、カテゴリーにおいて最も代表的かつ特徴的な要素、最初にかつ頻繁に思い出される要素、そして子どものときに習得した要素によって形成される．このプロトタイプの最も有名な例は、前項でも触れたが、鳥(AVE)のカテゴリーである．たとえば、「鳥」について考えてみると、canario『カナリア』、gorrión『スズメ』のような鳥が連想されると思われるが、これは、「鳥」カテゴリーを描写するすべての特徴、具体的には「くちばしと翼を持っている」、「飛ぶことができる」、「足が 2 本ある」、「卵を産む」などといった条件を満たすと考えられるためである．このとき、典型例とされるカナリアやスズメが「鳥」カテゴ

[3] Rosch (1978) «Principles of categorization», en E. Rosch y B.B. Lloyd (eds.) Cognition and categorization, Lawrence Erlbaum, 27-48.

リーの基準となり、この基準にしたがって、他の例がこのカテゴリーに属するか否か、そして属するのであれば中心例に近いものなのか、あるいは周辺例なのかを判断することが可能となる. たとえば、以下の図 2 にみられるように periquito『インコ』や paloma『ハト』は中心例に近いとされるが、一方で古典的カテゴリー観では「鳥」カテゴリーには属さないと考えられたペンギン pingüino『ペンギン』や avestruz『ダチョウ』はカテゴリーの境界付近に位置する例とされる.

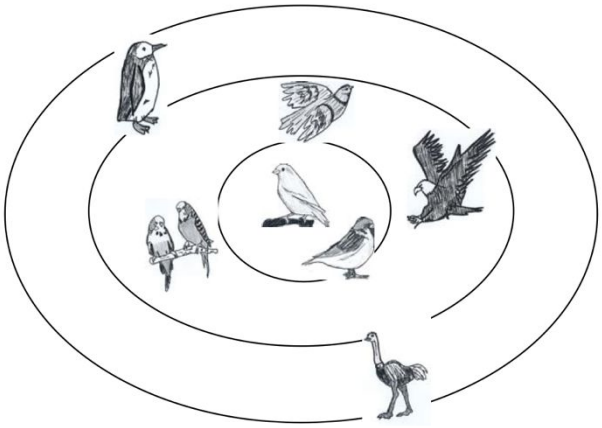

図 2　「鳥」カテゴリー[4]

このように、カテゴリー化をおこなうとプロトタイプ効果とよばれるものが生じる. その効果といわれているもののひとつに、ある例が中心に位置すればするほど、すなわちプロトタイプに類似すればするほど、その例がカテゴリー成員としてより早く認識されることがあげられる. たとえば、前述の「鳥」カテゴリーでは、ペンギンよりもカナリアのほうが思い浮かべることが容易であるとされる. また、一般化が典型例から周辺例に進むこともプロトタイプ効果のひとつであるとされている.

しかし、先にあげた鳥のカテゴリーのように典型例と周辺例が存在する場合もあれば、「偶数」や「奇数」のように、一見するとカテゴリー内でプロトタイプを有しないものもあるように思われる. たとえば、「奇数」は「2 で割りきることのできない自然数」であり、必要十分条件を満たし、このカテゴリーに含まれるものはすべて例外なく奇数である. しかしながら、奇数の例として最もあげられやすい数字は 1 や 3 であり、503 ではないことがいわれている. つまり、奇数のカテゴリーにおいて 1 や 3 のように奇数らしいものと 503 のように、そうでないものが存在しているのである (Cuenca y Hilferty 1999: 41).

このプロトタイプ理論は、主に多義語の意味分析、とりわけ多義語の中心的意味を定めるた

[4] Valenzuela et al.(2012: 57)

めに応用されるが、これは多義語の意味ネットワークを構築しようとする際、まず最初にどの意味が中心的意味かを定めることが必要なためである. 本論文においても en の中心的意味が空間的意味であることを、プロトタイプ理論を適用して定めるが、これに加えて、語が有する百科事典的知識に対してもプロトタイプ理論を適用すると、さまざまな百科事典的知識もまた中心的なものと周辺的なものに分類可能であると思われる. たとえば、イスであれば「ヒトが座る」ことは中心的な知識、「ヒトが上に立つ」ことは周辺的な知識に属すると考えられるが、このとき前者をプロトタイプ的な行為、後者を非プロトタイプ的な行為と定めることで、その名詞に対する行為がプロトタイプ的か非プロトタイプ的かによって前置詞の選択に影響がおよぶと思われる. この百科事典的知識に関しては次項で詳述する.

2.2.3. 百科事典的知識

百科事典的知識については、その先駆的研究 Haiman(1980)にはじまり、Langacker (1987)や Evans and Green(2006)において扱われているが、それらをさらに発展させた籾山(2009: 5)の定義にしたがえば、『ある語(に相当する言語単位)の百科事典的意味とは、その語から想起される(可能性がある)知識の総体のことである』[5].

認知言語学において、語の意味を観察する際にはこの百科事典的知識がとりわけ重視される. 認知意味論の理論が提唱される以前は、真理条件意味論において観察される考え方のように、指示対象あるいは真理条件が同じであれば意味は同じであるととらえられていたが、認知言語学はそれとは異なる意味観を有している. つまり、認知言語学では「意味」を「概念化」という心的経験としてとらえ、言葉は「意味」を内包するのではなく、言語主体に対してさまざまな概念、知識、信念の体系のネットワークへのアクセスを可能にし、心的レベルでのダイナミックな意味構築を引き起こすための手段にすぎないという立場をとる. ここでいう「概念化」とは、概念内容だけでなく、その概念内容がどのような「立場」でとらえられているのかを含むものである. こうして「意味」は「概念化」であると定義され、とらえ方の違いが言語表現に反映されるため、認知言語学では意味と形式に関して、「形式が異なれば意味も異なる」と考える立場をとる(野村 2003: 43–44).

また、認知意味論が提唱される以前は言語的意味[6]と百科事典的知識を区別すべきであると考えられており、言語的意味に属さない意味、すなわち文脈的意味や文化的意味などは意味論では扱わず、語用論の問題とされていた. しかし、認知意味論はこのような考え方を採用せず、

---

[5] 引用内における「百科事典的意味」は百科事典的知識と同義であると考えられる.
[6] 辞書的意味ともよばれる.

意味論と語用論の間に明確な差異を設けないこと、言い換えれば、言語的意味と百科事典的知識を区別しないという考えに基づいて語の意味を記述することを主張している. こうした百科事典的知識が有効である例として、Valenzuela et al.(2012)は soltero[7]『独身』と ballena『クジラ』の例をあげている. まず最初の例である soltero について、この語は DRAE(2014: s.v. soltero)では«que no se ha casado»[8]『結婚していないこと』と単純に定義されているが、実際にこの語が用いられる際には以下のような soltero に関する、より明確な概念が想起される.

> Una posible descripción correspondería a un varón heterosexual, ya pasada la edad típica de casarse, con alto nivel adquisitivo y con un cierto éxito entre el público femenino, que frecuenta fiestas nocturnas y conduce un coche descapotable, etc.
>
> 『soltero の概念を表す際にあげられることとして、異性を愛する男性であること、結婚適齢期を迎えていること、高い購買力があること、夜のパーティーによく行き、幌つきのオープンカーを運転しているなど、女性たちにある程度受け入れられていることがある. 』
>
> —Valenzuela et al. (2012: 50)

以上の概念はスペイン語の soltero に関することであり、スペイン語圏の文化や慣習が反映されているが、このような概念はその国の文化や習慣によって異なり、たとえば英語の bachelor や日本語の「独身」といった語も同一の内容を指示しているものの、それぞれの言語で異なった背景知識を有していると考えられる. 言語的意味には含まれていないこのような言語外知識が存在することによって、el papa es un soltero[9]『教皇は独身である』は多少不自然に感じられる. これは、言語的意味である「結婚していないこと」と照らし合わせるとそのとおりであるが、カトリックの世界において司祭は婚姻関係を結ばないという世界的知識を考慮すると先に引用した soltero の百科事典的知識とはずれが生じてしまうため、この言語的意味と合致している理由だ

---

[7] soltero は英語における百科事典的知識の例としてしばしば用いられる bachelor に最も意味が近い語であり、この 2 語は完全に意味は一致しないが、百科事典的知識がどのようなものであるのかを示す例として用いることが可能であると述べている(Valenzuela et al. 2012: 49).
また、Cuenca y Hilferty(1999)も bachelor を例にプロトタイプの説明をおこなっているが、やはり bachelor と soltero および solterón は完全には一致しないことを述べている. たとえば、27 歳の未婚の男性は bachelor の典型例ではあるものの、solterón の例にはなりえない.
El concepto de bachelor no tiene un paralelo exacto en español. En inglés, los hombres no casados pueden ser denominados básicamente single o bachelor, mientras que, en español, hablamos de solteros y solterones. Pero el límite entre ambos conceptos no es el mismo, pues un hombre no casado de 27 años sería un buen ejemplo de bachelor, pero no de solterón. Para evitar los equívocos derivables de dicha no correspondencia, mantendremos en el texto la palabra inglesa.
『bachelor の概念に合致する語はスペイン語にはない. 英語では未婚の男性を single や bachelor という語で基本的に表されるが、一方でスペイン語では soltero や solterón といった語がそれに相当する. しかしながら、2 つの概念における境域は同じものではなく、そのため 27 歳の未婚の男性は bachelor の典型例であるが、solterón はそれとは異なる. この不一致から生じうる誤りを避けるために、この本では英語の単語を用いる. 』 —Cuenca y Hilferty (1999: 74)

[8] DRAE(2001: soltero)では que no está casado『既婚でないこと』と記述されている.

[9] Valenzuela et al. (2012: 50)

けで soltero を用いることができないのである.

また一方で、常には言語的知識を必要としない別の例として ballena がある. Valenzuela et al.(2012: 50)は«Cetáceo, el mayor de todos los animales conocidos, que llega a crecer hasta más de 30 m de longitud. Su color es, en general, oscuro por encima y blanquecino por debajo. Vive en todos los mares, preferentemente en los polares»『クジラ目の動物であり、知られているすべての動物のなかで最も大きく、体長 30 メートル以上にまで成長する. その色は概して、上部は暗く、下部は白っぽい. すべての海、主に極地の海に生息している. 』という DRAE(2001)の記述を引用しながら、少なくとも(7)のような文を理解するためにここに記述されているすべての言語的意味、たとえばクジラ目である、あるいは最も大きい動物であるといった情報は必要ではないことを述べている. つまり、語や表現を理解する際に、それらが有しているすべての言語的知識を知っておく必要はないのである.

(7) Hace muchos años aún quedaban ballenas en el mar Cantábrico.
『何年も前には、カンタブリア海にまだクジラがいた. 』

—Valenzuela et al. (2012: 50)

従来の意味論では言語的意味こそが語の意味であると考えられていたが、語や表現を理解するために百科事典的知識が必要となる場合があること、あるいは言語的意味のすべてを知っている必要がないことを考慮すると、言語的意味と百科事典的知識との間に明確な線引きをおこなう必要はないと考えるのが認知言語学における語の意味に対する姿勢である.

本論文は前置詞に後続する名詞の性質によって前置詞の選択がおこなわれると仮説を立てたうえで考察をおこなうが、この性質は百科事典的知識によって喚起されると考えられる. 前置詞と百科事典的知識のこの関係については第 3 章で詳細に述べるが、名詞の百科事典的知識が前置詞の選択において影響を与える例として(8)および(9)があげられる.

(8) Me siento en la silla. 『私はイスに座る. 』

(9) Lo dejo sobre la silla. 『私はそれをイスに置く. 』

この場合、en よりも sobre のほうが「上」の概念がより際立つとされているものの、どちらも空間的な意味は「イスの座面の上」であり、同じ空間的位置を示すと考えられるが、(8)の「座る」のようなイスにヒトが位置づけられる行為に対しては en が用いられやすい一方で、(9)の「置く」のよう

にイスにモノが位置づけられる行為に対しては sobre が用いられやすいということが長縄(2015b)で明らかにされている. イスに対してプロトタイプ的な行為、つまりヒトがイスに位置づけられる場合には en が用いられ、そうでない行為、つまりモノがイスに位置づけられる場合には sobre が用いられる傾向が観察されるのは、イスはヒトが座るためのものであるという百科事典的知識によるものであると考えられる. そのため、たとえば(8)は en を sobre と交替しても文法的には容認され、その場合にはイスに対してふさわしくない行為、たとえばイスの上であぐらをかいたり、正座をしたりする状況が想起されるが、これはあくまでそのように想起される傾向があるということにすぎず、me siento sobre la silla を me siento en la silla の意味で用いることも可能であると思われる. さらに、このような現象は日本語の「イスに座る」と「イスの上に座る」においても観察され、つまり前者は(8)と同様にイスの座面に座ることを表す一方で、後者はイスの座面に正座をしたり、あぐらをかいたりする様子を表しうるのである.

以上、認知言語学における基本的な考えであるといわれているカテゴリー化、プロトタイプ理論、百科事典的知識について確認した.

2.3. 多義語の分析にあたって

本論文で扱う en は多義語であると考えられるが、本節ではこの多義の概念をそれに類する同音意義語と比較しながら定義づけをおこなった後、多義語の意味分析に際して必要な概念とされるメタファーとメトニミーについて先行研究の記述をもとに概観する.

2.3.1. 多義とは

概して多義とは、1 つの語が複数の意味を有していることであり、そのような語は多義語(polisemia)とよばれているが、まず最初に多義語とそれに類する同音異義語(homosemia)の差異を確認する. この 2 つの用語の定義の差に関してはさまざまな議論があるが、たとえば Valenzuela et al.(2012)は、同音異義語は意味間の動機づけや概念的な関連づけがされていない語のことを指す一方で、多義語は意味と意味の間に関連づけがされている語のことを指すと述べている.

> [...] la diferencia es que en la homosemia, estos significados no están motivados, o no están relacionados conceptualmente entre sí, mientras que en la polisemia sí están motivados o relacionados conceptualmente entre sí.
>
> 『その違いは、同音異義語では、意味と意味との間に動機づけされていない、あるいは概念的に関連づけられていない一方で、多義語ではその語において、意味がそれぞれ動機づけされ

ているあるいは、概念的な関連づけがある.』

—Valenzuela et al. (2012: 62)

そして、Valenzuela et al.(2012: 62)は、同音異義語と多義語を区別する例として banco をあげ、その主な意味である«'lugar para sentarse' y 'entidad financiera'»『「ベンチ」と「銀行」』という 2 つの意味は、概念的な関連づけがなされていないため同音異義語であるとしている. その一方で、同語の«'entidad financiera' y 'establecimiento donde se almacenan órganos, tejidos o sangre'»『「銀行」と「臓器や組織、あるいは血液を保管する場所」』という意味は両者とも「保管されている場所」を示しており、意味間に動機づけがなされているため、多義語とされる. この場合には、お金のみを保管するものからそれ以外のモノを保管するものへと意味的拡張がなされたものとしている.

これに対して、たとえば野村(2014: 75–77)のように、同一の語源を持っていれば、多義語であることを同音異義語か多義語かを判断する基準としてあげている研究者もおり、banco に相当する「ベンチ」と「銀行」を再びとりあげると、この語の語源をさかのぼれば、高利貸しはベンチで営まれていたことから、場所で行為を表すというメトニミーを介した結果、今日の銀行の意味が拡張したということを考慮すると、同一の語源を有しているといえるため、多義語とみなすことも可能である. ただし、野村(2014)も述べているとおり、語源が同一であっても概念的な関連づけが感じられない場合には、語源を重視するか概念的な関連づけを重視するかによって、多義語の中間的な存在として多義語か同音異義語か意見が異なる語があることも事実である. 先述の Valenzuela et al.(2012)は banco の語源に関しては触れておらず、概念的な関連づけを重視しているため、ベンチと銀行を表す banco は同音異義語としてとらえていると考えられる. 本論文においても、banco のように語源が同じであるものの、現在ではその意味のつながりが希薄になり、意識されにくいと思われる語については Valenzuela et al.(2012)にならって、同音異義語ととらえ、概念的な関連づけを重視する. なお、日本語の「たずねる(尋ねると訪ねる)」のような例は多義語として一般的に定義されているが、籾山、深田(2003b: 140)はこのような語を『典型的な多義語と典型的な同音異義語の中間に位置づけられるもの』ととらえている. このように、多義語であるか同音異義語であるか判断する基準はあるものの、必ずしも明確に二分できるものではなく、むしろこれらは連続的な存在としてとらえられている.

このように 1 つの語が複数の意味を有しており、かつそれらの意味の間に動機づけがおこなわれているのが多義語であるが、Valenzuela et al.(2012: 63)は多義語が持つそれぞれの意味の構成には 3 つの基本的な概念があると述べている. すなわち、多義語の意味は、(1)意味ネッ

トワーク(redes radiales)によって組織化され、(2)動機づけられており、そして、(3)メタファーやメトニミーのような認知的メガニズムによって生み出されている.

> —están estructurados; se organizan en las llamadas redes radiales [...] que muestran gráficamente las relaciones tanto entre los miembros centrales y periféricos, como entre los diferentes niveles de esquematicidad. Estas redes se basan en el concepto de semejanza de familia;
> —están motivados: una palabra no toma al azar diferentes significados sino que existe una base conceptual (corporeización) que explica porqué se dan estas extensiones semánticas indicando qué características comparten entre sí los significados;
> —están producidos por mecanismos cognitivos como la metáfora y la metonimia.
>
> 『—体系化されている; 意味はいわゆる放射状ネットワーク(中略)を構成しており、中心的成員と周辺的成員における関係を、そしてスキーマ性のさまざまなレベルにおける関係を図式的に示している. このネットワークは家族的類似性の概念に基づいている.
> —動機づけされている; ある語は偶然にさまざまな意味を獲得しているのではなく、概念的基盤(具象化)が存在し、意味がどのような特徴をそれ自身の中で共有しているのかを示すことで、この意味的拡張が生じるのか説明している.
> —メタファーやメトニミーのような認知的メカニズムを通じて、生み出されている. 』
>
> —Valenzuela et al. (2012: 63) 筆者により一部編集

多義語の例として、Valenzuela et al.(2012)は名詞 anillo『指輪』をあげ、DRAE(2001)から引用したその意味を記述している.

1. 'Aro pequeño' 『小さな輪』
2. 'Aro de metal u otra materia [...] que se lleva, principalmente por adorno, en los dedos de la mano'
   『主に装飾のために手の指につける(中略)金属、あるいは他の物質でできた輪』
3. 'Nombre que se da a algunas estructuras anatómicas de forma circular'
   『円形の解剖学的構造のものに与えられる名称』
4. 'Formación celeste que circunda determinados planetas'
   『特定の惑星をとりまく宇宙の組織』
5. 'Cada uno de los círculos leñosos concéntricos que forman el tronco de un árbol'
   『木の株を形成する木の同心円状の輪』
6. 'Cada uno de los segmentos en que está dividido el cuerpo de los gusanos y artrópodos'
   『イモムシなどの節足動物の体を分けている節々』

7. ‘Anillo pastoral: el que, como insignia de su dignidad, dan a besar los prelados’

『司教指輪：その威厳の証として、高位聖職者が接吻するもの』

8. ‘Anillos de Saturno: sistema de anillos planetarios que rodean al planeta Saturno’

『土星の輪：土星をとりまく惑星の輪』

—Valenzuela et al. (2012: 64) 筆者により編集

Valenzuela et al.(2012)はこれら 8 つの意味に関して、それぞれがどのように動機づけられているのかを以下のように述べている. たとえば、意味 2 と意味 7 は「指輪」という点で類似しているが、意味 7 は意味 2 に対して「司教がはめるもの」という別の要素が付加されている. さらに、意味 2 は「手の指にはめるもの」とされているが、今日では足の指にはめる anillo もあり、これを新しい意味 9 として加えることも可能であるとしている. また、意味 3 と意味 6 は、「生き物の身体の構造」という点で類似しており、そして、意味 4 と意味 8 もまた、「惑星をとりまく」点で類似している. こうして、Valenzuela et al.(2012)は以上のつながりを意味ネットワークとして図 3 のように図式化している. 意味ネットワークは中心的意味を起点として構成されており、その中心的意味から他の意味が拡張しているが、それは物理的、もしくは機能的な類似点だけではなく、メタファーやメトニミーによる拡張によっても構成されている.

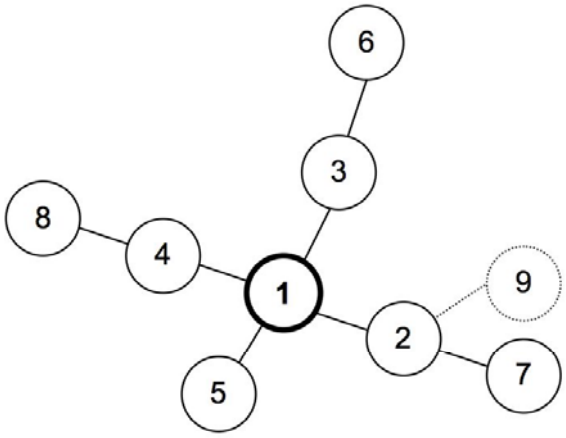

図 3　anillo の意味ネットワーク[10]

anillo のすべての意味は、直接的ではないものの、図 3 にみられるように中心的な意味と関連づけられており、図 3 において線で結ばれている 2 つの意味は何らかの特徴を共有している.

[10] Valenzuela et al.(2012: 64)

たとえば、先述の 1〜8 の意味において、意味 2 は意味 1と「環構造」という特徴を共有している一方で、意味 2 は「装飾する」特徴を有しているものの、この特徴は意味 1 に含まれていない. しかし、この「装飾する」特徴は意味 7 にも現れ、その特徴に加えてさらに「威厳を表す」という別の特徴を有している. こうして、意味 1と意味 2、そして意味 2 と意味 7 が関連づけられることで、意味ネットワークが構成されている.

このような多義語の意味ネットワークを構築する際、どの意味が中心的意味かを最初に定める必要があるが、この多義語の中心的意味に関する問題は肝要であると認識されており、認知言語学者の間においてもその定義づけのためにさまざまな規準が提案され、議論が続いている. しかしながら、多義語の分析にあたっては今日では 2.2.2.で概観したプロトタイプ理論を用いるのが主流であるとされており、本論文でもこのプロトタイプ理論を援用する.

2.3.2. メタファー

多義語は中心的意味からさまざまな意味が拡張しているが、その拡張においてはメタファーが大きな役割を果たしていると考えられている. メタファー[11](metáfora)とは、『2 つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて, 一方の事物・概念を表す形式を用いて, 他方の事物・概念を表す比喩』(籾山、深田 2003a: 76)のことであるが、メタファーは非日常的な表現、あるいは詩的な表現などといった修辞学の分野に関することとして認識され、認知言語学によってメタファーの研究が展開される以前は軽視されていた. ところが、Lakoff and Johnson(1980)はこの既存の考え方をとらえ直し、«The essence of metaphor is understanding and experiencing one kind of thing in terms of another»とメタファーの本質はあるものごとを別のものを通じて理解し、経験することであると述べながら、一方で他方を表現するだけにとどまらず、それを理解する認知的な営みも含まれていると考えた. こうして Lakoff and Johnson(1980)は認知言語学におけるメタファー理論研究の先駆けとなったのであるが、その主要な論点を辻(編)(2013)は以下のようにまとめ、メタファー表現は決して修辞的なものではなく、われわれの日常にごく一般的にあふれているものであるとしている.

1. 隠喩は、単に語の問題ではなく、ある概念領域を別な概念領域でもって理解するという認識の問題である。
2. 隠喩は装飾的な表現のみならず、広く日常言語に浸透している。

[11] 隠喩ともいわれる. 辻(編)(2013)はこの名称を用いている.

3. 隠喩は 2 領域間にあらかじめ存在する類似性に基づくのではなく、2 領域間に見られる相関関係を経験的基盤として成立する。

—辻(編) (2013: s.v. 隠喩／メタファー)

この事実はスペイン語にも認められ、Cuenca y Hilferty(1999: 98)もメタファーとは «constituye un mecanismo para comprender y expresar situaciones complejas sirviéndose de conceptos más básicos y conocidos»『基本的かつ既知の概念を用いて、複雑なものごとを理解したり説明したりするために構成されるメカニズム』と、より基本的な概念を用いることで複雑な概念を理解するためのメカニズムであると定義している.

また、Lakoff and Johnson(1980)によれば、メタファーは人間の認知的な営みによるものであり、われわれの日常において広く用いられることに加えて、何らかの経験的基盤を有しており、たとえば、垂直方向を表す語で量を表すことが可能である. これに関して、Cuenca y Hilferty (1999)は以下の例文をあげ、スペイン語においても同様のことが当てはまることを指摘している. なお、次項で確認するが、以下の MÁS ES ARRIBA や MENOS ES ABAJO は概念メタファー[12]とよばれるものであり、(10)～(15)における個々のメタファーの特徴をまとめる表現である.

MÁS ES ARRIBA: 『量が多いことは上』

(10) La inflación siempre sube más de lo que dice el Gobierno.
『インフレは政府が公表しているよりも常に大きく上昇している. 』

(11) El índice de paro es muy alto en nuestra comarca.
『我々の地方では失業率がとても高い. 』

(12) Los elevados costes de producción están obligando a muchas empresas a instalar sus fábricas en países donde la mano de obra es más barata.
『生産コストの上昇によって、多くの企業が人件費の安い国に工場を置くことを余儀なくされている. 』

MENOS ES ABAJO: 『量が少ないことは下』

(13) Los bancos tendrán que bajar los tipos de interés.
『銀行は利率を下げなければならないだろう. 』

(14) En las rebajas de enero, caerán los precios.
『1 月のバーゲンで価格が下がるだろう. 』

[12] 概念メタファーは通常スモールキャピタルで表される.

(15) Este año se ha registrado un descenso importante en la intención de voto.
『今年は投票への意向が著しく低下した.』

—Cuenca y Hilferty (1999: 99)[13]

(10)～(12)は量が多いことは上を表す例であり、(10)では動詞 subir『登る』、(11)では形容詞 alto『高い』、そして(12)では形容詞 elevado『上昇した』といった語によって数量の多さが表される. その一方で(13)～(15)は、量が少ないことは下を表す例であり、(13)では動詞 bajar『降りる』、(14)では動詞 caer『落ちる』、そして、(15)では名詞 descenso『下降』といった語を用いることで、数量の少なさが表されている. 本来 inflación『インフレ』、tipos de interés『利率』や precios『価格』のような抽象的な存在は、煙や木の葉のように物理的に上がったり下がったりすることはないが、このような概念メタファーがわれわれの日常の経験に基づいているため、われわれは(10)～(15)の意味を問題なくとらえることが可能である. たとえば、箱を積み上げたり、あるいはコップに水を入れたりするとき、われわれは数量の増加によって高さが伸びると認識することが多いのであるが、このような数量と高さの相関関係はメタファーが経験に基づいて成立していることに対する根拠のひとつになりうるとされている.

メタファーは多義語の意味の構成において重要な役割を果たしているが、たとえば、camino『道』に「手段」や「方法」の意味がみられる[14]のは、具体的な概念がメタファーによって拡張し、慣習化した結果であるとされる.

2.3.3. 概念メタファー

概念メタファー(metáforas conceptuales)は、Lakoff(1987)によって提唱されたもので、ある抽象的な概念と別の具体的な概念を用いて理解することと定義される. Cuenca y Hilferty (1999)は概念メタファーとメタファー表現(expresiones metafóricas)を区別しており、メタファー表現は概念メタファーにおける個々の例であると、概念メタファーとその例をまとめた表(表 1)を用いて説明している.

> Las metáforas conceptuales son esquemas abstractos, como los que acabamos de ver en la tabla 1, que sirven para agrupar expresiones metafóricas. Una expresión metafórica, en cambio, es un caso individual de una metáfora conceptual.

---

[13] 筆者により一部変更. イタリックは原文ママ. 以降、特にことわりがない場合、太字やイタリックは原文ママである.

[14] «Medio o arbitrio para hacer o conseguir algo»『何かをおこなう、あるいは得るための手段あるいは方法』—DRAE (2001: s.v. camino)

『概念メタファーは、表 1 でみたように、抽象的な枠組みであり、メタファー表現をまとめるものである. それに対して、メタファー表現は概念メタファーの個々の例である. 』

—Cuenca y Hilferty (1999: 100)

MORIR ES PARTIR	Nuestro amigo nos ha dejado
『死ぬことは出発することである』	『私たちの友人は私たちを残して亡くなった』
LAS TAREAS DIFÍCILES SON CARGAS	Quiero quitarme este peso de encima
『困難な課題は負担である』	『私はこの重荷から解放されたい』
LAS PERSONAS SON ANIMALES	El muy burro me dijo que no sabía resolver el problema
『人間は動物である』	『その大馬鹿者はその問題の解決法を知らないと私に言った』
LA VIDA ES UN VIAJE	Va por la vida sin la más mínima preocupación
『人生は旅である』	『彼はどんな心配ごともせず、人生を歩んでいる』
LAS TEORÍAS SON EDIFICIOS	Esta teoría carece de fundamentos empíricos
『理論は建物である』	『この理論は経験的基盤が欠如している』
EL TIEMPO ES UN OBJETO DE VALOR	El tiempo es oro
『時間は価値を持つものである』	『時は金なり』
LAS IDEAS SON ALIMENTOS	No pienso tragarme ni una mentira más
『考えは食べ物である』	『私はどんなうそも鵜呑みにするつもりはない』
EL AMOR ES UNA GUERRA	Ella lo conquistó con su sonrisa
『愛は戦争である』	『彼女はその笑顔で彼を魅了した』

表 1　主要な概念メタファーとその例[15]

概念メタファーは先述のように、具体的あるいは身体的経験に近い概念を用いて、より抽象的な概念を理解するものであるが、このとき前者の概念は起点領域(dominio fuente)とよばれ、また後者の概念は目標領域(dominio meta または dominio destino)とよばれている. この起点領域から目標領域へ移行させることを Lakoff(1987)は写像(proyección)とよび、両領域間に存在論的対応関係(correspondencias ontológicas)と認識論的対応関係(correspondencias epistémicas)が成立するとした. たとえば、表 1 にある概念メタファーのひとつである LAS IDEAS SON ALIMENTOS では、los alimentos が起点領域であり、las ideas が目標領域であるが、Cuenca y Hilferty(1999)はこの概念メタファーの両領域間の対応関係を以下のように記述している.

[15] Cuenca y Hilferty (1999: 100)の tabla 1をもとに筆者により作成. なお、イタリックは原文ママ.

a. las ideas corresponden a los alimentos;
『考えは食べ物に相当する』

b. la persona que come los alimentos corresponde a la persona que acepta la idea;
『食べ物を食べる人間は考えを受け入れる人間に相当する』

c. cocinar el alimento corresponde a concebir la idea y
『食べ物を調理することは考えを構想することに相当する』

d. digerir el alimento corresponde a comprender la idea.
『食べ物を消化することは考えを理解することに相当する』

—Cuenca y Hilferty (1999: 102)

両領域間の対応関係を観察すると、すでに述べたように、起点領域が los alimentos、そして目標領域が las ideas であり、起点領域における la persona que come los alimentos は目標領域内の la persona que acepta la idea に相当する. 本来であれば、「食べ物」と「考え」には共通するものは見いだせないが、この概念メタファーのように 2 つの語を結びつけることが可能であるのは、これら 2 つの語の背景知識によるものであり、これは認識論的対応関係とよばれている. Cuenca y Hilferty(1999)は「食べ物」と「考え」の認識論的対応関係として、以下をあげている.

Dominio origen: los alimentos sustentan el cuerpo.
『起点領域: 食べ物は身体を育てる. 』

Dominio destino: las ideas sustentan la mente.
『目標領域: 考えは頭脳を育てる. 』

—Cuenca y Hilferty (1999: 102)

この概念メタファーの理論、たとえばそのひとつである TIEMPO ES ESPACIO『時間は空間である』を用いることで、前置詞が有する空間的意味から時間的意味がどのようなプロセスを経て拡張されるか説明可能であると思われる. 本論文で扱う前置詞 en もまた時間的意味を有する前置詞であり、空間的意味からこの意味が拡張していると考えられている.

2.3.4. メトニミー

多義語の中心的意味からさまざまな意味が拡張するそのプロセスにおいて、メタファーとともにメトニミーもまた重要な役割を果たしている. メトニミー(metonimia)とは、『2 つの事物の外界

における隣接性，さらに広く 2 つの事物・概念の思考内，概念上の関連性に基づいて，一方の事物・概念を表す形式を用いて，他方の事物・概念を表す比喩』（籾山、深田 2003a: 83)のことをいう．この概念はスペイン語にも適用され、Cuenca y Hilferty(1999: 110)はメトニミーを«la metonimia puede definirse cognitivamente como un tipo de referencia indirecta por la que aludimos a una entidad implícita a través de otra explícita»『メトニミーは、明示された存在を通じて、暗に示された存在に言及することによる間接的な言及の一種として認知的に定義することができる』と定義している．たとえば、(16)は«EL TODO POR LA PARTE»『全体で部分』を表すメトニミーの一例である．

(16) Suena el teléfono. 『電話が鳴る．』 —Cuenca y Hilferty (1999: 110)

(16)は文字通りに電話機全体が鳴っているのではなく、電話に対してわれわれが有している百科事典的知識によって電話の一部、すなわちベルの部分が鳴っていると解釈される．つまり、全体を表す語である「電話」によって、その一部である「ベル」が表されるが、このように 2 つの物体が隣接している場合に、ある存在で別の存在を表すのがメトニミーである．メトニミーは人間の参照点能力を基盤に成立すると考えられているが、この参照点について籾山、深田(2003a)によれば、われわれはある対象を把握する際、その対象が認知的に際立ちの小さい場合において、際立ちの大きい部分を参照点として、その際立ちの小さい対象へアクセスしている．

> 『メトニミーの基盤となる認知能力として，ある対象を把握したり指示する際，その対象を直接把握するのに何らかの困難をともなう場合に，別のより把握しやすいものあるいはすでによくわかっているものを参照点(reference point)[16]として活用し，本来把握したい対象をとらえるという参照点能力が考えられる。』
>
> —籾山、深田 (2003a: 87) 脚注は筆者による

(16)の例では、「ベル」は「電話」に比べ際立ちが小さいため、際立ちの大きい対象である「電話」が参照点としてとらえられ、この参照点を経由してとらえられた「ベル」は「電話」と「鳴る」ことを関連づける役割を果たしている．これ以外にも、(17)のように部分を表す語で全体を表す表現«LA PARTE POR EL TODO»や(18)のように容器を表す語でその中身を表す表現 «EL CONTINENTE POR EL CONTENIDO»などもその隣接性ゆえにメトニミーとしてとらえられている表現である．(17)の場合には「ディーゼルターボエンジン」が、一方(18)では「グラス」が参照点として

[16] スペイン語では punto de referencia と表される．

認識され、それぞれ「ディーゼルターボエンジンを搭載した車」、「ワイン」が表されている.

(17) Es un turbo diesel precioso 『ディーゼルターボエンジンを搭載した車は高価だ』

(18) Se bebió tres copas de vino 『彼はワイングラス 3 杯を飲み干した』

—Cuenca y Hilferty (1999: 112)

本論文で分析する前置詞のなかでメトニミーによる意味拡張が観察されるのは a であり、この前置詞については 4.4.において詳述するが、a は基本的に方向を表す前置詞である一方で、隣接を示すことも可能である. このことに関して、Moreno y Tuts(1998)は(19)～(21)をあげて a の用法を説明している.

(19) Sentarse a la mesa (= junto a, al lado de). 『テーブルに向かって座る. 』

(20) Ponerse a la máquina (= acercarse a ella para trabajar).
『機械のそばについて作業する. 』

(21) Estar al volante (= ir conduciendo). 『運転している. 』

—Moreno y Tuts (1998: 15) 筆者により一部編集

(19)は単に空間的意味で隣接を表している一方、(20)および(21)は空間的意味だけではなく、前者は機械やハンドルに隣接していることから機械を動かして仕事をすること、そして後者は運転することをそれぞれ表している. このように a と共起する名詞が参照点ととらえられることで、その名詞から想起される行為を表すことが可能になるため、これはメトニミーによる意味拡張が生じていると考えることが可能である.

ここまで、多義語の特徴、そして多義語における意味拡張において重要な概念であるメタファーとメトニミーについて確認したが、次節ではとりわけ前置詞の意味分析に必要な概念、すなわちトラジェクターとランドマーク、そしてイメージ・スキーマについて概観する.

2.4. 前置詞の意味分析に有用とされる概念

本節では認知言語学の観点から前置詞の意味分析をおこなう際に有用とされている概念であるトラジェクターとランドマーク、そしてイメージ・スキーマについて概観したうえで、Vandeloise

(1991)において記述されているイメージ・スキーマの問題点について考察する. Vandeloise (1991)は、前置詞の意味はイメージ・スキーマで表されるように幾何学的ではなく、機能的に定義されると主張しているが、このことが前置詞の意味を名詞の性質から観察する本論文の考え方と合致することを本節を通して確認する.

2.4.1. トラジェクターとランドマーク

人間は知覚できるすべての情報を見ているわけでなく、無意識のうちに重要であるものとそうでないものとを分類しながら必要なものだけを見ているといわれているが、このとき注目している物体のことは図(figura)とよばれ、そして背景となる他の物体は地(fondo)とよばれている. この図と地は本来ゲシュタルト心理学における概念であるが、この概念は「意味を言語使用者の外界認識の産物としてとらえる」という認知意味論の基本的な考えとおおいに関係している. つまり、言語的な意味は客観的な外界を直接反映したものではなく、情報の分類をおこなう言語使用者の主体的な解釈に基づいているのである. たとえば、以下の(22)と(23)は同じ状況を表してはいるものの、前者と後者ではとらえ方が異なるため、重要であると認識しているものが異なっている. つまり、(22)ではコップに入っている水を前景に出し、空いている部分を背景にしている一方で、(23)では空いている部分を前景に出し、水が入っている部分を背景にしているのである.

(22) El vaso está medio lleno. 『コップは半分満たされている. 』

(23) El vaso está medio vacío. 『コップは半分空である. 』

—Cuenca y Hilferty (1999: 79)

辻(編)(2013: s.v. 図と地)によれば、知覚レベルにおける図となりやすい要因には、(1) 2 次元に閉じているもの、(2)相対的に面積の小さいもの、(3)垂直・水平なもの、(4)単純・規則的・対照的なもの、(5)中央にあり、より近いところに見えるもの、(6)明るく鮮やかなもの、(7)動くもの、(8)既存の意味や価値に関係づけられるものがあるとされる. この概念を利用して、Langacker (1987)はベース(base)とプロファイル(perfil)とよばれる概念を提唱しており、Cuenca y Hilferty(1999)もこの概念を援用しているが、ある認知領域において、すべての構造が同様に扱われるのではなく、焦点化された際立ちの大きいプロファイルとよばれる部分と、そのプロファイルの直接の背景要素として機能するベースに分けられる.

> La base se puede definir como la matriz subyacente de dominios cognitivos relevantes que se requiere o se evoca para comprender una expresión determinada. El perfil, por su lado, es la subestructura destacada sobre la base que la expresión en cuestión designa conceptualmente.
>
> 『ベースは特定の表現を理解するために、要求あるいは想起される際立った認知領域の下位部分として定義される．一方、プロファイルはその表現を概念的に表すベースの上にある際立った構造のことをいう．』
>
> —Cuenca y Hilferty (1999: 76)

たとえば、このベースとプロファイルの概念を説明するための典型例として hipotenusa『(直角三角形の)斜辺』があげられるが、図 4 から以下の解釈が可能である．

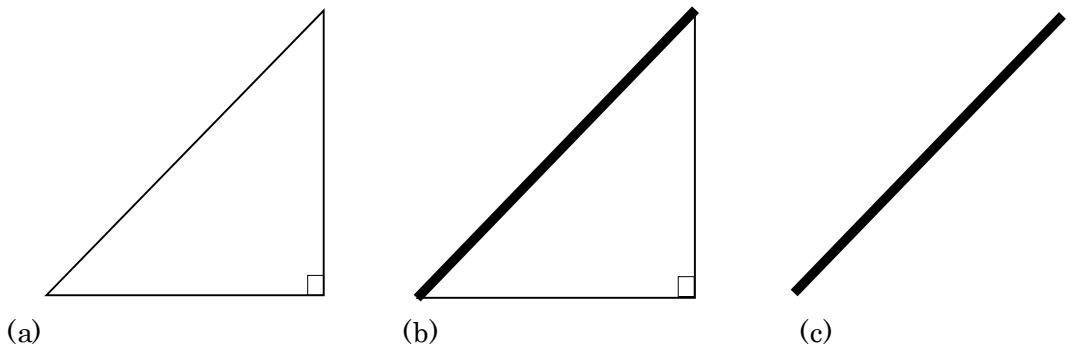

図 4 「斜辺」のベースとプロファイルの構造[17]

図 4 の(a)は直角三角形であり、(b)で太く塗られている部分はその斜辺であるが、この「斜辺」は、もし(c)のように図中の太線以外を消すと、斜辺とよばれていたものが単なる太線になってしまうため、直角三角形がなければ斜辺は存在しない．一方で、(a)のようにプロファイルする部分がない場合には、単なる直角三角形であり、やはり斜辺は存在しない．言い換えれば、直角三角形の百科事典的知識のなかにはすでに斜辺という概念が含まれており、「斜辺」は直角三角形をベースとして、図 4 の太線の部分をプロファイルしているのである．同様に、martes『火曜日』は semana『1 週間』をベースとしてプロファイルされた語である．つまり、martes を理解するためには semana の概念が必要なのである．この図と地、さらにベースとプロファイルという概念は認知言語学において文法構造を分析するために積極的に応用されている．

本論文で扱う en のような空間前置詞は、注目される物体と背景となる物体の位置関係を表す．たとえば、ある人が部屋に入り、中にあるものを見渡すと、テーブル、照明、カーペット、テレ

[17] Cuenca y Hilferty(1999: 77)をもとに筆者により作成．

ビ、本棚などさまざまなものが目に入り、テーブルの上に本が置いてあるのを見て el libro está en la mesa『本はテーブルの上にある』と発話すれば、この人は部屋に存在するさまざまなものを背景化し、これらをベースとしながら、「テーブル」および「本」を焦点化し、プロファイルしているのである. ここでは、「テーブル」を基準として「本」の位置が表されることにより、プロファイルされた「本」と「テーブル」が関連づけられるが、このとき「本」は「テーブル」よりも際立っており、プロファイルしたもののなかにおいてさらに際立ちの違いが生じている. そこで、Langacker(1987)は「テーブル」は背景というよりも二次的な図と考え、際立ちの最も大きい部分構造をトラジェクター(trayector)、その他の際立ちの大きい部分構造をランドマーク(landmark[18])とよんでいる. このランドマークとトラジェクターの概念を用いてイメージ・スキーマを描写することによって、前置詞の意味特徴を視覚的に表すことが可能であるため、松本(2003b: 50)は『前置詞の意味とは、ランドマークとトラジェクターの関係』であるとしている. このイメージ・スキーマについて次項で確認する.

2.4.2. イメージ・スキーマ

スキーマとは事象や経験における規則性の抽象的表示を指す心理用語であり、認知意味論において、Johnson(1987: 29)は«A schema is a recurrent pattern, shape, and regularity in, or of, these ongoing ordering activities»と述べ、イメージ・スキーマ[19]を日々の活動において繰り返し現れるパタン、形、規則性と定義している. この定義に対して、Cuenca y Hilferty (1999)は以下の説明を加えている.

> Las imágenes esquemáticas, pues, son el producto de nuestra habilidad de esquematizar y reconocer similitudes entre objetos y situaciones. Y lo que es más importante: sirven para fundamentar los procesos simbólicos que impregnan profundamente la cognición cotidiana.
>
> 『イメージ・スキーマとは物体と位置の間における類似性を図式化し、認識する能力のことである. そして、より重要なことは、イメージ・スキーマは日常的な認知をしっかり浸透させる象徴的な過程を確立するのに役に立つのである. 』
>
> —Cuenca y Hilferty (1999: 106)

よく知られているイメージ・スキーマには「道のスキーマ(esquema de CAMINO)」や「容器のスキーマ(esquema de CONTENEDOR)」などがある. たとえば、「道のスキーマ」を図式化すると概し

---

[18] Cuenca y Hilferty(1999)は英語の landmark に対して locus というスペイン語をあてているが、Ibarretxe-Antuñano y Valenzuela(dirs.)(2012)では英語の landmark をスペイン語にそのままの形で応用している.

[19] スペイン語では、Peña Cervel(2012)は esquema de imagen とよんでいる一方、Cuenca y Hilferty(1999)はこれを imágenes esquemáticas とよんでいる.

て以下の図 5 のように表されるが、このイメージ・スキーマは起点(Origen)、目的地(Destino)、起点と目的地を結ぶ一連の点(una serie de puntos que conectan el origen con el destino)、そして方向(Dirección)といった要素で構成されている. これらの要素にしたがって出発点から道に沿って移動すると、その道の途中でさまざまな点を通過することが描写されるが、この「道のスキーマ」を用いることで、たとえば、seguiré adelante a pesar de las dificultades『困難があっても私は前進し続けるだろう』のようなメタファー表現を理解することが可能になるのである. すなわち、この文では主語である「私」の人生の一時点を道にたとえ、その終点となる目標に至る途中の道のりにおいてさまざまな障害があっても、前進しようという堅い決意を持っていることが表されている(Peña Cervel 2012: 77–78).

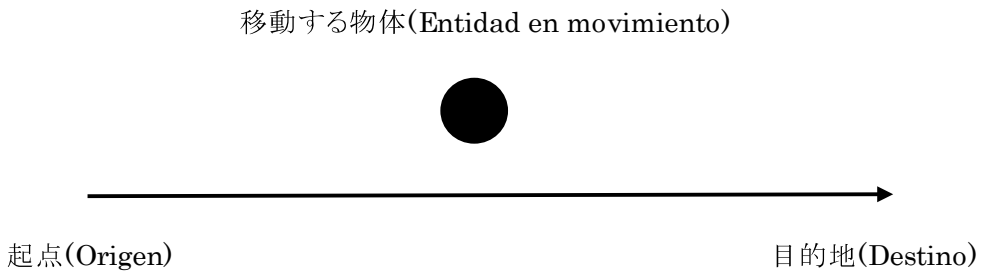

図 5　道のスキーマ[20]

一方、もうひとつの例である「容器のスキーマ」は内部(interior)、外部(exterior)、その境界(límite)の 3 つの要素で構成されているが、このイメージ・スキーマを用いることで、人間の身体の一部を容器にたとえた表現、たとえば、tener la cabeza vacía『頭が空っぽである』、llenar de alegría『喜びで満ちあふれさせる』、dejar en manos de ...『～の手中にゆだねる』などの表現が得られる. 最初にあげた tener la cabeza vacía では、cabeza が容器にたとえられ、その状態を vacía という語を用いて表現することで、人の状態、すなわち「頭が空っぽで何も考えてない様子」が表される.

本来、イメージ・スキーマの概念は英語の前置詞の意味記述の際に初めて応用されたといわれているが、たとえば、英語の前置詞 in のイメージ・スキーマは概して図 6 のように表される.

[20] Peña Cervel(2012: 70)をもとに筆者により作成.

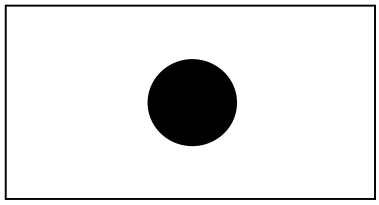

図 6　前置詞 in のイメージ・スキーマ

図 6 に表されるようなイメージ・スキーマを用いることで、in に関して「物理的領域における空間（図中の四角に区切られたもの）に、何らかの物体（図中の黒丸）が位置している」ことを視覚的にとらえることが可能である. たとえば、The ball is in the box. において、box は物理的な領域における空間であり、ball はその中に位置する主体であるが、このとき、ball はトラジェクターであり、box はランドマークである.

このようにイメージ・スキーマは前置詞の空間的意味を図示し理解しやすくするために非常に有用であると考えられるが、前置詞が示す実際の空間的位置がその前置詞が有するイメージ・スキーマにすべて一致するとは限らない. もとより、en のように空間的意味が広い場合にはさまざまなイメージ・スキーマが考えられるため、少なくともこの en の意味をイメージ・スキーマで視覚的に表現するのは難しいと考えられる. このイメージ・スキーマの問題点については Vandeloise(1991)の記述をもとに、次項で詳述する.

2.4.3. 前置詞の幾何学的意味と機能的意味

Vandeloise(1991)は、空間前置詞による空間的描写はイメージ・スキーマのように表される幾何学的なものではなく、むしろ機能的なものであることをフランス語の前置詞を例に出して主張している. たとえば、(24)～(26)では、英語の前置詞 in にあたるフランス語の前置詞 dans が用いられるが、in のイメージ・スキーマとは異なり、トラジェクターがランドマークの中に完全に包含されているのではなく、部分的に包含されている様子が表される.

(24) l'œuf est dans le coquetier　『卵がエッグカップにある』
the egg is in the eggcup

(25) l'arbre est dans la terra　『木が地面にある』
the tree is in the ground

(26) la paille est dans le verre　　『ストローがグラスにある』

the straw is in the glass

—Vandeloise (1991: 214) 日本語訳は筆者による

さらに、以下の図 7 はボウルの中につめられた果物の上に洋梨がある様子が描かれているが、この図を表した文である(27)にみられるように、ランドマークの内側にトラジェクターを位置づけるイメージ・スキーマとは異なり、洋梨がボウルの中ではなくむしろ外側に位置しているように見えるにもかかわらず、前置詞は dans が用いられると Vandeloise(1991)は述べている.

図 7　la poire est dans la coupe

(27) la poire est dans la coupe　　la pera est*á* en el cuenco

the pear is in the bowl　　『洋梨がボウルにある』

—Vandeloise (1991: 225) スペイン語訳と日本語訳は筆者による

このようにイメージ・スキーマはその前置詞の空間的位置を網羅的に描写するには限界があると感じられるが、より興味深いのは同じ空間的位置を表しているのにもかかわらず、容認される場合とされない場合が生じることである. 図 8 は Vandeloise(2003)が曖昧な形として提示しているものであるが、(28)の電球とソケットが(29)のビンとフタに相当し、同じ空間的位置を表しているにもかかわらず、前者は容認されるのに対し、後者は非文として扱われる.

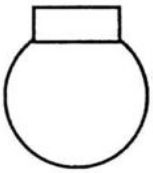

図 8　The bulb is in the socket.

(28) The bulb is in the socket.

(29) *The bottle is in the cap. —Vandeloise (2003: 396)

この差異は、(28)の場合、ソケットが電球の位置を定めるのに対し、(29)の場合ではビンがフタの位置を定める役割を担っているため、(29)は非文とされることにある[21]. このとき、Vandeloise(2003)は位置を定める物体を container「容器」、定められる物体を content「中身」と定義し、英語の in もフランス語の dans もこの「容器」と「中身」の関係を語彙化したものであると一連の研究を通じて主張している. そして、「容器」と「中身」の関係における特徴は以下の(a)～(d)のように表され、これらの特徴は in あるいは dans が用いられる必要条件でも十分条件でもないというものの、これらの前置詞が用いられる状況には、これらの前置詞を用いる他の状況と少なくともひとつの特徴が共有されているという. この(a)～(d)のような in を表す特徴は家族的類似性とよばれる概念で構成されており、それぞれの特徴は似ているが、すべての点で似ているわけではなく、それぞれの特徴における要素のなかに類似点が存在しており、ベン図のようにかかわりあっているのである.

(a) the container controls the position of the content

(b) the content moves toward the container

(c) the container surrounds the content

(d) the container protects the content —Vandeloise (2003: 400)

(30)～(32)において用いられている in は、(30)では(a)と(b)の特徴を、(31)では(a)と(c)を、そして(32)では(a)から(d)のすべての特徴を有している. ここで、(29)の*The bottle is in the cap が(30)と同じ空間的位置であるにもかかわらず非文とされる要因は、in が(a)から(d)のどの特徴も有していないためであるという.

(30) The bulb is in the socket.

(31) The soup is in the ladle.

---

[21] Hernández(2013)も Vandeloise(1986)の研究に言及するなかで、その際に(28)と(29)のスペイン語訳である以下の(28)'と(29)'を載せているが、in と同様、前者は容認される一方で、後者は容認度が下がる. また、この en を dentro de に交替したものに関しても言及しているが、たとえば(28)'の en を dentro de に交替させると容認しがたくなるという.
(28)' La lámpara está en el portalámparas
(29)' ?La botella está en la tapa —Hernández (2013: 88–89)

(32) The jewels are in the box. —Vandeloise (2003: 396–399)

このように Vandeloise(2003)は、前置詞はイメージ・スキーマで表されるような幾何学的なものではなく、機能的なものであると主張している. Vandeloise(2003)によるこれらの考察は同一の前置詞に対しておこなわれているものであり、交替可能な前置詞との比較考察をする際の方法論としては述べられていない. しかしながら、幾何学的意味が一致する 2 つの前置詞が交替可能である場合、この機能的意味が前置詞の選択要因として作用しているものと仮定して、本論文では考察をおこなう. もっとも、本論文では Vandeloise(1991)および Vandeloise(2003)が主張する機能的意味はランドマークが有しており、前置詞の意味は幾何学的なものであるという考えをとる. なお、Vandeloise(2003)は前置詞 en の機能的意味についても英語、フランス語の前置詞と比較しながら言及しており、2 方向以上に対する支配を containment そして垂直方向に対する支配を support という概念で表しているが、それぞれ英語では in と on、フランス語では dans と sur がこの概念に相当する前置詞である. 英語やフランス語の前置詞に対してスペイン語の en は containment と support の両方の概念を含む語であることから、図 9 に観察されるように、Vandeloise(2003)はさらなる上位概念として control という概念を設定し、この概念を«At the highest level of generality, b controls a if b prevents a from moving in at least one direction» (Vandeloise 2003: 403)と定義した. つまり、en には少なくとも一方向において、物体 b が物体 a の移動を妨げる要素が含まれていることを示している.

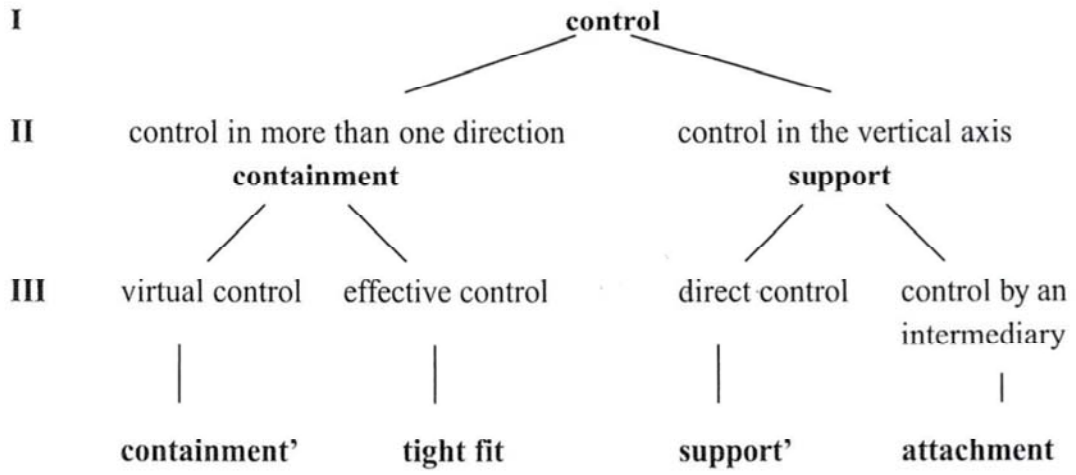

図 9 control 概念の関係図

—Vandeloise (2003: 404)

しかしながら、実際に en の機能を control と定義することについては疑問の余地があると思われる. というのも、Vandeloise(2003)のこの主張は、英語の前置詞 in と on、そしてフランス語の dans と sur をベースに発展させ、それをスペイン語の en に置き換えているだけであり、en が有する他の空間的意味、つまり隣接を表す en が考慮されていないためである. つまり、en la caja『箱の中』、en la mesa『テーブルの上』のように、「内部」や「表面の上」を表す場合には Vandeloise(2003)の主張は認められるが、en la puerta『ドアのところ』のように単なる隣接を表す用法は control の概念では説明できないと考えられる. また、Vandeloise(2003)はたとえば in であれば「容器」と「中身」の関係を観察することで、前置詞自身の意味を定義することを試みているが、スペイン語の en のように空間的意味を示す範囲が広い場合には、その意味は前置詞自体の意味ではなく、むしろ名詞の性質によって決定されると思われる. 加えて、en の類義語には support であれば sobre、containment であれば dentro de といったそれぞれの概念に対応する語または語句が存在しており、en の意味を control というひとつの概念でまとめるのではなく、これら 2 つの概念を別のものとして認める必要があると考えられる. したがって本論文では、en の意味は幾何学的意味であることを認めつつ、その意味は en 自身が有しているというよりもむしろ、共起する名詞の性質によって明確になることを提案する.

2.5. 前置詞の意味の分析にあたって

本節では認知言語学的観点から見た前置詞の意味、およびスペイン語における前置詞の意味に関する記述を確認し、本論文での前置詞の意味のとらえ方を提示する. さらに、先に確認した百科事典的知識が前置詞の意味にどのような影響を与えるか観察する.

2.5.1. 認知言語学的観点から見た前置詞の意味

本論文では en の意味を中心に前置詞の意味分析を試みるが、前置詞の具体的な意味を観察する前に、前置詞の意味に対する立場を明らかにする. 概して前置詞は機能語に属しているため、名詞や動詞が属する内容語に比べ、その意味は抽象的であることが特徴とされる. このような内容語と機能語の対立については、Langacker(1987)が認知言語学的観点から言及しており、この 2 つの差異は意味の具体性、意味内容の量、特定の形式の選択が自由であるかあるいは文法的環境によって定められているか、そして下位区分が新しい語を容認するかどうかによるものとしている.

> A good illustration is the traditional distinction between lexical and grammatical morphemes (or content words vs. function words). [...] The lexical vs. grammatical distinction seems clear on the basis of concreteness of sense, amount of semantic content, whether the choice of a particular form is free or is determined by the grammatical environment, and whether or not a subclass accepts new members.
>
> —Langacker (1987: 18)

しかしながら、Langacker(1987)は、内容語と機能語を特徴づけるこれらの差異は程度の問題であると述べており、内容語であっても、たとえば動詞は kick, talk, think, live, exist の順に意味の具体性に差が生じることが観察されるとしている. また、名詞に関しても同様のことがいえ、giraffe, mammal, animal, organism, thing の順に具体的な意味を有する語から抽象的な意味を有する語まで程度の差がみられる. さらに法助動詞、数量詞そして前置詞が thing や have といった内容語よりも意味内容が少ないとはいえないこと、また entity, exist, proximity といった語よりも抽象的とはいいがたいことを根拠として、たいていの機能語は意味を有していると主張している. そして、語の種類として、内容語と機能語について議論することは有効であると述べるものの、前置詞が内容語に属するのか、機能語に属するのかという議論は無意味であると主張している(Langacker 1987: 18−19). 以上は英語の例であるが、スペイン語では前置詞の意味がどのようにとらえられているのかを次項で確認する.

2.5.2. スペイン語における前置詞の意味

スペイン語においても前置詞は意味を有する語か否かという問題に関する議論は絶えないが、たとえば García Yebra(1988)は、前置詞の意味的内容について、«Entre los lingüistas modernos son mayoría los que niegan a la preposición contenido semántico. Este punto de vista es antiguo»『現代の言語学者の多くは前置詞の意味的内容を否定している. この観点は過去のものである』(García Yebra 1988: 56)と述べ、前置詞は意味を有しないとする見方に対して否定的な態度をとっている. 前置詞の意味を分析するためには前置詞に意味的内容が含まれていることを前提で議論を進めていく必要があるため、この García Yebra(1988)の記述や先述の Langacker(1987)の主張にしたがって、本論文においても前置詞は意味を有する語であることを前提として議論を進める. そして、この前提を補強するために、以下では同じく前置詞は語彙的意味を有するという立場をとる Alarcos Llorach(1994)および RAE(2009)[22]の記述を確認する.

[22] Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009). 以下同様.

Alarcos Llorach(1994)は、前置詞それ自体は発話内において意味を有するのではなく、被制辞と組み合わさり前置詞句を形成した場合に意味をなすと述べる. それはたとえば Se sentaron a la mesa『テーブルに向かって座る』と Se sentaron en la mesa『テーブルの上に座る』のように、同じ語句が用いられていても a と en の交替によって異なった状況が表されるため、前置詞は機能的な役割を果たすだけではなく、語彙的意味を有している語でもあると結論づけている.

> En ambos casos, es evidente que la preposición por sí sola no cumple función alguna especial dentro del enunciado, y solo sirve como índice del papel que desempeña el segmento en que está integrada. No obstante, hay funciones en que pueden aparecer preposiciones diferentes, y entonces son estas las que establecen distintas referencias a la realidad.
>
> 『どちらの場合においても、前置詞それ自身では、発話内では特別な機能を果たさず、前置詞句が果たす役割を示す語としてのみ用いられることは明らかである. しかしながら、異なった前置詞が表れうる場合があり、その場合にはそれらの前置詞は現実に対するさまざまな関連づけをおこなう. 』
>
> Así, cotejando los enunciados Se sentaron a la mesa y Se sentaron en la mesa, se observa que ambos llevan un adyacente circunstancial de función idéntica, pero cada uno hace diversa referencia en virtud de los sentidos distintos de las dos preposiciones a y en. Lo cual indica que las preposiciones, aparte de su función, están dotadas de un significante más o menos explícito según los contextos. De otro modo: las preposiciones, además de ser índices funcionales, comportan un valor léxico.
>
> 『たとえば、Se sentaron a la mesa と Se sentaron en la mesa という発話を比較すると、どちらも状況補語をもたらすという同じ機能を有していることが観察されるが、それぞれは、2 つの前置詞 a と en の異なった意味によって異なった指示をしている. その機能に加えて、このことによって前置詞は文脈によって多かれ少なかれ明白な意味を与えられていることが示される. 言い換えれば、前置詞は機能的な語であるだけでなく、語彙的意味も有している. 』
>
> —Alarcos Llorach (1994: 214−215)

一方で、RAE(2009)は前置詞の意味は抽象的であり、関係を示すものであると述べたうえで、述部の意味に応じて被制辞に「意味のしるし」を付加し、さらに、前置詞によって 2 つの情報、すなわち被制辞によってもたらされる情報と動詞によってもたらされる情報が結びつけられると述べている.

> El significado de las preposiciones, [...], es abstracto y casi siempre RELACIONAL. Por esta razón, es frecuente en las descripciones gramaticales presentar como significado de la preposición cierta noción que corresponde en realidad a su término. [...] En los análisis recientes es habitual señalar que las preposiciones MARCAN SEMÁNTICAMENTE su término, en el sentido de que INDUCEN en él determinados significados que se interpretarán en función de la situación designada por el predicado principal. De hecho, la naturaleza relacional de las preposiciones se manifiesta en que suelen poner en contacto las dos

informaciones que el hablante desea vincular; la aportada por su término y la que añade el predicado al que modifica o complementa como adjunto el grupo preposicional.

『前置詞の意味は(中略)抽象的であり、ほとんど常に関連を示すものである. それゆえ、文法的記述において、その被制辞に実際に相当する何らかの概念を前置詞の意味として表示するのはよくあることである. (中略)最近の分析では、前置詞は主要な述部によって示された状況に応じて解釈されうる特定の意味を導くという意味において、その被制辞に「意味的なしるしをつける」ことが一般的である. 実際に、前置詞の関連を示す性質は、話者が結びつけたいと思う 2 つの情報を常に関連づけることを際立たせる. その 2 つの情報とは、その被制辞によってもたらされる情報と、付加詞として前置詞句が修飾したり補完したりする述部が加える情報である. 』

—RAE (2009: 2227)

たとえば、RAE(2009)が提示する(33)を例にあげると、con は被制辞 una vieja pluma estilográfica『古い万年筆』と動詞 escribir『書く』がもたらす情報を結びつけている. つまり、被制辞によってもたらされる情報は書く道具に関係しており、その一方で動詞によってもたらされる情報はその道具が参与者としてかかわる特定の行為に言及している.

(33) Escribe todos sus artículos con una vieja pluma estilográfica.
『彼は自分の記事すべてを古い万年筆で書く. 』

—RAE (2009: 2227)

RAE(2009)が述べる「情報」を百科事典的知識であると考えると、本論文における前置詞に対する立場と近似すると考えられるが、次項ではこの被制辞に対する百科事典的知識によって前置詞の意味が変化する様子を確認する.

2.5.3. 百科事典的知識と前置詞の意味

本項では、前置詞と共起する名詞の百科事典的知識がどのような場合において前置詞の意味に影響をおよぼすのか、具体例を提示しながら観察する. (34)および(35)は百科事典的知識によって、前置詞が表す空間的意味が異なると考えられる例である.

(34) El libro está en la mesa. 『本はテーブルの上にある. 』

(35) El libro está en la caja. 『本は箱の中にある. 』

(34)と(35)において異なるのはランドマークの部分であるにもかかわらず、空間的意味は異なる. これは「テーブル」と「箱」、それぞれの名詞に対する百科事典的知識つまり、テーブルは「上にモノを置く」ものであり、それに対して箱は「中にモノを置く」ものであるという違いによって生じ

ると思われる. もちろん、「テーブルの中」や「箱の上」という解釈も可能ではあるものの、たとえば「本はテーブルにある」、あるいは「本は箱にある」と日本語で表された文の場合においても、それぞれ本は「テーブルの中」よりも「テーブルの上」、「箱の上」よりも「箱の中」にあると解釈され、これと同様の現象がスペイン語にも生じると考えられる.

(36) Me siento en la mesa. 『私はテーブルに向かって座る. 』

(37) Me siento en la silla. 『私はイスに座る. 』

また、(36)と(37)のように、動詞によって表される動作とその動作がおよぶランドマークとの関係によっても、前置詞によって示される空間的意味が異なると考えられる. (36)は Me siento a la mesa と比較され、「テーブルの上に座る」と解釈されると指摘する先行研究も多く見受けられる一方で、同じ空間的位置を示すこともあると述べる研究もまた存在している. この対立については第 4 章で詳しく観察するが、これは mesa の「座るためのものではない」という百科事典的知識によって、「テーブルの上に座る」ことが物理的に可能であるものの「テーブルに向かって座る」と解釈され、この場合において en は「隣接」を表している. それに対し、silla が共起した場合には、silla の「座るためのもの」であるという百科事典的知識によって、「イスの座面に座る」ことが示される. これに加え、ランドマークが同じであっても、(38)および(39)のように、トラジェクターであるモノの性質によっても空間的意味が異なる場合もある.

(38) Los niños están en la puerta. 『子どもたちはドアのところにいる. 』

(39) La llave está en la puerta. 『カギはドアにささっている. 』

(38)は niños が puerta のそばにいることを、(39)は llave が puerta のカギ穴にささっていることが描写されているが、(38)は少年がドア内部にはまっている状況、あるいは(39)は、カギがドアのそばにある状況として解釈されるのは不自然であると考えられる. 特に(39)では、カギはドアを開ける道具、そしてカギをカギ穴にさしてドアを開けるといったドアとカギそれぞれに対する百科事典的知識によって、ドアに含まれるカギ穴がプロファイルされて、「ドアのカギ穴の中」という解釈が可能になる. このような解釈をもたらす根拠のひとつとして荒川(1992)の名詞の「トコロ性」に関する考察があるが、次項ではこの荒川(1992)の考察が前置詞の意味分析に応用可能であることを提示する.

2.5.4. 「トコロ性」と前置詞の意味

荒川(1992)は中国語と対照しながら日本語の名詞の「トコロ性」を考察しているが、この「トコロ性」とはその名詞自身が空間や場所を表すことができる性質のことであり、『ココハ―デス』『―へ行ク』『―デ～シタ』といった文法的なワクにあてはめることが可能である名詞が基本的にトコロ性を有するとしている(荒川 1992: 73). これをふまえて、荒川(1992)は日本語の名詞を中国語と比較し、「ニ格」をとるさまざまな名詞を例にあげながら考察をおこなっている. そのなかで(40a)と(40b)および(41a)と(41b)のような表現をあげて、トコロ化しない場合とする場合、すなわち「上」や「中」といった場所を表す相対名詞が共起しない場合とする場合の容認度を比較している.

(40a) ベッドニネテイル

(40b) ?ベッドノ上ニネテイル

(41a) 椅子ニスワッテイル

(41b) ?椅子ノ上ニスワッテイル　　―荒川 (1992: 82–83)

(40a)と(41a)に対して(40b)と(41b)の容認度が下がることについて、荒川(1992: 83)は『トコロ(平面)ということが問題になっておらず, まさに「ベッド」は「ネル」の直接の対象であり、「椅子」は「スワル」の対象になっていて, 両者のあいだが, 空間的なむすびつきがないからだろう』と述べており、それゆえ、本来必要のない有標の形式である「上」が付加されることで、容認度が低下すると考えられる. さらに、荒川によれば、(42a)と(42b)のように、「ベッド」に対して「置く」行為をおこなう際には、人によって程度の差はあれども、トコロ化するほうが容認度は上がる.

(42a) ?ベッドニ置ク

(42b) ベッドノ上ニ置ク　　―荒川 (1992: 83)

荒川(1992)のトコロ性に関する考察と百科事典的知識の概念は通ずるところ、つまり、「ベッド」や「椅子」といった名詞に対する百科事典的知識によって、「上」などの相対的位置を表す名詞の共起の有無が選択されると思われる. たとえば、「ベッド」は「ヒトが寝るためのもの」、そして「椅子」は「ヒトが座るためのもの」であるため、そのことが意識されていれば「上」などの名詞が共起しないほうがより自然であり、それに対してベッドや椅子に「モノを置く」となれば、たとえその行為

がベッドや椅子に対する百科事典的知識に含まれていたとしても、プロトタイプ的な行為ではないため、(42b)の「上」のように相対的位置を表す名詞を共起させるほうがより自然な表現になると考えられる.

また、本多(2013)は荒川(1992)の指摘をアフォーダンスの観点から考察し、実際にこの見通しが正しいことを述べている[23]. 本多(2013)によれば、そのモノに対する行為が「ふさわしい行為」か「単に可能な行為」かによって表現が異なり、「上」といった名詞が用いられない場合には「ふさわしい行為」と共起しやすく、それに対して「～の上」と表現される場合には「単に可能な行為」と共起しやすい[24]. この見解をふまえて、先の(41a)を再度観察すると、椅子に対して「座る」ことはふさわしい行為であるため、この文は自然であるが、その一方で(41b)は椅子に対してふさわしくない座り方をしていることが表され、たとえば椅子の座面の上で正座をする様子やあぐらをかく様子が描写される. また、別の例として(43a)および(43b)を観察すると、前者は椅子に対して「立つ」ことはふさわしくない行為であるために「椅子に立つ」は不自然に感じられるが、その一方で後者の「椅子の上に立つ」はふさわしい行為でないものの、可能な行為であるために容認される.

(43a) *椅子に立つ

(43b) 椅子の上に立つ　　—本多 (2013: 113)

この本多(2013)が示す、そのモノに対する行為が「ふさわしい行為」であるか「単に可能な行為」であるかという基準を百科事典的知識に援用すると、名詞に対する百科事典的知識のなかでもより中心的なものと周辺的なものが存在すると考えられ、「ふさわしい行為」は中心的、つまりプロトタイプ的な行為であり、「単に可能である行為」は周辺的、つまり非プロトタイプ的な行為と定めることが可能であると思われる.

---

[23] そもそもアフォーダンス(affordance)は、生態心理学の分野における概念であり、ギブソン(Gibson)によって生み出された造語かつ概念である.『ある事物のアフォーダンスとは、その事物がある環境の中でそれぞれの知覚者に対して持つ意味である。より具体的には、環境の中のものが知覚者に提供する行為の可能性』(本多 2005: 56)のことである. たとえば、取っ手があるドアは「引く」行為をアフォードするのに対し、平らな木の板や金属板があるドアは「押す」行為を人間に対してアフォードする. アフォーダンスは、環境つまりあらゆる事物の中に存在するものであり、知覚者によって構成されるものではないという点、そしてアフォーダンスによってもたらされる行為の可能性はそれぞれの知覚者にとっての意味や価値であるという点が重要とされる. たとえば、イスというものは人間に対しては「座る」という行為をアフォードするのに対して、犬や猫に対しては「座る」という行為をアフォードしない. このように知覚者によって、さらには知覚者の能力、知覚者のおかれている環境によってもアフォードする行為が異なってくる.

[24] 本多(2013)はアフォーダンスが言語とどのように結びついているかテクニカルタームを用いずに書かれたものである.「可能な行為」は「アフォーダンス」、「単に可能なだけの行為」は「自然のアフォーダンス」、「ふさわしい行為」は「文化的なアフォーダンス」という用語に読み替えることが可能であることを自身のホームページにおいて記述している. [http:// akirahonda.no.coocan.jp] (最終アクセス日 2016 年 12 月 23 日)

このように、日本語では名詞の百科事典的知識が相対的位置を表す名詞の有無に影響をおよぼしていると考えられるが、スペイン語の前置詞に関しても同様のことがいえそうである. たとえば、「上」に相当する前置詞あるいは前置詞句は en, sobre, encima de であるが、このなかで en は最も用いられやすい語であり、日本語でいうところの「ニ」にあたる. それに対して、sobre や encima de は「上ニ」に相当し、en に対して有標の形式であると考えられ、これらのうちどの表現が選択されるかは動詞のみならず、前置詞と共起する名詞、そしてその名詞に位置づけられる名詞の百科事典的知識によるものと考えられる.

以上をまとめると、前置詞の役割はその被制辞と動詞からもたらされる情報をつなげることであり、その空間的意味は機能語ゆえに文脈に依存するため、前置詞自身に意味が含まれているといえるものの、動詞や共起する被制辞、その被制辞に位置づけられる名詞の百科事典的知識によって選択されるのである.

本章では、理論的枠組みとしてまず最初に認知意味論における基本的な概念であるカテゴリー化とプロトタイプ理論、百科事典的知識、そして多義の概念、多義語を分析する際に必要とされるメタファーとメトニミーの理論について概観した. さらに、前置詞の意味を分析するにあたって、トラジェクターとランドマークの概念、イメージ・スキーマについて観察したが、前置詞の意味をこのイメージ・スキーマで表すには限界が生じると考えられたため、Vandeloise(1991), (2003)の意見を援用し、批判的に検証しつつ、前置詞の意味が前置詞自体の意味ではなく、むしろ共起する名詞の性質によって決定されることを主張した. この名詞の性質とは名詞に対する百科事典的知識のことであるが、この百科事典的知識と前置詞の意味がどのように関係しているのか、具体例を観察しながら、荒川(1992)や本多(2013)の考察を参考にし、本論文での方向性を確立させた.

3．先行研究

3.1. はじめに

本章ではスペイン語の前置詞に関する先行研究の記述の確認をおこなうが、前半では数多く存在する研究のなかでも特にスペイン語の前置詞の意味が体系的に記述されている López (1972)および Morera Pérez(1988)を確認し、その方法論について批判的に検討する. 続いて、後半では本論文で重点的にとりあげる前置詞 en の空間的意味について記述している先行研究を確認する.

3.2. López (1972)

López(1972)は Pottier(1966[4])の分析をスペイン語に適用することで、スペイン語の前置詞の意味を体系的に説明することを試みている. Pottier(1966[4])の分析にしたがって、まず前置詞を次元的領域(universo dimensional)と概念的領域(universo nocional)の 2 つの領域に分類し、さらに次元的領域を空間と時間に下位分類している. このように分類したうえで、前置詞には空間的意味、時間的意味、そして概念的意味があると述べている. さらに、López(1972: 131)は«Según la tesis histórica, el sentido primitivo u original de una preposición sería, pues, espacial»『歴史的な見解によれば、前置詞の本来の意味は空間的なものであろう』と述べ、前置詞の本来的意味は空間的意味であるとしている. この記述は前置詞の中心的な意味は空間的意味であり、そこから時間的意味および概念的意味が拡張されていることを示唆していると考えられるものの、それぞれの意味が拡張される要因には触れられていない.

次に、López(1972)は前置詞の意味記述をおこなうにあたって、言語活動(lenguaje)を言語(lengua)と談話(discurso)の 2 つのレベルに分けて考えており、言語をわれわれが常に備えているもの、そして談話をその言語を実際にわれわれが使用しているものとそれぞれ定義している.

> 1º. El nivel de la lengua, es decir, del sistema que poseemos de una manera permanente, incluso cuando no hablamos.
>
> 『言語のレベル、つまり発話していない場合でもわれわれが常に備えている体系のレベル』
>
> 2º. El nivel del discurso, es decir, de la utilización que hacemos de la lengua cada vez que formulamos un enunciado.
>
> 『談話のレベル、つまり発話をおこなうたびに言語から作られる使用のレベル』
>
> —López (1972: 128)

以上の記述をもとに、以下の 4 つのポイント(a)～(d)をあげて、López(1972)は前置詞の意味

分析をおこなっている. すなわち、各前置詞のイメージ図は言語レベルの意味を表し、各前置詞の用例は談話レベルで扱われ、イメージはこの用例によって構成される.

(a) La representación gráfica de cada preposición constituye su significación en lengua.

『それぞれの前置詞の図示は言語における意味を構成する. 』

(b) Desde el momento en que damos ejemplos nos colocamos en el plano del discurso.

『われわれが例を提示する時点から、談話の視点に立っている. 』

(c) La imagen en lengua está constituida por el conjunto de rasgos pertinentes extraídos de los ejemplos del discurso.

『言語におけるイメージは談話の例から引き出された妥当な特徴の集まりによって構成される. 』

(d) En cuanto al orden que vamos a seguir en el estudio de las preposiciones, no nos atenemos a un orden alfabético, sino que tratamos, siempre que sea posible, de agrupar las preposiciones por parejas. Así, empezamos estudiando la prepocisión a, seguida de de; en, seguida de entre; por y para; sobre y bajo, etc.

『前置詞の考察での順序に関しては、アルファベット順ではなく、可能である限り前置詞のペアを作ることを試みる. そこで、a に対しては de、en に対しては entre、por と para、sobre と bajo のようにペアを作って考察を始める. 』

—López (1972: 134)

この記述以降、López(1972)は各前置詞の意味を記述する際に、まず言語レベルとして、スキーマ(esquemas representativos)を描写し、そのスキーマをもとに、空間的意味、時間的意味、概念的意味での談話レベルの例を示し、そこから意味の記述をおこなっている. 以下は en を例にとって引用したものであるが、物体が内部にある様子、そして内部へ入る移動の様子をスキーマに表している. なお、前置詞の空間的位置を図示したスキーマの概念は第 2 章で確認したイメージ・スキーマとほぼ同様の概念であると思われる.

Preposición EN. —EN representa la interioridad en un doble límite, y también el movimiento franqueando un límite de interioridad.

『前置詞 EN —EN は 2 つの境界における内部を表し、またその境界を越え、内部に入る移動も表す. 』

(← (X) →)　　○ →[→ ●]

—López (1972: 136)

そして、談話レベルの例として、空間的意味は estar en clase『授業中である』、時間的意味は lo haré en dos días『私はそれを 2 日かけてやるだろう』、概念的意味は ocuparse en algo『何らかの役割を果たす』などをあげており、最終的に空間的意味は«situación en el interior de, o en los límites de»『ある場所の内部あるいは範囲内の状況』、«consecución de un límite con entrada o contacto[25]»『進入あるいは接触による境界の連続』とし、時間的意味は«en los límites de»『範囲の中で』、«consecución de un momento»『ある時点の達成』、そして概念的意味は«entrada en una nueva situación, entrada en un nuevo estado»『新たな状況に入ること、新たな状態に入ること』をそれぞれ表すと記述されている(López 1972: 136–137). これに加え、en の内部(interioridad)の意味から重なり(superposición)の意味が拡張していることを述べており、たとえば en la mesa は«en el interior de los límites de la mesa»『テーブルの範囲の内部』を表しており、sobre la mesa と同義であることが述べられている(López 1972: 137). このとき、en la mesa は「テーブルの上に」という意味を表すが、これは平面であるテーブルの表面上の範囲の内部と解釈可能と述べられていることから、López(1972)は en の空間的意味の中心的意味は「内部」であると主張していると考えられる. なお、前置詞の意味を空間的意味、時間的意味、概念的意味に大別している研究は他にも存在し、Fernández López(1999: 34–35)は、たとえば en の項目でその意味を usos espaciales, usos temporales, usos nocionales の 3 つに大きく分類し、意味の記述をおこなっている.

さらに、López(1972)は、前置詞の意味を体系的に記述することに加え、先の引用(d)で述べているように 2 語のペアとなる前置詞をとりあげ、«Las oposiciones están realizadas según tres planos: plano gramatical, de sentido y facultativo»『対立は 3 つの側面に基づいて観察される. つまり、文法的対立、意味的対立、そして交替可能な対立である』(López 1972: 147)と述べ、文法的対立、意味的対立、そして交替可能な対立という 3 つの点に分類して考察をおこなっている. なお、以下で述べられているように、文法的対立とは動詞や被制辞によって前置詞が決定されるような対立、意味的対立とは前置詞の部分のみが異なる文において意味の差が生じる対立、そして交替可能な対立とは前置詞を交替させてもその文の意味は変化しないとされる対立である.

> En el plano gramatical registramos aquellas oposiciones formadas por construcciones que necesariamente exigen una determinada preposición. Por ejemplo, el objeto de persona exige la preposición a, mientras que el de cosa no.

[25] たとえば、ir de puerta en puerta がこれに該当する. (López 1972: 136)

『文法的側面では、特定の前置詞を必然的に要求する構文によって形成される対立が観察される. たとえば、目的語がヒトである場合には前置詞 a が要求される一方で、モノである場合には要求されない. 』

Las oposiciones de sentido, como su nombre indica, están constituidas por frases de igual contorno, pero con preposiciones diferentes, que cambian por completo el sentido de la frase. Pensamos, por ejemplo, en salir de Nueva York / salir para Nueva York.

『意味的対立は、その名称が示すように、前置詞の部分のみが異なり、他の部分が同じである文によって構成され、文の意味は完全に変化する. たとえば、「ニューヨークから出発する」と「ニューヨークへ出発する」を考えてみよう. 』

En el grupo de oposiciones facultativas hemos registrado aquellos casos en que es indiferente el uso de una u otra preposición; así, lo dijo en broma / lo dijo de broma. Son los casos de posibilidad de permutación, de neutralización de preposiciones.

『交替可能な対立では、たとえば、lo dijo en broma「彼はそれを冗談で言った」と lo dijo de broma「彼はそれを冗談で言った」のように、2 つの前置詞の用法に差異がない様子が観察される. これらは交替可能、そして前置詞の意味的中和が生じている場合である. 』

—López (1972: 147)

以上は López(1972)の前置詞の意味分析における方法論であり、認知意味論に基づく分析でないものの、イメージ・スキーマに類似した図を用いて各前置詞の中心的意味を図示したうえで意味の記述をおこなっている点に加えて、文法的および意味的観点に基づいて交替可能な 2 つの前置詞を比較している点など、本論文における方法論と合致する個所がある. しかしながら、以下のような問題点も指摘できると思われる.

まず最初の問題点は、López(1972)は Pottier(1966[4])にしたがって、前置詞の意味を空間的意味、時間的意味、概念的意味の 3 つの意味に大きく分類可能としたうえで、本来的な意味は空間的意味であると述べ、さらにそれぞれの意味の中心となるイメージを提示しているものの、そこからどのように時間的意味や概念的意味が拡張しているのかについて、つまりそれぞれの意味との関連性について言及していない点である. そのため、空間的意味と時間的意味および概念的意味のそれぞれの意味には何らかの動機づけがあり、相互に関連性が存在していると考える認知意味論の理論を援用することによって、その部分を明らかにすることが必要であると思われる.

もうひとつの問題点は、交替可能な前置詞を比較しているものの、意味的対立が明確でない場合には交替可能な対立とし、両者には意味的差異がないものとして扱っている点である. このような立場をとる López(1972)の以下の記述について、García Yebra(1988)はこの部分を引用しながら、懐疑的な立場をとっている.

Pues bien, hoy, como hemos visto, en el sistema preposicional español hay construcciones en las que es indiferente el uso de una o de otra preposición, pero es muy posible que la norma se decida por una determinada y la otra queda poco a poco arrinconada. [...] Por otra parte, hemos visto el intercambio que hay en el sistema preposicional, puesto que varias preposiciones pueden expresar la misma relación: [...]

『今日では、先に観察したように、スペイン語の前置詞体系の中にはどちらの前置詞を用いても問題ない構文があるが、規範がどちらか一方の前置詞に定め、もう片方は少しずつ使用されなくなるということはおおいにありうる.（中略）一方で、前置詞体系において、いくつかの前置詞が同じ関係性を表すことが可能であるゆえに、存在する交替を観察した.』

—López (1972: 208–209)

A mi juicio, no se trata en todos estos casos de exactamente la misma relación, pero sí de relaciones suficientemente próximas entre sí para que podamos ver en ellas la sinonimia que hemos reconocido en tantas preposiciones. Tampoco los sustantivos, verbos, adjetivos o adverbios que solemos considerar como sinónimos tienen exactamente la misma denotación y, menos aún, las mismas connotaciones.

『私の判断では、これらすべての場合において全く同じ関係とあるとはいえないが、確かにお互いが十分に近い関係であり、いくつかの前置詞のなかには我々が認めた類義語を観察することができる. 類義語として常に考えられる名詞、動詞、形容詞あるいは副詞もまた、全く同じ意味を有しない. 言外の意味であればなおさらである.』

—García Yebra (1988: 72–73)

García Yebra(1988)の主張は認知意味論の考え方と合致しているが、それはとりもなおさず本論文における主張とも合致している. 本論文が援用する認知意味論は、「形式が異なれば意味も異なる」という立場に基づいて意味分析をおこなうため、たとえ 2 語の前置詞が交替可能で同じ状況を表す場合であっても、何らかの差異が見受けられるという立場をとる. したがって、本論文では複数の前置詞あるいは前置詞句が交替可能な場合、それぞれの前置詞がどのような状況において用いられるのかをコーパスを利用して明らかにする.

3.3. Morera Pérez (1988)

前置詞の意味を体系的に記述しているものには他に Morera Pérez(1988)があるが、Morera Pérez(1988)は López(1972)と異なり、前置詞の意味を意味素性(sema)によって定義していることが際立った特徴である. Morera Pérez(1988)は図 10 にみられるように 15 項目の意味素性を用いて、その素性の有無によって前置詞の意味を定義している.

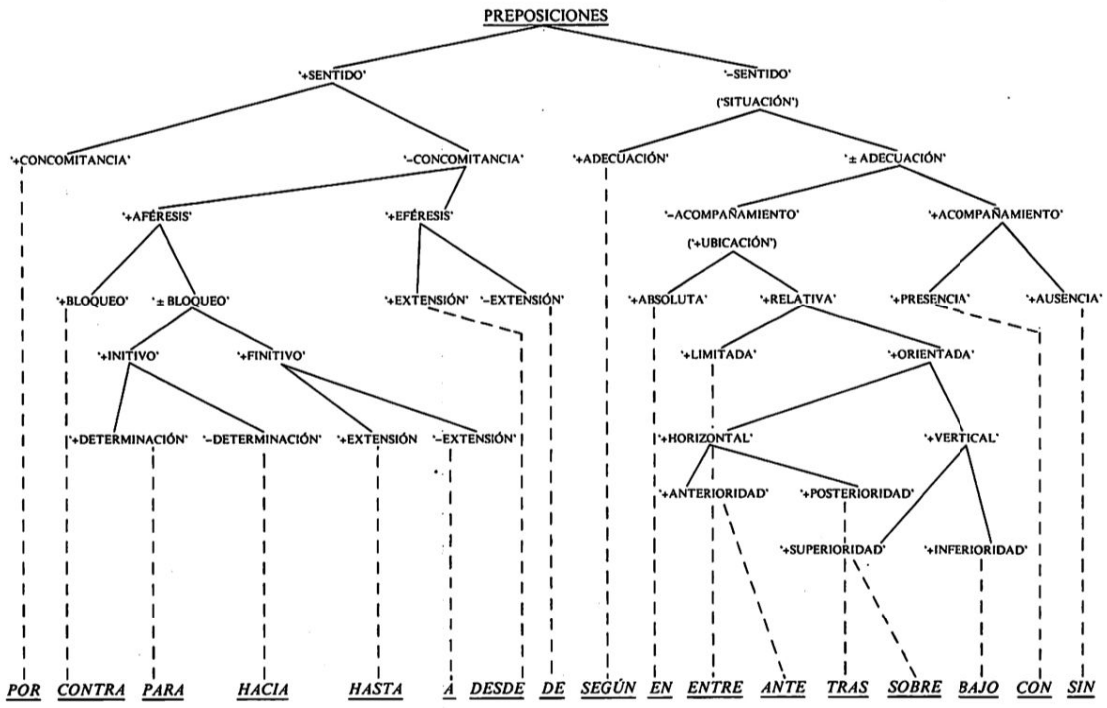

図 10　スペイン語前置詞の意味素性による分類 —Morera Pérez (1988: 85)

たとえば、前置詞 en は[-sentido] [+ubicación] [+absoluta]『[-方向性] [+位置性] [+絶対性]』の 3 つの意味素性で定義される. このように意味素性を組み合わせることで意味をとらえる方法はチェックリスト意味論においてとられていたが、この方法は語の意味の関連性、たとえば同義性や反義性などを明確にとらえられるという点において有効である[26]. この方法論に関する問題点は第 2 章で述べたとおりであるが、認知意味論ではこの問題点を解消するために異なる立場に基づいて語の意味をとらえている. このように、Morera Pérez(1988)はそれぞれの前置詞の意味は意味素性の組み合わせによって定義されることを主張しているが、この定義に加え、それぞれの前置詞にみられる意味を可能な限り列挙していることもこの研究の大きな特徴で

[26] Fillmore(1975)にしたがって、松本(2003b)において用いられている名称. 以下でも例をとりあげるが、たとえば、boy という単語が[+human] [+male] [+adult]という 3 つの要素で構成されるという構造主義に基づいた考え方である. このように定義することによって girl, man, woman を以下のように表すことが可能であり、単語の関係が明確にできる. このような意味特徴は示差的特徴(distinctive feature)とよばれる(松本 2003b: 20–21).
man　[+human] [+male] [+adult]
woman　[+human] [-male] [+adult]
boy　[+human] [+male] [-adult]
girl　[+human] [-male] [-adult]
ただし、以降でも述べるように構造意味論では示差的特徴以外の意味的要素は二次的なものとされたため、示唆的でない要素が含まれないという点において問題があるとされた.

ある. たとえば本論文でとりあげる en は 41 の意味に分類[27]されており、ひとつひとつ例があげられ、それぞれの意味が詳細に記述されている.

ここまで述べたように、意味素性で前置詞の意味を定義している点、そしてその定義に基づいてこと細かく個々の前置詞の意味を可能な限り列挙している点が Morera Pérez(1988)の特徴であるが、以下で述べるようにいくつか問題点が存在すると思われる. まずひとつは、意味素性の組み合わせによって意味を定義するチェックリスト意味論において指摘される問題点であるが、松本(2003b)をはじめ多くの研究者が指摘しているように、語の意味を意味素性の組み合わせによって定義すると、語の意味を十分に記述できなくなる可能性がある. このような問題が生じる例として、松本(2003b)は braise を例にあげ、以下のように述べる.

> 『例えば, braise（妙め煮する)という動詞を考えてみよう。この動詞の表す事象は, 〈食物の表面を少量の油で焼いたあと, 水などの油以外の液体を加えて(ふたの付いた鍋で)中火で煮る〉ことである。この語が他の料理動詞とどのように対立しているかというと, 水と油の両方を使用する点で, 水のみを使う boil（ゆでる, 煮る)（中略）油のみを使う fry（妙める, 揚げる), どちらも使わない broil（直火で焼く)（中略）と対立している。水と油の両方を使うものは braise のみであるから, [+oil] と [+water] のみで他の語との対立は表すことができる。しかし, この 2 つの特徴だけでは braise の意味を十分に規定したとはいいがたい。』
>
> —松本（2003b: 26–27)

すなわち、語の意味を定義するにあたって、意味素性の組み合わせだけでは限界が生じるのである. 一方で、認知意味論では認識する主体によって意味が異なると考え、語の意味が事物に関するさまざまな知識と結びついていると考える(松本 2003b: 30). その際に用いられる概念が第 2 章でとりあげた百科事典的知識である.

次の問題点は意味がただ列挙されているだけであり、それぞれの意味に動機づけがなされていない、つまりそれぞれの意味に関連性が見いだせない点である. 1 つの多義語には中心的意味が存在し、そこからさまざまな意味が拡張されていると考えると、語の意味の記述にある程度のまとまりが生まれると考えられるが、それぞれの意味に動機づけがなされないと、用例の数だけ意味が生まれるという、いわゆる多義の誤謬を引き起こしかねない. ある語に多義性が見いだせる場合には、個々の意味の間には関連性があると考えられ、たとえば、意味どうしの間ではメタファーやメトニミーによる意味の拡張がみられ、また、それぞれの意味がその語の中心的な意味とされるプロトタイプ的意味の一部を有しているとされる. しかしながら、以下の記述は 41 項

[27] これら 41 の意味は必要に応じて、下位分類されている. たとえば、(1)としてあげられている意味は(a)～(ñ)に下位分類され、さらに(b)の意味は(α)と(β)に下位分類され、意味および用例が記述されている.

目ある en の意味に記述されている最初の 3 つの意味であるが、ここで観察されるように、その記述内容と順序からその関連性が述べられているとはいいがたいと思われる.

> [1] Regida por verbos de movimiento, se pueden distinguir los siguientes usos de en: [...] (361)
>
> 『移動動詞に要求され、以下の en の用法を区別することができる. 』
>
> [2] Regida por una noción de 'reposo' pueden señalarse los siguientes usos: [...] (373)
>
> 『"静止"の概念に要求され、以下の用法を観察することができる. 』
>
> [3] En general, con un verbo regente que denota 'actividad', tales como trabajar, estudiar, buscar, etc., en desarrolla también un sentido 'espacial' o 'nocional', según el significado del régimen, y puede conmutar, habitualmente, con las preposiciones situativas, sobre todo. (378)
>
> 『概して、「働く」、「勉強する」、「探す」などといった"活動"を示す動詞と共起し、被制辞の意味にしたがって、en は"空間的"あるいは"概念的"意味でも用いられ、普通、とりわけ場所を表す前置詞と交替可能である. 』
>
> —Morera Pérez (1988)[28]

[1]は移動動詞と共起する場合、[2]は「静止」の概念[29]と共起する場合、そして[3]は活動を表す動詞と共起する場合と項目立てがなされている. しかし、それぞれ[1]と[2]と[3]の間に何らかの関連づけがなされていることは述べられておらず、記述の順序を観察してもそれぞれがかかわりあっているとは考えにくく、意味の羅列に終始し、できるだけ多くの意味を記述しようとしている感が否めない.

最後の問題点は前置詞の意味を動詞の意味によって分類している点である. 先に観察した[1]～[3]の記述はすべて、en と共起する動詞によって項目分けがなされているため、前置詞の意味というよりはむしろどのような意味を有する動詞と共起しやすいのかを記述しているような印象が見受けられる. 動詞と前置詞の意味のこのような関係については RAE(2009)においても触れられている.

> Los complementos de régimen preposicional introducen preposiciones seleccionadas, en el sentido de requeridas, impuestas o elegidas por el predicado (verbal, nominal o adjetival) del que dependen. Algunos gramáticos distinguen entre aquellos casos en que la preposición seleccionada CONSERVA su valor semántico independiente (como de en Venir de París, donde la preposición mantiene el valor de separación que caracteriza algunos de sus

[28] [1]～[3]は筆者により付加. また、( )内の数字は Morera Pérez(1988)におけるページ数を示す.

[29] noción と記述されているが、日本語の『とどまる』、『いる、ある』にあたる quedarse, permanecer, estar, hallarse などの動詞を指している.

usos: § 29.7ñ) de aquellos en que no se reconocen motivaciones semánticas en su selección (Carecer de algo).

『前置詞補語は述部(動詞、名詞あるいは形容詞)によって要求されているという意味で選択された前置詞と共起している. 文法学者のなかには、選択された前置詞がその意味的価値を「保っている」場合(たとえば Venir de París の de はその用法のいくつかを特徴づける分離の意味を有している)とその選択において意味的動機づけが認められないケース(Carecer de algo の de)を区別している者もいる. 』

—RAE (2009: 2717)

つまり、述部と前置詞の間に意味的動機づけが認められない場合もあるものの、概して前置詞は述部によって要求されるのである. この観点にしたがえば、Morera Pérez(1988)の意味の記述は妥当であると思われるが、Morera Pérez(1988)の分類は主に共起する動詞によるものであるため、動詞以外の要素が前置詞を要求することはないのかという疑問が残る. したがって、本論文では動詞よりもむしろ en に後置される名詞を中心とした動詞以外の語に注目し、前置詞と共起する名詞や別の語句の百科事典的知識によって前置詞の意味が明確になると仮定したうえで考察をおこなう.

3.4. 前置詞 en の空間的意味に関する先行研究

前置詞 en の意味は研究者によって差異はあるものの、基本的には López(1972)が述べているような分類、すなわち空間的意味、時間的意味、概念的意味の 3 つに大きく分類され、これらの意味からさらに下位分類がなされているものがほとんどである. ここでは en の意味を記述している先行研究をとりあげ、とりわけ空間的意味に関する記述を確認する.

3.4.1. Moreno y Tuts (1998)

Moreno y Tuts(1998)は en の意味の概要を説明したうえで、空間的意味の例を「～の上に」と「～の中に」に分類し、その拡張的意味とともにあげている.

Esta preposición sirve para localizar en el espacio y en el tiempo.
A esta localización añade las ideas de interiorización o penetración, así como la de resultado final, o, dicho con otras palabras, entrada en una nueva situación o estado.

『この前置詞は空間あるいは時間に位置づけるために用いられる.
この位置づけに加え、内にとりこむことや入りこむことを表す概念、また、最終的な結末の概念、すなわち新たな状況や状態に入る概念がある. 』

—Moreno y Tuts (1998: 82)

以下の(44)～(47)は「表面の上」を表す en であるが、en の意味を encima de および sobre の意味と等価であるとみなし、その差異には言及せずに記述している.

Encima de, sobre.『～の上に』

(44) La comida está en la mesa. 『食事はテーブルの上にある.』

(45) Hay una mosca gordísima en la pared. 『壁にとても丸々としたハエがとまっている.』

(46) Se apoyó en su hombro. 『彼女は彼の肩にもたれかかった.』

(47) No pongas los libros en el suelo. 『床に本を置かないで.』

—Moreno y Tuts (1998: 82)[30]

続いて、空間的範囲を広げた意味として(48)～(50)があげられているが、これらは先の(44)～(47)と異なり、sobre および encima de と交替できない例としてあげられていると考えられる.

En sentido m**á**s amplio. 『広い意味で』

(48) Me acosté en el sofá. 『私はソファーで寝た.』

(49) La noticia ha salido en todos los periódicos.
『そのニュースはすべての新聞に載った.』

(50) Te espero en la puerta. 『私は君をドアのところで待つ.』

—Moreno y Tuts (1998: 82)

さらにあげられている(51)～(53)は「内部」を表す en であり、dentro de と同じ意味として記述されている一方、(54)および(55)は広い意味で「内部」を示した例としてあげられており、これらは dentro de と交替可能でないものとして扱われていると考えられる.

dentro de『～の中に』

(51) Mete esto en tu armario. 『これを君のタンスに入れなさい.』

(52) Encontré aquella carta en su bolsillo. 『私は彼のポケットからあの手紙を見つけた.』

(53) Pon la ropa sucia en lejía. 『汚れた服を漂白剤につけなさい.』

[30] Moreno y Tuts (1998)にあげられている例文はイタリックである. 以下同様である.

En sentido m**á**s amplio.『広い意味で』

(54) Me he dejado el paraguas en casa. 『私は傘を家に置いてきた.』

(55) Se conocieron en una sala de fiestas. 『彼らはナイトクラブで知りあった.』

—Moreno y Tuts (1998: 83)

以上の記述では en の意味を表すために別の前置詞あるいは前置詞句を用いることが可能であることを示唆しているが、同じ意味とみなしているため、意味的差異に関する言及はない. この en と sobre あるいは encima de の差異については 4.5.で、そして en と dentro de の差異については 4.6.で考察をおこなう.

3.4.2. RAE (2009)

RAE(2009)は、先の Moreno y Tuts(1998)とは異なり、en の意味を他の前置詞や前置詞句で表すことはせずに、「表面の上」と「内部」の 2 つの意味をこの順序でそれぞれ記述していることに加えて、物理的な接触や隣接をことにも言及している. ここでは触れられていないが、以下の引用内における例文 Te espero en la puerta『君をドアのところで待つ』の en を a に交替させても同じ状況を表すことが可能であることが他の先行研究において記述されている. この a との比較については 4.4.で述べることにする.

> Se usa para indicar el lugar que ocupa lo que está en la superficie de algo (en la mesa, en la playa) o en su interior (en el cajón, en mi cabeza), y se emplea tanto en las situaciones en las que hay contacto físico con algo (El cartel est*á* en la pared) como en las que se expresa solamente proximidad (Te espero en la puerta).
>
> 『あるものの表面(テーブルの上、海岸で)もしくはその内部(引き出しの中に、私の頭の中に)である物体が占めている場所を示すために用いられ、そしてあるものと物理的接触がある状況(壁にポスターがある)や隣接を表すだけの状況(君をドアのところで待つ)でも用いられる.』

—RAE (2009: 2266)

3.4.3. Garc**í**a Yebra (1988)

en の空間的意味に関して、García Yebra(1988)は en の語源であるラテン語の IN の意味に基づき、「向かう場所」と「存在する場所」の 2 つに分類しているが、これは動詞が移動動詞か移動を表さない動詞かで異なるだけであり、前置詞の意味的差異として認めにくいと考えられる.

En la preposición en concurren asimismo dos significados fundamentales: el que indica un lugar al que se va, p. ej. «entrar en casa», y el que señala un lugar en el que se está, p. ej. «vivir en el campo».

『前置詞 en も同様に 2 つの基本的な用法がある:「家に入る」のような、向かう場所を指す意味と、「田舎に住む」のような存在する場所を示す意味である. 』

—García Yebra (1988: 67)

以上の分類をおこなったうえで、García Yebra(1988)はラテン語の奪格をとる IN に由来する en の意味を記述し、(56)と(57)にみられるように「内部」の意味を最初に提示し、続いて、(58)と(59)にみられる「表面の上」の意味を示している.

La preposición en ha perdido muchos de los valores de su antecesora latina, pero ha conservado algunos. Predominan en español los procedentes del uso de in con ablativo, para expresar:

『前置詞 en では、本来ラテン語にあった意味の多くが消失しているが、いくつかの意味が保持されている. スペイン語では奪格と用いられる in の用法から由来した意味が優勢であり、以下のことを表す. 』

(a) el lugar dentro del cual está u ocurre una cosa

『何かがある、あるいは生じる内部の場所』

(56) Está en casa 『彼は家にいる』

(57) Da clase en el aula núm. 12 『彼は第 12 教室で授業をする』

(b) la superficie en que algo está o se desarrolla

『何かがある、あるいは何かが展開している表面』

(58) La comida está en la mesa 『食べ物はテーブルにある』

(59) Escribe en la pizarra 『彼は黒板に書く』

—García Yebra (1988: 181–182) 筆者により編集

3.4.4. Fernández López (1999)

Fernández López(1999)はまず最初に en にはおおまかな場所の意味があることを(60)および(61)を用いて示したうえで、この意味の下位カテゴリーとして「内部」と「表面の上」の意味を分けて言及することが可能であることをそれぞれ(62)と(63)をあげながら述べている.

Indica el lugar en el que se localiza algo o en el que tiene lugar algún acontecimiento:

『あるものが置かれている場所、あるいは何らかの出来事が起こる場所を指す.』

(60) El Parque del Retiro está en Madrid. 『レティーロ公園はマドリードにある.』

(61) Estudié cuatro años en este instituto. 『私はこの中学校で 4 年勉強した.』

La preposición en hace referencia al interior del lugar mencionado:
『前置詞 en は示された場所の内部に言及する.』

(62) Tu madre está en la tienda de ropa. 『君の母親は服屋にいる.』

También puede hacer referencia a la parte superior o la superficie de un objeto:
『また、ある物体の上部、あるいは表面に言及することも可能である.』

(63) Los platos ya están en la mesa. 『皿はすでにテーブルにある.』

—Fernández López (1999: 34–35)[31]

3.4.5. Slager (2010)

Slager(2010)はここまで観察してきた先行研究とは異なり、en の意味は曖昧であり、「表面の上」と「内部」は区別されずに用いられると述べ、(64)の対話をあげながら、en mi escritorio が机の上とも机の中、すなわち引き出しの中とも解釈可能であることを示している.

Para indicar de forma muy neutra un lugar donde se ubica algo o se desarrolla alguna acción se usa en, sin distinción entre ubicación en una superficie o en un espacio cerrado:
『en は、あるものが置かれている場所や何らかの行為がおこなわれている場所をかなり漠然と指し示すために用いられるが、表面の位置と閉じた空間における位置は区別されない』

(64) —El sobre lo tenía en mi escritorio. 『私は机に封筒を保管していた.』
—¿Pero, encima o en uno de los cajones?
『でも、机の上かい、それとも引き出しの中かい.』

—Slager (2010: 98)

3.4.6. Bruyne (1999)

Bruyne(1999)は「表面の上」と「内部」といった表現を用いず、空間的一致(coincidencia espacial)という表現で en の空間的意味を記述しているものの、あげられている(65)および(66)の en はどちらも「内部」を示すものであり、en の意味は「表面の上」よりも「内部」であることを示

[31] Fernández López (1999)にあげられている例文はイタリックである. 以下同様である.

唆しているように思われる.

En es una preposición de coincidencia espacial en sentido amplio.
『en は広い意味で空間的一致を表す前置詞である. 』

(65) Cenaré en casa. 『私は家で夕食をとるつもりだ. 』

(66) Guarde el dinero en la caja fuerte.『金庫にそのお金を保管してください. 』

—Bruyne (1999: 669)

3.4.7. Salv**á** (1988)

Salvá(1988)もまた Bruyne(1999)と同様に、「表面の上」と「内部」で意味を峻別せず、場所を表す前置詞として記述している. なお、Salvá(1988)は(71)のように交通手段を表す en も場所を表す意味のなかに含めている.

Que es el in latino, nos designa el lugar o sitio en que se halla o se hace una cosa, y la embarcación, carruaje o cabalgadura en que uno va.
『ラテン語の in に相当し、ある物が存在、あるいはあることがなされる場所、人が乗りこむ船、車、馬を示す. 』

(67) La comida está en la mesa 『食べ物はテーブルにある』

(68) Vive en Burgos 『彼はブルゴスに住んでいる』

(69) Reside en la colegiata 『彼は参事会教会に住んでいる』

(70) Mora en tal villa 『彼はそのような町に住んでいる』

(71) Viene en coche 『彼は車で来る』

—Salvá (1988: 541–542) 筆者により編集

3.4.8. **先行研究における en の意味の考察**

ここまで en の意味に関するいくつかの先行研究の記述を観察したが、先行研究によってその記述内容に多少の差異はあるものの、すべての文献において最初に空間的意味を記述していることが確認されるため、プロトタイプ理論に基づいて考えると en の中心的意味は空間的意味であるといえそうである. プロトタイプ理論については第 2 章ですでに述べたように、多義語の中心的意味を定めるためにこの理論は重要であると考えられており、ある例がプロトタイプに類

似すればするほど、カテゴリー成員として早く認識されるというプロトタイプ効果がみられる. つまり、先に記述されるほうがよりプロトタイプ的意味、すなわち中心的意味であることのひとつの根拠になりうるのである. この空間的意味を中心的意味としたうえで、さらにその空間的位置をどのように記述しているかによって下位分類をおこなうと次の A～C に分類可能であると思われる. なお、以下にあげる意味以外にも、空間的意味として en tren のような交通手段を表す用法や、entrar あるいは caer などの移動動詞と共起する用法も確認されるが、本論文では最も基本的とされる「場所」の意味の記述のみを考察対象にしている.

A. 「表面の上」の意味を最初に記述し、そのあとに「内部」の意味を記述しているもの.
B. A とは反対に、「内部」の意味を最初に記述し、「表面の上」の意味を記述しているもの.
C. 「表面の上」と「内部」の意味を曖昧としている、あるいは特に区別せず、単に「場所」の意味として記述しているもの.

これらの分類の基準は、「表面の上」の意味と「内部」の意味をどの順序で示しているのか、あるいはこれら 2 つの意味を峻別せずに場所の意味として記述しているのかどうかであるが、ここで記述の順序を分類の基準にしているのは、先に述べたプロトタイプ理論に基づいて考察をおこなうためである. しかしながら、ここまでそれぞれの先行研究を観察して明らかであるように、en の空間的意味は主に「表面の上」の意味と「内部」の意味で下位分類されるものの、先行研究における記述の順序、つまりプロトタイプ的理論の観点の立場から観察すると、A の立場と B の立場との間に明らかな傾向がみられないため、これら 2 つの意味のうちのどちらがより中心的であるのかを判断することは容易ではない. また、積極的にこれら 2 つの意味の関係を明確にすることを試みている研究は確認されなかったため、どちらがより中心的意味であるかについて考察をおこなう必要があると考えられる. なお、Slager(2010)は先の(64)をあげながら、「表面の上」と「内部」といった 2 つの空間を区別せずにひとつの表現で表すことが可能であることは他の言語ではみられず、スペイン語に特有の現象であると指摘している.

> En muchas otras lenguas, la frase Lo *tenía* en mi escritorio no se podría formular de forma tan neutra; en ellas hay que concretar siempre si el objeto en cuestión estaba en la superficie o en el interior del mueble: [...]
>
> 『他の多くの言語では、「封筒を私は机に保管していた」という文はそれほど曖昧に表現されないだろう. 他の言語では、件の物体が机の表面にあったか、あるいは中にあったかどうかは常に具体的に表さなければならない. 』

—Slager (2010: 98) イタリックは筆者による

本論文で主に取り扱う問題のひとつは en の空間的意味の中心的意味についてであるが、ここまでの先行研究の記述から明らかになったように、en が示しうる空間的範囲は他の前置詞に比べ広範囲であり、en の空間的意味における中心的意味に関する考察が研究者によりさまざまであることから、en の空間的意味に対する考察について議論をおこなう余地がまだ残されている. ここまでの先行研究の記述を観察すると、en の空間的意味の中心的意味は(1)「表面の上」、(2)「内部」、(3)「(1 と 2 の区別をせず)場所」のいずれかに設定できると考えられるが、本論文では「場所」という上位カテゴリーを定め、その下位カテゴリーとして「表面の上」、「内部」あるいは「隣接」の意味が観察されることを認めたうえで、名詞の機能によって下位カテゴリーのいずれかの意味に決定されるという立場をとる. もちろん、先に分類した C のように「場所」という上位カテゴリーを定めるだけにとどめ、下位カテゴリーを定めて分類する必要はないという考えもあると思われるが、sobre や dentro de などの en と交替可能な類義語を考慮すると、その空間的意味が「表面の上」、「内部」、あるいは「隣接」でそれぞれ表現が異なるため、下位カテゴリーの設定が必要であると考えられる.

このようにして前置詞の意味を観察すると、もうひとつの問題が浮上する. それは en と交替可能な類義語は常に同じ意味を示すのか、言い換えれば en と類義語である表現とどのような意味的差異がみられるのかということである. このことに関して、たとえば Moreno y Tuts(1998)は en の意味の記述において他の前置詞あるいは前置詞句との交替が可能であることを示唆しているものの、その意味的差異に関する考察はおこなっていない. ただし、en が示す空間的範囲が曖昧である場合に、その類義語と考えられる sobre や dentro de と交替することで空間的範囲をより明確にすることが可能であると述べる研究は確認されるものの、空間的範囲の差異にとどまり、空間的意味以外の差異に関して言及をおこなっている研究は管見によればまだ少なく、議論の余地があるものと思われる.

本章では前置詞の意味に関する先行研究 López(1972)および Morera Pérez(1988)の記述を確認し、その方法論を批判的に検討し、本論文における方針を明らかにした. また、前置詞 en の意味に関して記述をおこなっているものをいくつかとりあげ、en の空間的意味がどのようにとらえられているか観察をおこなったが、研究者によって en の空間的意味のとらえ方は異なっているが、本論文では「場所」という上位カテゴリーを定め、その下位カテゴリーとして「表面の上」、「内部」あるいは「隣接」の意味が観察されることを認めたうえで、名詞の機能によって下位カテゴリーのいずれかの意味に決定されるという立場をとる. 次章では en とその類義語とされる a, sobre, dentro de とそれぞれ比較しながら、主に空間的意味以外の意味的差異に関する考

察をおこなう.

4. en の類義語とされる前置詞あるいは前置詞句との比較考察

4.1. はじめに

本章では、まず最初に en の空間的意味に多義的別義が存在することを確認し、その存在を裏づけると考えられる en の反義語および類義語について観察する. そして、en とその類義語とされる前置詞あるいは前置詞句 a, sobre, dentro de のそれぞれと比較することで、それら 2 つの表現の間に見受けられる意味的差異を明らかにする.

4.2. en の空間的意味ー多義的別義の認定

前置詞 en は、たとえば本論文の冒頭であげた(72)～(74)(=(1)～(3))に観察されるように、さまざまな空間的意味を有している.

(72) La canica está en la caja. 『ビー玉は箱の中にある. 』

(73) El libro está en la mesa. 『本はテーブルの上にある. 』

(74) El chico está en la puerta. 『少年はドアのところにいる. 』

この意味的差異は共起するランドマークの性質によって生じると考えられるが、(72)～(74)の en の意味をそもそも多義としてとらえ、それぞれを異なった意味として認定してよいのか、あるいは単義であり、それが文脈によって変容しているだけであるのかを考察する必要がある. そこで、空間的意味を表す en が多義であるかどうかを籾山(1993)の多義的別義の認定基準を参考に確認する. それによると、以下に示す基準を en が満たせば、その語は多義語と認められるとされる. 籾山(1993)は國廣(1982)の多義的別義の判定基準をさらに発展させているが、ある語を多義語とみなすための基準として、(a)非両立関係にある同位語の違い、(b)反義語の違い、(c)反対語[32]の違い、(d)類義語の違い、(e)上位語の違い、(f)意味分野の違い、という 6 点をあげている(籾山 1993: 47–53). 本論文で扱う en については、これらのうち(b)反義語の違いと(d)類義語の違いの 2 つの基準によって en の空間的意味が多義と認めることが可能であると考えられるため、ここで反義語の違いと類義語の違いについて籾山(1993)の記述を確認する.

前者の反義語の違いとは、國廣(1982)においても提案されている基準であり、次の(75)と

[32] ここでは反対語と反義語は別の語としてとらえられている. 國廣(1982: 173)によれば、同一の出来事、関係をあい対する観点から眺めて表現する語は反対関係を構成しており、片方の表現が成立するならば、必ず他の表現も同時に成立する. たとえば、商取引において、片方が「買う」行為をおこなえば、他方は「売る」行為をおこなうが、このような関係が認められれば、それは反対関係を構成しているといえ、そのような語を反対語とよんでいる. それに対して、反義語は以下で例をあげるが、「高い」と「低い」のようにその対応関係がみられない.

(76)ではそれぞれ「タカイ」が用いられているが、これらの「タカイ」に対応する反義語は「ヒクイ」と「ヤスイ」で異なるため、「タカイ」は異なる複数の意味を有しているという.

(75) 背がタカイ／ヒクイ

(76) 値段がタカイ／ヤスイ　　—籾山（1993: 48）

一方、後者の類義語の違いは、たとえば次の(77)と(78)において、それぞれキタナイを類義語で交替させると異なった語、すなわち、(77)はヨゴレタが用いられ、(78)はズルイが用いられる. この類義語の違いもまた先の反義語の違いと同様に、ある語が多義語であると認める判断基準として提案されている.

(77) 太郎はいつもキタナイ服を着ている。(＝ヨゴレタ)

(78) あいつのやり方はキタナイ。(＝ズルイ)

—籾山（1993: 50）筆者により編集

ここで en の意味を観察すると、先に示した(72)～(74)で用いられている en はすべて空間的意味であるが、それぞれに対応する反義語および類義語は異なると考えられる. 次の(79)および(80)は en を反義語で書き換えたものである. なお、(74)の en の意味である隣接についてはこれに相当する反義語はないと思われる.

(79) La canica está fuera de la caja.　『ビー玉は箱の外にある. 』

(80) El libro está debajo de la mesa.　『本はテーブルの下にある. 』

これらに対して、(72)～(74)の en に対応する類義語と交替させた文は次の(81)～(83)(=(4)～(6))であるが、この場合にはそれぞれ別の表現があてられ、空間的位置がより明確になる.

(81) La canica está dentro de la caja.

(82) El libro está sobre la mesa.

(83) El chico está a la puerta.

以上の言語事実に基づくと、空間的意味を表す en は多義的であるといえそうであるが、その一方で、それぞれの空間的位置はまったく無関係のものではなく、何らかの関連づけがあるとい

う見方も存在している. たとえば、López(1972)は Pottier(1966[4])の考えを引用し、「内部」の意味から「表面の上」の意味が生じていることを、図 11 をあげながら述べている.

> Todavía hay otra posibilidad respecto a en: según Pottier, de la representación de interioridad se ha pasado a la de superposición: IN MENSA, "en el interior de los límites de la mesa", se convierte, con un eje de orientación vertical, en "sobre la mesa":
>
> 『en に関して他の可能性もある. Pottier によれば、内部の意味から表面の上の意味が生じている. IN MENSA は「テーブルの境界の内部」という意味であるが、垂直方向の軸によって「テーブルの上」の意味が転じている. 』

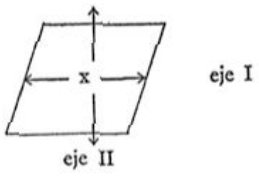

図 11

—López (1972: 137)[33] 図の番号は筆者による

Pottier(1966[4])は図 11 と同じような図を提示しながら、「表面の上」の意味は表面上における内部であることに加え、テーブルの平面を表す軸である eje I に対する垂直方向の軸である eje II の内部に物体が位置することから生じていると主張している. このように「表面の上」の意味が「内部」の意味として考えられることを前提にして、以下に再掲した(73)を観察すると、「本はテーブルの表面という範囲の枠内にある」という解釈がまずなされたうえで、テーブルの平面に対する垂直方向の軸の内部に本があることから「表面の上」と解釈される. しかしながら、en を「内部」の意味の類義語である dentro de に交替させた(84)は「テーブルの上」とは解釈されず、テーブルを 3 次元の物体ととらえた上でテーブルの内部、つまり本は「引き出しの中」にあると解釈される. それに対して、先の図 11 のイメージと合致すると思われる Europa『ヨーロッパ』を例にして考えると、(85)にみられるように、ニュアンスの差があるものの、en と dentro de は交替可能であり、この場合 mesa のように en と dentro de で空間的位置が異なることはない.

(73) El libro está en la mesa. 『本はテーブルの上にある. 』

(84) El libro está dentro de la mesa. 『テーブルの(引き出しの)中に本がある. 』

[33] López(1972)は Pottier(1966[4]: 98)における«De la représentation d'intériorité, on est passé à celle de superposition: IN MENSA, "à l'intérieur des Limites de la table" devient, avec un axe d'orientation vertical "sur la table"»の個所をスペイン語にそのまま訳して引用している.

(85) Esto facilita la libre circulación de personas [dentro de / en] Europa.

『このことによって、ヨーロッパ内の人の行き来が容易になる.』

—Slager (2010: 93) (85)のみ 太字は筆者による

以上を勘案すると、en が有するとされる「表面の上」と「内部」の 2 つの意味は別義であり、その意味はランドマークが 2 次元か 3 次元かによって異なると考えられる. なお、ランドマークの性質による en の意味の変化については第 5 章で扱う.

4.3. en とその類義語の意味的差異の分析にあたって

先の節では(72)～(74)のように en が用いられる場合と、(81)～(83)のようにその類義語が用いられる場合があることを確認したが、ここでは en とその類義語の間にみられる差を観察する. (72)～(74)のような空間的位置を表す際には en の使用がより自然であり、(81)～(83)で用いられている dentro de, sobre, a は en に比べてその空間的位置が明確に表示されるが、これはつまり、en が示すことができる空間的範囲が広く、たとえば「表面の上」なのか「内部」なのか不明瞭である場合、その曖昧さを回避するために en の類義語が用いられるのである. 先行研究における記述を例にあげると、Slager(2010)は「内部」の意味を表す際には en と dentro de は交替可能であることを述べたうえで、「境界の概念を強調して、外側ではなく内側」であることを強調したい場合に dentro de を用いると述べ、en と sobre などの類義語との意味的差異を空間的位置の観点からの言及にとどめている.

> Aparece con sentido espacial en frases donde compite con la preposición en, aunque dentro de, precisamente por no ser preposición y por admitir énfasis contrastivo, sirve mejor que en para subrayar la idea de delimitación (dentro, pero no fuera).
>
> 『(dentro de は)前置詞 en と競合する文において、場所の意味をともなって現れるが、dentro de は前置詞ではなく、対比の強調を認めるゆえに、境界の概念(中であり、外ではない)を際立たせるために en よりも適する.』

—Slager (2010: 93) 太字は筆者による

他方で Cifuentes Honrubia(1996)は、「表面の上」の意味は「内部」に含まれると主張しているものの、「内部」を有する物体に対して、「表面の上」に位置づける場合には混同が生じる可能性があると指摘し、「表面の上」か「内部」のどちらであるか不明瞭な場合には別の表現を用いることによって、その空間的位置を明確にする必要があると述べている.

Los ejemplos con «en» pueden funcionar para localizar sobre una superficie, siendo categorizada entonces perceptivamente la base como conteniendo los objetos. Sin embargo, cuando la base tiene la dimensión «interioridad», y localizamos superficialmente con «en», puede prestarse a confusiones, pues no sabremos si la localización es «en el interior» o «sobre la superficie», de forma que si no sabemos culturalmente cuál es la localización usual de la figura con ese objeto (quedando entonces bien localizada con «en»), deberemos sobrespecificar la localización con otro locativo de rasgo vertical o de rasgo interior, e incluso podemos sobrespecificar la localización con una base más específica y que no deje lugar a dudas, o con un gesto o sustituto. Es más, si la dimensión por excelencia del objeto localizante es «interioridad», no podremos localizar sobre una superficie con «en» (la pelota est*á* en el armario) a riesgo de no ser bien entendidos.

『en をともなう例文は、表面の上に位置づけるために機能しうるが、これは知覚的にベースが物体を含んでいるものとして分類される. しかしながら、ランドマークが「内部」の次元を有し、en を用いて表面的に位置づける場合、混同を引き起こしうる. つまり、その位置が「内部」なのか「表面の上」なのかわからないため、ランドマークに対するトラジェクターの通常の位置がどちらか文化的にわからない場合(その場合、en で位置づけておくとよい)、垂直的な位置を表す語か内部を表す語で、しっかり明示しなければならない. そして、疑いの余地のない明確なランドマーク、あるいは行為や代わりとなるものを用いて位置を明示することも可能である. さらに、もし位置づける物体の次元が「内部」であることが特に際立っていれば、うまく理解されない可能性があるため、(「ボールはタンスにある」のように)en で表面の上に位置づけることはできない. 』[34]

—Cifuentes Honrubia (1996: 115)

また、Cifuentes Honrubia(1996)は culturalmente『文化的に』という語を用いて、トラジェクターとランドマークの位置関係が百科事典的知識によって変化することを示唆しており、en が明確になる要因として、ランドマークの性質やランドマークに対する行為が関わることが述べられている. もっとも、空間的位置にのみ言及しており、別の表現に交替することで生まれるニュアンスの差にはここでは言及していない.

そこで本章では en とその類義語が交替する要因について、空間的位置の曖昧さを回避する以外の観点、つまり、それぞれの表現がどのような文脈において用いられやすいのか、特に en と共起する名詞の性質に焦点をあてて考察をおこなうことで、en の空間的意味の範囲を明らかにする. 次節以降では a, sobre, dentro de をそれぞれとりあげ、en との比較考察をおこなう.

4.4. en と a

本節では前置詞 en と a の差異に関して、まずこの差異に言及している先行研究の記述を確認した後、前置詞 a が有するとされる位置の意味に注目し、とりわけ「隣接」の意味が「方向」の意味から拡張している様子を観察する. そして、sentarse a/ en la mesa『テーブルに向かって座る』、そして a/ en la puerta『ドアのそばに』の 2 つの表現をとりあげ、en と a の差異の考察

[34] Cifuentes Honrubia(1996)は日本語のランドマークとトラジェクターにあたる語として、figura と base という語を採用している.

をおこなう. 続いて、a が「隣接」の意味を有することからによって、メトニミー的意味が拡張している様子を、a と共起しやすい名詞を例にあげながら観察する.

4.4.1. 先行研究

先行研究の多くは空間的意味を表す前置詞 a と en に関する比較をおこなっているが、たとえば López(1972)によれば、前者はある終点への移動および移動の終点を表す一方で、後者はある 2 点間の内部および内部への移動を表す.

> Preposición A. — A representa un movimiento hacia un límite, y puede expresar el término del movimiento (o la coincidencia con el límite).
>
> 『a はある点に向けての移動を表し、そしてその移動の終点(あるいはその点と一致する点)を表現することが可能である. 』
>
> Preposición EN. — EN representa la interioridad en un doble límite, y también el movimiento franqueando un límite de interioridad.
>
> 『en は 2 点の中における内部、そして内部との境界を越える移動も表す. 』
>
> —López (1972: 134, 136) 筆者により編集

また、Gili Gaya(1980[13]: 253)は、«Podríamos decir que mientras a establece una relación dinámica, en es la preposición de las relaciones estáticas»『a は動的な関係を構築する一方で、en は静的な関係の前置詞であるといえるだろう』と述べ、a は動的な関係を、en は静的な関係を構成するという.

これらの先行研究では、a は移動を表し、動的であるのに対し、en は内部を表し、静的であることが 2 つの前置詞の間に見受けられる差異であると記述されているが、この差異はそれぞれの前置詞と共起する動詞の性質によるもの、すなわち、a は ir『行く』や venir『来る』など移動動詞と共起し、en は移動を表さない動詞と共起するためであると考えられる. しかしながら、sentarse a la mesa『テーブルに向かって座る』のように a が移動動詞と共起しない例も確認され、このときの a は「隣接」を表すとされる. また、このような a について Butt and Benjamin (2011[5]: 472)が«The use of the preposition a to indicate 'at' or 'in' a place is limited in Spanish»と述べるように、場所を示す a の用法は限定的であるといわれている. たとえば、「隣接」を表す a について記述している先行研究において提示されている例文を観察すると mesa『テーブル』や puerta『ドア』など常に同じような名詞が出現することから、a のこの用法は限定

的であるという見解はおおむね正しいと思われる. このように a の用法が限定的であることから a la mesa や a la puerta はすでに語彙化してしまい、コロケーションとして用いられるという見方も可能であるが、本項では具体的に Roegiest(1977)の主張をもとに、移動を表さない動詞と共起する a、つまり空間的位置を表す a と、それと共起可能な名詞を観察し、a と共起可能である要因をその名詞の性質に基づいて考察する. また、同じく位置を表し、a と交替可能であるといわれる en についても観察し、それぞれどのような場合に用いられるかについても考察をおこなう.

先に確認した López(1972)および Gili Gaya(1980[13])は a および en の最も基本的な用法を述べているが、Roegiest(1977)は、a は動的であり en は静的である、とその差異を簡単に説明するこれら 2 つの先行研究[35]に対して批判的な態度を示している. というのも、a が移動動詞と共起して方向の意味を表すだけではなく、esperar a la puerta『ドアで待つ』のように移動を表さない動詞と共起して位置を表せる場合があるためである. なお、Roegiest(1977)は結論として a と en が有する要素を表 2 のようにまとめている.

	Base no-marcada	Variante marcada
a	directivo	relativo
en	locativo interior	interiorización (dinámico + interior)

表 2　a と en の意味[36]

Roegiest(1977)はこの表をあげながら、前置詞 a は基本的に「方向(directivo)」を表す一方で、文脈が「方向」を表すものでない場合には「相対的位置(relativo)」を表すのに対して、前置詞 en は a と異なり、「方向」の意味は有しておらず、「内部(locativo interior)」を表すと述べる. その一方で、文脈が「方向」を表している場合には en は「内部への動的な移動(interiorización)」を表すと結論づけている. 移動を表す文において、しばしば対比されるのは(86)や(87)のような entrar『入る』と ir『行く』が用いられる文であるが、(86)のように起点を表す語句を共起させると容認度が下がるため、entrar はすでに方向の意味を語の中に有しているとされる. その一方で、(87)で用いられている ir は起点を示す語句との共起が可能であることから、a によって方向が示される.

[35] 当時は Gili Gaya(1964[9])である.
[36] Roegiest(1977: 282)をもとに筆者により作成.

(86) ?Desde el pasillo entraron en la habitación.『彼らは廊下から部屋に入った.』

(87) Iban de Madrid a Barcelona.『彼らはマドリードからバルセロナに行っていた.』

—Roegiest (1977: 258)

以上は文脈が「方向」を表す際のものであり、このような場合における a と en の差異については Roegiest(1977)の主張がもっともなものであると思われる. 本節で焦点をあてるのは文脈が「方向」を表さない場合における a、つまり「位置」を示す場合である.

a が位置を表す場合について、Roegiest(1977)は a が共起する名詞の特徴を(a) 具体的な場所の名詞、(b) 抽象名詞、(c) 身体の一部や衣類に言及する譲渡不可の名詞の 3 つに分類している.

> [...] a entra en construcciones que de ordinario se caracterizarían por la presencia de en; pues designan todos un localización. A se emplea grosso modo delante de tres categorías de nombres (N) bastante fáciles de discernar[sic] formalmente: (a) N de lugar concretos; (b) N abstractos; (c) N inalienables refiriéndose a una parte del cuerpo (humano) o del vestido.
>
> 『普通 en が用いられる特徴を有する構文において、a が用いられる. つまり、どれも場所を表す. a は形式的に識別するのがかなり容易な 3 種類に分けられた名詞の前でだいたい用いられる. すなわち、(a) 具体的な場所の名詞、(b) 抽象名詞、(c) 身体の一部あるいは衣服に言及している譲渡不可能な名詞である.』

—Roegiest (1977: 263)

具体的には(a)には、lado『側』、izquierda『左』、norte『北』など相対的な位置や方角を表す名詞に加え、puerta『ドア』、entrada『入口』、salida『出口』、mesa『テーブル』などの具体的な名詞があげられている. そして、(b)には抽象名詞として sol『太陽』、luz『光』、fuego『火』などの名詞があげられており、最後の(c)では、cuello『首』、mano『手』、pecho『胸』といった譲渡不可能な名詞とされる身体名詞があげられている.

本節では、(a)であげられている方向を示す名詞ではなく、a と共起することで場所が表される puerta や mesa などの具体的な名詞、および(b)であげられている抽象名詞に焦点をあてる. というのも、対象にするこれらの名詞は他の先行研究においても a と en の比較においてあげられる典型的な語であるためである. これらの名詞に注目しながら、Roegiest(1977)の主張をもとに、他の先行研究における主張と比較し、前置詞 a が位置の意味を表すときの特徴、そしてその際に共起する名詞の性質について再検討をおこなう. さらに前置詞 en が用いられる場合にどのような差異がみられるのか観察したうえで、Roegiest(1977)の主張を補強していく.

4.4.2. 隣接を表す a

前置詞 a は基本的に「方向」の意味を有していることは先に引用した Roegiest(1977)が述べているとおりである. Roegiest(1977)は文脈が「方向」を表さない場合には「相対的位置」を表すと述べ、これら 2 つの意味は文脈によって異なるもの(variante marcada)と主張しているが、本論文ではこれらの意味は連続的であり、「方向」の意味から「隣接」の意味が拡張されているものとして考察をおこなう. (88)と(89)は a を用いた例文であり、前者は「方向」、後者は「隣接」を表すと考えられる.

(88) Voy a Madrid. 『私はマドリードへ行く. 』

(89) Me siento a la mesa. 『私はテーブルに向かって座る. 』

2 つの文における大きな差異は移動がともなうか否かであり、おそらくこの差が Roegiest(1977)が述べる、文脈によって異なるものと考えられるが、(88)は「マドリードに向かって行くこと」を表すのに対し、(89)は「テーブルのそばに座っていること」を表している. つまり、(88)と(89)では「方向」の意味が前提として存在し、ランドマークとの距離がない場合において「隣接」の意味が拡張されていると考えられる. しかしながら、ランドマークとの距離がなければ a を用いることは必ずしも可能ではなく、先行研究において確認したとおり、共起するランドマークは限定的であり、「隣接」の意味として a が用いられる場合はまれであるとされる. ただし、(90)～(93)にみられるように動詞が接触や隣接を表す語であれば、ランドマークにかかわらず a が用いられる.

(90) pegar una tirita a la herida 『傷口に絆創膏を貼る. 』 (s.v. pegar)

(91) fijar un cuadro a la pared 『壁に額をつける. 』 (s.v. fijar)

(92) adherir un sello a un sobre 『封筒に切手を貼る. 』 (s.v. adherir)

(93) juntar la estantería a la pared 『本棚を壁にくっつける. 』 (s.v. juntar)

(90)～(93)—高垣(監) (2007)[37] 太字は筆者による

このような例が確認されるものの、動詞が接触や隣接を表す語であれば共起可能な前置詞は a に限らず、たとえば pegar は(94)および(95)において観察されるように、en や sobre などとも

[37] 高垣(監)(2007)の日本語訳は原文を引用. 以下同様.

共起可能である.

(94) Corté un trozo de papel y lo pegué sobre la cubierta.
『私は紙切れを切り、それをカバーに貼った.』

—SALAMANCA (s.v. pegar)

(95) Pegue una foto A/ EN la solicitud.『写真を申請書に貼ってください.』

—Real Academia Española (2016[3]: s.v. pegar)

Roegiest(1977: 270)も Clavar a/en la pared『壁に固定する』などの例を提示しながら、a と en の交替に関して言及しているが、この場合、en は表面に対する位置を示すのに対して、a は物体と場所の接触を示すという. つまり、前置詞と共起するランドマークに対して、空間上の点とみるのか、あるいはそのランドマークが有する表面に対して接触しているとみなすのかによって前置詞が異なると述べているのである.

> Solamente aquí la oposición se destaca menos, porque falta la tridimensionalidad de los ejemplos anteriores; en insiste en una localización respecto a una superficie, mientras a explicita el contacto (adhesión) entre objeto y el lugar interpretado tanto más fácilmente como límite simple en vez de espacio integrante.
>
> 『もっぱらここにおける対立はあまり際立ったものではない. というのも、例文において 3 次元性が欠如しているためである. en は表面についての位置を示すのに対して、a は空間の一部ではなく、単なる点としてよりいっそう容易に解釈される場所と物体の間における接触(付着)を示す.』

—Roegiest (1977: 270–271)

先にあげた pegar, fijar, adherir, juntar は ir に比べればその距離は短いものの、移動のニュアンスが含まれるために a と共起可能であると考えられ、さらに行為の結果としてトラジェクターとランドマークの接触が表されるために、en や sobre とも共起可能であると考えられる. そのため、ここで表される a は「方向」の意味から「隣接」の意味が拡張する中間的な段階のものであるといえるため、これらの 2 つの意味は連続的であるといえそうである.

ここまで、前置詞 a は本来「方向」を表す語であり、移動の概念がなくなることで「隣接」の意味が拡張していることを確認したが、本項でとりあげるのは、動詞が移動や接触を表すものではない場合に a が共起する場合、とりわけ、estar『いる、ある』や esperar『待つ』などの移動を表さない動詞と共起する a の特徴である.

この特徴に関して、Fernández López(1999)は a の意味を列挙するなかで「方向」よりも「位置」を先にあげ、(96)と(97)を提示している. ここで記述されている a の定義は一見すると en の空間的意味と類似していると思われるが、このように「位置」を表す場合には、ある場所との「隣接」が表されることを述べ、(98)を例としてあげている.

Indica el lugar concreto en el que sucede algo:
『何かが起きている具体的な場所を指す. 』

(96) Se encontró con Antonio a la puerta de su casa.
『アントニオの家の玄関で彼はアントニオに出くわした. 』

(97) A la entrada del cine hay mucha gente.
『映画館の入り口にたくさんの人がいる. 』

Con este valor se resalta una localización de contacto o limítrofe; así en la expresión a la mesa nos estamos refiriendo a al lado de la mesa.
『この意味で、接触あるいは隣接の位置が際立つ. たとえば、a la mesa という表現は al lado de la mesa「テーブルのそばに」について述べているのである. 』

(98) Lávate las manos y siéntate a la mesa.『手を洗って、席につきなさい. 』

—Fernández López (1999: 22)

この他に以下の(99)～(101)のような場合にも「隣接」が表され、(99)は puerta に対して直接作用をおよぼすため必然的に「隣接」する. 後者の 2 つの表現は後に観察するが、(100)は位置関係を示唆するだけではなく、共起する名詞に隣接することでその名詞を利用することを示唆する表現、そして、(101)は共起する名詞が何らかの作用性を有し、隣接することでそれを利用することを示唆する表現である. これらのニュアンスはいずれも a が有する「隣接」の意味によって生じていると考えられ、たとえば、(100)は「ピアノの前に座る」だけではなく、「ピアノを弾く」ことが示唆され、また(101)は「火のあるところに置く」ことで火が有する作用によって「温める」ことが示唆される.

(99) llamar a la puerta 『ドアをノックする』

(100) sentarse al piano 『(ピアノを弾くために)ピアノの前に座る』

(101) poner al fuego 『(温めるために)火に置く』

これらに加え、メタファーとしても「隣接」を表すことが可能であり、たとえば entrar と共起する a は Bruyne(1999)によれば、「～に入る」というニュアンスよりもむしろ、入る行為の開始に言及しているとして、(102)をあげている.

(102) El reconocimieto[sic] médico es al viejo estilo: tocar timbre, entrar a una sala de espera y someterse a cinco horas de exámenes médicos.

『健康診断は古いスタイルである. ベルを鳴らし、待合室に入り、5 時間の検査を受ける. 』

Como muestra (102), no obstante, también en el español europeo es posible encontrar entrar a, pero con un matiz especial de dirección, es decir, que alude al comienzo de la acción de entrar.

『しかしながら、(102)にみられるように、ヨーロッパのスペイン語においても entrar a は見受けられ、方向の特別なニュアンスをともなう. つまり、入る行為の開始に言及する. 』[38]

—Bruyne (1999: 670) 例文番号は筆者により変更

さらに、DRAE(2014)によれば、entrar a + 不定詞は«Dar principio a la acción de algo»を意味し、(103)のようにある行為の開始を表す.

(103) Entrar A reinar. 『統治を始める. 』 —DRAE (2014: s.v. entrar)

このように a を用いることによって行為の開始時点を表すことが可能であるため、空間的意味において a と共起する名詞に隣接していることと時間軸上における行為の「開始時点」がメタファー的に一致することを考慮すると、a は時間軸における「隣接」も表すことが可能であるといえそうである.

引き続き a と en の意味的差異について、a と共起しやすい名詞である mesa と puerta を例にとり、考察をおこなう.

4.4.2.1. sentarse a la mesa と sentarse en la mesa

Roegiest(1977)は、(104)にみられるように名詞 mesa『テーブル』をとりあげ、a は位置(localización)を表すのに対し、en は重ね合わせる(superposición)ことを表すと主張している.

[38] ここで el español europeo『ヨーロッパのスペイン語』とあるのは、entrar や meter などの『入る』ことを表す動詞と共起する前置詞が、ヨーロッパでは en であるのに対し、イスパノアメリカでは a であることがいわれているためである.
En el español europeo se utiliza principalmente la preposición en, [...], mientras que en la América hispanohablante se prefiere a, [...]
『ヨーロッパのスペイン語では主に前置詞 en が用いられる一方、(中略)イスパノアメリカのスペイン語話者たちは a を好む』 —Bruyne (1999: 669)

これにしたがえば、(104)のように a の場合には「テーブルのそばに座る」ことが表されるのに対して、en と交替すると「テーブルの上に座る」ことが表されると考えられる.

(104) [...] don Mateo y la niña estaban ya sentados a la mesa

『ドン･マテオと少女はテーブルに向かってすでに座っていた』

—Roegiest (1977: 264)

また、López(1972)も同様にこの対立に言及し、sentarse a la mesa は「食事をするために座る」ことを示し、sentarse en la mesa は「テーブルの上に座る」ことを示すと述べる.

El verbo sentarse puede llevar un complemento con a o en más el sustantivo mesa. Así resulta la oposición sentarse a la mesa, sentarse en la mesa. La primera construcción indica sentarse para comer; la segunda indica sentarse encima de la mesa.

『動詞 sentarse「座る」は前置詞 a あるいは en と名詞 mesa「テーブル」を補語としてともなうことが可能である. それゆえ、sentarse a la mesa と sentarse en la mesa の対立が生じる. 前者は食事をするために座ることが示されるのに対し、後者はテーブルの上に座ることが示される. 』

—López (1972: 161)

一方で RAE(2009)は、前置詞 a が表す「位置」の意味は現代ではかなり限られた用法であり、sentarse a la mesa と sentarse en la mesa は意味が著しく異なると述べているものの、どのような差異が生じるかについては言及していない.

La preposición a está bastante restringida en la actualidad para expresar ubicación: estar a las puertas de la ciudad, encontrarse a la entrada del cine, sentarse a la mesa (también al piano, en el sentido de 'ante el piano') [...]

『位置を表す前置詞 a は現代ではかなり限定的である.「街の門のところにいる」、「映画館の入り口で落ち合う」、「テーブルに向かって座る」(「ピアノの前」という意味で al piano も同様に用いられる)』

—RAE (2009: 2252)

Persisten, sin embargo, algunos usos localizadores de la preposición a, como esperar a la entrada, sentarse a la mesa, quedarse a la puerta, ponerse al sol, tumbarse a la sombra. [...] Se expresan significados muy diferentes en sentarse a la mesa y sentarse en la mesa [...]

『しかしながら、「入り口で待つ」、「テーブルのそばに座る」、「入り口にとどまる」、「日なたにいる」、「日陰に横たわる」のように、前置詞 a のいくつかの位置を表す用法が残っている. (中略) sentarse a la mesa と sentarse en la mesa では著しく異なった意味が表される』

—RAE (2009: 2259)

これらの記述において注目すべき点は、a と共起する名詞、すなわちランドマークが Roegiest (1977)で例としてあげられている語とほとんど同じということである. つまり、a は entrada, puerta, mesa, sol といったランドマークと共起しやすい一方で、これら以外の別の語とは共起しにくいことが示唆される. そのため、トラジェクターとランドマークの隣接あるいは接触を表すのに先にあげた名詞以外では a ではない前置詞が用いられるはずであるが、それは場所を表すもうひとつの前置詞の en であると思われる. この点に関して RAE(2005)[39]では、先の RAE(2009)の記述と異なり、sentarse en la mesa が sentarse a la mesa と同じ意味を表す[40]、つまり前者は文字通り「テーブルの上に座る」という意味であるが、「テーブルに座る」という意味でも用いられることに加えて、mesa に形容詞などの修飾語がともなう場合には通常 en と共起することが述べられている. つまり、en と共起することによって、「テーブルの上に座る」と解釈が必ずしもされるわけではないため、en も a と同様に「隣接」を表すといえそうである.

> Aunque, en sentido recto, sentarse en la mesa significa 'acomodarse encima de ella', esta expresión funciona también como equivalente de sentarse a la mesa, locución fija que significa 'sentarse frente a una mesa para comer, negociar, etc.' [...] Es más, cuando el sustantivo mesa lleva elementos especificativos lo normal es usar la preposición en.
>
> 『文字通りの意味では、sentarse en la mesa は「テーブルの上に座ること」を表すが、この表現は「食事や仕事などのためにテーブルの前に座る」ことを意味する定型表現 sentarse a la mesa と同じ意味として機能する. (中略)さらに、名詞 mesa が限定的な要素をともなう場合には、普通 en が用いられる. 』
>
> —RAE (2005: s.v. sentar(se))

この現象を山梨(1995)はメトニミーの下位分類であるトポニミーとよんでおり、これを場所と空間の隣接関係に基づく表現と定義している. たとえば、(105)の「机に」の部分は、(106)のように慣用的に「机(の前)に」を意味し、このような表現の場合には特殊な文脈を考えない限り、(105)から(106)への解釈が一般的である(山梨 1995: 34).

(105) 机に座って手紙を書く。

(106) 机(の前)に座って手紙を書く。 —山梨 (1995: 34)

日本語では(105)を「机の上に座ること」と解釈可能であるが、「机は本来座るものではない」と

[39] Real Academia Española (2005) Diccionario panhispánico de dudas. 以下同様.

[40] 小池他(編)(2014: s.v. 座る)においても sentarse a [en] la mesa で『机に向かって座る』という訳があてられており、a と en のどちらでも用いられることが確認される.

いう百科事典的知識にしたがって、(106)のように解釈されるのが一般的であると思われる. ここで、「机」の代わりに「イス」を用いて「イスに座る」と表すと、その名詞の性質ゆえに「イス(の座面)に座る」と問題なく解釈され、「イスのそばに座る」とは解釈されないと考えられる. つまり、共起する名詞の性質によって、前置詞の意味が変化しうるのである.

このような概念がスペイン語でも適用できると仮定すると、sentarse en la mesa が sentarse a la mesa と同じ空間配置を指すことが説明可能と思われる. 実際に sentarse en la mesa の用例を CREA で観察すると(107)のように「テーブルに向かって座っている」用例がほとんどであり、(108)のように「テーブルの上に座っている」用例はわずかであった.

(107) Se sent**ó** en la mesa y comenzó a escribir en un bloque de papel.
『彼はテーブルに向かって座り、メモ用紙に書き始めた. 』

(108) "Atlas, bájate de la mesa." [...] Se sienta en la mesa en la postura de un Buda, con los brazos cruzados.
『「アトラス、テーブルから降りなさい」(中略)彼は腕を組んでブッダの姿勢でテーブルの上に座っている. 』

—CREA

sentarse と mesa が共起する場合には、ここまで観察してきたように a が用いられるが、たとえば comportarse『ふるまう』と mesa が共起する場合には(109)や(110)のように en を用いている例文が散見される.

(109) El niño no se comporta bien en la mesa.『その子は食卓で行儀がよくない. 』

—山田 (1995: 157) 日本語訳は原文

(110) siempre se comporta bien en la mesa 『彼はいつも食卓で行儀がよい』

—Butt and Benjamin (2011[5]: 485)

sentarse a la mesa と同様に comportarse en la mesa も空間的位置について文脈を考慮しながら観察すると、「表面の上」ではなく「隣接」を表していると考えられ、(109)や(110)は en が「隣接」を表すことが可能であることを裏づけるさらなる例とすることができる. しかしながら、comportarse en la mesa は sentarse a la mesa と同じ空間的位置を示していると考えられるものの、これらの例文において en と a が交替可能であるという記述は確認されなかった. この問題は後に触れるが、a が共起する場合には共起した名詞を利用した行為を想起させると考えら

れ、実際に先に引用した López(1972)や RAE(2005)では、sentarse a la mesa の意味記述のなかに「食事や話し合いをするために」といった記述があり、「テーブルに座ること」でおこなわれる行為を示唆している. その一方で、comportarse は sentarse とは異なり、「ふるまうこと」が表されるのみで、テーブルを利用した行為を示唆できないため、comportarse については a と共起した例が観察されないと思われる. このように、共起する名詞のみならず、動詞の意味内容によっても、前置詞の選択が制限される場合があると考えられる.

ここまで、sentarse a la mesa と sentarse en la mesa の意味的差異に関する考察をおこなったが、mesa のように表面を有する名詞の場合には a は「隣接」、en は「表面の上」を表すことが可能であるものの、トポニミーの概念や名詞に対する百科事典的知識を利用することで、程度の差はあると思われるものの、en もまた「隣接」を表すことが可能であることを確認した. また、テーブルとの隣接を表していれば常に a la mesa が用いられるのではなく、comportarse en la mesa のように、動詞の意味によっては a ではなく en が用いられることも確認した.

4.4.2.2. a la puerta と en la puerta

puerta『ドア』、entrada『入口』、salida『出口』は mesa とならんで、位置を示す a と共起しやすい名詞の例としてとりあげられるが、mesa とは異なり、たとえば puerta は表面を有しておらず、a と共起する際は隣接というよりはむしろ参照点としてとらえられ、その参照点を中心とした範囲にトラジェクターが位置づけられる. ここでは、先行研究の記述を確認しながら、puerta, entrada, salida のような名詞が a と共起しやすい理由、そして en と交替した場合の意味的差異について考察をおこなう.

Roegiest(1977)は、(111)や(112)の a が junto a と類義語であり、隣接あるいは接触を表すことを主張している. (111)は墓地の塀のそばを列車が通っていることが表される一方で、(112)はアルフレッドの頭のそばに松の幹がそびえ立っている様子が表されるが、このとき en と交替すると大きく意味が異なるという. en に交替した場合の差異について言及はされていないが、(111)の場合には「塀の上」、(112)の場合には「頭の上」のように、「表面の上」の意味でとらえられると考えられる.

(111) Pasa el tren a las tapias del cementerio 『墓地の塀のそばを列車が通る』

(112) Al contestarle observé que a la cabecera de Alfredo se erguía un pino de tronco recto y copa tripuda, [...]

『彼に返事をしたとき、私はアルフレッドの頭のそばに樹冠の大きい、まっすぐな幹の松の木がそびえ立っているのを見た』

—Roegiest (1977: 264)

このように a と en が交替すると大きく意味が変化する場合があるものの、Roegiest(1977)は、a/ en la puerta, a/ en la entrada, a/ en la salida といった名詞と共起する場合には意味が変化することなく交替可能であると、(113)～(115)をあげながら述べている. そして、最終的に a は「隣接」を表し、en は「内部」を表すと結論づけるが、あげられている例文を観察する限りはその違いが見いだしにくい.

En algún contexto y gracias a él, las dos preposiciones pueden a veces alternar sin que se modifique el referente. Es lo que ocurre por ejemplo con a/ en la puerta, a/ en la entrada, a/ en la salida, si bien sea tan considerable la divergencia semántica.

『文脈によっては、その文脈のおかげで、2 つの前置詞は指示対象が変わることなく交替することが可能である. 意味の相違が大きいこともあるが、これは a/ en la puerta, a/ en la entrada, a/ en la salida のような場合に生じる. 』

(113) [...] y se ha quedado de sereno y en ayunas a la puerta vigilando para que nadie pueda turbar la digestión y el sueño del recién venido

『そして、やって来たばかりの人の消化や眠気が乱されないよう見張りながら、彼は何も食べずに、夜気にふれて門のところにいた』

(114) Tenga cuidado la señora — advirtió —. Los milicianos tienen armas y desde hoy hay una centinela en la puerta principal

『「気をつけてください. 民兵は武器を持っていて、今日から正門で見張りをしています. 」と言った』

(115) Cuando Mateo llegó a la jefatura de Policía el agente que estaba a la puerta le dijo que esperara [...]. A los diez minutos fue Julio en persona quien apareció en la puerta

『マテオが警察本部に着いたとき、門にいた警官は彼に待つよう言った(中略). 10 分後、門に現れたのはフリオ自身であった』

En efecto, a no pasa de la expresión de una «posición con relación a»: no hay coincidencia absoluta entre la posición del objeto y la del lugar denotado. A la localización de interioridad de en la puerta, a opone una yuxtaposición.

『実際には、a は「～についての位置」という意味が変化することはない. すなわち、物体の位置と示された場所の間に完全な一致はない. en la puerta の内部の位置に対して、a は隣接を表す. 』

—Roegiest (1977: 264)

同様に Morera Pérez(1988)も puerta と共起する際の en と a の差異に言及しており、en は動詞の行為がおこなわれている場所を指す一方で、a は junto a と類義語であり、「隣接」の意味を表し、この前置詞と共起する名詞は動詞の行為がおこなわれている場所を関連づける参照点を指すと述べている.

> De nuevo, a equivale aquí a la locución prepositiva «junto a» —v. gr., «Estaba junto a la puerta»— y conmuta frecuentemente con la preposición en —v. gr., «Estaba sentado en mi balcón»—, lo que motivaría el cambio semántico ya señalado: en representa al régimen como 'lugar sobre el que se realiza la noci**ó**n verbal', mientras que a lo señala como 'punto de referencia en contacto con el cual se ejecuta la misma'. A veces, en caso como «Hay un mendigo a (en)» la puerta», se sienten como equivalentes, pero en este empleo lo que ocurre es que, regido por la preposición en el sustantivo puerta hace alusión al 'espacio del umbral' más que a la 'pieza de carpintería'.
>
> 『あらためて、a は前置詞句 junto a と同じ意味であり、頻繁に前置詞 en と交替するが、これにより、先に示した意味的変化をもたらす. つまり、en は「動詞の概念が実現している場所」を示す一方で、a は「動詞の概念が実現している場所と繋がっている参照点」を示す. しばしば、Hay un mendigo a (en) la puerta「物ごいがドアのところにいる」のような場合には同じ意味と思われるが、この用例では名詞 puerta が前置詞 en をとると「ドア枠」というよりむしろ「門口の空間」を指す. 』

—Morera Pérez (1988: 177–178) 太字は筆者による

このなかで Morera Pérez(1988)が述べる参照点(punto de referencia)は、認知言語学の分野において Langacker(1993)が提唱している「参照点」に通じている. この参照点の概念は、スペイン語においても有効であり、Maldonado(2012)は参照点について以下のように説明している. つまり、ターゲットが際立ちの小さい要素の場合、それよりも際立ちの大きい要素にアクセスすることで、そのターゲットに接触することが容易になるのである.

> Lo fundamental en este modo de conceptualización es que del conjunto de elementos ubicados en el dominio seleccionamos uno en particular y para ello utilizamos el punto de referencia como guía para tener acceso a tal elemento, la meta.
>
> 『この概念化の方法において重要なことは、認知領域に位置づけられている要素の集合から、とりわけひとつの要素を選択し、ターゲットとなるその要素にアクセスするための手がかりとして参照点が用いられることである. 』

—Maldonado (2012: 238)

たとえば、Te espero a la puerta『私は君をドアのところで待つ』という文であれば、「私が待っている場所」がターゲット(meta)とされるが、このターゲットにアクセスするため、参照点である「ドア」を経由することがそのアクセスを容易にするのである. この参照点の概念は以降でもとりあ

げるが、たとえば al piano『ピアノのところに』や al volante『ハンドルのところに』のような表現における piano や volante は参照点としてとらえられることで、メトニミーによる意味拡張がなされた結果、空間的な隣接だけではなく、そこから想起される行為、「ピアノを弾くこと」、あるいは「運転すること」を表すことが可能である.

これらの先行研究を観察する限りは a にのみ「隣接」の意味があるように思われるが、RAE (2009)では en la puerta にみられる en は「物理的接触」や「隣接」の意味を有していると述べられており、en の意味に関しては、先に引用した Morera Pérez(1988)の主張と類似している.

> [...] se emplea tanto en las situaciones en las que hay contacto físico con algo (El cartel est*á* en la pared) como en las que se expresa solamente proximidad (Te espero en la puerta).
>
> 『前置詞 en はある物体との物理的接触のある状況(「ポスターは壁にある」)や単に隣接が表される状況(「私は君をドアのところで待つ」)において用いられる. 』
>
> —RAE (2009: 2266)

さらに、山田(1995)においても、en は『地点やその近辺も表わす』と(116)や(117)を例にして述べられているが、a との交替には言及されていない.

(116) Te esperaré en la parada. 『停留所で君を待っているよ. 』

(117) La vi en la estatua del perro. 『私は犬の像のところで彼女に会った. 』

—山田 (1995: 156) 日本語訳は原文

これらの en が「近接」として扱われるのは、sentarse en la mesa の en が「隣接」を表すことと同じ理由であると考えられる. すなわち、「ドア」や「停留所」、「像」に対する空間的位置を考慮したとき、たとえば esperar en la parada の en を「表面の上」と解釈し、「停留所の上にのぼって待つ」ことは物理的に可能ではあるものの、「停留所」に対する百科事典的知識によって、概して「停留所のそば」と解釈されると考えられる.

以上で確認したように、Roegiest(1977)も Morera Pérez(1988)も a と en は交替可能であり、a la puerta と en la puerta では大きな意味変化は生じないと主張するが、実際の使用における出現数を CREA を用いて確認した. 検証では移動を表さない動詞として esperar『待つ』quedar(se)『とどまる』を採用し、前置詞 a と en、そして共起しやすい名詞として例にあげられている puerta, salida, entrada の 3 つの名詞を対象として検索をおこない、その結果を表 3 に

まとめた.

検索語句(esperar)	件数	検索語句(quedar)	件数
esper* a la puerta	37	qued* a la puerta	13
esper* en la puerta	77	qued* en la puerta	29
esper* a la salida	35	qued* a la salida	0
esper* en la salida	0	qued* en la salida	0
esper* a la entrada	7	qued* a la entrada	4
esper* en la entrada	5	qued* en la entrada	2

表 3　esperar/ quedar a/ en la puerta/ salida/ entrada の該当数[41]

先行研究が指摘するように、位置を表す a は用例数はわずかであるものの、salida や entrada と共起しやすいことがうかがえる. puerta は a に比べ、en と共起しやすいことが確認され、a と共起可能とはいえそうであるが、場所を表す前置詞としては en が選択されることがうかがえる. 興味深いのは en la salida の用例がないことであるが、以下の(118)および(119)を観察すると、a la salida は「～を出たところ」というニュアンスを有しているように思われ、en が本来有している「内部」を指していないために en が用いられないと考えられる.

(118) Me esperas a la salida del pueblo, en el cruce. Yo te recogeré allí.
『村を出たところの交差点で待ってて. そこで拾うよ. 』

(119) La muchacha los esperaba a la salida del restaurante semisentada en uno de los coches aparcados sobre el paseo central.
『少女は、中央分離帯に停めてある自動車のうちの 1 台に半座りになって、レストランを出たところで彼らを待っていた. 』

—CREA[42]

なお、Butt and Benjamin(2011[5])は、a la entrada や a la salida は空間的意味よりもむしろ時間的意味であることを指摘しており、たとえば Os esperaré a la salida『私は出るときに君たちを待つつもりだ』のように、これらの名詞を空間的意味で表すときには a ではなく、en が用いられるという.

[41] 動詞 esperar と quedar の活用形を考慮するために、esper*および qued*で検索をおこなった. このときに出現した esperanza などの動詞以外の品詞に関しては、件数から除外している. なお、検索条件として地域を España に限定した. 以降、CREA を用いる際は、スペインのスペイン語を対象とするために地域を España に限定している.

[42] 以下、CREA からの引用における太字は筆者によるものである.

> Apart from set phrases like al lado de 'at the side of', a la luz de 'in the light of', a can only be used with a few nouns like vuelta, 'turn', 'return' (a mi vuelta de 'on my return from'), salida 'exit', entrada 'entrance' which denote actions or moments in time rather than places. Os esperar*é* a la salida is best thought of as 'I'll wait for you on the way out' rather than 'at the exit', which is en la salida.
>
> —Butt and Benjamin (2011[5]: 472)

esperar/ quedarse en la salida が用例として確認されなかったこと、そして、先の(118)および(119)が時間的意味でなく空間的意味で解釈されることを考慮すると、この Butt and Benjamin(2011[5])の指摘についてさらなる検討をおこなう必要があると思われる. しかしながら、いずれにしても、a la salida が『出るときに』のように時間的意味を表す場合には la salida は抽象名詞化して、「出口」という空間的意味ではなく「出ること」と解釈されるため、本論文ではこのような場合は考察の対象外とする.

また、移動を表さない動詞との比較による考察ではないが、移動動詞 entrar と共起する前置詞 a と en の交替について書かれた Ibarretxe-Antuñano(2004)では、認知言語学におけるスコープ(scope)の概念が a と en の差異を説明するために応用されている. まず最初にこのスコープについて概観する.

スコープは最大スコープ(maximal scope)と直接スコープ(immediate scope)の 2 つに分類され、前者はある言語表現の意味の基盤となっている概念領域であり、後者はその概念領域で特に目立つ領域を指す(籾山、深田 2003a: 108). この概念について、たとえば Maldonado (2012)は brazo を例に出し、腕の直接スコープはひじや手であり、さらに手のスコープは指やその関節といったように連続的であると述べている.

> Por ejemplo brazo constituye el *á*mbito inmediato (immediate scope) de codo y mano, mientras que esta última lo es de dedo, nudillo y así sucesivamente.
>
> 『たとえば、腕の直接スコープはひじと手であるが、手の直接スコープは指とその関節、といったように連続的である. 』
>
> —Maldonado (2012: 227)

ある表現が有する直接スコープによって、その表現に対して共起可能な表現がある程度決定されるのであるが、たとえば、Maldonado(2012)が以下で述べているように、『指の先』は la punta del dedo と表され、*la punta de la mano『手の先』とは表すことができない. 同様に『指の爪』は la uña del dedo と表され、*la uña de la mano『手の爪』は容認されない. というのも、「指先」や「爪」が「指」の直接スコープに含まれ、「手」の直接スコープには含まれないため

である. これに対して、最大スコープは概念領域全体を指し示し、先の例である「指の爪」の直接スコープは指と手であるのに対し、最大スコープは腕全体や胴体におよぶ.

> Una cuestión fundamental del alcance es que el alcance o *á*mbito inmediato contrasta con el *á*mbito o alcance m*á*ximo de una predicación (maximal scope). Este último es totalmente incluyente. Incorpora toda la gama de contenido conceptual que una expresión evoca como base de su significado. Como ya se ha visto, el ámbito inmediato es la porción directamente relevante para focalizar un elemento en una emisión. De manera que al hablar de la u*ñ*a del dedo su ámbito inmediato es el dedo y la mano, mientras que su ámbito máximo sería el brazo completo e incluso el torso.
>
> 『スコープに関する基本的なことは、ある語の最大スコープと直接スコープが対照的であることである. 最大スコープは完全に包括され、ある表現がその意味のベースとして想起させる概念的内容全体を含んでいる. すでに見たように、直接スコープは語のある要素を焦点化するために直接的に際立つ部分であるため、「指の爪」について話す場合、その直接スコープは指と手であるのに対し、最大スコープは腕全体や胴体にまでおよぶ. 』

—Maldonado (2012: 228)

ここまでスコープの概念に関する記述を確認したが、Ibarretxe-Antuñano(2004)は(120)と(121)では状況は同じであるものの、en と a で最大スコープと直接スコープの領域に差が生じると、図 12 を用いて説明している.

(120) Estaba yo esperando al tren, cuando vi que entraba en la estación
『私が列車を待っていたとき、彼が駅に入ったのを見た. 』

(121) Estaba yo esperando al tren, cuando vi que entraba a la estación
『私が列車を待っていたとき、彼が駅に入ったのを見た. 』

(120) (121)

図 12 entrar en/ a の最大スコープと直接スコープ

—Ibarretxe-Antuñano (2004: 331)[43]

この 2 つの文における舞台は estación『駅』であり、どちらも「私」が駅の中で列車を待っているところに「彼」が駅に入ってきたことを表している. このとき、en と a の最大スコープは駅全体

[43] 原文では例文はイタリック.

であるが、図 12 において表された(120)の太枠内のグレーで示された直接スコープは、細い線の枠で囲われた最大スコープと同じ領域、つまり駅全体を指示しているため、「私」が列車を待っている場所と「彼」が入ってきた場所を同じ領域とみなしている. それに対して、図 12 の(121)では、ベースである最大スコープは en と同じく「駅全体」であるが、直接スコープは en よりも狭くとらえられ、a はホームなどの列車を待っている場所と「彼」が入ってきた場所を別の領域と話者がとらえる場合に用いられる. このように、Ibarretxe-Antuñano(2004)は a と en では直接スコープの領域に差がみられると主張する.

以上、このスコープの概念とこれまでの先行研究の記述をもとに、en と a の意味的差異について観察してきたが、最後に puerta や entrada のような名詞が移動を表さない動詞と用いられた場合、a と共起可能である理由について考察をおこなう.

puerta や entrada は部屋、建物や敷地などをベースとしてプロファイルされる部分である. 前置詞 a が「隣接」を表すことは先に述べたとおりであるが、これらの名詞が a と共起する場合、プロファイルしている部分に隣接していることが表されるのと同時に、ベースの部分とも隣接していることとらえることが可能である. たとえば、esperar a la puerta de la habitación『部屋のドアのところで待つ』の空間配置は puerta との隣接を表しつつ、それを含む habitación にも隣接していることに等しくなり、sentarse a la mesa と同じ空間配置とみなすことが可能である. ここで、ベースである部分は mesa や habitación など、ある程度広がりを有するものである必要があると考えられる. このような名詞に対して、(116)の parada や(117)の estatua は点的な物体としてとらえられる、あるいは広がりがあってもプロファイルしている部分がやはり点的なものと解釈されるため、a と共起しないと思われる. したがって、前置詞 a が「隣接」を表す場合に puerta や entrada と共起しやすいことが説明可能である. これに加えて、Ibarretxe-Antuñano(2004)が提案する、スコープによる意味的差異について検討すると、a の直接スコープが最大スコープよりも狭い領域としてとらえられるのは、話者との位置関係というよりはむしろ「隣接」が最も基本的な空間的な位置関係を表すためであり、駅と外部が隣接する地点である「入り口」を際立たせた結果として a と共起すると思われる. ただし、この例の場合は移動動詞である entrar が用いられており、動詞の意味に「内部に入る」ことが含意されており、内部を有するものに焦点があてられるため、a la estación でも en la estación でも容認される一方で、移動を表さない動詞であれば、a la estación ではなく「隣接」している部分が際立つ a la entrada と表されると考えられる. なお、en の直接スコープが最大スコープと同一領域を指すのは、en が estación の内部全体を指し示すことが可能であるためと思われる.

以上の見解から、a は「隣接」を表すという Roegiest(1977)の考察は妥当であると考えられるものの、en に関してはランドマークが 3 次元である場合は「内部」であり、本項で扱っている en la puerta のようにランドマークが 3 次元ではない場合にも同様に、そのランドマークを中心とした一定の範囲の「内部」ととらえることが可能である. 後者の「内部」の意味ではランドマークに近い位置にトラジェクターが位置づけられるため、RAE(2009)や山田(1995)が提示する「近接」、あるいは Morera Pérez(1988)の「動詞の行為がおこなわれている場所」ととらえることも可能である. この定義であれば、話者によって示される空間的位置に差異が生じる可能性があると思われるものの、共起する名詞および動詞にふさわしい場所が選択されると考えられる. たとえば先に観察した sentarse en la mesa であれば、sentarse という動作と mesa というその動作の対象の組み合わせから導き出される百科事典的知識によって「表面の上」ではなく「隣接」として解釈される.

本項では、a が移動を表さない動詞と用いられる際にみられる「隣接」の意味について観察した. sentarse a la mesa と sentarse en la mesa を比較することで、「隣接」の意味を有する前置詞 en との差異を考察した. 先行研究のなかには、この場合の en は「表面の上」の意味を表すと述べるものがみられたが、コーパスの例文を観察すると「隣接」と解釈される例が多く観察された. このように a と en は同じ空間的位置を示すものの、en の場合はもっぱら空間的位置を表すのに対し、a は食事や仕事などテーブルでおこなう行為を示唆することが多いようである. さらに puerta や entrada が a と共起しやすい理由について考察をおこない、puerta や entrada に隣接しているというよりも、そのような名詞で仕切られた空間に隣接しているという意味で a と共起しやすいと結論づけた. ただし、en と交替した場合は puetra や entrada に隣接していると解釈されると考えられる. 次項では、この「隣接」の意味から拡張されると考えられるメトニミー的意味を観察する.

4.4.3. 隣接することで利用を示唆する名詞

前置詞 a は「隣接」を表すことを先の項で述べたが、本項では a がこの意味から拡張していると考えられる、その名詞を利用することを表現する用法を観察し、そのような用法が拡張する要因について考察をおこなう.

a と共起する名詞が空間的な隣接を表すだけではないことに関して、Moreno y Tuts(1998: 15)は、たとえば ponerse a la máquina『機械のところにつく』は«acercarse a ella para trabajar»『作業するために機械に近づく』を表し、そして estar al volante『ハンドルのところ

にいる』は«ir conduciendo»『運転する』を表すと述べている. また同様に Morera Pérez (1988)は特定の目的を果たすために扱われる器具や道具が空間的に「隣接」していることにより、その物体を「利用する(aplicar)」というニュアンスが得られるとし、このニュアンスはわれわれの文化的経験に基づいて定められるものであると述べている. Morera Pérez(1988)はこの記述において「百科事典的知識」という表現を用いていないものの、前置詞 a の意味に共起する名詞の百科事典的知識が影響することを示唆していると思われる. しかしながら、Morera Pérez(1988)は以下の引用にあげられている例文のようにメトニミー的解釈がなされる場合において「文化的知識」がかかわると述べており、前置詞の選択において百科事典的知識が関連するという本論文の主張とは異なる.

> El régimen preposicional hace referencia a un objeto o instrumento que se manipula para lograr un determinado fin; v. gr., remo, volante, etc. [...]
> La significación 'puntual' de la preposición a, que ubica el regente en contacto espacial con el régimen, adquiere en estos contextos un matiz de **'aplicación'**, determinado, más que por razones lingüísticas, por nuestra experiencia cultural, que nos dicta que, cuando alguien se pone a un remo o un volante, pongamos por caso, lo hace con la finalidad de bogar o de conducir.
>
> 『前置詞の被制辞は、オールやハンドルなど、特定の目的を達成するために用いられる器具や道具に言及している.（中略）
> 物体を被制辞と空間的に接触させる、前置詞 a の「点」の意味は、このような文脈から「利用」のニュアンスを獲得しており、これは言語的な根拠よりもむしろわれわれの文化的な経験によって定められる. たとえば、誰かがオールあるいはハンドルに身をおいているとき、それは漕ぐことや運転する目的をもってそのようにする. 』
>
> —Morera Pérez (1988: 174−175) 太字は筆者による

先述の ponerse a la máquina や estar al volante といった表現では、前置詞 a が「隣接」を表し、さらに「参照点」の役割を果たすため、a の用法がメトニミーを介して拡張し、共起する名詞から連想される行為を表している. この「参照点」がメトニミーの認知的基盤において大きな役割を果たしていることは 2.3.4.で述べたとおりである.

また、本節で扱っている sentarse a la mesa の a に再び注目すると、RAE(2005)では、«sentarse frente a una mesa para comer, negociar, etc.»『食べたり、話し合ったりするためにテーブルの前に座ること』と記述されており、「食事や話し合いをするために」と使用目的が暗に示されている. この sentarse の他にも、estar や ponerse のような移動を表さない動詞と特定の行為を想起させる名詞が共起する場合、(122)～(125)[44]のように前置詞 a を共起させることが

[44] a と共起する名詞は Morera Pérez(1988)、Moreno y Tuts(1998)および RAE(2009)から採取し、採取した名詞が用いられている例文は CREA から引用している.

可能である. ただし、CREA で確認された例文数はわずかであった.

(i) al piano

(122) Julián se sent**ó** al piano del salón y, frente a una intrigada audiencia de quince putillas adolescentes en paños menores, interpret**ó** un nocturno de Chopin.

『フリアンはサロンのピアノに座り、興味津々な聴衆である下着姿の 15 人の若い娼婦たちを前に、ショパンのノクターンを演奏した. 』

(ii) a la máquina

(123) Y era mi madre, a pesar de su embarazo, quien le servía de oficiala hilvanando piezas, sent**á**ndose a la m**á**quina de coser y planchando horas y horas con la plancha de vapor.

『そして、私の母は妊娠しているにもかかわらず、女子工員として働き、仮縫いし、ミシンで縫い、スチームアイロンで何時間もアイロンをかけていた. 』

(iii) al volante

(124) ¿Sus amigos o familiares pasan miedo cuando usted est**á** al volante?

『あなたがハンドルを握っているとき、あなたの友人や家族は怖い思いをしますか. 』

(iv) al timón

(125) La barca se separó del muelle. Sebastián estaba al tim**ó**n y Federico a su lado.

『船は桟橋から離れた. セバスティアンは舵をとっており、フェデリコは彼の隣にいた. 』

—CREA

(122)～(125)はいずれもその名詞との隣接関係が表されているだけでなく、2 つの行為が時間的に隣接し、連続的におこなわれていることも同時に表されている. すなわち、(122)はピアノの前に座ってピアノを弾くこと、(123)は機械の前について機械を作動させること、(124)はハンドルの前について運転すること、そして(125)は舵をとって船を動かすことが前提となっている表現である. たとえば、(122)は se sentó al piano と interpretó が連続して表されており、ピアノのそばに座ることだけではなく、ピアノを演奏することが明示されている. それに対して(123)では、sentarse によって座ることを表すのに加え、ミシンを動かすことが示唆されており、同様に(124)では estar によって、運転することが示唆される. なお、籾山、深田(2003a)の記述にみられるよ

うに、日本語では「箸をつける」、「口を開く」などの表現がこれに相当し、スペイン語のみならず、他の言語においても、このように 2 つの事態が隣接することに基づいて生じる表現が観察される.

> 『「言うことを聞く」と同様に，2 つの事柄が時間的に連続して生じることに基づき，字義通りには先行する事柄を表すが，慣用的には後続する事柄を表す句として「箸をつける」「口を開く」「筆（ペン）をとる」「舵をとる」などがある。それぞれ字義通りの行為に，〈食べる〉〈言葉を発する〉〈書き始める〉〈舵を操作して船を進める〉という行為が後続することに基づき，慣用的には後者の意味を表している。』
>
> ―籾山、深田（2003a: 85）

また、前置詞 a は移動動詞と共起してもメトニミー的解釈がなされることが Ibarretxe-Antuñano(2004)において述べられている. Ibarretxe-Antuñano(2004)は動詞 entrar『入る』を例として(126)および(127)をあげ、前者の escuela は学校での活動を表すのに対し、後者では学校の建物を指すと述べている. つまり、a の場合には主なメトニミーのひとつである ACTIVIDAD POR LUGAR『場所で活動を表す』によって、授業を 9 時 30 分に始めることが示唆されるのに対し、en の場合にはメトニミー的解釈がなされず、9 時 30 分に学校の建物に入ることが表される.

(126) Entro a la escuela a las 9.30 『私は 9 時 30 分に授業を始める』

(127) Entro en la escuela a las 9.30 『私は 9 時 30 分に学校の校舎に入る』

―Ibarretxe-Antuñano (2004: 326)

これらの例では escuela が用いられているが、これ以外にも fábrica『工場』や cine『映画館』などといった、その場所でおこなわれるイベントが容易に特定可能である名詞が共起する場合には同じような解釈が得られるという. そのため、(128)および(129)のように、文脈がある程度定められる場合には交替されにくく、(128)は文脈的に「授業」の意味で用いられるため a が選択され、(129)は「学校の建物」の意味として用いられるため en が選択されるのがより自然である.

(128) Todos los días entro a/ ?en la escuela a las 9.30 y salgo a las 2.00.
『毎日私は 9 時半に授業を始め、2 時に終わる』

(129) Cuando entro ?a/ en la escuela, lo primero que hago es ir a la cafetería
『私は学校に着くと、最初にカフェテリアに行く』

―Ibarretxe-Antuñano (2004: 327)

動詞 entrar の意味の性質上、前置詞と共起する名詞は 3 次元であるため、a でも en でもその名詞の内部に入ることが表されるが、a の場合にはメトニミー的解釈がさらに加わり、その場所に入ることで実現される行為が示唆される. それに対して、先に観察した sentarse a la mesa や ponerse a la máquina のように移動を表さない動詞の場合には、a によって「隣接」が表されるため、Moreno y Tuts(1998)が述べるように、a を en と交替させると「隣接」ではなく「表面の上」と解釈される.

> En estas frases, si sustituimos a por en, ya no estamos cerca de, al lado de, sino sobre la mesa o la máquina.
>
> 『これらの文において、もし a を en と交替させると、「近くに」や「そばに」という意味ではなく、テーブルあるいは機械の「上」にという意味になる. 』
>
> —Moreno y Tuts (1998: 16)

しかしながら、sentarse a/en la mesa の比較で確認したとおり、en は「表面の上」のほかに「隣接」を表すことが可能であるが、en の場合にはメトニミー的解釈はなされず、もっぱら空間的位置が表される. すなわち、volante も máquina も物理的にその「上」に座ったり乗ったりすることが可能であるものの、「表面の上」という位置が不自然であるため、「隣接」が表されるのである. このような en は CREA において観察され、たとえば、(130)における en el volante は「ハンドルの上」ではなく「ハンドルの前」を表していると思われる.

> (130) El tranvía avanza, parece que vuela sobre los dos raíles. Tú estás sentado en el volante del coche. “Cuidado”, te dice ella, la chica de las coletas, desde lo alto del árbol, y tú aceleras justo en el momento en que el tranvía pasa por encima del auto, [...]
>
> 『路面電車は進み、2 つの線路の上を飛んでいるようである. 君は車のハンドルの前に座っている. お下げ髪の女の子は木のてっぺんから君に「気をつけて」と言い、君は路面電車が車の上を越えるちょうどその瞬間に加速する』
>
> —CREA

本項では、a が「隣接」を表すことにより、その空間的意味からメトニミー的意味の拡張がみられることを確認したが、a と共起している名詞すべてがその名詞を利用しておこなう行為を示唆するとは限らず、たとえば sentarse a la mesa や sentarse al piano で用いられる a は「隣接」を表したうえで、その名詞を介しておこなう行為、すなわち、この場合には comer や interpretar などの動詞が明示される. これに加えて、estar al volante や sentarse a la máquina のようにメトニミー的意味が慣用化し、「隣接」の意味よりもむしろその名詞を応用しておこなう行為を意味

する表現も観察される. このように用いられる a は en と交替することで「表面の上」や「隣接」といった空間的意味を表すことが可能であるが、en の場合にはメトニミー的解釈はなされず、もっぱら空間的位置が示されるのである.

4.4.4. 隣接する名詞が作用性を有する場合

最後に、「作用性(carácter de agente)」を有する名詞と共起する場合について観察する. Roegiest(1977)は、(131)～(134)において観察されるように、sombra, sol, viento, brisa, aire, luz, lumbre, fuego, brasa, frío, calor『陰、日なた、風、そよ風、空気、光、炎、火、燠、寒さ、暑さ』などの抽象名詞が a と共起し、これらの名詞は「作用性」を有すると述べている[45]. そして a と共起することによって、その名詞によって覆われている位置を示すのに加え、その名詞に置かれることでなされる作用が示唆されるという. それに対して、en が共起する場合は単に場所を示すにとどめていると考えられる.

(131) Tenderme a la sombra de un árbol es una de las cosas que me gustan más

『木陰に寝転がることは私が最も好きなことのひとつだ』

(132) Tenía la cara llena de concavidades [...] a la luz de la única bombilla de la lámpara

『明かりのたったひとつの電球の光のせいで、(中略)でこぼこでいっぱいの顔になっていた』

(133) Enciende el cigarro a/ en la lumbre 『彼は葉巻に火をつける』

(134) Pon la leche al fuego 『牛乳を火にかけて』

De una frase como (131) se infiere que una connotación causal se añade a veces a la relación espacial. Es que los SP contienen N que pueden desempeñar un papel activo en un proceso verbal. Se caracterizan por un sema / agentivo/ responsable de la posibilidad de a al lado de en. Dada su naturaleza no concreta, esos N pueden, en vez de situar el objeto X en la zona que cubren (localización), ejercer su acción en él (exposición):

『(131)のような文から、使役の含意がしばしば空間的な関係に加えられると考えられる. というのも、動詞のプロセスにおける活動的な役割を果たすことが可能な名詞が前置詞句に含まれているからである. これは en よりも a にみられる「作用」という意味素によって特徴づけられる. 具体的ではない

[45] これらの名詞の列挙の順序は、以下にみられるように Roegist(1977)に準ずる. また、Roegist(1977)はこれらを N(ombres) abstractos と表しているが、すべてが抽象名詞というわけではなく、たとえば lumbre や fuego は厳密には物質名詞に分類されると思われるが、mesa や puerta と異なり「形がない」という点において、抽象的であるとしていると考えられる.
A se prefiere igualmente ante un inventario bien delimitado de N abstractos, como sombra, sol, viento, brisa, aire, luz, lumbre, fuego, brasa, frío, calor, abrigo, amparo, peligro, etc...: [...]
『a は陰、日なた、風、そよ風、空気、光、炎、火、燠、寒さ、暑さ、避難場所、隠れ場、危険などといった抽象名詞とも同様に共起しやすい. 』—Roegiest (1977: 265)

というその性質ゆえに、それらの名詞は、それらが覆っている場所に物体 X を位置づける(位置の意味)代わりに、その物体に対して作用をおよぼす(さらす意味)ことができる.』

—Roegiest (1977: 265) 筆者により一部編集

(131)～(134)は、a と共起する名詞が空間的位置だけではなく、何らかの作用を動作主にもたらしている. (131)では日陰という場所だけではなく、そこからもたらされる作用、たとえば涼しさなどが暗に示される. また、(132)は光があたっているところにいることに加えて、その光にあたっていることで顔にたくさんのでこぼこがあるように見えることを表している. さらに、Roegiest (1977)は(134)に関して、poner は本来 en と共起する動詞であるが、場所ではなく作用性に焦点をあてる場合には、a とも交替可能であることに言及している. この場合には火に置くことで牛乳を温めることが示唆されるのに対して、(133)は encender のみで火をつけることを表せることから、a/ en la lumbre は一種の冗長表現であり、前置詞の意味的差異が生じにくくなると考えられ、a と en のどちらでも用いられるものと思われる.

一方で、López(1972)はこのような a と en の対立に関連して、al sol と en el sol の差異に言及しており、これら 2 つの表現に大きな意味的差異はないものの、a は存在の状態に言及している一方で、en は場所の意味に焦点があてられると述べており、Roegiest(1977)と同様の主張をしている.

Sentarse al sol, tenderse al sol, quedarse al sol indican una forma de estar: "Tito y Lucita se quedaron al sol" (El Jarama, pág. 63); mientras que en las construcciones con en hay además un sentido marcadamente local. Al decir se quedó en el sol suponemos que hay otro espacio con sombra, pero que eligió el sol: "Más abajo vio a Mely, en el sol" (El Jarama, página 64).

『「日なたに座る」、「日なたで横になる」、「日なたにいる」は存在の方法を示している. たとえば、「ティトとルシータは日なたにいる」のように. その一方で、en をともなう場合には、強く場所の意味が生じる. 「彼は日なたのところにいた」という場合には、日陰もあったが日なたを選んだことを意味する. たとえば、「彼はもっと先にある、日なたのところでメリーに会った. 」のように. 』

—López (1972: 162)

そして、Moreno y Tuts(1998)も同様に(135)と(136)をあげて al sol/ la sombra および en el sol/ la sombra の対立について言及し、大きな違いはみられないとしたうえで、a と共起する場合はその存在の仕方について言及している一方で、en と共起する場合には場所の意味として用いられると、López(1972)と概して同様の主張をしている.

(135) Estar/ ponerse/ quedarse/ sentarse ***al*** sol/ la sombra.

(136) ***en*** el sol/ la sombra.

『日なた/ 日陰に、いる/ いる/ いる/ 座る』

No hay entre estas frases una fuerte oposición, pero la primera se refiere, sobre todo, a una manera de estar, mientras que la segunda tiene más valor local (en la zona donde hay sol o sombra).

『これらの文の間に大きな差異はないが、前者はとりわけ存在の方法について言及している一方、後者は(日光、あるいは陰のあるところにおいてという)より場所の意味を含んでいる. 』

—Moreno y Tuts (1998: 16)

他方では、Fernández López(1999)がヒトやモノを特定の大気現象にさらすことを示すためには a が用いられると述べている. なお、en との交替に関しては言及していないものの、sol, luz, luna に関しては bajo と交替すると述べている.

También se utiliza esta preposición para señalar que las personas u objetos están expuestos a determinados fenómenos atmosféricos, como: al sol, al frío, a la sombra, al viento, al aire, al calor, a la intemperie, a la luz del día...

『この前置詞は特定の大気現象にさらされている人やモノを示すためにも用いられる.「日なたに、寒さに、日陰に、風に、大気に、暑さに、戸外に、日光に」』

—Fernández López (1999: 22) 筆者により一部編集

この記述は、共起する名詞の特徴で分類しているように思われるが、determinados fenómenos atmosféricos とまとめてしまうと、先の例である al fuego のような大気現象に含まれない名詞の扱いについて問題が生じる. そのため、Roegiest(1977)が提示する「作用性」のある名詞というカテゴリーのほうが、より有効なのではないかと思われる.

本項では sol や sombra といった名詞が a と共起する場合にも、4.4.3.で列挙した volante などの特定の行為を想起させる名詞と同じように、「隣接」の意味から拡張したメトニミー的意味が生まれることを観察した. ただし、4.4.3.で観察した名詞は「作用性」を持たないため、隣接したうえで利用するという点で sol や sombra などの名詞とは異なる. 言い換えれば、日なたや日陰、火は場所として指示することも可能であり、その名詞は「作用性」を有しているため、たとえば火のある場所に近づけば、その火の作用によって「燃える」や「暖まる」などの効果がもたらされる. そのため、a であっても en であっても「隣接」を表すことが可能であるものの、a が用いられることでその場所への隣接によってもたらされる作用が示唆される、あるいはその作用に焦点があてら

れるのである. ただし、これらの前置詞が交替可能であることが示すように、a と en の選択によって意味が明確に峻別されているわけではなく、それぞれの前置詞が用いられる要因として以上のことが考えられるのである.

4.4.5. en と a の意味的差異

本節では空間的位置を表す a について考察をおこなった. a は ir『行く』や venir『来る』などの移動動詞と共起することで基本的に「方向」を意味するが、移動を表さない動詞と共起すると、「方向」から「隣接」の意味が拡張すると考えられる. a が「隣接」の意味として用いられる場合には共起する名詞は限定されているため、たとえば a la mesa といった語句はコロケーションとして定着したと考える見方もあるものの、本節では前置詞の意味と前置詞と共起する名詞の性質に注目して、a の意味に関する考察をおこなった. この性質にしたがって以下のように(a)～(d)の大きく 4 つに分類し、Roegiest(1977)の主張をもとに移動を表さない動詞と用いられる前置詞の a の意味を考察したうえで、どのような場合に en と交替可能であるのか、また交替した場合、どのような差異が見受けられるのかを観察した.

(a)	表面を有する名詞	mesa
(b)	入口、出口を表す名詞	puerta / entrada / salida
(c)	隣接することで利用を示唆する名詞	piano / máquina / volante/ mesa
(d)	作用性を有する名詞	sol / sombra / fuego

a が移動を表さない動詞と共起する場合、a の最も基本的な意味は「隣接」であることは先に述べたとおりであるが、これは(a)や(b)のような名詞と共起する場合にみられ、さらにこの意味から(c)や(d)に分類される名詞と共起する場合に生じるメトニミー的意味が拡張していると考えられる. まず、(a)の mesa を用いた例を観察すると、sentarse a la mesa はテーブルに向かって座ることを表し、このときの a は「隣接」を意味する. これに対して、sentarse en la mesa はテーブルの上に座ることを表すだけでなく、a の場合と同様にテーブルに向かって座る様子を表すことも可能であるが、これはトポニミーによるもの、そして、本来テーブルは座るものではないという百科事典的知識によるためであると考えられる.

続いて、(b)のグループの puerta, entrada, salida のような名詞について観察すると、これらの名詞は部屋や区切られた空間をベースとしてプロファイルされる部分であり、たとえば

esperar a la puerta のように a が共起可能であるのは、このプロファイルした部分に位置することでその部屋や空間に隣接していることを同時に表現しているためであると思われる. つまり、esperar a la puerta de la habitación『部屋のドアで待つ』は、プロファイルされている puerta に隣接しているのと同時に habitación と隣接していると述べることが可能なのである. これらの名詞は平面を有しないという点において、(a)の名詞とは異なり、en と交替する場合には puerta などの名詞が存在する位置を中心としたある一定の範囲の「内部」と解釈することが可能である. また、トラジェクターがランドマークに比較的近いところに位置づけられるため、「近接」という意味を有すると述べる研究もみられる.

そして、(c)のグループの名詞は a が「隣接」を表すことにより、その隣接した名詞を利用することを表すメトニミー的意味が観察される. このグループに(a)の mesa も含まれると考えられるが、たとえば piano であれば a と共起することで、「演奏する」といったその名詞にふさわしい行為、つまりプロトタイプ的な行為を示唆する. このとき、se sienta al piano e interpreta un nocturno de Chopin『彼はピアノに向かって座り、ショパンのノクターンを演奏する』のようにその名詞との「隣接」をいったん表したうえで、その名詞を用いた行為が表される場合もあれば、está al volante『ハンドルのところにいる』のように隣接することで可能となる行為、つまり「運転すること」が示される場合もある. いずれの場合も en との交替が可能であるものの、(a)や(b)と同様に「隣接」あるいは「上」といった空間的位置を表すことに焦点があてられ、共起する名詞を用いた行為は概して示唆されない.

最後の(d)のグループはその名詞自体に「作用性」が認められるものであり、たとえば al sol であれば「日光のあたる場所」という空間的位置に加えて、その位置に置かれるものに対して日光の作用を利用することが示唆される. そのため、たとえば bañarse al sol『日光に当たる』、secarse al sol『日光で体を乾かす』、tender la ropa al sol『服を日なたに干す』といった a が用いられる表現が観察される. また、これまで観察してきたとおり、これらの a は en と交替することが可能であり、その場合には空間的位置により焦点があてられる.

以上をまとめると、前置詞 a は「隣接」を表す場合、共起する名詞を利用することで何らかの動作が示唆されるといえそうである. つまり、本節の冒頭から「隣接」の意味として観察してきた sentarse a la mesa『食事するため、あるいは仕事をするために座る』や ponerse a la máquina『機械を使うために位置する』のように、空間的意味だけでなく、共起する名詞から想起される行為も示唆していると思われる. しかしながら、a と共起する名詞が限定的である以上、たとえその名詞から行為が想起されたとしても、その場合に a が用いられるとは限らない. たとえ

ば、先に引用した(116)や(117)は a ではなく en が用いられ、とりわけ(116)は「バスに乗るために」という目的が puerta よりも明確であると思われるものの、移動を表さない動詞と共起した a la parada や a la estatua が用いられた例文は CREA において確認されなかった.

(116) Te esperaré en la parada. 『停留所で君を待っているよ.』

(117) La vi en la estatua del perro. 『私は犬の像のところで彼女に会った.』

—山田 (1995: 156) 日本語訳は原文

(116)や(117)において a が共起しないのは、parada や estatua はトラジェクターの空間的位置を示すだけであり、volante や piano のようにトラジェクターがこれらの名詞を実際に利用しないためであると思われる. この要因に加えて、ランドマークの形状を考慮しても、このような名詞は点的な物体としてとらえられる、あるいは広がりがあってもプロファイルしている部分がやはり点的なものと解釈されることも大きな要因であると思われる. このように、a は本来の「方向」を表すという空間的意味から「隣接」の意味が拡張したものと考えられ、さらにその「隣接」の意味からメトニミーを介した意味拡張がおこり、隣接によって示唆される行為を表すようになったのである.

ここまで観察してきた a のそれぞれの意味は、先行研究において言及されており、そのなかで a は動的であり、en は静的であるというように共起する動詞の意味が前置詞の意味として記述されている研究もあれば、a にも en にも位置の意味を認め、「隣接」の意味やメトニミーの意味が記述されている研究もみられた. しかしながら、「方向」から「隣接」、「隣接」から「メトニミー」といったような、意味間の関連づけを体系的におこなっている研究、そして「隣接」を表す場合に共起可能な名詞が限定的である要因について考察をおこなっている研究は管見によれば確認されなかった. そこで本論文では、それぞれの意味を関連づけながら、これまでの先行研究における a の意味に関する記述をまとめたうえで、「隣接」を表す a と共起しやすい名詞に関する考察をおこなった. そして、a と en の差異についての結論として、a は空間的意味を表しながらもメトニミー的解釈がなされることが多いと述べ、これは共起するランドマークの百科事典的知識によるものであると主張した.

4.5. en と sobre[46]

本節では、en が「表面の上」を表す場合の意味範囲を、文脈によっては交替可能であるとさ

[46] 本節は長縄(2015b)を加筆修正したものである.

れる前置詞 sobre と比較しながら考察する.

en は「内部」の意味も有しており、その場合には sobre との意味の対立が生じる一方で、「表面の上」の意味にあたる en と sobre の意味的差異は見受けられないと記述する先行研究がほとんどである. たとえば López(1972)は、en と sobre の意味の間における差異はなくなっており、同じランドマークで対立がみられるのは en が「内部」、sobre が「表面の上」で解釈される場合であると述べている.

> Las preposiciones en y sobre sólo pueden neutralizarse cuando ambas significan 'sobre la superficie', pero no cuando en significa 'dentro de' (EN I), o sobre corresponde al esquema II. En este caso llegan a construir oposiciones de sentido; el reloj está sobre la mesa / el reloj está en (dentro) la mesa.
>
> 『前置詞 en と sobre は、2 つの語が「表面の上」を意味するときにのみ、意味の差異は消失するが、en が'中'を意味する場合、あるいは sobre がスキーマ II(訳注 表面から離れて上にある場合)に相当する場合には差異が生じる. この場合において、意味の対立が生じる.「時計はテーブルの上にある」/「時計はテーブルの中にある」』
>
> —López (1972: 194) 原文ママ

同様に、Moreno y Tuts(1998)は(137)～(140)をあげながら、en は内部を表す一方で、sobre は重なりを表すと述べている. そのうえで、「表面の上」を表す場合には en と sobre が交替可能であることを述べており、(141)～(143)にみられるように、どちらを用いても意味が同じであるとしているが、その意味的差異には言及していない.

> En marca interioridad; sobre expresa superposición.
>
> 『en は内部を示し、sobre は重なりを表す. 』
>
> (137) Mira en la casa. 『彼は家の中を見ている. 』
>
> (138) Mira sobre la casa. 『彼は家の上を見ている. 』
>
> (139) Está en el agua. 『彼は水の中にいる. 』
>
> (140) Está sobre el agua. 『彼は水の上にいる. 』
>
> Su uso se neutraliza en:『この用法は以下の場合において意味の差異がない. 』
>
> (141) Lo he dejado en/sobre la mesa. 『私はそれをテーブルの上に置いた. 』
>
> (142) Se apoyó en/sobre la mesa. 『彼はテーブルに寄り掛かった. 』
>
> (143) Pon todo eso en/sobre la mesa. 『それらすべてをテーブルの上に置きなさい. 』
>
> —Moreno y Tuts (1998: 127)

これらの先行研究の記述にしたがえば、en が「内部」を表す場合において、「内部」ではなく「表面の上」であることを表すために sobre が用いられる一方で、en が「表面の上」の意味で用いられる場合には、sobre と交替しても 2 つの前置詞の間に意味的差異がみられないという. しかしながら、ランドマークによっては en を「内部」でも「表面の上」でも解釈可能な場合があるため、Cifuentes Honrubia(1996)はこれら 2 つの意味が曖昧になる場合には、en とは異なる別の表現を用いることでその位置を明確に示したほうがよいと述べている. そして、位置づけるものが 3 次元を有する、つまり「内部」を有する場合には「表面の上」を示すことができないと(144)を用いて説明している.

(144) la pelota está en el armario 『ボールはタンスの中にある』

—Cifuentes Honrubia (1996: 115)[47]

(144)は概して「ボールはタンスの中にある」と解釈され、「ボールはタンスの上にある」とは解釈されないという. これは、en と共起するランドマークの性質によって曖昧さが生じない限り en の使用が可能であるのに対し、曖昧な場合には en ではなく、空間的範囲がより限定された sobre や dentro de などの表現が用いられるためであると考えられる. もっとも、Cifuentes Honrubia(1996)は「タンスの上」にあたる表現を提示していない.

このように Cifuentes Honrubia(1996)は、ランドマークによって en の解釈が定まると述べているが、これは発話者がランドマークに対して有している百科事典的知識に深くかかわっているためであると考えられる. 言い換えれば、(144)で用いられている armario はモノを中にしまうものであるために、en el armario は「タンスの中」と解釈される一方で、そうではない「タンスの上」と解釈されるためにはたとえば sobre el armario のように、en よりもその空間的位置がより明確な表現が用いられると考えられる. このように、前置詞の意味の変化や別の表現との交替は、トラジェクターとランドマークそれぞれの百科事典的知識によるものであることが観察されるのである. これは第 2 章で確認した名詞の「トコロ性」に関する考察における主張と重なり、たとえば、「マンガの本を本棚に置く」と「マンガの本を本棚の上に置く」では、前者は本棚の各段に置くという解釈になる一方で、後者は本棚全体の一番上に置くという解釈になりやすい(本多 2013: 112)ことと関連している. この例は日本語の「～に」と「～の上に」の対立であるが、「本を各段に置く」ことは本棚に対するプロトタイプ的な行為であるため、「～に」で表される一方で、「本棚全体の一番上に本を置く」ことは行為としては可能であるものの、本棚に対する非プロトタイプ的な

[47] Cifuentes Honrubia (1996)にあげられている例文はイタリックで表記されている. 以下同様.

行為であるため、「～の上に」が用いられるのである.

そこで、本節では「表面の上」を表す en に焦点をあて、同義語とされる sobre と encima de について、とりわけ前者と en が交替可能な場合にどのような意味的差異が生じるのか、そしてどのような文脈において en が、あるいは sobre がランドマークと共起しやすいのか考察する.

4.5.1. 先行研究

本節では前置詞 en が「表面の上」という意味で用いられる文脈で、sobre や encima de と交替可能な場合における意味的差異を考察するが、ここでは en と類義語とされる sobre と encima de の差異に関する先行研究の記述を確認する. あらためて en と sobre の差異を観察すると、これら 2 つの前置詞はともに「表面の上」を表すことが可能であり、先に引用した(141) Lo he dejado en/sobre la mesa.『私はそれをテーブルの上に置いた.』のような文脈では 2 つの前置詞は交替可能である.

Morera Pérez(1988)は、sobre と en が交替してもニュアンスは変化しないとしているものの、sobre は localización espacial superior en contacto con『(ある物体と)接触した状態における上部』を表すのに対し、en は ubicación absoluta『絶対的位置』を表すといった差異がみられると述べていることから、sobre は「ある物体よりも上」という概念がより際立っていることを示唆していると考えられる. また、上田(2011: 276)も en と sobre の差異に関して、sobre は「ある物の上部」であることを意識して、「～の上で」という意味で用いる一方、en は特に「上」であることを意識せず、接触したという意味で用いると述べ、先の Morera Pérez(1988)と同様に sobre は en に比べて「上」のニュアンスが際立つとしている. これらの記述は日本語の「～に」と「～の上に」の対立に類似していると考えられ、en はランドマークに対するトラジェクターの空間的位置を表すために最も自然に用いられる一方で、sobre は en の空間的意味が曖昧になる場合、あるいは「タンスの中に置く」ではなく、「タンスの上に置く」のように、その名詞に対する行為が非プロトタイプ的な行為であると解釈される場合に用いられるという仮説を立てることが可能である. なお、sobre は(145)にみられるように、トラジェクターとランドマークが物理的に離れていても用いることが可能であるが、この場合は en と交替することはできない.

(145) El avión voló sobre la ciudad.

『飛行機は町の上を飛んだ.』 —山田 (1995: 168)

また、これらの先行研究に加えて、Matte Bon(1995b)は encima de と sobre はあるものが別

のものより上に位置することを特に明確にするためにもっぱら用いられ、それ以外の場合では en が好まれると述べているが、(146)の対話が示すように、「内部」と「表面の上」で対立する場合にも sobre および encima de が用いられると述べている.

> Encima de y sobre se usan casi exclusivamente cuando el hablante quiere dejar muy explícita la superposición de un elemento con respecto a otro. De lo contrario, se prefiere en. Así pues, para situar un elemento en una superficie, normalmente se utiliza en: [...]
>
> 『encima de と sobre は、話者がある要素が別の要素よりも上部に位置することをより明確にしたいときにもっぱら用いられる. それ以外は en が好まれる. したがって、表面にある要素を位置づけるためには、en が用いられる. 』
>
> Sin embargo, si se están oponiendo dos posiciones distintas con respecto al mismo punto de referencia se usan sobre y encima:
>
> 『しかしながら、もし同じ参照点について、2 つの異なった位置の対立がみられる場合には sobre と encima が用いられる. 』
>
> (146) A: ¿Has visto mis gafas?
> B: Me parece que están en la mesa de la cocina.
> A: Ya he vaciado el cajón, pero no las encuentro.
> B: Yo no decía en el cajón, creo que las vi encima de la mesa.
>
> 『A: 私のメガネ、見た？
> B: ダイニングテーブルの上にあると思うけど.
> A: もう引き出しの中を見たけど、見つからないよ.
> B: 引き出しの中ではないよ、テーブルの上にあるのを見たと思うよ. 』
>
> —Matte Bon (1995b: 181)[48]

そして、Matte Bon(1995b)は encima de と sobre の差にも言及しており、encima de はより高い位置にあることを示すために用いられるとしている. (147)の対話では、スキーブーツがタンスの上にあることを encima de を用いて表すことで、それが比較的高い場所にあることを示唆していると考えられる.

> Para referirse a la superposición de un elemento con respecto a otro que el hablante considera o quiere presentar como más bien alto se usa encima de:
>
> 『話者がより高い位置にあると考えたり、示そうとしたりしているある要素が別の要素よりも上部に位置していることを言及するためには encima de が用いられる. 』

[48] 対話中の太字、および対話中の A、B は筆者による.

(147) ¿Dónde están mis botas de esquiar? 『私のスキーブーツはどこ？』

En una caja, encima del armario. 『箱の中だよ. タンスの上の. 』

—Matte Bon (1995b: 182) 例文中の太字は筆者による

さらに Matte Bon(1995a)は、sobre が使われることで 2 つの要素が物理的に接触していることが示唆されるのに対し、encima de は物理的な接触が 2 つの要素の間に必ずしも示唆されないことを(148)をあげながら述べている. (148)ではランプが机から離れてその上部にある天井に接触していることが表されている.

El uso de sobre implica contacto físico entre el elemento A y el elemento B. El elemento A está siempre encima del elemento B y en contacto con él. Por el contrario, el uso de encima de no implica necesariamente que haya contacto físico entre los dos elementos.

『sobre は、要素 A と要素 B の間における物理的な接触を示唆する. 要素 A は常に要素 B の上にあり、接触している. それに対して、encima de は 2 つの要素の間に物理的な接触があることは必ずしも示唆しない. 』

(148) La lámpara está en el techo, encima de la mesa.

『ランプは机の上部、天井についている. 』

—Matte Bon (1995a: 283) 例文中の太字は筆者による

Matte Bon(1995a)はあくまでも en, sobre, encima de の使い分けは物理的な空間配置の差によるものであると主張していると考えられる. その一方で、Moreno y Tuts(1998)は en と sobre が類義であることに加えて、(149)と(150)をあげながら、sobre と encima de の類義性についても言及し、相互に関連のある 2 つの物体が接触している場合にはこれら 2 つの表現が用いられやすいものの、en を用いることも可能であると述べている. すなわち、空間的位置の差異だけではなく、2 つの要素が関連づけられるかどうかで用いられる前置詞が異なることを主張しているのである.

[Sobre y encima de] Localizan en la superficie, especialmente si hay contacto entre las dos cosas que se relacionan.

『(sobre と encima de は)表面に位置づける. このとき、特に、相互に関連づけられる 2 つのものが接触している. 』

(149) Me puse una capa sobre/ encima de los hombros.

『私はケープを肩に羽織った. 』

(150) Pon algo sobre/ encima de los papeles o se volarán.
『紙の上に何か置いて. でないと飛ばされるよ. 』

—Moreno y Tuts (1998: 127) [ ]内は筆者による

ここで「相互に関連している」とは、(149)では、概してケープは肩に羽織るものと考えられることからケープと肩の間に関連性があり、また(150)では、何かを紙の上に置くのは飛ばされないためであることから、algo で示された物体と紙の間に何らかの関連性があるものと解釈されると思われる. それに対して、先に引用した(141) Lo he dejado en/sobre la mesa.は(149)や(150)に比べると、テーブルとそれ(lo)の間には関連性がないように思われる. この関連性は本論文の枠組みにおけるトラジェクターとランドマークそれぞれに対する百科事典的知識で判断することが可能であると考えられる. これに加えて、Moreno y Tuts(1998)は sobre と encima de の対立について言及し、もしある物体が別の物体の上部にあり、それがさらに高いところにあることに言及する場合には encima de を用いることが好まれると述べており、この点については Matte Bon(1995b)の主張と一致する.

Preferimos encima de cuando nos referimos a una cosa que está sobre otra y, además, en altura.
『ある物体が別の物体の上、さらに高いところにあることをいう場合には encima de が好ましい. 』

(151) Mira allá arriba, encima de todas las cajas.
『あの上のほうを見て、箱の一番上のところ. 』

(152) La abuela colocaba las maletas encima del armario.
『祖母はスーツケースをタンスの一番上に置いていたものだ. 』

—Moreno y Tuts (1998: 127)

これに対して、sobre と encima de の意味的差異について考察している Cifuentes Honrubia(1996)はこれら 2 つの表現の差異について、先の Moreno y Tuts(1998)の主張に対する言及はおこなっていないものの、これら 2 つの表現がほぼ同義であることを認めたうえで、たとえば(153)～(155)の a と b をそれぞれ比較しながら分析をおこなっている. Cifuentes Honrubia(1996)は 2 つの物体が相互に関連のある場合に sobre や encima de が用いられるという Moreno y Tuts(1998)の主張とは異なり、2 つの物体が常に一緒で、ひとつのまとまりとして解釈される場合には sobre が用いられ、そのまとまりが認められない場合には、encima de が

用いられるという.

(153a) Está tumbado sobre la arena. 『彼は砂の上に寝そべっている.』

(153b) Está tumbado encima de la arena. 『彼は砂の上に寝そべっている.』

(154a) Pondré flores sobre tu tumba. 『君のお墓に花を供えるつもりだ.』

(154b) Pondré flores encima de tu tumba. 『君のお墓の上に花を置くつもりだ.』

(155a) Cabalgar sobre el caballo. 『馬に乗る.』

(155b) Cabalgar encima del caballo. 『馬の上に乗る.』

En los ejemplos de la arena y del caballo [...], considero que la diferencia fundamental que puede producirse viene dada por el sema [+duratividad] que podamos encontrar en el objeto a localizar, es decir, si un objeto —en este caso un sujeto que realiza una acción— está localizado respecto a una base, y guarda con ésta una relación tal que puede entenderse como iterativa y durativa, es decir, que es común que objeto localizante y localizado estén siempre juntos, que parezcan una unidad, entonces, en ese caso, usaremos «sobre».

『砂と馬の例において(中略)、生じうる基本的な差異は位置づけるための物体が有する意味素性[+継続性]によるものであると考えられる. つまり、もし、物体—この場合では行為を実現する主語—がベースに対して位置づけられ、反復そして継続として理解されうる関係、つまり位置づける物体と位置づけられる物体が常に一緒であることが一般的で、ひとつのモノと判断される関係が物体とベースの間で維持されるならば、その場合には sobre が用いられるだろう.』

Por otro lado, cabalga sobre el caballo una persona que tiene por costumbre hacerlo, es decir, que podemos asociar las figuras de ambos como unidas y relacionadas por la costumbre [iteratividad] que tenemos de verlos así.

『他方で、馬に乗ることが習慣としてある人が馬に乗る場合、つまり我々が馬と人をまとまりとして、そして関連づけられるものとして見る「繰り返し」の習慣によって、その 2 つのものを関連づけることができる場合に、cabalga sobre el caballo と表される.』

—Cifuentes Honrubia (1996: 109–110)

(153)～(155)のそれぞれのペアに対して Cifuentes Honrubia(1996)は sobre と encima de が用いられる場合の状況について以下のように述べている. (153a)と(153b)については、sobre が用いられる場合には está tumbado sobre la arena tomando el sol『彼は砂の上に寝そべり、日光浴をしている』のように習慣的な関係が示され、常に一緒にあるものと解釈される. 次の(154a)と(154b)では、ランドマークである tumba『墓』とトラジェクターである flores『花』の位置関係、つまり「花が墓の上にある」状況だけではなく、習慣的に「墓に花を供える」行為をしている場合には sobre が用いるのが適切であるとし、(154b)よりも(154a)がふさわしいと述べている. このとき encima de が用いられると墓の上に花が置かれている事実が知られていないものであ

ったり、偶然だったり、まれなことであることが示唆されるという. そして(155a)と(155b)は、両者とも「人が馬の上にいる」という位置関係を示しているが、その人が習慣的に馬に乗っている場合であれば sobre が用いられる. このとき sobre が用いられるのは、習慣的に馬に乗ることによって、馬とそれに乗る人が関連づけられ、常に一緒であることが示唆されるためである. その一方で、たとえばその人が馬に乗ったのが初めてである場合には、習慣性が示唆されないため encima de が選択されると述べている.

Moreno y Tuts(1998)や Cifuentes Honrubia(1996)が述べるように、トラジェクターとランドマークの関連性が sobre と encima de の選択に影響するという観点はそれぞれの名詞の百科事典的知識によるものであると思われるものの、たとえば(149)および(150)の sobre と encima de は en と交替可能と述べるにとどめ、en と共起する場合には言及していない. したがって、本節では考察範囲を en にも広げ、トラジェクターとランドマークの関連性について観察をおこなう.

4.5.2. 実例検証

ここでは CREA を利用し、用例を観察する. まず最初に、en, sobre, encima de のそれぞれと共起可能である名詞をランドマークの例として選び、DRAE(2014)および SALAMANCA を参考にそれぞれ名詞の辞書的定義を確認したあと、CREA を用いて[各前置詞あるいは前置詞句＋名詞]を検索し、どのような文脈でそれぞれの前置詞あるいは前置詞句が名詞と共起しやすいのかを例文を観察することで考察をおこなう. この考察にあたり、とりわけ注目した部分はトラジェクターとランドマーク、そしてトラジェクターのランドマークに対する行為を表す動詞である. たとえば、él se acuesta en la cama『彼はベッドに横になっている』という文において、ランドマークである cama に対する行為を表す動詞は acostarse であり、トラジェクターは él である. なお、今回の検証ではスペインのスペイン語のみを検索対象とした. 今回ランドマークの例として選択した名詞は、cama『ベッド』、silla『イス』、mesa『テーブル』、suelo『床』である.

4.5.2.1. cama

4.5.2.1.1. 定義

まず、cama の定義を DRAE(2014) および SALAMANCA で確認する.

> Mueble destinado a que las personas se acuesten en él, compuesto de una armazón, generalmente con patas, sobre la que se colocan un somier o tabla, un colchón, almohada y diversas ropas.
>
> 『マットレス台や板が置かれた、概して脚がついており、骨組み、マットレス、枕、そしてさまざまな寝

具で構成され、そこに人が横たわるように作られた家具である.』

—DRAE (2014: s.v. cama)

Mueble de diferentes formas, tamaños o materiales sobre el que se coloca el colchón y varias prendas de ropa para dormir o descansar.

『様々な形、大きさ、素材でできた家具で、眠ったり休息をとったりするために、その上にマットレスや寝具を置く.』

—SALAMANCA (s.v. cama)

4.5.2.1.2. CREA による検証

先の辞書的定義から cama は「ヒトを寝かせる」ものであり、これが、cama に対する主な百科事典的知識であると考えられる. 次に、en la cama, sobre la cama, encima de la cama のそれぞれを CREA で検索し、その件数を表 4 に示した.

検索語句	件数
en la cama	2432
sobre la cama	386
encima de la cama	71

表 4　la cama と共起する前置詞(句)の件数

表 4 から、en と共起する頻度が最も高く、sobre と encima de の頻度は en に比べるとずっと少ないのがみてとれ、空間的意味を表すためには en の使用がより自然であることが考えられる. 今回は例文を観察するのに際し、encima de la cama および sobre la cama はすべての例文にあたることが可能であった一方で、en に関しては 2432 件と件数が多かったため、sobre la cama とほぼ同じ件数になるように調整した[49]. 例文を観察するうえで最初に注目したのは、cama はどのような類の名詞が位置づけられるのかということである. そこで、荒川(1992)であげられていた「ベッドニネテイル」と「ベッドノ上ニ置ク」において、前者はヒトがトラジェクターであり、後者はモノがトラジェクターであること、そしてトコロ化していることに着目し、ランドマークに対するトラジェクターをヒトかモノかで分類し、表 5 にまとめた. なお、ここでいうヒトには persona『人』や madre『母親』などの名詞だけでなく、人称代名詞も含んでおり、またモノは ropa『衣服』や libro『本』などの具体的な名詞とし、抽象名詞についてはその他として分類しているが、検証対象から除外した.

[49] Filtros を Documentos にし、Ratio に 6 を入れることで合計件数の約 6 分の 1 の用例を抽出した.

	en	sobre	encima de
ヒトと共起	355	243	32
モノと共起	18	123	37
その他[50]	17	20	2
検証した例文数	390	386	71

表 5 検証した例文数とそれぞれの前置詞(句)と共起する名詞による分類(cama)

表 5 の結果と、「ヒトが寝るための場所であり、その上にヒトを位置づける」ということが cama のプロトタイプ的な百科事典的知識であることから考えると、en la cama が用いられる場合にはヒトがランドマークであることがほとんどであるため、cama が「ヒトを何らかの状態で位置づける」行為と共起する場合には en が用いられる傾向があると思われる. それに対し、sobre la cama が用いられる場合には、モノと共起する頻度が en の場合に対して高くなり、さらに encima de la cama の場合にはモノと共起する頻度が en や sobre の場合に比べて、より高いことがみてとれる. つまり、「モノを位置づける」行為は cama に対する百科事典的知識のなかに含まれると考えられるものの、「ヒトを位置づける」行為に比べて非プロトタイプ的な行為であるため sobre や encima de が用いられていることが観察される. これをまとめると、en は cama に対する百科事典的知識のなかでもプロトタイプ的な行為であると考えられる「ヒトを位置づける」行為と共起しやすく、一方、sobre や encima de は非プロトタイプ的な行為であると考えられる「モノを位置づける」行為と共起しやすいといえる.

次に共起する動詞を観察すると、en の場合には dormir(se)『眠る』(5 件)、caerse『倒れこむ』(7 件)、echarse『横たわる』(8 件)、estar(se)『ある』(31 件)、incorporarse『上体を起こす』(11 件)、meterse『中に入る』(52 件)、sentarse『座る』(28 件)、tenderse『横たわる』(8 件)、tirarse『横たわる』(8 件)、tumbarse『横たわる』(25 件)のように、寝る、横たわる、上体を起こす、そして座るという意味を有する動詞と共起しやすいことがわかる[51]. このように共起する動詞の出現数を観察すると、「ヒトを位置づける」行為のなかでも、(156)および(157)にみられるように、en la cama と共起する動作である、横たわる、上体を起こす、座るといった行為が cama に対するプロトタイプ的な行為であると考えられる.

(156) Al salir del baño se sentó en la cama y soltó un resoplido.

『風呂から出ると彼はベッドに座り、荒い息をはいた. 』

[50] 抽象名詞の例、ベッドとトラジェクターが接触していない例、トラジェクターが明示されていない例、cama が寝床を意味していない例などの数を示す.

[51] ここでは再帰形を記載しているが、件数の中には過去分詞形および他動詞形も含んでいる. 以降、同様である.

(157) Me tumbé en la cama sin quitarme los zapatos.

『私は靴を履いたままベッドに横たわった.』 —CREA

一方、sobre と共起する動詞を観察すると、ヒトと共起する場合には meterse を除く[52]、先にあげた動詞に加え、それぞれ少数ではあるが、dar saltos『ピョンピョン跳ぶ』、saltar『跳ぶ』、poner [de/ en] pie『立つ』、poner a cuatro patas『四つんばいになる』、ponerse de rodillas『ひざまづく』といった語(句)がみられた. そして、モノと共起する場合には(158)のように、「置く」を意味する colocar(4 件)、dejar(14 件)、depositar(4 件)、poner(5 件)に加え、(159)にみられるような、「投げる」を意味する arrojar(9 件)、tirar(9 件)、また、「落とす」を意味する caer(6 件)、dejar caer(4 件)も観察された. そのほかにも、amontonar『積み上げる』(3 件)、extender『広げる』(6 件)がみられた. また、encima de に関しても、ヒトに対しては tumbarse(4 件)、sentarse(5 件)、そしてモノに対しては(160)のように、dejar(7 件)、poner(6 件)と共起しているのに加え、(161)のように subirse『登る』、trepar『登る』、saltar といった動詞がそれぞれ 1, 2 例確認された.

(158) Te dejó sobre la cama un bolso de plexiglás verde, tu color preferido.

『彼は君に、君の好きな色である緑のプレキシガラスのハンドバッグをベッドの上に置いていった.』

(159) Te quitaste la casaca arrojándola sobre la cama del dormitorio matrimonial, [...]

『君はジャケットを脱ぎ、寝室のダブルベッドの上に放り投げた』

(160) Del armario donde oscilaban perchas vacías sacó una maleta grande y la puso encima de la cama.

『何もかかっていないハンガーが揺れている洋服ダンスから彼は大きなスーツケースをとり出し、ベッドの上に置いた.』

(161) Se sube encima de la cama y pone una pose de diosa egipcia.

『彼女はベッドの上に登り、エジプトの女神のポーズをとる.』

—CREA

先に述べたように「ヒトを何らかの状態で位置づける」行為が cama に対するプロトタイプ的な行為であり、その場合には en と共起しやすいと考えられるが、それに対して、「飛び跳ねる」、「立つ」、「登る」、そして「モノを置く」、「モノを(置くために)投げる」といった動作は cama に対

[52] meterse は「中に入る」を意味するため、en とのみ共起し、「上」の概念が際立つとされる sobre la cama とは共起しないと考えられる.

する非プロトタイプ的な行為といえそうであり、例文を観察すると sobre あるいは encima de と共起している文がほとんどである. 言い換えれば、en と共起する場合はそのトラジェクターに対してふさわしい行為がおこなわれる傾向があるのに対し、sobre や encima de と共起する場合にはそのトラジェクターに対して単に可能な行為がおこなわれる傾向があるといえ、本節の仮説どおりの結果が得られた.

4.5.2.2. silla

4.5.2.2.1. **定義**

silla についても cama と同様に、まず最初にその辞書的定義を確認する.

> Asiento con respaldo, por lo general con cuatro patas, y en que solo cabe una persona.
> 『背もたれつきの座席で、普通 4 本の脚がついており、一人の人間のみが腰かけることができる. 』
>
> —DRAE (2014: s.v. silla)

> Asiento individual con respaldo.『背もたれつきの一人用の座席』
>
> —SALAMANCA (s.v. silla)

4.5.2.2.2. CREA **による検証**

先の辞書的定義より silla は「ヒトが腰かける」ものであり、cama と同じように「ヒトを位置づける」行為がプロトタイプ的な行為であると考えられる. 次に、en, sobre, encima de と共起する件数を CREA で確認し、表 6 にまとめた.

検索語句	件数
en la silla	326
sobre la silla	58
encima de la silla	7

表 6　la silla と共起する前置詞(句)の件数

cama に比べると全体の件数は減るものの、cama と同様に en, sobre, encima de の順に件数が少なくなり、en の使用頻度が高いことが見てとれる. 続いて、個々の例文を観察し、トラジェクターに関して、こちらも cama と同じくヒトかモノかで分類した後、その結果を表 7 にまとめた.

	en	sobre	encima de
ヒトと共起	247	25	2
モノと共起	26	23	4
その他[53]	53	10	1
検証した例文数	326	58	7

表 7　検証した例文数とそれぞれの前置詞（句）と共起する名詞による分類(silla)

表 7 から、en la silla が用いられる場合は「ヒトを位置づける」ことがほとんどであるのに対し、sobre la silla が用いられる場合にはモノと共起する割合が全体の例文数の約半分を占めることが確認された. また encima de の場合にはそもそも例文数が少ないものの、モノと共起する割合が en や sobre の場合に比べて、より高くなっているのがみてとれる. しかしながら、それぞれの総例文数に差があるため、先に述べた見通しが正しいかどうかを母数の異なるグループを比較するのに有効である加重平均を用いて検証した[54]. なお、表中の数値が高いほど頻度が高いことを示している.

	en	sobre	encima de
ヒト	187.14	10.78	0.57
モノ	2.07	9.12	2.29
その他	8.62	1.72	0.14

表 8　表 7 のデータを用いて加重平均した結果（小数点第 3 位を四捨五入）

表 8 から、「ヒト」と共起する場合のポイントは、en では 187.14 であるのに対し、sobre や encima de ではそれぞれ 10.78 と 0.57 であり、「ヒトを位置づける行為」と silla が共起する場合には en が用いられる傾向があるといえる. 一方で、en と「モノ」が共起するポイントは 2.07 であるのに対して、sobre は 9.12 と sobre の数値が高いため、少なくとも sobre は en に比べて「モノを位置づける」行為とより共起しやすいといえそうである. これらの結果から、silla も cama と同じく、プロトタイプ的な行為に対しては en la silla と共起しやすく、非プロトタイプ的な行為に対しては sobre la silla と共起しやすいと考えられる. encima de に関しては該当例文数が乏しいため、今回は考察を控える.

次に共起する動詞を観察すると、「ヒトを位置づける」行為として、en の場合には(162)にみら

[53] トラジェクターが明示されていない例、silla eléctrica『電気イス』や silla de ruedas『車イス』など一般的なイスでない場合の例などの数を示す.

[54] 実測値と各前置詞の例文総数に対する相対平均の積、すなわち実測値の二乗を各例文総数で割った値を示す. たとえば、en が「ヒト」と共起する加重平均を算出する式は $247^2/326$ である.

れるように、「座る」を意味する sentarse『座る』(113 件)、repantigarse『ゆったり座る』(2 件)、retreparse『楽な姿勢で座る』(2 件)が比較的多く観察された. 次いで、(163)のように「もたれる」を意味する recostarse『もたれかかる』(9 件)、apoyarse『もたれる』(5 件)、echarse『(体を)傾ける』(7 件)があり、さらには「倒れこむ」を意味する dejar caer(15 件)、derrumbarse(5 件)といった動詞がみられた. これらの動詞の頻度から silla に対しては「座る」行為がプロトタイプ的な行為であり、さらには「もたれる」、「倒れこむ」といった、身体を支えるために身を任せる行為もプロトタイプ的な行為であると考えられる.

(162) Después volvió a retreparse en la silla y contempló la pantalla que se iba cubriendo de renglones paralelos de letras uniformes.

『そのあと、彼は再びイスにゆったりと座り、一様の文字でできた平行な文字列で徐々に埋まりつつある画面を見つめた. 』

(163) Cuando el secretario hubo cerrado la puerta encendió un cigarro, se recostó en la silla.

『秘書がドアを閉めた途端、彼はタバコに火をつけ、イスにもたれた. 』

—CREA

一方、sobre と共起しやすい動詞を観察すると、「ヒトを位置づける」行為は en の場合とあまり相違なく、「倒れこむ」を意味する dejar caerse(5 件)や derrumbarse(2 件)が比較的多くみられ、cama のように「立つ」や「登る」などの行為が多くみられると思われたものの、そのような例はほとんどなく、また、en の場合に最も頻度が高かった sentarse が用いられている例は 1 件のみであった. この事実は、「座る」行為が silla のプロトタイプ的な行為であることの根拠のひとつとすることが可能である. これに対し、「モノを位置づける」行為として、(164)のように「置く」を意味する dejar(8 件)、poner(2 件)、colocar(2 件)、そして、(165)にみられるように「投げる」を意味する arrojar(3 件)、tirar(1 件)が全 23 件のなかで多く観察された. また、encima de についても sentarse は確認され、(166)のように subirse, acuclillar『しゃがみこむ』、そして(167)のように dejar, poner といった「置く」を意味する動詞がみられた. このような動詞が sobre および encima de と共起しやすいということはつまり、「モノを置く」あるいは「モノを(置くために)投げる」といった行為は非プロトタイプ的であることを意味すると考えられる.

(164) La Reina deja con cuidado su máquina fotográfica sobre la silla.

『女王はイスの上に注意深く自分のカメラを置く. 』

(165) Gregorio arrojó el periódico sobre la silla y se puso en pie.

『グレゴリオはイスに新聞を放り投げ、立ち上がった. 』

(166) NICK se sube encima de la silla, sin dar crédito a sus ojos.

『ニックはイスの上に登り、自分の目を疑う.』

(167) Por encima de la silla de cuero que está al lado de la puerta no es raro que descanse durante días una bandeja metálica con dos o tres vasos con restos de agua o de vino...

『ドアの側にある革のイスの上に、水やワインが残った 2、3 個のコップを載せた金属トレイが数日間おいてあるのは不思議なことではない.』

—CREA

以上から、silla は「座る」のようにプロトタイプ的な行為に対して en と共起する傾向があり、「モノを置く」といった非プロトタイプ的な行為には sobre や encima de と共起する傾向があるといえる. 言い換えれば、en la silla と共起しやすい行為は、silla に対するふさわしい行為といえるのに対し、sobre la silla や encima de la silla と共起しやすい行為は、silla に対して単に可能な行為であるといえそうである.

4.5.2.3. mesa

4.5.2.3.1. 定義

mesa についても、まず最初に DRAE(2014)および SALAMANCA の定義を確認する.

Mueble compuesto de un tablero horizontal liso y sostenido a la altura conveniente, generalmente por una o varias patas, para diferentes usos, como escribir, comer, etc.

『書き物や食事など、さまざまな用途のための、概して 1 本または数本の脚によって適度な高さで支えられた水平の板で作られた家具.』

—DRAE (2014: s.v. mesa)

1. Mueble que consta de una tabla horizontal y una o varias patas.

   『水平な 1 枚の板と 1 本あるいは数本の脚からできている家具.』

2. Conjunto de cosas preparadas y dispuestas para comer en este mueble.

   『この家具で食事をするために用意された、あるいは置かれた物体の一式.』

3. Comida.『食べ物.』

—SALAMANCA (s.v. mesa)[55]

mesa は日本語の『机、テーブル』にあたるが、荒川(1992)は日本語のこれら 2 つの名詞は

[55] 数字は原文における見出し番号.

異なるものであると認識しており、すなわち「テーブル」は主に何かを置くところであるのに対し、「机」は何かをするところであると述べている. 先に検証した cama と silla は、それぞれのプロトタイプ的な行為を考慮すれば、ヒトがトラジェクターとなりやすい物体である一方で、荒川(1992)が mesa にあたるテーブルや机について述べているように、mesa は主にモノがトラジェクターとなりやすい物体であるといえそうである.

> 「テーブル」と「机」は,（中略）日本語の世界でいうと,「テーブルニ置ク」より「机ニ置ク」の方が, より不自然に感じられるのは筆者だけであろうか。これを意味の上から考えてみると,「テーブル」は, 食事や何かをするところでもあるが, 主に何かを置くところである。それに対し,「机」は物を置くというより何かをする（主として物を読んだり書いたりする）というところに重点がある。（中略）構造からいっても,「テーブル」は, 上の平面だけに用途があるだけだが,「机」は平面もあれば「引き出し」もある。「テーブルニ置ク」にくらべ,「机ニ置ク」がより抵抗がある（と筆者に感じられる）のはそのためであろう。
>
> ―荒川（1992: 84）

荒川(1992)はテーブルのほうが机に比べると平面が際立つものであるため、「テーブルニ置ク」は容認できるものの、「机ニ置ク」は「机ノ上ニ置ク」のように「上」を付加したほうが容認されやすいことを示唆していると思われるが、スペイン語ではテーブルも机も mesa で表され、辞書的定義によれば「何かをするための場所」といえそうである. そして、先の DRAE(2014)および SALAMANCA の記述を確認すると、「食事のために用意されたもの」、あるいは「食べ物」といった「食事をする場所」からメトニミーを通じて拡張した意味が記述されていることから、とりわけ「食事をするための場所」であるといえそうである[56].

4.5.2.3.2. CREA による検証

先の定義を前提として、続いて en la mesa, sobre la mesa, encima de la mesa が用いられている例文を CREA で観察し、どのような場合にこれらの前置詞あるいは前置詞句と共起しやすいのかを考察をおこなう.

I. トラジェクターによって分類した場合の頻度

以下の表 9 は mesa が en, sobre, encima de と共起する件数を CREA で確認し、まとめたものである. España の列は検索対象範囲を España に限定した件数であり、さらに数を絞りこ

[56] DRAE(2014)においても、以下の定義が記述されている.
Comida o alimento que cada día toma una persona.『人が毎日摂る食事. 』―DRAE（2014: s.v. mesa）

むためにジャンルを novela『小説』に設定し、該当件数を novela の列に記載した.

検索語句	España	novela
en la mesa	1215	476
sobre la mesa	1642	764
encima de la mesa	369	149

表 9　la mesa と共起する前置詞(句)の件数

「表面の上」と解釈される場合には en と最も共起しやすいと考えられ、cama や silla と同様に en と共起する頻度のほうが sobre の頻度より高くなると予想されたものの、それとは逆に en に比べて sobre と共起する頻度が高いことが表 9 によって確認できる. 先に観察したようにテーブルと隣接していることが観察される場合には a la mesa が用いられ、en la mesa が共起するよりも自然であるため、en の件数が sobre の件数よりも少ないと考えられる[57]. 続いて、個々の例を観察し、cama や silla と同様にトラジェクターがヒトかモノかで分類した結果を表 10 にまとめた.

	en	sobre	encima de
ヒトが上にある	91	141	7
モノが上にある	197	553	123
ヒトが行為をおこなう	78	34	0
ヒトが隣接	85	0	0
その他[58]	25	36	19
検証した例文数	476	764	149

表 10　検証した例文数とそれぞれの前置詞(句)と共起する名詞による分類(mesa)

表 10 における「ヒトが行為をおこなう」の項目の en la mesa に言及する必要がある. この項目に該当するのは以下の(168)のように、「テーブルの上」にトラジェクターが位置づけられず、行為をおこなう主体がテーブルに隣接しており、そのテーブルの上で行為をおこなっていること

[57] a la mesa に関して、他の検索語句と同様に地域を España、ジャンルを novela に限定して検索すると 467 件が確認された. もちろん移動動詞と共起する例も多いものの、junto a, frente a, en torno a といったイディオムを含む、sentarse や estar と共起して隣接を表す例は約 250 件みられた.

[58] 以下の(i)のように、トラジェクターとランドマークが接触していないと考えられる例や(ii)のようにトラジェクターが具体的なモノでない例などはその他に計上している.

(i) Velázquez apagó con los dedos la llama de la lámpara que pendía sobre la mesa [...]
『ベラスケスは、テーブルの上にかかっているランプの火を指で消した』

(ii) Aquel día el silencio ya no regía en la mesa de los Moraldo.
『あの日、モラルド家の食卓はもう静けさにおおわれていなかった. 』　—CREA

が表されている例である．一方、このような例とは異なり、具体的な行為が明示されていないものの、estar や haber などの所在や存在を表す動詞と共起している(169)の場合、あるいは動詞がなく、前置詞句のみによってヒトが位置づけられている(170)の場合のように、ヒトがテーブルの上ではなく、テーブルに隣接していると解釈される例は「ヒトが隣接」の項目に含めた．さらに、この項目には同じくテーブルとの隣接を表す sentarse と共起する例を加えているが、4.4.2.1.で述べたように、これらの例を観察した限りは(171)のようにヒトがテーブルに向かって座っていることが表されており、テーブルの上に座っている例はほとんど確認されなかった．

(168) Cuando mamá bajó hoy a desayunar ya estaba yo esperándola en la mesa y ni siquiera se acercó para darme un beso como es habitual en ella por las mañanas.

『お母さんは今日朝食を食べに降りてきたとき、私はすでに彼女をテーブルで待っていたが彼女は毎朝するいつものキスさえしなかった．』

(169) Cuando volví a la sala, ¿a que no saben quién estaba en la mesa con Legrand?

『広間に戻ると、テーブルに誰がレグランドといたかわかりますか．』

(170) La joven tímida, gestante y ensimismada en la mesa de la lectora de la emperatriz, es la esposa del médico.

『女帝の読書用のテーブルで、内気で妊娠している物思いにふけった若い女性は医者の妻です．』

(171) Todos los que he entrevistado y que se han sentado con él en la mesa de póquer coinciden en afirmar que Gatopardo jamás cambia el rostro ni en la ganancia ni en la pérdida.

『私がインタビューした、そして彼と一緒にポーカーテーブルに座った全員がガトパルドは勝っていても負けていても決して顔を変えることはないと述べている点は一致している．』

—CREA

このように、mesa は先に観察した cama や silla とは異なり、en と共起する場合にはトラジェクターが「表面の上」に位置づけられることが表されるだけでなく、先の「ヒトが行為をおこなう」、「ヒトが隣接」の 2 つに該当する en のように「隣接」の意味でも用いられる．つまり、en la mesa の場合には「テーブルの上に」と「テーブルに向かって」の 2 つの状況がありうるのである．その一方で、sobre は非接触の場合[59]もありうるものの、「表面の上」が最も基本的な意味であるため、sobre la mesa はもっぱら「テーブルの上に」を表し、この点が en la mesa と大きく異なると考えられる．

[59] たとえば、前注の(i)や(145)．

II. トラジェクターがヒトである場合に共起しやすい動詞

続いて、先の表 10 に基づいてトラジェクターの種類について観察すると、いずれの前置詞あるいは前置詞句についても、ほとんどのトラジェクターがモノであったが、トラジェクターがヒトである例も少なからず観察された. そこで、en, sobre, encima de が用いられている例のうち、ヒト(あるいは身体の一部)がテーブルの上に位置づけられている件数を動詞[60]の意味別に分類し、表 11 にまとめた. なお、inclinarse sobre la mesa『テーブルによりかかる』のように、ヒトがテーブルの上に完全に載らずにテーブルに接触しているような例も対象とし、また動詞がなく、前置詞句が名詞を直接位置づけている場合にはテーブルの上に位置づけられているとみなして、「直接位置づけ」の項目に分類した.

	en	sobre	encima de
(手やひじを)置く	37	37	0
直接位置づけ	7	34	1
もたれる、よりかかる	8	21	1
横になる、寝そべる	5	8	0
倒れこむ	0	11	0
載る	0	1	2
座る	0[61]	1	1
たたく	34	23	0
その他	0	4	0
合計	91	141	7
検証した例文数	476	764	149

表 11　ヒトが mesa の上に位置づけられている場合

総例文数と mesa がヒトと共起する例文数の割合を考慮すると、これまでに観察した cama や silla のようにヒトかモノかで前置詞の選択がおこなわれているとは考えにくい. en についても sobre についても大半の例が以下の(172)～(175)のように「手やひじなどを置く」ことを表している例あるいは前置詞句によって直接位置づけられている例である. このような例において、en と共起している主な動詞は apoyar『支える』(26 件)、acodar『ひじをつく』(4 件)、clavar『固定する』(3 件)であり、そして直接位置づけを表す例は 7 件であった. 一方で、sobre と共起している主な動詞は apoyar(14 件)、poner『置く』(11 件)、reposar『置く』(3 件)であり、直接位置づけに該当するのは 34 件であった.

[60] 過去分詞形および他動詞形も件数に含む.
[61] テーブルの上に座っている例の数を示す.

(172) Amador seguía mirándole, con las palmas de las manos apoyadas sobre la mesa.

『アマドールはテーブルの上に手のひらをおいて、彼を見続けていた.』

(173) Al apartar el plato se manchó mínimamente la manga de Gigli con el borde ensuciado. Ahora tenía los brazos cruzados sobre la mesa, aun así parecía elegante.

『皿をさげるとき、汚れた皿のふちでジリの袖が少し汚れた. ちょうどテーブルの上で腕を組んでいたが、それにもかかわらず華麗に見えた.』

(174) Se encontraba a gusto en aquella media luz de la cocina ordenada y silenciosa, acodado en la mesa de mármol frente a los restos de la merienda.

『彼は片づいた、そして静かな、薄明かりの台所で、残されたおやつを前にして大理石のテーブルの上でひじをついていた.』

(175) Estaba relajado, repantigado en calzoncillos en el salón de su casa, con los pies en la mesa de café y una copa en la mano.

『彼は自宅の居間で、パンツ姿になってテーブルに足を置き、手にグラスを持って、くつろいでいた.』

—CREA

次いで多いのは、(176)や(177)のような、手やこぶしなどでテーブルをたたく行為であるが、こちらも en と sobre では大きな差は認められない. なお、この行為自体はヒトがテーブルの上に位置づけられるものではないが、テーブルに対して身体を使って作用をおよぼすため、分類項目のひとつとしている.

(176) Roberto, impaciente, dio unos golpecitos con la palma de la mano sobre la mesa y llamó a todos al orden.

『ロベルトはいらいらして、テーブルの上を手のひらで数回たたき、全員に静かにするよう求めた.』

(177) La mano cerrada de Francisco de Rioja golpeó en la mesa con los nudillos.

『フランシスコ･デ･リオハは手を握りしめ、関節でテーブルをたたいた.』

—CREA

一方で、これらの分類以外の部分に注目すると、cama や silla と同様に(178)の inclinarse『よりかかる』(20 件)や、apoyarse『もたれる』(1 件)といった動詞、(179)の dormir『眠る』(4 件)をはじめとする、echarse『横になる』(2 件)、tirarse『寝そべる』(1 件)、tenderse『横になる』(1 件)のような「横になる、寝る」にあたる動詞、(180)の volcarse『倒れこむ』(3 件)をはじめとする dejar caer『倒れる』(4 件)、derrumbarse『倒れる』(2 件)、arrojarse『飛びこむ』

（1 件）、lanzarse『飛びこむ』（1 件）のような動詞、そして(181)の sentarse『座る』（1 件）のように、身体がテーブルの上に載る、あるいはもたせかけることを表すような動作の場合には sobre が用いられやすいことが確認された. その一方で、encima de は該当例文数が極端に少なく、後に確認するが、モノがトラジェクターである場合がほとんどであった.

（178） Constanza miraba de soslayo la cabeza del pintor, su melena rojiza, el cuello de la chaqueta de verde terciopelo, la delgada espalda un poco inclinada sobre la mesa.

『コンスタンサは、画家の頭、赤いロングヘア、ビロードの緑のジャケットの首回り、机に少しよりかかったやせた背中をざっと見ていた. 』

（179） El hombre del mostrador depositaba un plato y un tazón humeante bajo mis narices. Me había dormido de bruces sobre la mesa.

『カウンターの男は私の鼻の下に湯気の立つカップとお皿を置いていた. 私はテーブルの上でうつぶせになって寝ていたのだった. 』

（180） En la cocina, Paulina, la televisión a toda pastilla, el vasito de chinchón casi vacío, dormía volcada sobre la mesa, entre los restos de su cena.

『パウリーナは、大音量のテレビ、ほとんど空になったチンチョンのグラスのある台所で、自分の夕食の残りの中に倒れこんで眠っていた. 』

（181） Se trataba de una especie de diminuta sala de espera en la que dos enfermeras y un enfermero tomaban un café; [...]; el enfermero se sentaba sobre la mesa, de espaldas a la cafetera.

『それはとても小さいタイプの待合室であった. そこでは 2 人の女性の看護師と 1 人の男性の看護師がコーヒーを飲んでいた. （中略）その男性の看護士はカフェテリアに背を向けて、テーブルの上に座っていた. 』

—CREA

ここでは mesa に位置づけられるトラジェクターがヒトである場合について en と sobre の比較をおこなったが、en と共起する場合、手や足などのヒトの身体部分が位置づけられる例はみられるものの、ヒトがテーブルの表面に腰かける、あるいは乗りかかるような行為の場合には、en ではなく sobre と共起することを明らかにした.

III. トラジェクターがモノである場合に共起しやすい動詞

続いて、モノがテーブルの上に位置づけられる例を観察し、ヒトの場合と同様に動詞の意味にしたがって分類し、その該当数を表 12 にまとめた. この分類において、明らかにテーブルの中であることが示される例は除外しているが、(182)のようにテーブルの上とも解釈可能な例は数に含めている. もっとも、そのような例はほとんどみられなかった.

(182) –Buscó su pasaporte en la mesa de noche y me lo tendió, abierto por la primera página–.

『彼はナイトテーブルにあるパスポートを取りにいき、その最初のページを広げて私に差し出した.』

—CREA

	en	sobre	encima de
置く	110	322	72
広げる	4	35	4
散らばる	6	12	3
投げる、落とす	7	41	4
ある、いる	28	71	10
直接位置づけ[62]	42	72	30
合計	197	553	123
検証した例文数	476	764	149

表 12　モノが mesa の上に位置づけられている場合

表 12 から、sobre は「置く」にあたる表現と共起しやすいと考えられ、さらに「広げる」、「投げる、落とす」にあたる表現は en よりも sobre のほうが共起しやすいように考えられるものの、en, sobre, encima de の総例文数に差があるため、この見通しが正しいかどうかを検証するために、silla と同様の手法である加重平均を用いて検証した. なお、表中の数値が高いほど高頻度であることを示している.

	en	sobre	encima de
置く	25.42	135.71	34.79
広げる	0.03	1.60	0.11
散らばる	0.08	0.19	0.06
投げる、落とす	0.10	2.20	0.11
ある、いる[63]	10.29	26.77	10.74

表 13　表 12 のデータを用いて加重平均した結果（小数点第 3 位を四捨五入）

表 13 から sobre が「置く」にあたる表現と共起するポイントは 135.71 であり、en の 25.42 や

[62] この項目には(iii)のように動詞ではなく、前置詞が直接名詞を位置づけている例と、(iv)のように、動詞はあるものの、その動詞が「位置づける」という意味内容を有していないものを含んでいる. なお、これらは「ある、いる」とほぼ同義であると考えられる.

(iii) Sin apartar sus ojos de los míos, Fumero le clavó un culatazo al jarrón con flores marchita sobre la mesa.
『フメロは私と目を合わせたまま、しおれた花がささった、テーブルの上の花瓶に銃尾を打ちつけた.』

(iv) El teléfono repicó en la mesa del presidente.　『社長の机の電話が鳴った.』　—CREA

[63] 表 12 の「直接位置づけ」の件数もここに含む.

encima de の 34.79 に比べるとその差は際立っており、先に述べた見通しが正しいように思われる. なお、「置く」についてはどのような動詞が用いられているか観察しながら、さらなる考察を以降の IV でおこなう. 一方で、(183)や(184)にみられる estar や haber のような存在や所在を表す表現と sobre が共起するポイントは 26.77 であり他の 2 つの表現に比べて高いことがみてとれる. これに対して、encima de について観察すると、encima de la mesa の頻度数は低いものの、この結果によれば en よりも「置く」と共起しやすいといえそうである.

(183) El mando a distancia estaba sobre la mesa. Lo cogí y volví para atrás.
『リモコンはテーブルの上にあった. 私はそれを取り、後ろを向いた. 』

(184) Dejadme vuestra dirección, hay papel y bolígrafo en la mesa.
『君たちの住所を書いておいて. テーブルの上に紙とボールペンがあるから. 』

—CREA

また、ヒトと共起しやすい場合と同じように、(185)や(186)の caer, arrojar に加え、echar, tirar, lanzar, escupir のような「投げる、落とす」にあたる動詞と共起する sobre のポイントは 2.20 であり、en の 0.10、そして encima de の 0.11 に比べて高いことも注目に値する. ここで、mesa は「置くためのもの」ではなく、「何らかの行為、特に食事をするためのもの」であるという百科事典的知識を考慮すると、「置く」行為や「投げる、落とす」行為は mesa に対する非プロトタイプ行為であると考えられるため、「置く」行為は en よりも sobre や encima de と共起しやすいといえそうである. しかしながら、「置く」にあたる動詞が en と共起する頻度も高いと考えられるため、次の IV では共起するトラジェクターに注目して考察をおこなう.

(185) Volvieron a eso del mediodía, para la hora de comer, con un pez magnífico, de color naranja, un pez que no se había visto nunca. El capitán Varela lo llevó a la cocina, cogido por la cola, y lo dejó caer sobre la mesa de mármol, donde hizo un ruido de cachete.
『彼らは、これまで見たことのないオレンジ色のすばらしい魚を持って、正午、昼食の時間に間に合うように戻ってきた. 船長のバレラはそれを台所までしっぽをつかんで持っていき、大理石のテーブルの上に落として、殴るような音をたてた. 』

(186) El comisario encendió un cigarrillo y arrojó el paquete sobre la mesa por si yo quería fumar.
『警察官はタバコに火をつけ、私が吸うかもしれないと思い、テーブルの上にパッケージを投げた. 』

—CREA

続いて、具体的に動詞を観察すると、en, sobre, encima de のそれぞれと共起している主な「置く」にあたる動詞は dejar【34/148/26】[64]、poner【17/50/19】、colocar【11/30/3】、depositar【14/30/2】、tener【11/29/13】であり、en, sobre, encima de のいずれの表現に対しても dejar は共起しやすい動詞であることが見受けられる.(187)～(189)は dejar が共起している例であるが、先にあげた以外の動詞には posar, descansar, reposar, descargar, centrar, situar, disponer, ordenar, distribuir, abandonar が確認された.

(187) Serena se puso en pie; dejó el libro sobre la mesa.

『セレナは立ち上がった. そして、本をテーブルの上に置いた. 』

(188) El camarero dejó la botella en la mesa. La madre de Juan dijo que sirviera el vino.

『ウェイターはビンをテーブルに置いた. フアンの母親はワインを注ぐよう言った. 』

(189) Al volver le dijo a Lucrecia que había mucha gente que deseaba engañarlo, y sacó la pistola, la dejó encima de la mesa, [...]

『彼は戻るとルクレシアに、彼をだましたがっている人がたくさんいると言い、ピストルを取り出して、それをテーブルの上に置いた』

—CREA

そして「置く」モノに注目すると、sobre の場合には(190)の montón de telegramas『大量の電報』のような積まれたモノ、また(191)の dos gruesos fajos de dinero『2 つの分厚い札束』のような束になったモノが散見された. このような名詞は en ではほとんど確認されなかった.

(190) La secretaria, una joven y esbelta negra, pasó al despacho del Presidente y le dejó sobre la mesa otro montón de telegramas.

『若くてほっそりとした黒人の秘書は社長室に行き、別の大量の電報を社長の机に置いた. 』

(191) Al cabo de una semana, Pati les dijo feliz Navidad -era mediados de marzo- y puso sobre la mesa, junto a la bolsa de la Skorpion, dos gruesos fajos de dinero.

『1 週間後、パティは彼らにメリークリスマスといい—3 月の半ばだったが—、そしてテーブルの上のスコルピオンの袋のそばに 2 つの分厚い札束を置いた. 』

—CREA

これに関連して、(192)～(194)のような「広げる」そして「散らばる」といった、ある程度広い範囲に作用がおよぶ動詞についても、ほかの例に比べて頻度は低いものの、sobre が en や

[64]【 】内の数字は en, sobre, encima de と共起している例の数をこの順序で記載したものである.

encima de よりも共起しやすいことが表 12 と表 13 から読みとれる. つまり、「置く」モノでも、高さあるいは広さを有するととらえられる比較的大きなモノは sobre と共起しやすいと考えられるわけである. なお、「広げる」にあたる動詞には extender, abrir のほかに desplegar, tender, alisar, vaciar, desdoblar があった一方、「散らばる」にあたる動詞には、derramar のほかに verter, volcar, esparcir があった.

(192) Extendieron las maletas sobre la mesa: faldas de tweed, jerséis y chaquetas de Cachemira, ropa interior de encaje, blusas de seda francesas e italianas, zapatos de marca [...]

『彼らはテーブルの上にスーツケースを広げた. ツイードのスカート、カシミヤのセーターと上着、レースの下着、フランス製とイタリア製のシルクのブラウス、ブランドの靴』

(193) Mi padre se encogió de hombros acostumbrado a estos desplantes, se sentó y abrió sobre la mesa su periódico gigante.

『このような態度に慣れた私の父は肩をすくめ、席につき、大きな新聞をテーブルの上に広げた. 』

(194) Ha enjugado una gota derramada sobre la mesa, mientras se llevaba un dedo sobre los labios, indicando silencio.

『彼はテーブルの上にこぼれた水滴をふきとりながら、静かにするようにと指を唇の上にもっていった. 』

—CREA

IV. 「置く」にあたる動詞と用いられやすい名詞

ここまで、mesa が sobre と共起しやすい場合について考察をおこなったが、それによれば cama や silla と同様に、テーブルに対して「投げる」、「落とす」、また「比較的大きなモノを置く」、「モノを並べるなどして広げる」といった非プロトタイプ的な行為をおこなう場合には sobre が用いられるといえそうである. しかしながら、「置く」は sobre や encima de だけではなく、en も比較的共起しやすい点について考察をおこなう必要がある. そこで、置かれているモノ、すなわちトラジェクターが「食事に関係のある名詞」であるかどうかで分類をおこなった. というのも、mesa は食事をするために主に利用されるものであることからメトニミー的意味が拡張した結果、mesa は「食事」を表すことが可能であることに加え、mesa を用いた表現のなかには poner la mesa『食卓の用意をする』あるいは ¡A la mesa!『ご飯だよ！』といった食事に関連する表現が多くみられるためである. したがって、「置く」行為が非プロトタイプ的な行為であったとしても、テーブルの上に載せるモノが食事に関連するものであれば、それはテーブルの上に置かれるものとしてふさわしいものであると述べることが可能である.

検証する例文は、先にあげた「置く」にあたる 5 つの主な動詞が用いられている文に限定し、

食事に関連する名詞が共起している件数を調べ、その数を表 14 にまとめた. なお、ここでいう食事に関連する名詞とは(195)にあるような飲食物だけではなく、(196)にあげた bandeja『トレイ』を含む vaso『コップ』、plato『皿』、cubierto『カトラリー』などの食器を指す.

(195) En tu mesilla siempre había muchas medicinas y en la mesa te ponían una comida especial y había que tener cuidado de no despertarte cuando al fin te quedabas dormida a la hora de la siesta -hizo una pausa, miró al fondo de la taza-.

『ナイトテーブルにはいつもたくさんの薬があり、テーブルには特別な食事が置かれ、昼寝の時間に眠ってしまったときには君を目覚めさせないように気をつけなければならなかった、と彼は話を止めて、カップの底を見た. 』

(196) Luego puso los platos y los cubiertos en la mesa de mármol de la cocina y se dispusieron a comer.

『そのあと、彼は大理石のダイニングテーブルにお皿とカトラリーを置き、食事をしようとした. 』

—CREA

	en	sobre	encima de
「置く」と共起する件数	91	287	63
食事に関する名詞と共起している件数	43	51	10

表 14　各前置詞(句)が食事に関する名詞と共起している件数

表 14 より、sobre は en よりもずっと「置く」動詞と共起しやすいものの、「置く」と共起する例文数に対する食事に関する名詞がトラジェクターである割合を加味すると、en のほうが食事に関する名詞と共起しやすいようである. したがって、en と共起する場合には、特に(195)にみられるような「食事をすること」が表される傾向があるといえそうである. その一方で、sobre および encima de と共起するトラジェクターの種類は en に比べて多岐にわたり、sobre や encima de と共起する mesa は「モノを置く場所」ととらえられていると考えられる.

V. CREA による検証のまとめ

以上、mesa について検証をおこなったが、mesa と、それと共起する en, sobre, encima de に関する考察をまとめると、まず mesa は cama と silla とは異なり、en と共起することで「隣接」の意味で用いられ、その平面に何かを位置づける行為だけでなく、会話や食事といった行為をおこなうことが表される. ただし、この意味で用いられる際、mesa は 4.4.2.1.で述べたように en

la mesa よりも a la mesa で表すほうが自然である. 一方で、トラジェクターが mesa の上に位置づけられる場合には a で表すことができないため、en あるいは sobre で表す必要があるが、トラジェクターがヒトかモノのどちらで位置づけられやすいのかを観察すると、en, sobre, encima de いずれの表現についてもヒトよりもモノと共起しやすい. そして、この場合、いずれの前置詞あるいは前置詞句も dejar や poner などの「置く」にあたる動詞と共起しやすいことが明らかになったが、トラジェクターに注目すると en の場合には食事に関連するモノが置かれることが多く、sobre や encima de はその用途、目的に限らずさまざまなモノが置かれる傾向がある. また、置き方についても「積み上げる」、「広げる」場合には sobre や encima de と共起する傾向が観察され、さらに、「投げる」、「落とす」といった「置く」以外の動作について観察すると sobre や encima de と共起する頻度が高い. その一方で、テーブルの上にヒトが位置づけられる場合、つまり「もたれる」、「寝そべる」、「倒れこむ」といった行為の場合には、主に sobre の頻度が高いことが明らかになった. したがって、mesa についても、mesa に対する行為がプロトタイプ的である場合には en と共起しやすく、そうではない場合には sobre あるいは encima de が用いられやすいといえそうである.

4.5.2.4. suelo

4.5.2.4.1. 定義

最後に、suelo『床、地面』を観察するが、この語は DRAE(2014)や SALAMANCA では以下のように定義されており、これまでの名詞とは異なって、suelo は単なる平面であり、特定の用途が想定されないものと思われる. つまり、テーブルにも平面があるが、その平面には用途性があるという点で床の平面とは異なるということである. 日本語でも、荒川(1992)が指摘しているように、ベッド、椅子、机に比べて床はずっと平面的なものであるといわれており、このような名詞の場合に前置詞の選択がどのようにおこなわれるのか考察をおこなう. なお、この検証において床と地面は特に区別しないこととする.

1. Superficie terrestre.『陸の表面. 』
5. Superficie artificial que se hace para que el piso esté sólido y llano.
   『面がしっかりとした平らになるように作られた人工的な表面. 』

—DRAE (2014: s.v. suelo)[65]

[65] 数字は原文における見出し番号.

1. Superficie de la corteza terrestre.『地殻の表面.』

2. Superficie cubierta con un material resistente para poder pisar.
『踏むことができるように丈夫な素材で覆われた表面.』

—SALAMANCA (s.v. suelo)

4.5.2.4.2. CREA による検証

これまで検証した名詞と同様に、まず CREA で suelo が en, sobre, encima de と共起する件数を調べた. 表 15 の España の列は検索対象範囲を España に限定した件数であるが、さらに数を絞りこむためにジャンルを novela に設定し、該当件数を novela の列に記載した.

検索語句	España	novela
en el suelo	2950	1174
sobre el suelo	306	88
encima del suelo	13	5

表 15　el suelo と共起する前置詞(句)の件数

suelo の場合には en と比べて、sobre および encima de と共起する頻度が低いことが際立っているが、これはおそらく、suelo 自体が平面であること、そして、これまでの名詞のように特定の用途が想定されないことが要因となり、sobre や encima de によって交替させる必要がないためであると思われる. 実際に sobre el suelo が含まれる例文を観察すると、(197)のように「土地に対して」や(198)のように「地面から離れて」のように、en と交替可能である接触の意味では用いられないことが多く、「床の上、地面の上」の意味ではもっぱら en が用いられると考えられる.

(197) En este sentido, el ministro de Obras Públicas y Urbanismo anunció hace aproximadamente un mes que se aumentarían considerablemente los impuestos sobre el suelo con el fin de que los propietarios se vieran forzados a desprenderse de él.
『この意味で、公共事業・都市開発大臣は約 1 ヵ月前に、所有者たちにその土地を放棄させることを目的として、その土地に対してかなりの額の増税をおこなうことを発表した.』

(198) Una piedra situada a cierta altura sobre el suelo posee energía mecánica. Sin embargo, cuando la soltamos, cae y termina en el suelo, quieta.
『地面からある程度の高さにある石は力学エネルギーを有している. しかしながら、それを離すと、落ちて地面までいき、止まる.』

—CREA

続いて、個々の例を観察し、cama, silla, mesa と同様にトラジェクターがヒトかモノかで分類し、その結果を表 16 にまとめた. なお、ヒトには手や脚などの身体の一部を含んでいる. また、encima de は例の数が極端に少ないため、suelo については encima de の検証を控える.

	en	sobre
ヒト	110	48
モノ	116	20
その他[66]	27	20
検証した例文数	253[67]	88

表 16　検証した例文数とそれぞれの前置詞(句)と共起する名詞による分類(suelo)

表 16 を観察すると、まず en に関してはトラジェクターがヒトかモノかでは目立った差は確認できない. 一方、sobre について観察すると、ヒトと共起する割合がモノに対して高いものの、本来の en の出現数を考慮すると en がヒトと共起しにくいわけでないため、これまでの名詞のようにヒトと共起する場合には sobre と共起しやすいとはいいがたい.

次に、モノの場合とヒトの場合のそれぞれにおいて、共起する動詞や表現を mesa のときと同様に意味ごとに分類し、表 17 にまとめた.

[66] mesa のときと同様、先の(i)のように、トラジェクターとランドマークが接触していないと考えられる例や(v)のようにトラジェクターが明確でない、あるいは具体的なモノでない例などはその他に計上している. さらに、en については(vi)の empotrar のように、動詞が「内部」のニュアンスを有し、en が「表面の上」を表していないものも含んでいる.

(v) Desde la terraza veo las piedras, el árbol, la tapia y veo la sombra del árbol doblada sobre el suelo y la tapia.
『私はベランダから石と木と土塀を見て、地面と土塀の上で木陰が曲がっているのを見ている. 』

(vi) –Abrió la pequeña caja fuerte empotrada en el suelo y oculta bajo unas tablas al lado mismo de su mesa; [...]
『彼のテーブルのちょうど横に数枚の板で隠された、床に埋めこまれた小さな金庫を開けた. 』—CREA

[67] Filtros を Casos にし、Ratio に 4 を入れることで合計件数の約 4 分の 1の用例を抽出した.

	en	sobre
置く	35	3
直接位置づけ[68]	28	3
広げる、散らばる	18	5
ある、いる	13	1
投げる、落とす	11	4
その他	11	4
合計	116	20

表 17　モノが suelo に位置づけられている場合

表 17 を観察すると、前置詞によって特定の意味と共起しやすい傾向が見受けられない. ただし、主にモノを位置づける mesa とは異なり、(199)の dejar(13 件)をはじめとした、poner(5 件)、depositar(4 件)、posar(4 件)、colocar(3 件)などといった「置く」にあたる動詞と共起する場合には en が用いられやすいといえそうである. 加えて、(200)の extender(7 件)や desplegar(3 件)、abrir(3 件)などの「広げる、散らばる」にあたる動詞とも共起する傾向があることが確認された. このような動詞に対して、先の mesa は sobre と共起しやすいことが確認されたが、suelo の場合には en でも sobre でも大きな差は認められない. つまり、動詞が前置詞を選択しているのではなく、名詞が前置詞を選択しているということのひとつの裏づけになると考えられる.

(199) Dejé la impedimenta en el suelo y mientras buscaba el mechero hasta el último bolsillo ella dijo:

『私は床に荷物を置いて、最後のポケットの中までライターを探している間に、彼女に次のように言った. 』

(200) Se veían manteles extendidos en el suelo, restos de comida, botellas de vino.

『地面に広げられた敷きものには、食べ物の残りやワインのビンがあった. 』

—CREA

最後に、suelo のトラジェクターがヒトである場合に共起する表現を、モノの場合と同じように意味ごとに分類して表 18 にまとめた.

[68] この項目には(vii)のように動詞ではなく、前置詞が直接名詞を位置づけている例を含めている.

(vii) Salió a una especie de almacén color cemento con el techo bajo y vio su maleta allí en el suelo.
『彼はコンクリートの色をした、天井の低いある種の倉庫へ出かけ、そこで彼のスーツケースが床にあるのを見た. 』 —CREA

	en	sobre
座る	29	4
横になる、眠る	20	6
立つ、支える	15	10
いる、ある	13	1
転ぶ、倒れる	9	10
たたく	4	1
置く	2	0
かがむ、しゃがむ	0	2
ひざまずく	2	5
その他	16	9
合計	110	48

表 18　ヒトが suelo に位置づけられている場合

表 18 から観察できるように、モノの場合と同様 en と sobre では動詞の意味において、大きな差異は見受けられない．まず en に注目すると、ヒトがトラジェクターの場合には(201)のような sentarse を主とする「座る」にあたる表現と共起する例が多く、次いで、(202)のような「横になる、眠る」にあたる表現、そして(203)のような「立つ、支える」にあたる表現と共起する傾向があることがわかる．

(201) Los niños, sentados en el suelo, jugaban una partida de damas.
『子どもたちは、床に座ってチェッカーをしていた．』

(202) Para aguantar las lágrimas, se echó en el suelo, mirando para el techo y esforzándose en seguir las notas del piano, que trataba de situar mentalmente en un pentagrama imaginario.
『涙をこらえるために、彼は床に横たわり、天井を見ながら、ピアノの音を追うように努め、架空の五線譜に頭の中で音を配置した．』

(203) Cuando el individuo puso los pies en el suelo, resbaló y se cayó sentado.
『その人が床の上に立つと、滑って尻もちをついた．』

—CREA

一方、(204)の de rodillas や(205)の arrodillar といった「ひざまずく」にあたる表現と共起する場合には en よりも sobre のほうが共起しやすいようにみえるものの、例の総数が少ないため、例を提示し、指摘するのみにとどめる．

(204) De rodillas sobre el suelo, palpó su vestido desgarrado y notó entre el refajo la pipa de Bambú.

『彼女は床にひざまずいて、引き裂かれた自分の衣服を手で触れると、スカートの間に竹製のパイプがあることに気がついた．』

(205) Christopher se arrodilló sobre el suelo, después se curvó y arañándose las rodillas empezó a gemir.

『クリストファーは床の上にひざまずき、前かがみになってひざをひっかくとうめき始めた．』

—CREA

以上が、suelo に関する考察であるが、cama や silla とは異なり、suelo の場合には en と共起する例の数が sobre に比べて著しく多いことがコーパスによって明らかになった．そして、トラジェクターをモノかヒトかで分類すると、en については総数の半分がヒト、半分がモノと分類された一方、sobre についてはモノよりもヒトのほうが共起しやすいことが観察された．しかしながら、モノにおいてもヒトにおいても共起する動詞の意味ごとで観察したものの、en と sobre の間に大きな差異は認められなかった．これは suelo が mesa などとは異なり、特定の用途が想定されるものではなく、トラジェクターがモノであれヒトであれ、プロトタイプ的な行為と非プロトタイプ的な行為を差異化する必要がないためであると思われる．言い換えれば、suelo は mesa, silla, cama に比べて、その名詞に対するプロトタイプ的な行為が見いだしにくいということである．このことは日本語の「地面の上に座る」と「地面に座る」、「床に座る」と「床の上に座る」のそれぞれのペアにおいても差がみられないことと関連があるように思われる．この考察によって、en と sobre の間に意味的差異がないというよりはむしろ、同じ動詞が用いられているにもかかわらず、共起する名詞によって en と共起しやすい名詞と sobre と共起しやすい名詞がみられることから、動詞ではなく、共起する名詞が前置詞の選択に大きな影響をおよぼす場合もあると考えられる．

4.5.3. en/sobre と sobre/encima de

先の 4.5.2 では CREA を利用して、主に en と sobre の意味的差異について考察をおこなった．この考察から得られた en と sobre の意味的差異は、先行研究である Cifuentes Honrubia (1996)および Moreno y Tuts(1998)における sobre と encima de の対立と同じような関係を示すことが明らかになった．つまり先行研究ではトラジェクターとランドマークがひとつのまとまりとみなされれば sobre が、そうでなければ encima de が用いられると主張されている．しかしながら、en と sobre の差異については言及されていなかったため、本論文ではこの 2 つの前置詞の意味的差異を明らかにした．en と sobre、sobre と encima de というそれぞれの対立をみた場合、それぞれの前者はトラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている

のに対し、後者は非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合に用いられやすいといえそうである. そこで、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている en と sobre の差について考察するために、それぞれのランドマークの特徴を観察すると、本論文で選択したランドマーク cama, silla, mesa, suelo は平面的なモノが多い一方で、Cifuentes Honrubia(1996)および Moreno y Tuts(1998)が例にあげていたランドマークは hombro『肩』、papel『紙』、arena『砂』、tumba『墓』、caballo『馬』のように、先の 4 つの名詞に比べて平面的というよりもモノ的であることがわかる. ひとつの仮説として考えられるのは、ランドマークが平面的であればランドマークは en と共起しやすく、モノ的である場合には sobre と共起しやすいということである. 名詞がモノ的か平面的かという分類は日本語において荒川(1992)がおこなっている考察であり、そのなかで動詞「置く」を使って以下の表 19 にあげられた名詞の平面性を調べており、この表の上に位置する名詞のように平面的であれば自然に共起する一方で、表の下のほうにいくにつれて名詞はモノ的になっていき、「置く」との共起が不自然になると述べている[69].

棚、本棚、床	平面的
ベッド、テーブル	↓
机	
タタミ、座布団	
まな板、お皿	
本、雑誌、ノート	モノ的

表 19 平面的な名詞とモノ的な名詞[70]

たとえば、(206a)はモノ的である「本」が「置く」と共起している例であり、荒川(1992)はこの例を不自然であるとしている. しかし、(206b)のように「上に」をつけてトコロ化することで容認されると述べている.

(206a) *本ニ物ヲ置ク

(206b) 本ノ上ニ物ヲ置ク　　—荒川 (1992: 84–85)

これに基づいて、あらためて Moreno y Tuts(1998)および Cifuentes Honrubia(1996)が sobre と encima de の考察であげていた例を再掲した(207)～(211)を確認すると、例文にあげ

[69] 荒川(1992)はこの平面性を『トコロ(平面)性』と表しているが、ここでは「平面性」という呼称に統一する.
[70] 荒川(1992: 84)の表 II に基づいて作成. 一部表記を筆者により変更している.

られているランドマークは hombro(s), papel(es), arena, tumba, caballo であり、4.5.2.において検証した cama, silla, mesa, suelo に比べてモノ的なものが多いと思われる.

(207) Me puse una capa sobre/ encima de los hombros. (=(149))

(208) Pon algo sobre/ encima de los papeles o se volarán. (=(150))

(209) Está tumbado sobre/ encima de la arena. (=(153a), (153b))

(210) Pondré flores sobre/ encima tu tumba. (=(154a), (154b))

(211) Cabalgar sobre el/ encima del caballo. (=(155a), (155b))

そこで、先にあげたモノ的と考えられる名詞から hombro(s), tumba, caballo を選択し、CREA を用いて、ランドマークが平面的かモノ的かによって前置詞の選択がおこなわれるかどうかを考察する.

はじめに hombro(s)について、en los hombros および sobre los hombros の出現数を CREA で調べると、前者は 114 件、後者は 266 件確認された. さらに(207)と同様の例、つまり『ケープを羽織る』のように服飾品を肩にかけている例に限定すると、en が hombros と共起している例は(212)をはじめとして 6 件みられたのに対し、(213)および(214)のように sobre が共起している例は 94 件みられた. したがって、hombro(s)に服飾品をかける場合には en よりも sobre が共起しやすいといえそうであり、Moreno y Tuts(1998)の主張がさらに裏づけられた.

(212) Doña Gloria estaba sentada en un sillón de orejas, con un chal en los hombros y envuelta en una manta blanca desde la cintura hasta los pies.

『グロリア夫人は、ショールを肩にかけ、腰から足にかけて白いマントにくるまり、そでいすに座っていた. 』

(213) Se volvió a colocar la chaqueta sobre los hombros y pasó las manos por los cabellos para alisarlos repetidas veces.

『彼女はジャケットを再び肩にかけて、手ぐしを入れて何度も髪をとかした. 』

(214) Un poco más lejos, erguido en el bordillo, con la trinchera sobre los hombros y las manos en los bolsillos del pantalón, el inspector Galván observa a distancia el trajín de las mujeres, la pelirroja entre ellas, en torno a los tenderetes de ropa barata para niños.

『少し遠くで、縁石に立って、肩にトレンチコートをかけて、両手をズボンのポケットに入れているガルバン警部は遠くから、安い子ども服の露店の周りにいる女性たち、そのなかでも赤い髪の女性の動きを観察している. 』

—CREA

続いて、tumba についても hombro(s)と同様に、en la tumba および sobre la tumba の出現数を調べると、前者は 95 件、後者は 41 件みられ、件数のみに注目すれば、en のほうが tumba と共起しやすいように感じられる. しかしながら、(215)のように墓の上に何かを置いていることを表している例のうち、en が tumba と共起している例は 9 件であったのに対し、sobre が tumba と共起している例は 17 件で、わずかな差異ではあるものの、tumba の上に何かを置く場合には sobre と共起しやすいといえそうである. なお、置かれているものは en も sobre も(215)～(217)にみられるように花あるいは花でできたものが多く、また sobre については(218)のように lápida『墓石、墓碑』と共起している例もみられ、Cifuentes Honrubia(1996)が述べるように、トラジェクターとランドマークがひとつのまとまりを表す場合には sobre が用いられやすいようである.

(215) Después de que lo mataran, ellas iban muy compungidas a ponerle flores en la tumba, por su santo.

『彼女たちは彼を殺したあと、とても悔やんで彼の守護聖人の日にお墓に花を供えに行ったものだった. 』

(216) Al salir la comitiva regia después de la boda, la princesa se apartó por unos momentos del lado de su marido y, quitándose el "bouquet" de blancas gardenias que llevaba, lo depositó sobre la tumba del Soldado Desconocido.

『結婚式のあと、王の随行者が出ていくと、王女はしばらくの間夫から離れ、身につけていたクチナシのブーケを無名戦士の墓の上に置いた. 』

(217) Y allí, en aquel cementerio, Ifigenia pondrá flores sobre la tumba de su padre, y llorará un rato, porque las penas son hondas y requieren de infinidad de pañuelos.

『そして、あの墓地でイフィヘニアは父親の墓の上に花を置き、しばらく泣くだろう. というのも、ハンカチが何枚あっても足りないほど悲しみが深いものであるからだ. 』

(218) Por otra parte, hace unos días, la lápida colocada sobre la tumba de Gregorio Ordóñez ha vuelto a ser destrozada por desconocidos.

『他方では、数日前にグレゴリオ･オルドニェスの墓の上に置かれていた墓碑が何者かによって再び破壊された. 』

—CREA

最後に、caballo についても en el caballo と sobre el caballo のそれぞれを CREA で検索し、出現数を確認すると、前者は 85 件が該当したのに対し、後者は 12 件が該当した. そして、馬に乗っていることが表されている例文のなかで、(219)のように en と共起する例は 8 件であったのに対し、(220)のように sobre と共起する例は 2 件であった. caballo の場合は先の 2 つの名

詞に比べて例が少ないが、これは「馬に乗る」にあたるイディオムである a caballo があるため、そして en や sobre が共起する場合には以下の例文でもみられるように caballo が de Octavio などの修飾語で限定される必要があるためであると思われる. いずれにしても、本論文では caballo が en と共起しやすいのか、あるいは sobre と共起しやすいのかについては判断を控える.

(219) Hacia las ocho de la mañana llegaron los de los caballos con Octavio y Soledad montados en el caballo de Octavio.

『朝 8 時ごろ、馬に乗っていった人たちが、オクタビオの馬に乗ったオクタビオとソレダードと一緒に到着した. 』

(220) Cayetano Martínez de Irujo, el jinete que cabalgará sobre el caballo "Madrid" si se clasifica para los Juegos Olímpicos, afirma que sería una pena tener que vender el animal tras los juegos de Atlanta.

『もしアトランタオリンピックに出場することになれば、「マドリード」という名の馬に乗る予定の騎手、カジェタノ･マルティネス･デ･イルホは、オリンピックの後に馬を売らなければならないのは残念なことであると述べている. 』

—CREA

以上、hombro(s), tumba, caballo について CREA を用いて考察したが、検証した名詞は少ないものの、caballo を除く 2 つの名詞に関しては「モノを載せる」ことを表す場合、en よりも sobre が共起しやすいといえそうである. したがって、このことから mesa, silla, cama といった平面的なモノとは en が共起しやすく、hombro や tumba のような平面が意識されないモノ的な名詞とは sobre が共起しやすいといえそうである.

4.5.4. en と sobre の意味的差異

本節では前置詞 en, sobre そして前置詞句 encima de が類義として用いられる場合に、そのランドマークである名詞に対する百科事典的知識によって、どの前置詞あるいは前置詞句が選択されるのか考察をおこなった. この考察にあたり、仮説として en はその名詞に対する百科事典的知識に基づいたプロトタイプ的な行為と共起し、sobre および encima de は非プロトタイプ的な行為と共起することを提示したが、これは本多(2013: 112)の『「～の上」のほうが単に可能なだけの行為に結びつきやすく、ただの「～」のほうがそのモノにふさわしい行為と結びつきやすい』という記述と、sobre は en よりも「上」の概念が際立つという先行研究の記述を合わせて立てたものである.

この仮説を検証するために cama, silla, mesa, suelo の 4 つの名詞を選択し、CREA を用い

ながら考察をおこなった. その結果、まず cama, silla についてはこれらの名詞に対する百科事典的知識によって、ヒトがトラジェクターの場合には en と共起しやすいといえる. そして、たとえば cama であれば、「眠る」や「横たわる」のような cama に対するプロトタイプ的な行為に対して en と共起しやすい一方で、「立つ」や「跳ぶ」といった非プロトタイプ的と思われる行為に対しては en よりも、sobre や encima de と共起する例が確認された. また、トラジェクターがヒトであってもその名詞に対して非プロトタイプ的な行為をおこなう場合、さらにトラジェクターがモノの場合には sobre あるいは encima de と共起しやすいと思われる.

続いて、mesa を観察したが、この名詞は平面の上だけではなく、その周りにヒトが位置づけられる性質を有するものであるため、前置詞の選択に en, sobre, encima de だけではなく a が加えられ、「隣接」を表す場合にはもっぱら a と共起しやすいといえる. また、a と共起する場合には 4.4.2.1.でも述べたようにテーブルの上で何か行為をおこなうことが示唆されるが、これは mesa のプロトタイプ的な行為に合致する. そして a la mesa だけではなく、en la mesa も同様に「隣接」を表すことが可能であることは先行研究においても指摘されていたが、この意味が表れるのはトラジェクターがヒトである場合がほとんどであり、「もたれる」、「寝そべる」、「倒れこむ」のように表面の上にヒトが位置づけられる場合には、sobre と共起しやすいことが明らかになった. 一方で、トラジェクターがモノの場合には en でも sobre でも共起しやすいが、mesa が食事をする場所であるという百科事典的知識によって、食事に関連するモノがトラジェクターである場合には en と共起することが多いのに対して、トラジェクターが食事にかかわるモノのみならず多岐に渡る場合には、sobre と共起しやすい. また置き方について注目すると、「積み上げる」あるいは「広げる」ことを表す動詞が用いられる場合には sobre と共起しやすいことが明らかになった. したがって、mesa についても mesa に対する行為がプロトタイプ的であれば en と共起しやすく、そうでない場合は sobre あるいは encima de と共起する傾向があると考えられる.

最後に検証した suelo については、CREA で検索すると en が sobre に対してずっと共起しやすいことが明らかになったが、これはこの名詞が先の 3 つの名詞に比べてより平面的で、特定の用途が想定されず、プロトタイプ的な行為が明確でないためであると考えられる. そのため、トラジェクターがヒトかモノかによって分類して観察しても際立った差異はみられず、また共起する動詞の種類に注目しても差異はみられなかった. このことによって、en と sobre の差異は認められないととらえることは可能であるものの、同じ動詞が用いられているにもかかわらず共起する名詞によって選択される前置詞あるいは前置詞句の頻度にばらつきがみられることから、前置詞の選択要因は動詞だけではなく、名詞の百科事典的知識も前置詞の選択要因になりうるとい

う根拠を提示することが可能である.

そして最後に、本論文でとりあげた名詞と Moreno y Tuts(1998)および Cifuentes Honrubia(1996)が考察をおこなっている名詞を比較し、平面的な名詞とモノ的な名詞で共起しやすい前置詞が変化することを指摘した. 具体的には、ランドマークが平面的で、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合、ランドマークは en と共起しやすい一方、非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合は sobre が共起しやすい. その一方で、ランドマークがモノ的で、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合、ランドマークは sobre が共起しやすく、非プロトタイプ的である場合には encima de が共起しやすい. このことから、前置詞の選択は動詞によって決定されるとは限らず、ランドマークの形状が大きく影響することもあるといえそうである.

4.6. en と dentro de

本節では、前置詞 en が「内部」を表す場合に交替可能とされる前置詞句 dentro de の意味を en と比較考察する. sobre と「表面の上」を表す en の関係と同じように、これら 2 つの表現に関しても、en が「内部」を表す場合には dentro de と意味的に等価であるといわれている. (221a)と(221b)がその例であり、共起する名詞が 3 次元である場合には、en も dentro de も「内部」の意味で解釈されると考えられる. その一方で、(222a)および(222b)では、冷蔵庫は 3 次元のものであるものの、(222a)の en は「内部」ではなく「表面の上」と解釈されるのが自然である. これは、メモは冷蔵庫の中に入れるものではなくむしろ、冷蔵庫の扉にマグネットなどで貼りつけるものであるというメモと冷蔵庫それぞれの百科事典的知識がはたらくと考えられるためである. それに対して、dentro de は en よりも空間的範囲が制限されて「内部」を表すため、(222b)ではメモが冷蔵庫の中にあることが示される. このように、共起する名詞の性質によって en の意味が変化するのはどのような場合なのか、dentro de と比較しながら考察をおこなう[71].

(221a) La canica está en la caja. 『ビー玉は箱の中にある. 』 (=(1))

(221b) La canica está dentro de la caja. 『ビー玉は箱の中にある. 』 (=(4))

(222a) La nota está en la nevera. 『メモは冷蔵庫(の扉)にある. 』

(222b) La nota está dentro de la nevera. 『メモは冷蔵庫の中にある. 』

[71] 「～の中」にあたる語句にはたとえば en el interior de もあるが、以降の先行研究を観察すると確認されるように en の類義語としてこの語句と比較している研究はなく、もっぱら dentro de と比較している. そのため、本論文でも en と dentro de の比較考察を中心におこなう.

4.6.1. 先行研究

まず最初に en と dentro de の差異について触れられている先行研究の記述を確認する. Cerrolaza Gili(2005)は(223)をあげながら、en と dentro de は「内部」を表すことが可能であるものの、en が持つ意味の範囲が dentro de よりも広いことから、「内部」であることを際立たせるためには dentro de を用いるとよいと述べている.

> Se expresa la misma idea, pero con Dentro de se insiste en explicar que la posición es interior y no otra. Si no se quiere hacer esa insistencia, se utiliza más frecuentemente En.
>
> 『en と dentro de は同じ概念を表すが、dentro de はその位置が内部であり、外部ではないことを意味する. もし、それを言及する必要がなければ、en のほうが頻繁に用いられる. 』

(223) Los informes están en mi cartera, pero dentro de la cartera.

『報告書は書類カバンにあるが、その中に入っている. 』

—Cerrolaza Gili (2005: 111)

(223)を Los informes están en mi cartera と表すにとどめ、pero 以下を省略すると、この文は 2 つの解釈が可能となる. すなわち、1 つは報告書が書類カバンの外側にあり、かつそのカバンの上にあるという解釈、もう 1 つは報告書が書類カバンの内部にあるという解釈である. そのため、(223)では pero 以下で dentro de を用いることで、後者の意味であることが明確にされる.

そして、Pavón Lucero(1999)も以下のように、dentro de と en が交替すると意味が異なる場合があることを述べている. Pavón Lucero(1999)は、dentro del armario と en el armario は意味的に等価であると述べている一方で、en Madrid および en la hierba はそれぞれ en を dentro de に交替させたとしても同じ意味として解釈されないと述べているものの、その意味的差異について言及していない.

> Por otra parte, el adverbio dentro y la preposición en, alternan en numerosos contextos, pero el valor de la preposición es mucho más amplio y menos específico que el del adverbio. Por ejemplo, una construcción como dentro del armario puede considerarse equivalente desde un punto de vista semántico a en el armario; sin embargo, construcciones como en Madrid o en la hierba no son parafraseables por dentro de Madrid y dentro de la hierba, respectivamente.
>
> 『一方で、副詞 dentro と前置詞 en は多くの文脈で交替するが、前置詞の意味は副詞の意味よりもずっと広く、特定的ではない. たとえば、dentro del armario のような文は意味的な観点から en el armario と同じであると考えられる. しかしながら、en Madrid や en la hierba のような句は dentro de Madrid や dentro de la hierba とそれぞれ書き換えることができない. 』

—Pavón Lucero (1999: 601)

Pavón Lucero(1999)の上記引用における en la hierba と dentro de la hierba を応用した(224)と(225)を用いて考察すると、前者はボールが芝生の上に載っている状態を示しているのに対して、後者は芝生の中に入っている状態を示していると考えられる. これは en が「表面の上」を表す一方で、dentro de は「内部」を表すためである.

(224) La bola está en la hierba. 『ボールは芝の上にある. 』

(225) La bola está dentro de la hierba. 『ボールは芝の中にある. 』

一方、en Madrid と dentro de Madrid のように都市名と共起する en と dentro de の差異については Hernández(2013)が考察をおこなっているため、以降の 4.6.4.で再度触れる.

そして、Slager(2010)もまた en と dentro de の差異に対して以下のように言及している.

> Aparece con sentido espacial en frases donde compite con la preposición en, aunque dentro de, precisamente por no ser preposición y por admitir énfasis contrastivo, sirve mejor que en para subrayar la idea de delimitación (dentro, pero no fuera):
>
> 『(dentro de は)前置詞 en と競合する文において、場所の意味をともなって現れるが、dentro de は前置詞ではなく、対照を表すゆえに、境界の概念を強める(中であり、外ではない)のに en よりも適する. 』

(226) [Dentro de / en] un radio de pocos kilómetros, dispondrá de 12 campos de golf.

『半径数キロの範囲で、12 のゴルフ場ができるであろう. 』

(227) Esto facilita la libre circulación de personas [dentro de / en] Europa.

『これによってヨーロッパにおける人の自由な往来が容易になる. 』

(228) [Dentro de / en[sic]] nuestro país, ya es una de las figuras más prestigiosas.

『我が国では、彼はすでにもっとも権威のある人物の一人である. 』

—Slager (2010: 93) 太字は筆者による

Slager(2010)は en で表される場所が外側か内側かに加えて、「境界の概念」を際立たせるためには dentro de を用いるのがよいと述べている. 先の(226)～(228)では、radio『範囲』、Europa『ヨーロッパ』、nuestro país『我が国』のような広がりを持ち、かつ境界を持つものがランドマークとなっているため、Slager(2010)は明言していないものの、このような名詞(句)が en よりも dentro de と共起しやすいと推測される. そこで、この Slager(2010)の記述をもとに、長縄

(2013)では空間的意味で dentro de が用いられる際にどのような名詞と共起するか Mark Davies の Corpus del español を用いて検証したところ、área『地域』、límite『範囲』、marco『範囲』、país のような範囲を有する名詞、あるいは境界そのものを表す名詞と共起しやすいことが観察された[72]. それに対して、dentro de は「内部」の意味を有することから casa, caja, escuela などの 3 次元の空間を有する名詞と共起しやすいと考えられたが、それほど多くは観察されなかった. このような考察から、dentro de は 3 次元の空間における内部よりも平面の境界を有する内部を表す頻度のほうが高いと思われる. こうして、Slager(2010)や Pavón Lucero (1999)の記述で観察されるように、dentro de は en に比べて、境界の概念、すなわち内部と外部の境界明示の度合いがより大きい語句であり、それゆえに空間的意味において微妙な差異がみられるといえそうである.

4.6.2. トコロ性と「中」

en と sobre に対して「～に」と「～の上に」のように、スペイン語と日本語が対応することと同様に、en と dentro de についても「～に」と「～の中に」という対応関係が成り立つと考えられる. ここで再び荒川(1992)のトコロ性に関する考察を確認しながら、日本語の名詞の「中」について観察をおこなう. 荒川(1992: 85)は『一般に名詞の「中」は「平面」よりも抽出されやすい』と述べるが、これはすなわち、「～の上」とトコロ化する「平面」に比べて、「中」に関しては名詞自体にその概念が含まれていることが多く、トコロ化する必要なく用いることが可能であることを意味する. 以下の(229)および(230)は荒川(1992)の例であるが、これらは「～の中」を付加することなく自然に用いることが可能である.

(229) テントニハイル

(230) ほら穴ニハイル　　—荒川 (1992: 86)

4.5.3.でも言及しているが、荒川(1992)は名詞のトコロ(平面)性に関して、動詞「置く」と共起可能な名詞をあげており、その名詞がモノ的になるほど「～の上に」とトコロ化する必要があると述べている. たとえば(231)の本ダナと(232)のテーブルはより平面的なものであるため、トコロ化する必要はない一方で、(233)の本のようにモノ的なものである場合には(234)のように「上」を付加してトコロ化する必要がある.

[72] dentro de +[任意の冠詞]+[任意の名詞]、dentro del +[任意の名詞]を検索結果に表示させるために、それぞれ dentro de [*L] [*NN]、dentro del [*NN]で検索をおこなった. なお、時代は 20 世紀に限定した.

(231) 本ダナニ置ク

(232) テーブルニ置ク

(233) 本ニ物ヲ置ク

(234) 本ノ上ニ物ヲ置ク　　—荒川 (1992: 82–85)

それに対し、名詞の「中」について、荒川(1992)は(235)のようにイレルおよびハイルと共起可能な名詞をあげながら、これらの名詞は「平面」とは異なり、トコロ化する必要なく用いることが可能であるため、「中」が「平面」よりも抽出されやすいと述べている.

(235) ［封筒/紙袋/ゴミ箱/クズカゴ/サイフ/カバン/フトコロ/ポケット/洗面器/ポット/オサラ/湯のみ/コップ］ニイレル

—荒川 (1992: 86) 筆者により編集

たとえば、(236a)や(237a)で用いられている川やクズカゴのような名詞に対しては、それぞれ(236b)や(237b)のように「～ノ中」を付加することでトコロ化することが可能であるが、(238a)と(238b)のフトコロのように本来的に「中」が内包されている名詞はトコロ化すると冗長的になりうる(荒川 1992: 81).

(236a) 川ニトビコム

(236b) 川ノ中ニトビコム

(237a) クズカゴニ捨テル

(237b) クズカゴノ中ニ捨テル

(238a) フトコロニイレル

(238b) フトコロノ中ニイレル　　—荒川 (1992: 81)

このことに関連して、本多(2013)は(236a)と(236b)および(237a)と(237b)を引用し、「中」が付加されるか否かで示される状況に差が出ない場合もあると荒川(1992)の主張を認める一方で、(239)～(241)にみられるように、「中」の有無によって意味が異なる場合も存在することを指摘している. しかしながら本多(2013)によれば、「中」が付加されるか否かで差が生じる場合には、付加されないほうが「ふさわしい行為」を表し、付加されるほうが「単に可能だけの行為」を表すが、

これが逆になる例はない.

(239a) 病院ニイレル

(239b) 病院ノ中ニイレル

(240a) 家ニハイル

(240b) 家ノ中ニハイル

(241a) 目ニハイル

(241b) 目ノ中ニハイル　　—荒川 (1992: 87–88)

(239a)は入院させること、(240a)はその家の構成員になること、そして(241a)は姿や景色などが視界に入ることを表す. このとき、たとえば(239a)の「病院ニイレル」は病院にふさわしい行為であるため、「入院させる」という解釈がなされる一方で、「病院ノ中ニイレル」は建物としての「病院」の中に入れるという空間的位置についての言及であるため、これは単に可能な行為として解釈されるのである.

以上が日本語の「中」に関する考察であるが、「中」が付加される場合とそうでない場合では意味的差異が見受けられる場合が多いものの、「上」の場合と比較すると差異が観察される例は少ないと考えられる. このような差異がスペイン語の en と dentro de にもみられるかどうかを確認するために、次項では「入れる」にあたるスペイン語の動詞と「中」の関係について考察する.

4.6.3. スペイン語の meter と「中」

日本語の「入る」、「入れる」にあたるスペイン語のひとつに動詞 meter があるが、Cifuentes Honrubia(1996)はこの meter の性質について以下のように述べている.

> Los usos con «meter» (o similares, como «introducir») son interesantísimos; en primer lugar, no dinamizan nunca la ubicación de partida, es irrelevante, sólo la ubicación interior de llegada. La diferente conceptualización entre «meter» y «poner» supone concebir la escena como direccional o posicional: si la base tiene caracterizada una dimensión interior puede alternar «meter» y «poner»;
>
> 『meter(類似したものに introducir がある)の用法は非常に興味深いものである. ひとつは、起点の位置は重要ではなく、全く活性化されず、着点である内部の位置のみが活性化される. 動詞 meter と poner の間における概念的差異は方向的あるいは位置的なものとして舞台をとらえることであると考えられる. もし、ベースが内部の次元を有するものであれば meter と poner は交替可能である. 』

(242) Lo metió en el saco. 『彼はそれを袋に入れた.』

(243) Lo puso en el saco. 『彼はそれを袋に入れた.』

Si su dimensión característica no es interior, es imposible «meter»
『もし、その次元が内部を有しない場合には、meter を用いることはできない.』

(244) *Lo metió en la alfombra. 『彼はそれをじゅうたんの中に入れた.』

(245) Lo puso en la alfombra. 『彼はそれをじゅうたんの上に置いた.』

—Cifuentes Honrubia (1996: 124)

meter も poner も内部を有する名詞と共起可能であり、(242)および(243)は saco『袋』の中に入れることを表す一方、alfombra『じゅうたん』のように内部を有しない名詞に対しては(244)のように meter を用いると非文になり、poner が用いられている(245)は「置く」と解釈される. ここで(242)に注目すると、meter と共起する名詞は日本語の「ハイル」や「イレル」と同様に、トコロ化する必要なく用いられるが、これは Cifuentes Honrubia(1996)が述べるように meter が着点として内部を要求するためであると考えられる. また、この場合、動詞や名詞の意味によって内部が表されるため、en の意味が希薄になる一方、poner は着点が内部であることを要求しないため、(243)でも(245)でも問題なく用いられ、この場合には名詞の性質によって en は「表面の上」と「内部」のいずれかの意味で解釈される. もっとも、(243)は「袋の中」でも「袋の上」でも解釈が可能であると思われるものの、袋は「その中に何かを入れるモノである」という百科事典的知識によって、en は「～の中」と解釈されるのが最も自然であると考えられる.

この meter に加え、Cifuentes Honrubia(1996)は日本語の「投げる」にあたる echar, arrojar, tirar の考察もおこなっている. これらの動詞は先の poner や meter とは異なり、起点を共起させることが可能であるため、方向を表す動詞(verbos direccionales)として分類されるが、移動距離が短いゆえに、物体の形状によっては静的にも動的にもとらえられるという. そのため、poner と交替可能であることが(246)～(249)の例を通じて示されている.

Verbos como echar, arrojar, tirar, etc., no son verbos posicionales ni direccionales interiores; se trata de verbos direccionales, como se puede comprobar fácilmente al admitir construcciones con de, desde, hasta, etc. Sin embargo, el desplazamiento de estos verbos es muy cercano al posicionamiento, pues al poder tratarse de objetos pequeños podemos concebir una misma acción de forma dinámica o estática;

『echar, arrojar, tirar などの動詞は位置を表す動詞でも、内部への方向を表す動詞でもない. こ

れらは、de, desde, hasta などと共起させた構文で容易に確認ができるように、方向を表す動詞である. しかしながら、これらの動詞で表される移動はその位置までの距離がとても短いものであるゆえに、小さい物体の場合には、同じ行為を動的にも静的にもとらえることが可能である. 』

(246) Échalo a la basura. 『それをゴミ箱に捨てなさい. 』

(247) Ponlo en la basura. 『それをゴミ箱に入れなさい. 』

(248) Tíralo a la papelera. 『それをくず箱に捨てなさい. 』

(249) Ponlo en la papelera. 『それをくず箱に入れなさい. 』

—Cifuentes Honrubia (1996: 148)

先に述べたとおり、これらの動詞は方向を表す動詞であるため、(246)および(248)では前置詞は a が用いられている. ここで注目すべき点はどちらも「内部」を終着点としてとらえていることであり、これはすなわち、en が「内部」の意味を必ずしも担うわけではなく、動詞や名詞の性質によってその意味が表される場合がある点である. この場合であれば、a や en が「内部」の意味を表しているというよりはむしろ、basura や papelera が「中」の概念を有しており、その「内部」にトラジェクターを位置づけるため、「内部」の意味が表れると思われる. なお、echar は『投げられるものの終着点に焦点があてられる』(高垣(監) 2007: s.v. tirar) ため、en や sobre とも共起可能であると思われるものの、以下の(250)～(252)を観察する限り、sobre は内部を有しない名詞と共起していることから、前置詞の選択はあくまでも終着点を表す名詞の性質によるものであると考えられる.

(250) echar el abrigo **sobre** la cama 『ベッドの上にコートを投げ捨てる』

—高垣(監) (2007: s.v. echar) 太字は筆者による

(251) echar la salsa **sobre** el pescado 『魚にソースをかける』

—小池他(編) (2014: s.v. かける)[73] 太字は筆者による

(252) echar agua **sobre** la cabeza 『頭から水をかぶせる』

—小池他(編) (2014: s.v. かぶせる) 太字は筆者による

以上の考察から、スペイン語の名詞も日本語と同じく、「中」というトコロ性をその名詞自身に含んでおり、その名詞と共起する動詞の意味内容によって活性化されると考えられる. たとえば、

[73] 小池他(編)(2014)の日本語訳は原文を引用. 以下同様.

meter『入れる』は「中」を含む名詞とのみ共起可能であるが、それに対して poner は「中」を含む名詞と共起すれば、『入れる』と解釈されやすく、「中」を含まない名詞であれば、『置く』と解釈される. この場合の前置詞は en が用いられるが、いずれにしても動詞と「中」を含む名詞によって「内部」の意味が示唆されるため、前置詞の意味内容は希薄になると思われる. つまり、meter の場合にはこの動詞によって、poner であれば共起する名詞によって en の意味が定まるのである. 同様のことが、tirarlo a la papelera と ponerlo en la papelera の例を観察してもいえそうである. したがって、ランドマークの性質は前置詞の意味に大きな影響を与えていると考えられる.

続いて、次項では共起する名詞を限定して en と dentro de の交替について考察をおこなっている Hernández(2013)の記述を観察する.

4.6.4. Hernández (2013)

Hernández(2013)は en と dentro de が交替可能な場合とそうでない場合についてそれぞれ異なる要素を有する名詞 país『国』、restaurant[74]『レストラン』、avión『飛行機』に焦点をあてて考察をおこなっているが、この研究はいみじくも本論文の目指すところである、名詞の性質によって前置詞あるいは前置詞句の選択がおこなわれることを観察したものである. しかしながら、Hernández(2013)は en と dentro de に関して、共起する名詞によってその意味の差を分析している点では本論文と一致するものの、en と共起している文において、dentro de と交替可能であるか、また dentro de と共起している文において、en と交替可能であるのかをネイティブが有する言語感覚に基づいて判断することで en と dentro de の意味的差異を考察しており、4.5.2.でおこなったような頻度数に基づいた分析はしていない.

Hernández(2013)はこれらの名詞の考察をおこなう前に、2.4.2.で確認したイメージ・スキーマや Vandeloise(1986)が主張する機能的意味などに触れつつ、en と dentro de の意味的差異に関する先行研究をまとめている. そのなかで Pavón Lucero(1999)の記述に触れてはいないものの、先に 4.6.1.において言及した en Madrid と dentro de Madrid のように都市名や国名と共起する場合の en と dentro de の意味的差異について、いくつかの考察をおこなっている. それは以下の(253a)や(253b)のように国や都市が共起する場合、en は場所を問う質問に対して物体を位置づける返答を導く一方で、dentro de は境界をより意識させるため、物体を位置づけるという意味では用いられず、たとえば法律が適用される地理的範囲のように、内と外の関係が意識されるものとして再解釈される場合において妥当性が得られると述べている.

[74] restaurante と同義.

En efecto, mientras que con países o ciudades, la preposición en introduce respuestas a la pregunta ¿Dónde...? localizando la figura con respecto a una entidad de referencia, las formulaciones con dentro de inducen el establecimiento de fronteras: estos enunciados, infrecuentes con valor localizador, ganan pertinencia si se reinterpretan según una relación dentro-fuera, por ejemplo en el ámbito legal (circunscripción del territorio de aplicación de una ley, por ejemplo): [...]

『事実、国や都市などとともに用いられる場合、前置詞 en は「どこ」という質問に対する答えを導き、基準となる存在に対して図を位置づけるのに対し、dentro de の場合は国境の存在を想起させる. つまり、dentro de を用いる発話は、位置の意味を有することはあまりなく、たとえば法的範囲(たとえば、法律が適用される区域)のように、「内と外」の関係に基づいて再解釈されれば、適切なものとされる. 』

(253a) Juan está en Buenos Aires. 『フアンはブエノスアイレスにいる. 』

(253b) Juan está dentro de Buenos Aires. 『フアンはブエノスアイレス内にいる. 』

—Hernández (2013: 90–91)

以上のことを述べ、さらに別の例文をあげながら Hernández(2013)は、en は概して位置を表す意味としてふるまうのに対し、dentro de は明確な境界によって閉ざされたベースに図を含んだステージを形成する表現であると述べている.

Vale decir que la opción entre en y dentro de se acompaña de diferencias en las instrucciones interpretativas activadas por cada relacionante: en se comporta como localizador de valor general mientras que dentro de configura una escena de inclusión de la figura en una base cerrada delimitada por bordes definidos.

『en と dentro de の選択によって、それぞれ共起する名詞によって活性化させる解釈において差異がもたらされる. en は一般的な意味として位置を表すものとしてふるまう一方で、dentro de は明確な境界によって区切られ、閉じられたベースに図を含んだステージを形成する. 』

—Hernández (2013: 91–92)

さらに、dentro はある領域の境界における特有の緊張をもたらし、「内と外のイメージ・スキーマ(esquema de imagen dentro-fuera)」を活性化させるため、たとえば、(254a)に対して(254b)は庭の境界を示す囲いに焦点があてられていると考えられる.

(254a) plantar flores en el jardín 『庭に花を植える』

(254b) plantar flores dentro del jardín 『庭の中に花を植える』

—Hernández (2013: 92)

Hernández(2013)は、dentro de の意味はこれまでの先行研究と同様に、境界を意識させ、さらにその内側と外側の関係を示すものであると定義したうえで、以下の a～c のランドマークを選択し、en と dentro de がどのような状況下において交替可能かの検証をおこなっている. また、これら a～c の語の特徴を以下のように記述しているが、それぞれ境界を有するもの、容器[75]としてとらえられる建物、そして閉ざされた交通機関を表す名詞の例である.

a. país:	como indicación de un territorio claramente circunscripto, dotado de fronteras precisas
b. restaurant:	edificio usualmente aprehendido como contenedor con interior y exterior
c. avión:	medio de transporte dotado de un habitáculo cerrado

『a. 国:	はっきりとした境界を有する、明確に区切られた領域を示すもの
b. レストラン:	外部と内部を有する容器として通常理解される建造物
c. 飛行機:	閉じた空間を有する交通機関』

—Hernández (2013: 94) 筆者により編集

Hernández(2013)の検証方法は、país を例にとると、en el país が用いられている例文および dentro del país が用いられている例文を Google によって抽出し、en el país の文であれば en を dentro de に交替させ、反対に dentro del país の文であれば en el país に交替させ、それぞれ別の表現に交替させた文の容認度を判断するというものである. 交替可能な場合もそうでない場合もその根拠は示されているものの、もう一方の表現に交替させた文の容認度は Hernández 自身がおこなっており、以降で示す例文について容認可能かどうかを判断している. 以降では、Hernández(2013)がおこなったそれぞれの名詞についての考察を確認する.

4.6.4.1. en el país と dentro del país

(255a)は Google によって抽出された文であり、(255b)は en を dentro de に交替した文章である.

(255a) Boudou negó una devaluación brusca en el país para favorecer al sector exportador

『ボウドウは輸出産業を有利にするために国内の突然の平価切り下げを否定した』

[75] contendor とそこに含まれるものである contenido（英語では container と content）は日本語ではそれぞれ「容器」と「中身」と表される. この「容器」と「中身」は第 2 章で扱ったメタファーやメトニミー、あるいはイメージ・スキーマなどを説明する際に用いられる.

(255b) ??Boudou negó una devaluación brusca dentro del país para favorecer al sector exportador

—Hernández (2013: 96)[76]

この文における devaluación『平価切り下げ』は経済用語であり、他国ではなく自国に適用されるというこの語に対する百科事典的知識[77]があるため、(255b)のように dentro de が用いられると冗長的になってしまう. そのため、Hernández(2013)は dentro de と交替させた(255b)の容認度は低いものと判断している. このように、文脈に応じて、とりわけ文章中に共起する名詞の百科事典的知識によって前置詞あるいは前置詞句の選択がおこなわれることを主張している. これに対して、以下の(256a)は本来 dentro de で記された文であり、en に交替させた文が(256b)であるが、(256a)は dentro de を用いることで、「国の外側ではなく内側」であることを表し、国内線の運賃であることが明示される. 一方で、(256b)のように、en と交替させると国内線、国際線を含めたこの国発着の便の運賃が上がることも表せるため、曖昧な表現としてとらえられうるが、これは en の場合、「国の中」という境界の概念が dentro de に比べて弱まるためであると Hernández(2013)は述べている.

(256a) A partir de mañana, volar dentro del país será más caro

『明日から、国内における飛行機の運賃はより高くなるだろう』

(256b) ?A partir de mañana, volar en el país será más caro

—Hernández (2013: 97–98)

また、(257)においてイタリックで示している extranjeros『外国人』と entrada『入国』によって、国の外側が想起されるのに対し、dentro del país で「国内」が表されている. このように入国など国境を越えることが表され、さらに内側と外側の対立が示される場合には dentro de が用い

---

[76] それぞれ a の文は Google から引用された文章、それに対して b は Hernández(2013)が en あるいは dentro de と交替させた文章である. ?などで表された容認度は Hernández(2013)によるものである.

[77] Hernández(2013)自身は以下にみられるように百科事典的知識(conocimiento del mundo)を Fillmore が提唱するフレーム理論の概念に置き換えて説明しているが、本論文では百科事典的知識と同じ概念とみなして、Hernández(2013)の考察を観察する.

En (255b), el empleo de dentro de, por su énfasis en la interioridad, genera un enunciado redundante que puede entrar en conflicto con nuestro conocimiento del mundo: según los frames (Fillmore 1982) de política financiera, las devaluaciones se sitúan naturalmente en un ámbito local y no se piensa que un gobierno pueda devaluar su moneda en otro lugar que no sea su propio país.

『(255b)では、その内部が強調される dentro de によって、われわれの百科事典的意味と衝突を起こしうる冗長さが生じる. つまり、財政フレームによれば、平価切り下げはその国だけでおこなわれ、政府が自国以外の他の場所の通貨の価値をさげることは考えられない. 』—Hernández(2013) 太字は筆者による. 例文番号は筆者により変更

られる.

(257) Los extranjeros no pertenecientes a la Unión Europea que viajen a Italia y deseen permanecer dentro del país más de 90 días necesitarán una Visa de entrada.

『イタリアを旅行し、90日を超えて国内に滞在することを希望する、EUに属していない外国人は入国ビザが必要となるだろう.』

—Hernández (2013: 99)

以上の考察をふまえて、Hernández(2013)は dentro del país が用いられるのは領域が閉じていることが表されたうえで、さらに共起している表現によって内側と外側の概念が際立つ場合であると結論づけている.

Los datos empíricos analizados permiten identificar, en el caso de la secuencia dentro del país, una clara tendencia a la marcación de cerramiento y tensión interior-exterior mediante indicaciones cotextuales de traspaso de fronteras con polarizaciones del tipo importación-exportación, competencia nacional-internacional, vuelos domésticos-internacionales, estatus nacional-extranjero, etc.

『分析された経験的データによって、dentro del país が用いられる場合、輸出と輸入、国内競争と国際競争、国内線と国際線、国内の立場と外国の立場などのような二分化と一緒に、国境越えを示す語が共起することで、閉じていること、そして内側と外側の緊張を際立たせる明らかな傾向が認められる.』

—Hernández (2013: 100)

4.6.4.2. en el restaurant と dentro del restaurant[78]

続いて restaurant に関する考察を観察するが、この語は建物として認識されるものの、屋内だけでなく、屋外も範囲に含まれる場合がある名詞の例として選定された語である. たとえば、(258a)は本来 en が用いられている例文であり、単に位置を示す場合には en が用いられる一方で、(258b)のように en の代わりに dentro de を用いると位置を示すというよりもむしろ、容器としてとらえられる空間が閉じていることを想起させるため、容認されにくいと述べられている.

(258a) En el Restaurant Árabe se sirven comidas de raíces libanesas.

『レストランアラブでは、レバノン起源の料理を提供している.』

(258b) ?Dentro del Restaurant Árabe se sirven comidas de raíces libanesas.

—Hernández (2013: 101)

[78] 先にも述べたとおり、Hernández(2013)は「レストラン」にあたる語を restaurante ではなく restaurant として検索をおこなっている.

(259a)も同様に en が用いられる例であるが、デッキや庭など屋外で食事ができることが表されるため、restaurant は建物の内部だけでなく、建物を含めた範囲として表されている. したがって、(259b)にみられるように dentro de と交替すると「屋内」のニュアンスが際立つため、(259a)に比べて(259b)の容認度は下がると Hernández(2013)は判断している.

(259a) En el restaurant se puede almorzar en los decks de madera sobre el río, en el jardín, a la sombra de algún hermoso árbol, en la galería con vista al río

『そのレストランでは、川のそばの木製デッキ、庭、美しい木の陰、川に臨む画廊で昼食をとることができる』

(259b) ?Dentro del restaurant se puede almorzar en los decks de madera sobre el río, en el jardín, a la sombra de algún hermoso árbol, en la galería con vista al río

—Hernández (2013: 102–103)

さて、これらの例を日本語に置き換えて比較すると、先述の(258a)やこの(259a)は「レストランの中では」というよりも「レストランでは」とするほうが、容認度が上がると思われるため、en のほうが dentro de より自然であることのひとつの根拠となりうると考えられる.

一方で、以下の(260a)は dentro de が原文に用いられている例であるが、この例ではある空間の中に別の空間があることを表しており、dentro de によって restaurant の境界が定められ、その内部にさらに別の空間を位置づけているため、dentro de がふさわしいとされる. 一方で、(260b)のように en に交替すると容認度が下がると Hernández(2013)は判断しているが、これはおそらく en el Baby Snow Park, en el restaurant と en が用いられる語句が続くため、その重複を避けるためでもあると思われる.

(260a) Aquí, los niños también tienen su espacio en el Baby Snow Park, un *á*rea dentro del restaurant y en la base, que se encuentra abierta de 12 a 16 hs

『ここには、レストラン内、土台の上のスペースである、ベイビースノーパークに子どもたちのための場所もあり、12 時から 16 時でオープンしている』

(260b) ?Aquí, los niños también tienen su espacio en el Baby Snow Park, un *á*rea en el restaurant y en la base, que se encuentra abierta de 12 a 16 hs

—Hernández (2013: 104–105)

そして、(261a)は先の(260a)と同様に dentro de が本来用いられている文であるが、これは

no en las mesas de afuera『屋外のテーブルでない』という表現が共起し、外部と内部の対立が想起されるためであると述べられている. 一方で、en と交替した(261b)はその対立が弱まるため、容認されにくくなるという.

(261a) La comida es muy buena, pero la ambientación (dentro del restaurant, no en las mesas de afuera) es patética, el olor a comida es demasiado intenso

『食事はおいしいが、雰囲気(屋外のテーブルではなく、レストラン内)はひどい. 食べ物のにおいが強すぎる』

(261b) ??La comida es muy buena, pero la ambientación (en el restaurant, no en las mesas de afuera) es patética, el olor a comida es demasiado intenso

—Hernández (2013: 104–105)

以上の考察から、Hernández(2013)は dentro de は en に比べ、明確な境界の内部における空間を際立たせ、そして内部と外部の対立を明確にする役割を有しており、閉じた容器を想起させるものと結論づけている.

4.6.4.3. en el avi**ó**n と dentro del avi**ó**n

最後に、閉じた空間を有する交通機関の名詞の例である avión の記述について観察する. (262a)および(262b)は本来 en が用いられている例で、前者のように、飛行機が目的地に向かっている状態を表す時には en を用いるほうが自然であるとされる. というのも、en el avión de regreso であれば状態が示されるが、(262b)のように dentro del avión de regreso と表されることによって、『帰りの飛行機』というひとつの名詞句を形成していたものが場所を表す dentro del avión と状態を表す de regreso の 2 つの要素に分裂してしまうためである.

(262a) Estoy en el avión de regreso a Argentina luego de un fin de semana muy especial compartido con los Pastores Robert y Karen Barriger...

『パストーレス·ロバートとカレン·バリガーと一緒に過ごした特別な週末の後、私はアルゼンチンへ帰る飛行機にいる. 』

(262b) ?Estoy dentro del avión de regreso a Argentina luego de un fin de semana muy especial compartido con los Pastores Robert y Karen Barriger...

—Hernández (2013: 107)

一方で、(263a)のように en el avión が機内つまり、cabina『キャビン』を示す場合には、

dentro del avión と交替して、(263b)のように表しても Hernández(2013)は容認できると判断している.

(263a) Ahora estoy en el avión a punto de despegar, he tenido suerte pues me ha tocado ventanilla.

(263b) Ahora estoy dentro del avión a punto de despegar, he tenido suerte pues me ha tocado ventanilla.

『今、離陸直前の飛行機にいるが、運良く窓際の席に座れた. 』

—Hernández (2013: 107)

(264a)および(265a)は dentro del avión の例であるが、この場合、イタリックで示されている meterse『入る』や quedarse sin aire『空気がなくなる』あるいは ahogarse『息苦しい』のように容器とされる物体の内部に閉じこめられていることが想起される表現と共起しており、内部の概念を際立たせる目的で dentro de が用いられている. これらの例は(264b)や(265b)のように、en と交替しても容認されるものの、境界の概念、すなわち空間が閉ざされているというニュアンスが弱まるという.

(264a) Ahora estoy dentro del avión, estoy nervioso ya que es la segunda vez que me meto en un avión.

(264b) Ahora estoy en el avión, estoy nervioso ya que es la segunda vez que me meto en un avión.

『今、飛行機の中にいるが、飛行機に入るのは 2 回目なので緊張している. 』

(265a) Cuando estoy dentro del avión siento que me vuelvo loca, que me quedo sin aire, que me ahogo, que necesito que me vea un doctor...

(265b) Cuando estoy en el avión siento que me vuelvo loca, que me quedo sin aire, que me ahogo, que necesito que me vea un doctor...

『飛行機の中にいると、気が変になる、空気が無くなる、息苦しいと感じ、医者に診てもらわなければならないと感じる…』

—Hernández (2013: 108–109)

本来 dentro del avión が用いられている文は閉じた空間であることが示され、en と交替するとそのニュアンスは dentro de に比べて弱まるものの、dentro de と共起しているすべての引用された例が en と交替可能であると Hernández(2013)は判断している.

4.6.4.4. Hernández (2013)の結論

Hernández(2013)は en および dentro de と共起する país, restaurant, avión 以上 3 つの名詞を含む文について考察した後、以下の結論を導きだし、dentro de は境界とその形状を示すもの、そして内と外の対立をより明確にする語であると述べている.

(i) La locución prepositiva dentro de se comporta como configurador descriptivo y marcador de bordes;

『前置詞句 dentro de は明確な形状を示すもの、そして端を示すものとしてふるまう. 』

(ii) La delimitación de fronteras activada por dentro de se acompaña, a nivel pragmático, de una tensión dentro-fuera que consideramos ligada a un esquema de imagen interior-exterior en combinación con el modelo del contenedor;

『dentro de によって活性化された境界は、語用論のレベルにおいて、内と外の対立をともなうが、それは容器のモデルと組み合わされた内と外のイメージ・スキーマに関連づけられると考えられる. 』

(iii) El empleo de dentro de exhibe afinidad con contextos de oposición interior-exterior frecuentes en dominios que presuponen la existencia de fronteras.

『dentro de の使用により、境界の存在を前提とする範囲において内と外の対立が頻繁にみられる文脈との類似性が示される. 』

—Hernández (2013: 112)

Hernández(2013)は、dentro de が用いられる主な要因を、境界が明示される場合そして文中において内側と外側の対立を想起する表現が存在している場合に求めている. つまり、前置詞あるいは前置詞句それ自体の意味であるというよりもむしろ、文脈によってふさわしい前置詞あるいは前置詞句が選択されていることを主張している. この研究と本論文が目指していることとは同じであり、本論文での主張を補強するものであると思われるものの、Hernández (2013)は en と dentro de が交替可能であるのかをネイティブが有する言語感覚に基づいて判断することで en と dentro de の意味的差異を考察し、コーパスでの頻度数に基づいた分析はしていない点で本論文とは方法論が異なる. また、en が用いられている文を dentro de に、あるいはその逆に交替させて容認可能かどうかを判断することはスペイン語のネイティブであるゆえに可能な考察であると考えられるため、ただちにこの手法をモデルとすることはできない. これに加えて、Hernández(2013)は引用した例文をアルゼンチン国内のものに限定しているため、地域差が生じている可能性も否めない. そこで次項では、Hernández(2013)の先の結論をふまえて、ランドマークに対してプロトタイプ的な行為か非プロトタイプ的な行為かによって前置詞あるいは前

置詞句の選択がおこなわれるのかどうか検証をおこなう. 具体的には、4.5.2.と同様に CREA を用いて en と dentro de のどちらとも共起可能と思われる名詞を選択し、その使用頻度およびその差異について、ランドマークとして用いられている名詞の百科事典的知識に対して、共起している動詞やその他の表現が見合うものであるかどうかを観察する.

4.6.5. 実例検証

本項では CREA を利用し、en と sobre について観察したときと同様の手法を用いて、用例を観察する. まず最初に、en と dentro de が交替可能である名詞をランドマークの例として選び、DRAE(2014)および SALAMANCA を参考にそれぞれ名詞の辞書的定義を確認したあと、CREA を用いて[各前置詞(句)＋名詞]を検索し、どのような文脈で用いられやすいのかを例文を観察することで考察をおこなう[79].

まず、これまで観察してきた例をもとに 3 次元を有する名詞をいくつか選択し、CREA における出現数を表 20 にまとめた. 名詞は、Hernández(2013)がとりあげた país の「範囲を有するもの」、restaurant の「建物」、avión の「乗り物」に加え、3 次元を有する典型的な名詞である「容れ物」、そして「液体」の 5 種類に分類した.

[79] RAE(2009)によれば、en は他の前置詞と結びつくことを拒む. 特に de en は非文法的であり、この場合には提示されている例にみられるように en を dentro de と交替させるとよい. ただし、これは統語的差異であるため、本論文では考察の対象外とする.
No se registra en ninguna variante del español la combinación *de en, que se ajusta a la pauta semántica mencionada (*quitar el plato de en la mesa). Se ha observado que en rechaza asociar con otras muchas preposiciones. (se dice, por ejemplo, Emergió desde dentro de la fosa, pero no *Emergió desde en la fosa).
『いかなるスペイン語の変種においても、先に言及した意味的規準に当てはまる de en という組み合わせは認められていない(たとえば、quitar el plato de en la mesa「テーブルの上から皿をさげる」は非文である). en は他の多くの前置詞と結びつくことを拒むことが観察されている. (たとえば、Emergió desde dentro de la fosa.「それは穴から現れた」に対して、*Emergió desde en la fosa.は非文である)』—RAE(2009: 2248)

名詞の種類	検索語句	en	dentro de
容れ物	frigorífico 冷蔵庫	194	14
	nevera 冷蔵庫	146	3
	caja 箱	226	14
	cajón 引き出し	138	6
	maleta スーツケース	104	3
建物	casa 家	1974	105
	hospital 病院	1064	10
	estación 駅	449[80]	2
	escuela 学校	745	15
範囲を有するもの	ciudad 都市	2905	47
	zona 地域	3649	51
	territorio 領土	596	57
乗り物	coche 車	705	63
	autobús バス	146	2
	tren 電車	202	1
液体[81]	agua 水	1017	82
	mar 海	807	6
	río 川	347	3
	lago 湖	129	1

表 20　各名詞の en および dentro de と共起する出現数

表 20 から明らかであるように、en と dentro de の出現数を比較するときわめて en と共起する頻度が高い. 4.6.2.で確認したように、en と sobre が示す「～の上」に相当する「平面」に比べて、「中」については名詞自体にその概念が含まれており、トコロ化させる必要なく用いることが可能であるため、このような際立った差が生じるものと思われる.

また、en との頻度差がこのようにみられるもうひとつの原因として、dentro de は時間表現と共起しやすいことがあげられる. たとえば DRAE(2014: s.v. dentro)における dentro de の個所では、以下のように空間的意味よりも時間的意味が先に記述されている. 一方で、SALAMANCA では dentro de については時間的意味のみがあげられており、以下の 2.にあたる空間的意味は記述されていない. もちろん、dentro de は通時的にみれば空間的意味から時間的意味が拡張していると考えられるものの、辞書の記述から共時的にみたときに時間的意味が主な用法であることが示される.

[80] en la estación で検索した 568 件のうち、estación estival『夏』といった「季節」の意味や estación espacial『宇宙ステーション』や estación de servicio『ガソリンスタンド』といった鉄道やバスの「駅」以外の施設を表している計 119 件を除いた数.

[81] このうち、「川」と「湖」は水の部分を指していない例も観察されるが、参考のため検索して出現した件数を記載している.

1. Para indicar el término de un período de tiempo visto desde la perspectiva del presente.

   『現在を基準としたある期間の終了時点を示す.』

2. En el interior de un espacio real o imaginario.

   『現実、あるいは想像上の空間の内部.』

—DRAE (2014: s.v. dentro) 筆者により一部編集

実際に時間を表す名詞と共起しやすいのかを Mark Davies のコーパスを用いて dentro de と共起しやすい名詞上位 20 語を表 21 にまとめた[82].

	名詞	件数		名詞	件数
1	**años**	106	11	tradición	25
2	**días**	71	12	contexto	24
3	casa	57	13	literatura	23
4	límites	51	14	marco	23
5	meses	40	15	comunidad	22
6	sociedad	40	16	fronteras	22
7	familia	27	17	hora	22
8	**año**	25	18	línea	22
9	ciudad	25	19	estructura	20
10	historia	25	20	rato	20

表 21　dentro de と共起する名詞上位 20 語

表 21 にみられるように、20 語の名詞のうち時間を表す名詞は太字で表した 6 語(años『年』, días『日』, meses『月』, año『年』, hora『時間』, rato『短い時間』)であり、dentro de を基準に観察すると時間を表す名詞は共起しやすいと思われる. なお、同条件で en と共起する名詞を確認したが、時間を表す名詞は 20 語中 momentos『時期』, siglo『世紀』, año の 3 語であった[83]. したがって、en と共起する名詞と比較すると dentro de は空間的意味よりも時間的意味として用いられやすいといえそうである.

そこで本項では、「中」を表す場合には en が基本的に用いられること、さらに dentro de は時間的用法が主であり、空間的意味で用いられる頻度が低いことを前提としたうえで、dentro de が用いられるのはどのような場合であるのか、表 20 にあげた dentro de と共起する名詞のなかから agua と coche の 2 つの名詞をとりあげ、以降で検証をおこなう.

[82] 検索語句は dentro de とし、任意の名詞(NN*)が dentro de 以降 3 語以内にある場合を検索した. なお、時代は 20 世紀に限定している.

[83] en と dentro de では時間的意味は異なるものとされているため、共起する時間を表す名詞も異なると考えられる. en と dentro de の時間的意味については、長縄(2015a)および長縄(2016)を参照されたい.

4.6.5.1. agua

4.6.5.1.1. **定義**

これまでの検証と同様、まず最初に agua の定義を DRAE(2014)および SALAMANCA で確認する.

> Líquido transparente, incoloro, inodoro e insípido en estado puro, cuyas moléculas están formadas por dos átomos de hidrógeno y uno de oxígeno, y que constituye el componente más abundante de la superficie terrestre y el mayoritario de todos los organismos vivos.
>
> 『純粋な状態では透明、無色、無臭、無味の液体であり、その分子は 2 つの水素原子と 1 つの酸素原子で構成されている. そして地球上で最も多く存在している構成要素であり、すべての生物の大部分を占める物質である. 』
>
> —DRAE (2014: s.v. agua)

> Líquido sin sabor ni olor y sin color en pequeñas cantidades, aunque azul o de otros colores en grandes masas, que ocupa las tres cuartas partes de nuestro planeta, forma parte de todos los seres vivos, y está formado por dos volúmenes de hidrogeno y uno de oxígeno.
>
> 『無味無臭で、少量であれば無色であるが、大量であれば青あるいは他の色を有する液体で、地球の 4 分の 3 を占め、すべての生物に含まれており、そして 2 つの水素原子と 1 つの酸素原子で構成された物質である. 』
>
> —SALAMANCA (s.v. agua)

これらの辞書的定義は水自体の性質に言及しており、水を利用して何らかの行為をおこなうといった用途に関する記述は確認されなかった.

あらためて表 20 を確認すると、agua が en と共起する例は 1017 件である一方で、dentro de と共起する例は 82 件であった. 本検証では、en el agua が含まれる例文を 127 件[84]、dentro de が含まれる例文を 82 件検証し、どのような場合にこれらの前置詞あるいは前置詞句と共起しやすいのか考察をおこなう. 考察にあたり、en と sobre と同様にトラジェクターがヒトか、動物を含めたモノかによって分類すると、ヒト(または身体の一部)である例は en el agua では 127 例中 31 例であったのに対して、dentro del agua では 82 例中 52 例であり、en に比べて dentro de のほうがヒトと共起しやすい印象を受けるものの、en el agua の出現数が本来多いため、トラジェクターの差異のみで、en と dentro de の差異を見いだすのは難しいと思われる. そこで、以降では en と共起している場合にみられる特徴と dentro de と共起している場合にみられる特徴を記述する.

[84] Filtros を Documentos にし、Ratio に 6 を入れて、合計件数の約 6 分の 1 の用例を抽出した.

4.6.5.1.2. agua が en および dentro de と共起する場合の特徴

I. fuera と共起する場合

Hernández(2013)において指摘されていたことであるが、(266)や(267)にみられるように fuera と共起して内側と外側の対立がみられる場合には en ではなく dentro de と共起する. このような例は以下の 2 例以外にもさらに 2 例確認された.

(266) Su estructura les permite sobrevivir durante periodos prolongados fuera del agua ya que pueden respirar tanto fuera como dentro del agua, además se protegen contra la desecación.

『その構造によって、しばらくの間は水の外で生き長らえることができる. というのも、水の外でも中でも呼吸ができ、さらに乾燥から身を守っているからである. 』

(267) –Para arrancarlo se tira de una maneta y el motor está arriba, fuera del agua y se mete dentro del agua una parte que tiene la hélice... ¿Puedo pintarlo en la pizarra?

『「モーターを作動させるにはレバーを引っ張ります. モーターは上の方、水から出ていて、スクリューの付いた部分を水の中に入れます…. 黒板に描いてもいいですか. 」』

—CREA

これは意味的な対立だけではなく品詞の観点からも、en y fuera de ではなく dentro y fuera de のほうが共起しやすいためであると Hernández(2013)は述べている.

En efecto, si bien pueden aparecer secuencias tales como "en y fuera de la escuela / casa / Universidad / país", se registra con mayor reiteración la formulación "dentro y fuera de la pantalla / escuela / casa / cárcel / cancha / pistas / país" la cual parece responder a una simetría antonímica: a la pregunta ¿Cuál es el contrario de fuera?, se responderá más naturalmente dentro que en.

『実際、「学校/家/大学/国の中と外」のように en と fuera を共起させることは可能である一方で、「画面/学校/家/刑務所/コート/走路/国の中と外」のように dentro y fuera は頻繁に用いられている. そして、これは反義語と対応しているように思われる. つまり、「fuera の反対は」という質問に対しては en よりも dentro と答えるほうがより自然である. 』

—Hernández (2013: 92)

II. 「入れる」にあたる動詞と共起する場合

en el agua と共起する動詞には、(268)にみられる meter(11 件)や(269)にみられる introducir(3 件)などといった「入れる」にあたる動詞が dentro de の場合に比べて比較的多くみられた. これは動詞が en を要求するため、そして動詞自体に「中」の概念が含まれているためであると考えられる[85].

[85] 他には internar(2 件)、entrar(1 件)と共起している例があった.

(268) Estaban sentados junto al torrente: Asunción metía en el agua sus pies descalzos, Mateo cortaba un pedazo de hogaza.

『激しく水が流れる川のそばに座っていた. アスンシオンは素足を水に入れ、マテオは大きな丸いパンの一切れを切っていた. 』

(269) Introdujo sus manos en el agua y comenzó a bañar su rostro, pecho, axilas y brazos.

『彼は自分の手を水に入れ、顔、胸、脇の下、そして腕を濡らしはじめた. 』

—CREA

一方で、「入れる」にあたる動詞が dentro de と共起する例は(270)や(271)を含めた 5 例みられた.

(270) Sentados en el borde de la piscina, introducir las piernas dentro del agua y realizar batidos de pie.

『プールのへりに座り、脚を水の中に入れ、ばた足をする. 』

(271) Introduce el dispositivo dentro del agua y separa el dedo del disco con cuidado.

『水の中に装置を入れ、注意深く円盤から指を離す. 』

—CREA

また、5 例のうちの 2 例である(272)や(273)では、水中であることを表すために dentro de と en の両方が用いられており、このような例はそれぞれの意味が異なるというよりもむしろ、繰り返しを回避するために異なった表現が用いられていると考えられる.

(272) Por parejas, un compañero introduce una mano dentro del agua y marca un número con las manos. El otro debe introducir la cabeza en el agua y adivinar el número.

『ペアごとに、ひとりが手を水の中に入れて、手で数を示す. もうひとりは頭を水の中に入れて、数を当てなければならない. 』

(273) Esto obliga a introducir la oreja contraria dentro del agua obligando a adquirir la posición correcta del cuerpo. Al espirar, realizar el movimiento por la boca y por la nariz, hundiendo la cara en el agua y tomando como punto de referencia el suelo de la piscina.

『これによって、反対の耳を水の中に入れなければならず、体の正しい位置を身につけなければならない. 息を吐くときは口と鼻でおこない、水に顔を沈めて、プールの床を基準点としてとらえる. 』

—CREA

III. 水中における位置

続いて、水中における位置に注目し、水は水面と水中という空間的位置を有していることを考慮すると、en el agua は水の表面での動作を表す表現と共起する傾向がみられた. 具体的には、(274)にみられる chapotear『(手足を動かして)バシャバシャいわせる』とその名詞形 chapoteo(4 件)、(275)にみられる flotar などの「浮く」にあたる表現(6 件)、reflejar などの「反射する」にあたる表現(3 件)などが観察された. ほかにも(276)や(277)のように、動詞の意味によって「水面」の意味で解釈される例がみられたが、このような場合、en は dentro de とは交替しにくいと思われる.

(274) [...] porque también ella está bebiendo demasiado, no nota que sus pies chapotean en el agua y que tiene mojados los zapatos y el trasero, o si lo nota no le importa, [...]

『彼女もまたたくさん飲んでいるので、足で水をバシャバシャと音を立てていることや靴やおしりを濡らしていることに気付いていない、あるいはそれに気付いてもどうでもよい』

(275) Llueve ahora con mucha fuerza y el mar está oscuro y agitado lleno de espumas. Algo flota en el agua: algo como un tronco, o es un brazo. Pero no, es sin duda un papel, un periódico acaso.

『今、雨はかなり強く降っており、海は暗く、荒れ狂い、泡で覆われている. 何かが水に浮かんでいる. 丸太のような、腕のような. でも、違う. 紛れもなく紙だ. おそらく新聞だろう. 』

(276) Antes de poder verlo, hemos oído el gotear monótono del grifo en el agua todavía invisible.

『私たちがそれを見る前に、まだ見えない水面に蛇口から滴る単調な水の音が聞こえた. 』

(277) Se ha sentado allí, la espalda apoyada en la baranda de la escalerilla, los pies balanceándose casi en el agua, seguro que acabará mojándose los pies, metida en los tejanos de siempre y en un suéter gordo que debe estarla matando de calor [...]

『彼女はそこに座り、小さいはしごの手すりに背中をもたせかけ、足を水面すれすれで揺らしていたが、きっと足は濡れてしまうだろう. 彼女はいつものジーンズを履き、暑苦しいに違いない厚いセーターを着ていた』

—CREA

もちろん en は「水の中」を表すことも可能であるが、dentro de を用いることでその空間的位置をより明確にすることが可能である. たとえば、(278)では円盤が浮くのではなく、水中でとどまることを示すために dentro de が用いられているが、これは en を用いると底に沈んだ状態あるいは浮いた状態を示しうるためであると考えられる.

(278) Si sumergimos el disco en un recipiente con agua, al soltarlo, se hundirá. Sin embargo, es posible mantenerlo dentro del agua sin que se hunda.

『もし、水が入った容器に円盤を浸して、それを放すと沈む. しかしながら、沈めることなく水中にとどめておくことが可能である. 』

—CREA

また、トラジェクターがすべて水の中に入っていなくても dentro de を用いることが可能であると思われる例が確認された. (279)は動きにくいことを水中でヒトが歩くことにたとえているが、このとき歩いているヒトが完全に水の中に浸かっているとは考えにくく、たとえば頭の部分は水から出ていると思われる. 同様に、(280)においてもヒトが首まで水に浸かっていることが示されており、dentro de と共起しているにもかかわらず、トラジェクターであるヒトがランドマークである水の中に完全に入っていることが示されていない.

(279) En la galería el olor del vino era todavía más fuerte y más espeso y me costaba trabajo moverme, como cuando uno anda dentro del agua.

『ギャラリーのワインの匂いは非常に強く、そして濃いものだったので、水の中を歩くかのように、移動するのが大変だった. 』

(280) Hay que adentrarse hasta, que el agua llegue al pecho e incluso el cuello, caminar con el agua a esa altura y dar un saltito cada vez que llegue una ola. Se puede permanecer dentro del agua unos 10 minutos, entonces se sale y se recupera calor al sol durante por lo menos 15 minutos.

『水が胸、そして首に浸かるまで進み、水がその高さにある状態で歩き、波が来るたびにジャンプしなければならない. 約 10 分間水の中にとどまり、それから水から出て、少なくとも 15 分間は太陽にあたって体を温める. 』

—CREA

IV. 水の中がふさわしいかどうか

最後に、水の中でおこなわれる行為や生じる現象に注目して、en el agua と dentro del agua における際立った差異を観察した. 前者については(281)や(282)にみられる disolver, diluir, deshacer といった、「溶かす」にあたる表現（18 件）と共起し、さらに(283)や(284)にみられる mezclar『混ぜる』(2 件)、echar『加える』(3 件)、poner『入れる』(4 件)といった、水を必要とする行為[86]と共起することが確認された. いずれの例も「水の中」を表しているにもかかわらず dentro del agua と共起している例はみられなかった.

[86] これらの例は「入れる」の動詞に加えることも可能であるものの、いずれの例もレシピにおける文であり、「水を必要とすること」が含意されると考えられたため、ここに記述している.

(281) El colesterol no se disuelve en el agua, pero, gracias a los ácidos biliares, su solubilidad es posible.

『コレステロールは水には溶けないが、胆汁酸のおかげで水に溶けるようになる. 』

(282) Se hierven estas flores en agua de rosas, con azúcar blanco diluido en el agua, y por cada onza de este brebaje se añaden tres laminillas de oro, ingiriéndolo en ayunas con un poco de vino blanco.

『ローズウォーターに入れたこれらの花を、水に溶かした白糖と一緒に煮て、この薬 1 オンスごとに 3 枚の金箔を加え、食前に少しの白ワインと飲む. 』

(283) Para eliminar la maleza que nace en las grietas del cemento o baldosas, arráncala y vierte por la grieta agua hirviendo. Si mezclas en el agua hirviendo sal gorda, hará que nada vuelva a crecer ahí.

『セメントや敷石の裂け目に生える雑草を根絶やしにするためには、雑草を引き抜き、沸騰した水を裂け目にかけてください. もし、沸騰しているお湯にあら塩を混ぜれば、そこには再び何も生えてこないでしょう. 』

(284) Aparte, en el agua de cocer las verduras echa los mejillones y cuécelos.

『さらに、野菜をゆでた水の中にムール貝を入れて、それらを煮てください. 』

—CREA

一方、概して水の外でおこなわれる行為あるいは生じる現象が、水中でもおこなわれることを示す場合、dentro de と共起する傾向があると思われる. (285)はコンクリートが水中で固まること、(286)は休憩、会議、何もしないでいることが水中でおこなわれること、そして(287)はコマが水中で回ることが示されているが、先の(281)～(284)の行為あるいは現象は水中で実現されるプロトタイプ的な行為であると考えられるのに対し、(285)～(287)の行為や現象は非プロトタイプ的であるため、en ではなく dentro de が用いられていると考えられる.

(285) Reforzado con barras de acero (hormigón armado) se utiliza en pilares y, como puede fraguar dentro del agua, se emplea mucho en obras hidráulicas.

『鉄の棒で補強されたもの(鉄筋コンクリート)は柱に用いられる. そして、水の中で固まるので、水利工事においてよく用いられる. 』

(286) Millones de litros de aguas termales son aprovechados por los islandeses durante todo el año para calentar sus hogares y disfrutar de las propiedades de su agradable temperatura y su riqueza mineral. El descanso, las reuniones de trabajo, o el dolce fare niente es más lisonjero dentro del agua.

『何百万リットルもの温泉がアイスランド人によって、家を暖めるために、そしてその快適な温度と温泉の効果を享受するために一年中利用されている. 休憩、仕事の会議、あるいは何もしないでいることは水の中ではより快いものである. 』

(287) Esa distorsión espacio-temporal debida a la rotación de una masa fuera del ascensor (que puede imaginarse gráficamente como los torbellinos alrededor de un trompo que gira dentro del agua), [...]

『(水中で回るコマの周りの動きのような、図表上で想像することができる)リフトの外の塊の回転によるその空間と時間のゆがみは…』

—CREA

以上、共起する表現、水中での位置、そして水中で実現する行為あるいは現象としてふさわしいものであるかどうかという、4 つのパタンに分類して en el agua と dentro del agua の差異を観察した. agua については、en と dentro de では頻度数が著しく異なり、en のほうが共起しやすいものの、dentro de と共起する場合には en との差異が認められた. これは水面と水中という 2 つの空間的位置を有する水の性質によるものであり、その空間的位置を明確にするためにとりわけ水中であることを明確にする場合には dentro de と共起するようである. また、水中でおこなわれる行為あるいは現象を観察すると、水中でおこなわれるにはふさわしくない場合には dentro de と共起しやすいといえそうである.

4.6.5.2. coche

4.6.5.2.1. **定義**

続いて、coche を観察するが、DRAE(2014)および SALAMANCA では以下のように定義されており、いずれも「ヒトを輸送するためのもの」であることが記されている.

Automóvil destinado al transporte de personas y con capacidad no superior a siete plazas.

『7 人を超えない人を乗せることができる、人を輸送するための自動車. 』

—DRAE (2014: s.v. coche)

Vehículo con motor y de cuatro ruedas para transportar personas:

『モーターと 4 つの車輪をつけた、人を輸送するための乗り物. 』

—SALAMANCA (s.v. coche)

CREA で en el coche と dentro del coche を検索すると、表 20 にあるとおり、en と共起する例は 705 件である一方で、dentro de と共起する例は 63 件であった. ここでは、en el coche を含む例文を 149 件[87]、dentro del coche を含む例文を 63 件検証し、どのような場合にこれらの前置詞あるいは前置詞句と共起しやすいのか考察をおこなう.

[87] Filtros を Documentos とし、Ratio に 5 を入力し、合計件数の約 5 分の 1 の用例を抽出した.

4.6.5.2.2. coche が en および dentro de と共起する場合の特徴

I.「手段」としての en との共起

coche は交通手段のひとつであり、移動動詞と共起することで「車で移動する」ことを表すことが可能である. このとき、en coche のように無冠詞で用いられることが多いが、(288)～(290)のように特定の車であれば冠詞をつけて用いられる. そして動詞には、ir『行く』(7 件)、llevar『連れていく、持っていく』(7 件)、viajar『旅行する』(4 件)、subir『登る』(3 件)などがあり、手段を表す en el coche は合計で 28 件確認された[88]. なお、dentro del coche と移動を表す動詞が共起した例は確認されなかった.

(288) Mi amigo se ofrece a llevarme a casa en el coche.

『私の友人はその車で家まで私を送ることを申し出てくれる. 』

(289) "Hoy (por ayer) ha muerto un bebé que viajaba en el coche de una familia israelí que ha sido apedreado por los palestinos. También las piedras pueden matar".

『「今日(昨日)パレスチナ人によって投げられた石によって、イスラエル人の家族の車に乗っていた赤ん坊が亡くなった. 石でも人を殺すことができてしまう. 」』

(290) Fui a casa, metí los malditos calzoncillos y la almohada en un maletín y volví a buscarla. Subimos a San Lorenzo en el coche.

『私は家に戻り、旅行カバンに質の悪いパンツとクッションを入れ、彼女を迎えにいった. 私たちは車でサンロレンソ山に登った. 』

—CREA

II.「入る」、「乗る」にあたる動詞との共起

agua と同様に、entrar(18 件)、meterse(13 件)といった「入る」にあたる動詞、また montar(se)(13 件)、subir(3 件)といった「乗る」にあたる動詞と共起している例もまた多くみられた. このとき、(291)～(293)にみられるように概して車の中に入るだけではなく、車を運転して移動することが示唆される.

(291) Me metí en el coche que había dejado en el parking cercano, y enfilé hacia la avenida Pearson.

『私は近くの駐車場に置いておいた車に乗り、ペアルソン大通りに向かった. 』

(292) La cosa es que luego nos montamos en el coche para volver a casa (yo a veces me doy con la puerta del coche en la cabeza al entrar, no sé por qué), [...]

[88] 他には volver『戻る』、salir『出る』、llegar『到着する』、trasladar『移動させる』、regresar『戻る』、marcharse『立ち去る』があった.

『後に私たちは車に乗って、家に帰りました（どうしてかわからないけど、私はときどき乗るときに頭を車のドアにぶつけます）』

(293) Cuando nos subimos en el coche para regresar a casa, y apenas recorridos cinco kilómetros, notamos un persistente olor a quemado.

『家に帰るために車に乗って、そしてほんの 5 キロ行ったところで、私たちはひどく焦げたにおいに気付いた．』

—CREA

一方、わずかではあるものの、dentro de もこのような動詞と共起している(294)のような例が 3 件みられたが、en とは異なり、車での移動が明示されている例はなかった．

(294) [...] también le había visto entrar en un hotelucho magreándose con Gloria, la hija de Maite, la de la taberna, y dentro del coche, a un centenar de metros del parvulario en el que trabajaba Begoña, [...]

『私もまた、彼が居酒屋にいるマイテの娘、グロリアといちゃつきながらホテルに入るところやベゴーニャが働いている幼稚園から 100 メートルのところにある車の中に入るところを見た』

—CREA

III. estar, haber との共起

estar や haber といった車の中に存在、所在していることを表す動詞と共起する例もまた、「乗る」、「入る」にあたる動詞に次いで、多くみられた．具体的には(295)の estar（4 件）、(296)の haber（4 件）、(297)の quedarse（3 件）があり、これら以外にも(298)のように en el coche が動詞をともなわずに用いられる例（10 件）が確認された．後に確認するが、dentro de と共起する場合と比較すると、これらの例にみられるように en と共起する場合には車での移動が示唆される例が多いように思われた．もっとも、(297)のように示唆されない例も観察されたがわずかであった．

(295) La detención se produjo el lunes, después de que una mujer pidiese ayuda a través de otra persona a la que explicó que había sido secuestrada por un hombre que en ese momento no estaba en el coche en el que ambos viajaban y que tenía matrícula de A Coruña.

『逮捕されたのは月曜日で、1 人の女性が別の人を通じて、男に誘拐されたと説明し、助けを求めたあとだった．助けを求めたとき、2 人が乗っていたコルーニャのナンバープレートをつけた車には男はいなかった．』

(296) Hoy vamos a ir al Taj Mahal. Hay sitio en el coche, ¿os apetece venir?

『今日、私たちはタージマハルに行くつもり．車に席があるけど、君たちも行きたいかい．』

(297) Sin embargo, ese día el chófer estaba medio reventado de tanto subir escaleras y, como íbamos a cambiar de turno un poco más tarde, me

pidió permiso para quedarse en el coche esperándome.

『しかしながら、その日は運転手が階段をのぼりすぎてすっかり疲れ果てていて、シフトの交替が少し遅れる予定だったので、彼は車に残って私を待っていてもいいか許可を求めた.』

(298) Ya en el coche, camino de casa, "ella" le habló de aquel extraño señor que estuvo en casa unas horas, el que no miraba para afuera, y le preguntó que si le gustaría que se fuera a vivir con ellos.

『もう家に帰る車の中にいて、「彼女」は数時間家にいたあの奇妙な男性について彼に話した. その男性は外の方を見ておらず、彼女に彼らと一緒に住むために出ていきたくないか尋ねた.』

—CREA

一方、dentro de も車の中に存在、所在していることを表す動詞、具体的には(299)の estar (12 件)、(300)の quedarse(2 件)、(301)の permanecer(2 件)、そして en と同様、(302)のように dentro del coche が動詞をともなわずに用いられている例(6 件)が確認され、en よりも比較的多くみられた. これらの例にみられるように、dentro de と共起する場合には車に乗って移動することが示唆されない例が多いように思われた.

(299) -[...] El[sic] se me acercó y me preguntó si tenía fuego. Le dije que sí.

[...]

-Hice así y metí la mano en el bolso. Pero él ya estaba dentro del coche y sentí una navaja en el cuello.

『「彼は僕に近づいて、火を持ってないか聞いてきた. 僕は持っていると彼に言った.」
(中略)
「そう言って、ポケットに手を入れたんだ. でも彼はすでに車の中にいて、僕は首にナイフがあるのに気付いた.」』

(300) Al día siguiente, Luz Acaso llegó a Talleres Literarios a las doce menos diez y se quedó dentro del coche, escuchando la radio, para hacer tiempo hasta las doce.

『翌日、ルス･アカソは 12 時 10 分前に文学セミナーに到着したが、12 時まで時間を潰すために車の中にいて、ラジオを聴いていた.』

(301) O lo que es lo mismo y confirmó para EL MUNDO el portavoz de FORPRONU en Zagreb, Paul Risley, "ya no fueron forzados a permanecer dentro del coche, y aparcar éste en medio de una de las pistas del aeropuerto", como "escudos" frente a posibles ataques aéreos aliados.

『つまり、エルムンド紙に対して、ザグレブの国際連合保護軍のスポークスパーソンであるポール･リスレイは「もはや車内にとどまっている必要がなく」、起こりうる同盟国の空襲に対して「盾」として、「空港の滑走路の 1 つの中央に車を停めておくべきだ」と証言した.』

(302) Ya dentro del coche, saco un bolígrafo y escribo en la primera página de cada ejemplar: para papá, con cariño, Carlos.

『私はすでに車の中にいて、ボールペンを取り出し、各部の最初のページに「パパへ、心をこめて、カルロス」と書く.』

—CREA

coche についても、考察からは、en と共起する頻度と dentro de と共起する頻度に大きく差がみられたものの、移動手段を表す場合、「入る」にあたる動詞と共起する場合、「存在」を表す動詞と共起する場合の 3 つに分類して考察すると、en と共起する場合には移動が示唆される一方で、dentro de と共起する場合には移動の概念は示唆されず、単に場所として認識されるといえそうである. 以上の考察から、これまでの名詞と同じく、移動手段として乗る、あるいは人を運ぶというプロトタイプ的な行為に対しては en と共起しやすい一方で、移動をともなわない行為、つまり非プロトタイプ的な行為に対しては dentro de と共起しやすいことが明らかになった.

4.6.6. en と dentro de の意味的差異

本節では「内部」を表す en と dentro de が交替可能な文脈において、どのような場合に en あるいは dentro de が用いられやすいのか、共起するランドマークに対する百科事典的知識に基づいて考察をおこなった. スペイン語の名詞は日本語の名詞と同様、「中」については「平面」に比べると、名詞自体にその概念が含まれていることが多く、トコロ化する必要なく用いることが可能であるため、前置詞自体が意味を表しているというよりもむしろ、ランドマークの性質が前置詞の意味に大きな影響を与えているといえそうである. en と dentro de の検証にあたっては、まず最初に、en と dentro de の意味的差異について考察をおこなっている Hernández(2013)の記述を確認した. Hernández (2013)は país, restaurant, avión をランドマークとしてあらかじめ選択し、Google によって en あるいは dentro de とこれらの名詞が共起している例を抽出し、en の例であれば dentro de と、反対に dentro de の例であれば en と交替させ、容認度を判断している. そして結論として、概して dentro de が用いられる主な要因を、境界が明示される場合、また文中において内側と外側の対立を想起する表現が存在している場合に求めた. しかしながら、この検証はネイティブが有する言語感覚による分析であり、ただちにこの手法はモデルにすることはできないため、本論文では Hernández(2013)と同様にランドマークを限定しながら、CREA で抽出した例文をなるべく多く検証するという別のアプローチをとることで、どのような文脈で en あるいは dentro de が共起しやすいのか考察をおこなった. 具体的には、en と dentro de の使用頻度およびその意味的差異について、ランドマークとして用いられている名詞の百科事典的知識に対して、共起している動詞やその他の表現が見合うものであるかどうかを観察した. 実際に CREA で en と dentro de の両方に共起可能な名詞をいくつか選択し、その出現数を確認すると、先に述べたように、「中」の概念はすでに名詞に含まれていることが多いため、そのような名詞と共起する dentro de の件数は en の件数に比べずっと少ないことが明らかになった.

また、dentro de と共起する件数が別の要因として、dentro de は空間的意味よりも時間的意味で用いられることが多いことが考えられる. しかしながら、件数が少ないことと意味的差異がないことは等価ではないため、本論文では agua と coche をランドマークとして選択し、CREA を用いて検証をおこない、en と dentro de で差異が見受けられる場合があることを示した.

前者の agua については、内側と外側を想起させる表現、共起する動詞、水中での位置、そして水中で実現する行為あるいは現象としてふさわしいものであるかどうか、という 4 つの観点から en と dentro de の差異を観察した. その結果、agua もまた dentro de に比べて en のほうが共起しやすいものの、dentro de と共起する場合には en との差異が認められた. まず、dentro y fuera といった表現のように、内側と外側の対立が想起される場合には en ではなく dentro de と共起しやすいことが観察され、Hernández(2013)の主張があらためて確認された. 次に、共起する動詞に注目して、en と dentro de の意味的差異を観察すると、とりわけ「入れる」にあたる動詞と共起している場合には、動詞の意味自体に「中」が含まれると考えられることから、dentro de ではなくもっぱら en と共起しやすいことを確認した. そして、水は水面と水中という 2 つの空間的位置を有するため、水中の位置によって、en と dentro de の選択がおこなわれるようである. つまり、水中であることを明確にするためには dentro de と共起しやすく、水面を表している場合には en と共起するのである. 最後に、水中でおこなわれる行為、あるいは水中で生じる現象に注目したが、水中ではふさわしくない行為、水中で生じるには不自然な現象の場合には dentro de と共起しやすいことが確認された. つまり、en と共起する頻度は dentro de に比べて高いものの、agua に対して非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合には dentro de が共起しやすいといえそうである. 一方で、coche についても en と dentro de では共起する頻度に大きく差がみられたものの、移動手段の場合、「入る」にあたる動詞と共起する場合、「存在や所在」を表す動詞と共起する場合という 3 つの観点で分類すると、en と共起する場合には移動が示唆されるのに対して、dentro de と共起する場合には移動は示唆されず、ただ「内部」という空間的位置が表される. つまり、車を移動手段としてとらえて、車に対するプロトタイプ的な行為をおこなっている場合には en と共起しやすい一方で、移動をともなわない行為、つまり非プロトタイプ的な行為に対しては dentro de と共起しやすいことが明らかになった.

また、日本語では「中」が付加されるか否かで差が生じる例として、「病院に入れる」と「病院の中に入れる」、「家に入る」と「家の中に入る」という例が本多(2013)においてあげられており、スペイン語においても、たとえば en la casa / en el hospital と dentro de la casa / dentro del hospital で同じような意味的差異が観察されると予想されたが、2 つの表現の間にそのような差

異は本検証では観察されなかった.「病院に入れる」は概して「入院させる」と日本語ではメトニミー的に解釈されるが、スペイン語においては en と a を比較した際に述べたように、このような解釈がなされるのは前置詞 a と共起する場合であり、en ではメトニミー的解釈がなされない. そのため、en と dentro de では、「病院に入れる」と「病院の中に入れる」と同様の対立がみられないと思われる.

最後に、本論文で得られた結論と先行研究である Hernández(2013)の結論を比較すると、Hernández(2013)はランドマークの性質の異なるものを選択して、en と dentro de の意味的差異を分析し、結論として境界が明示される場合、そして内部と外部が際立つ場合に dentro de が共起しやすいと述べている. この主張は確かに en と dentro de の意味的差異であるものの、空間的意味の差異を述べるにとどまっている. それに対して、本論文では実際に en と dentro de が用いられている例文を観察しながら、名詞の百科事典的知識に注目し、その「用途性」によって en と dentro de が選択されることを示すことで、空間的意味以外の差異が見受けられることを明らかにした.

4.7. en とその類義語との差異

本節ではまとめとして、本章で確認した en とその類義語の差異をまとめながら、どのような場合に en が用いられやすく、どのような場合にその類義語が用いられやすいのか確認をおこなう.

4.7.1. en と a

a は概して ir『行く』や venir『来る』などの移動動詞と共起することで「方向」を表すが、estar『～にいる』といった移動を表さない動詞と共起すると「方向」ではなく、「隣接」の意味が表される. そして、その場合にはランドマークが参照点となり、トラジェクターはその参照点を中心とした一定の範囲に位置づけられると考えられる. 先行研究のなかには a は点的な物体と共起し、en は広がりのある物体と共起すると主張するものもみられる. しかし、トラジェクターとランドマークが隣接関係にあればどのような名詞でも常に a と共起できるわけではなく、共起可能な名詞は限られている. そして、a が共起可能である場合には「隣接」を表すだけではなく、メトニミー的解釈がなされることが多く、この点において a は en と大きく異なると考えられる. たとえば、sentarse a la mesa であればテーブルに隣接して座っていることを示すだけでなく、食事をする、書き物をするなどのテーブルの上でおこなわれる行為が示唆され、sentarse al piano であればピアノに隣接して単に座っているだけではなく、それを弾くことが示唆される. このように、a は

「隣接」の意味に加えてメトニミー的解釈がなされるが、トラジェクターとランドマークが隣接関係にある場合には a ではなくもっぱら en がランドマークと共起し、この場合には a とは異なり、空間的意味のみが表される. たとえば、parada『停留所』は点的な物体であり、「待つ」という行為が示唆されると考えられるものの、esperar en la parada『停留所で待つ』のように a ではなく en と共起する. parada はトラジェクターの位置を示す参照点として単に機能しているのみであり、それ自体を利用していないという点で mesa や piano とは異なっているため、a ではなく en と共起していると思われる. また、移動動詞のなかでも entrar や meter など「中へ入る」にあたる動詞は en と共起しやすいが、このような動詞においても entrar en は建物の中に入ることが表される一方で、entrar a はその建物の中でおこなわれる活動を始めるというメトニミー的解釈がなされることを Ibarretxe-Antuñano(2004)は指摘している.

以上で言及している a のそれぞれの意味については、これまでの先行研究で言及されてきたものの、a は動的である一方で、en は静的であるというように共起する動詞の意味が前置詞の意味として記述されている研究もあれば、a にも en にも位置の意味を認め、「隣接」の意味や「メトニミー」の意味が記述されている研究もみられた. しかしながら、「方向」から「隣接」、「隣接」から「メトニミー」のように、意味間の関連づけがおこなわれている研究、そして「隣接」を表す場合に共起可能な名詞が限定的である要因について考察をおこなっている研究は管見によれば確認されなかった. そこで本論文では、これまでの先行研究における a の意味に関する記述をまとめたながら、それぞれの意味を関連づけたうえで、「隣接」を表す a と共起しやすい名詞に関して、たとえば mesa や puerta といった名詞と a が共起しやすい要因について考察をおこなった. そして、a と en の差異についての結論として、a は空間的意味を表しながらもメトニミー的解釈がなされることが多いと述べ、これは共起するランドマークの百科事典的知識によるものであると主張した.

4.7.2. en と sobre

平面を有するランドマークの上にトラジェクターを位置づける場合、en, sobre, encima de を用いることが可能である. これらの前置詞および前置詞句が交替可能である場合において、その差異を明らかにするために、本論文では cama『ベッド』、silla『イス』、mesa『テーブル』、suelo『床』の 4 つの名詞を選択し、CREA を利用してその出現数や共起する表現を観察したが、どのような文脈においてもこれら 3 つの前置詞あるいは前置詞句が自由に選択されるわけではなく、それぞれの名詞に対する百科事典的知識によって共起しやすい前置詞あるいは前

置詞句があることが明らかになった. たとえば、cama は「ヒトが寝るためのモノ」、そして silla は「ヒトが座るためのモノ」という百科事典的知識によって、ヒトがトラジェクターの場合には en と共起しやすい一方で、モノの場合には sobre と共起しやすいことが明らかになった. つまり、cama や silla はヒトが寝るあるいは座るためのものであって、いずれもモノを置く場所ではないことが、前置詞の選択を通じて表されているのである. また、たとえば cama であれば「立つ」や「跳ぶ」、そして silla であれば「立つ」や「倒れこむ」といったそれぞれのランドマークに対して非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合はヒトがトラジェクターであっても概して sobre と共起しやすいことを明らかにした.

また、mesa は cama や silla と同じように平面を有する名詞であるものの、周りにヒトが位置づけられることが多いという点において、2 つの名詞とは前置詞の選択基準が異なる語であると考えられる. すなわち、ヒトがトラジェクターの場合には a とも en とも共起可能であるが、「隣接」を表す場合には a のほうが共起しやすく、en と共起する場合でも「隣接」を表し、「表面の上」と解釈される例はほとんどみられない. 一方で、テーブルの平面の上にトラジェクターを位置づける場合には「表面の上」と解釈され、en や sobre と共起する. en が共起する場合、「表面の上」に位置づけられるトラジェクターは食事に関連するものが多く、その他のモノの場合は sobre, encima de と共起する頻度が高いことが観察された. そして、行為に注目すると、ヒトが「もたれる」、「寝そべる」といった場合、あるいはモノを「積み上げる」、「広げる」といった動作の場合には sobre や encima de と共起しやすいことが観察された. さらに、「食事や書き物をするための場所」として用いる場合には en と共起しやすく、そうでない場合は sobre や encima de と共起しやすいことが明らかになった. このように en の意味は多義的であるが、「隣接」か「表面の上」かを決定するのは en 自身ではなく、en と共起するランドマークや動詞によるものであると考えられる.

しかしながら、4 つ目の suelo については先の 3 つの名詞とは異なり、en と共起する例が sobre や encima de に比べて圧倒的に多いことが CREA による検索を通じて明らかになったが、これは、特定の用途が想定されるないため、前置詞あるいは前置詞句の使い分けが生じないと考えられた.

以上のことから、en と sobre の差異についてはランドマークに対してプロトタイプ的な行為をしている場合には前者と共起し、可能ではあるが非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合には後者と共起するといえそうである. その一方で、その物体に特定の用途、つまりプロトタイプ的な行為が見いだせない場合にはもっぱら en と共起し、sobre と交替可能であると思われるも

のの、意味的差異はあまりみられないと結論づけた．これまでの先行研究、Cifuentes Honrubia(1996)および Moreno y Tuts(1998)では sobre と encima de の対立が本論文で提示した en と sobre の対立と同じような関係を示すことが述べられている．すなわち、トラジェクターとランドマークがひとつのまとまりとみなされれば sobre が、そうでなければ encima de が用いられるのである．しかしながら、en と sobre の差異については言及されていなかったため、本論文ではこの 2 つの前置詞の意味的差異を明らかにした．en と sobre、sobre と encima de というそれぞれの対立をみた場合、それぞれの前者はトラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっているのに対し、後者は非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合に用いられやすいといえそうである．そこで、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている en と sobre の差に関して、ランドマークが平面的であればランドマークは en と共起しやすく、モノ的である場合には sobre と共起しやすいという仮説を提示し、検証をおこなった．その結果、本論文では hombro『肩』、tumba『墓』、caballo『馬』を検証し、ランドマークが平面的かつ、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合、ランドマークは en と共起しやすい一方、非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合は sobre と共起しやすいといえそうである．その一方で、ランドマークがモノ的かつ、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合、ランドマークは sobre と共起しやすく、非プロトタイプ的である場合には encima de と共起しやすいようである．したがって、前置詞の選択は動詞のみによって決定されるのではなく、ランドマークの形状もまたその選択に大きく影響すると結論づけた．

4.7.3. en と dentro de

en と dentro de の意味的差異については Hernández(2013)が考察をおこなっており、ランドマークを país『国』、restaurant『レストラン』、avión『飛行機』に限定し、Google によってこれらの名詞と en および dentro de が共起している例を抽出し、en と共起している文であれば dentro de に、反対に dentro de と共起している文であれば en に交替し、その容認度を検証している．そして、結論として dentro de が用いられる主な要因を、境界が明示される場合、また文中において内側と外側の対立を想起する表現が存在している場合に求めた．一方で本論文では、同様にランドマークを限定しながらも、ネイティブが有する言語感覚による分析をおこなっている Hernández(2013)とは別の手法をとった．具体的には、en と dentro de の意味的差異について、ランドマークとして用いられている名詞の百科事典的知識に対して、共起している動

詞やその他の表現が見合うものであるかどうかを観察した.

en あるいはその類義語の dentro de を用いることで、caja や maleta などの 3 次元の名詞の内部、あるいは ciudad『都市』や territorio『領土』といった境界を有する 2 次元の名詞によって表されるランドマークの内部にトラジェクターが位置づけられ、「内部」が表される. しかしながら、3 次元を有する名詞はすでに「中」の概念を有しているため、en に比べ「内部」の意味がより明確に表れる dentro de を共起させると冗長的になりうる. それゆえ、「～の中」が表される dentro de の件数は en の件数に比べ著しく少ないことがさまざまな名詞を CREA で検索するなかで明らかになった. このような大きな差がみられるもうひとつの原因として、dentro de は en に比べて空間的意味として用いられるよりも時間的意味として用いられることがあげられる. しかしながら、en と dentro de において、頻度数が少ないことと意味的差異がみられないことは等価ではないため、4.6.5.で agua と coche をランドマークとしてとりあげて、検証をおこなった. その結果、いずれも dentro de の例は少なかったものの、en が共起する場合と dentro de が共起する場合において、文脈に差異があることが観察された.

agua については、内側と外側を想起させる表現、共起する動詞、水中での位置、そして水中でおこなわれる行為あるいは生じる現象としてふさわしいものであるかどうかという 4 つの観点から en と dentro de の差異を観察した. fuera のように内側と外側を想起させる表現が共起している場合には、Hernández(2013)の指摘どおり、dentro de が共起しやすく、ほかにも水面ではなく水中を表している場合、また水中でおこなう行為としては可能ではあるがふさわしくないと考えられる場合には dentro de が共起しやすいようである. 一方で、「入る」にあたる動詞と共起している場合や水面を表している場合、また水中でおこなう行為としてふさわしいと考えられる場合には en と共起しやすいことが例文の観察を通じて確認された.

そして、coche は「ヒトを輸送するためのモノ」という辞書的定義を確認したあとで、移動手段の場合、「入る」にあたる動詞と共起する場合、「存在や所在」を表す動詞と共起する場合に分類して観察をおこなった. en と共起する場合には、移動が示唆される一方で、dentro de と共起する場合には移動の概念は示唆されず、ただ「内部」という空間的位置が示される. したがって、これまでの名詞と同じく、車に対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合には en と共起しやすい一方で、非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合には dentro de と共起しやすいと結論づけた. なお、日本語の「病院に入れる」と「病院の中に入れる」の対立にみられるような差異が観察されると予想され、これらの名詞以外にもたとえば、casa や hospital も同じように検証をおこなったものの、スペイン語ではそのような差異は確認されなかった. 日本語の「病院に入

れる」は概して「入院させる」と解釈されるが、このようなメトニミー的解釈がなされるのは、スペイン語においては 4.4.で述べたように前置詞 a と共起する場合であり、このことは Ibarretxe-Antuñano(2004)によって指摘されている. つまり、en にはそのメトニミー的解釈を表す機能がないため、en と dentro de では、「病院に入れる」と「病院の中に入れる」と同様の対立がみられないと考えられる.

以上、en と dentro de の差異に関してまとめをおこなった. ここで、本論文で得られた結論と先行研究である Hernández(2013)の結論を比較すると、Hernández(2013)はランドマークの形状の異なるものを選択して、en と dentro de の意味的差異を分析している. Hernández(2013)はランドマークとして、国のような領域を表す名詞、レストランのような屋内と屋外を有する建造物、そして飛行機のような非開放的な交通機関を選択し、結論として境界が明示される場合、そして内部と外部が際立つ場合に dentro de が共起しやすいと述べている. この主張は en と dentro de の意味的差異であるものの、空間的意味の差異にとどまっている. それに対して、本論文では実際に en と dentro de が用いられている例文を観察しながら、名詞の百科事典的知識に注目し、その「用途性」によって en と dentro de が選択されることを示すことで、空間的意味以外の差異が見受けられることを明らかにした.

5. 前置詞 en の意味範囲に関する考察

5.1. はじめに

第 4 章では、en とその類義語と考えられている a, sobre, dentro de それぞれの語あるいは語句を比較することで、en との差異や選択の傾向に関する考察をおこなった. そこで本章では、実際に en はどのような条件において出現し、どのような意味を有するのか第 4 章で得られた各類義語との比較をまとめながら考察をおこなう.

5.2. en の意味を明確にする要素

前置詞 en はそれ単独で意味を有しながらも、その意味は動詞やランドマークなどの他の要素によってより明確なものになるという立場で論を進めているが、それぞれの要素のなかでも en の意味を決定づける強さが異なると考えられる. 本節では en の意味を明確にする要素をその強さの順に記述し、特徴をまとめる.

5.2.1. 動詞が en を要求する場合

第 3 章で Morera Pérez(1988)の記述を確認した際に述べたとおり、動詞自体が en を要求する場合は en の意味は動詞の意味に依拠する. たとえば、(303)は meter『入れる』が用いられているが、meter は en を要求するのと同時にランドマークに 3 次元の物体を要求するため、もちろんこの場合の en は「内部」を表す. 一方、(303)と同じ内容を表していると考えられる(304)では poner が用いられているが、この動詞は en を要求しないため、en の意味は動詞よりも en と共起する名詞、つまり(304)においては saco『袋』によって決定づけられていると考えられる.

(303) Lo metió en el saco. 『彼はそれを袋に入れた. 』 (=(242))

(304) Lo puso en el saco. 『彼はそれを袋に入れた. 』 (=(243))

—Cifuentes Honrubia (1996: 124) 太字は筆者による

動詞が特定の前置詞を要求する場合には、前置詞の意味とその動詞の意味内容は類似することが観察されること、そして動詞や名詞の意味内容によって選択される前置詞が決定されることが RAE (2009)において述べられている. 後者の点について、たとえば引用文中にあげられている sacar『取り出す』は、その「取り出す」起点を動詞が要求することから、「起点」の意味を

含む前置詞 de が要求されるのである.

> La preposición seleccionada y la palabra que la selecciona manifiestan a menudo significados muy próximos. En efecto, se ha observado que verbos que comparten aspectos de su significado toman regímenes introducidos por la misma preposición, semánticamente cercana a ellos.
>
> 『選択された前置詞とそれを選択する語はしばしばかなり近い意味を有する. 実際、その前置詞の意味の一部を共有する動詞は、意味的にその動詞に近い前置詞によって導かれる被制辞をとることが観察されている. 』
>
> —RAE (2009: 2717–2718)

> Desde el punto de vista semántico, resulta natural que el verbo sacar seleccione, entre otras, la preposición de, que denota 'lugar de origen' [...]. El complemento aporta, pues, un requisito semántico de la base, incluso uno de los componentes de su propio significado. Es también esperable que basarse seleccione la preposición en, que el sustantivo tratado se construya con sobre o acerca de, o que los verbos de elección (elegir, escoger, seleccionar) lo hagan frecuentemente con la preposición entre [...]
>
> 『意味論的観点から、動詞 sacar はもっぱら前置詞 de を選択し、「起点」を表すのが自然である(中略). よって、補語はベースの意味的条件、さらにはそれ自身の意味の構成要素のひとつを提供する. 同じように、basarse は前置詞 en を選択し、名詞 tratado は sobre あるいは acerca de と共起し、選択を表す動詞(elegir, escoger, seleccionar)は頻繁に前置詞 entre と共起する』
>
> —RAE (2009: 2718–2719)

動詞の意味内容と前置詞の意味は類似するという RAE(2009)の指摘に基づいて en を観察すると、meter などの「入れる」あるいは「入る」ことを意味する動詞と en は共起するという記述が Morera Pérez(1988)や Fernández López(1999)などの多くの先行研究においてみられる.

> Con verbos que signifiquen 'interiorización', como, por ejemplo, entrar, meter, penetrar, introducir, irrumpir, etc., en desarrolla el sentido 'situación final del movimiento verbal', condicionada por el valor 'terminativo' de los vocablos en cuestión.
>
> 『「内部に入ること」を意味する動詞、たとえば「入る」、「入れる」、「浸透する」、「導入する」、「押し入る」などといった語がともなうと、en は「動詞の移動の終点」の意味になるが、これはこれらの動詞の終止相の意味によって条件づけられる. 』
>
> —Morera Pérez (1988: 363)

> Con verbos que indican penetración introduce el lugar hacia el interior del cual se produce el movimiento:
>
> 『入りこむことを示す動詞とともに、(前置詞 en は)場所を導き、その場所の内部に向かって移動が生じる. 』

(305) Se encontró a su padre cuando entraba en casa.
『彼は自宅に入ろうとしたとき、父親に出くわした.』

(306) Mételo en la caja del fondo. 『それを奥の箱に入れなさい.』

—Fernández López (1999: 35)

Morera Pérez(1988)や Fernández López(1999)の記述にみられるように、動詞の意味を基準にして前置詞の意味を観察する研究はこれまでに数多くおこなわれてきたが、このように動詞によって前置詞が決定される場合には、その前置詞の意味が動詞の意味内容に依拠するため、本来の前置詞の意味を観察することが難しくなると考えられる. したがって、本論文では前置詞あるいは前置詞句と共起するランドマークを中心に観察し、そのランドマークに対する行為によって選択される前置詞あるいは前置詞句が異なることを第 4 章において明らかにした. たとえば以下の(307)～(310)のように「(ヒトが)モノをテーブルに／床に置く」ことが表される場合、en も sobre も共起可能であるものの、同じ dejar『置く』であっても以下の表 22 によれば、mesa の場合には sobre と共起しやすい一方で、suelo のときには en と共起しやすく、en と sobre の頻度に違いが生じる. つまり、動詞だけではなく、共起する名詞が前置詞の選択に何らかの影響をおよぼしていると考えられる.

(307) Las dos mujeres ya reían con él cuando yo saqué mi dinero del bolsillo del pantalón y lo dejé en la mesa y salí para volver a casa con Luisa.
『私がズボンのポケットからお金を取り出して、それをテーブルに置いて、ルイサと家に帰るよう外に出たとき、2 人の女性は彼と一緒にすでに笑っていた.』

(308) Primero va a la cocina y deja sobre la mesa el bolso de la compra.
『まず、彼はキッチンに行き、テーブルの上に買い物用の手提げ袋を置く.』

(309) El viajero deja en el suelo su mochila y se sienta en el borde de la presa.
『旅人は自分のリュックを地面に置き、貯水池のへりに座る.』

(310) Encendieron una lámpara de seda y la dejaron sobre el suelo:
『彼らはシルクシェードのランプをつけ、それを床の上に置いた.』

—CREA

検索語句	例文数	dejar と共起	例文数に対する比率
en la mesa	476	34	7%
sobre la mesa	764	148	19%
en el suelo	253	13	5%
sobre el suelo	88	2	2%

表 22　各検索語句に対して dejar と共起する例文数とその比率[89]

こうして、本論文では動詞が前置詞を要求しない場合には、共起するランドマークの特徴によって前置詞の意味が変化しうることを主張しているが、以下ではその意味に変化をもたらす要素を観察する.

5.2.2. ランドマークの形状

en の意味を明確にする、動詞以外の要素として最初に考えられるのはランドマークにあたる語句の特徴、とりわけランドマークの形状である. Cifuentes Honrubia(1996)は、先にあげた(304)、そして el saco『袋』の部分を la alfombra『じゅうたん』に交替させた(311)をあげながら、poner は meter と異なり、ランドマークが 2 次元でも 3 次元でも en と共起可能であると述べている. これに加え、(304)と(311)では空間的位置が異なり、前者は「内部」を表すのに対して、後者は「表面の上」を示し、ランドマークの形状によってその意味が異なることもまた述べている.

(304) Lo puso en el saco.　　『彼はそれを袋の中に入れた. 』

(311) Lo puso en la alfombra.　『彼はそれをじゅうたんの上に置いた. 』　(=(245))

—Cifuentes Honrubia (1996: 124) 太字は筆者による

en の意味がランドマークの形状によって異なることについて、Cifuentes Honrubia(1996)は以下のように述べている.

> Así pues, «en» puede usarse para localizar verticalmente sobre una superficie, no importando [...] su relación con el eje vertical universal, y percibiendo esa base como conteniendo perceptivamente el objeto localizado. Al ser los objetos superficies, es claro que éstos no pueden ser grandes, pues si son grandes no son superficies, sino lugares interiores con dimensiones abiertas: pared, leja vs. ciudad, campo.

[89] 検索条件、例文数は 4.5.2.3 および 4.5.2.4 での検索条件をもとにしている.

『en はある表面の上に垂直に位置づけるために用いられるが、(中略)鉛直軸との関係は重要ではなく、位置づけられた物体を知覚的に包含しているものとして認識される. 物体が表面を表す場合は、これらの物体が大きいことはありえないということは明らかであり、もし大きければそれらは表面を表しているのではなく、開けた次元をともなう場所の内部を表す. 前者の例として、壁や備えつけの棚、後者の例として都市や野原があげられる. 』

—Cifuentes Honrubia (1996: 116)

Cifuentes Honrubia(1996)は物体の大きさによって空間的位置が異なることを述べており、大きくない物体の場合には「表面の上」を表すのに対し、大きい場合には開けた次元を有した「内部」を示すと述べている. たとえば、例にあげられている pared『壁』や leja『備えつけの棚』などは物理的な大きさが比較的小さいため、en と共起すると「表面の上」として認識される一方、ciudad『都市』や campo『野原』は先の名詞に比べるとかなり大きいため、表面というよりもむしろ開けた次元を有しているものと認識され、このとき en は「内部」と解釈される. もちろん、en が 3 次元を有する物体と共起する場合には先の(304)のように「内部」の意味で解釈されることが多い. そのため、en が「表面の上」か「内部」かどうかはランドマークが 3 次元であるか 2 次元であるかによって変化し、さらに 2 次元の場合にはランドマークの大きさによって変化しうると考えられる. しかしながら、次元によってランドマークの性質を明確に分類することは容易ではないと思われ、たとえば mesa『テーブル』の表面は 2 次元の物体で、caja『箱』は 3 次元の物体であると容易に認識可能であるが、país『国』や cielo『空』など、Cifuentes Honrubia (1996)が述べる「開けた次元」を有したランドマークはとらえ方によっては 2 次元とも 3 次元とも解釈可能と思われる. 開けた次元を有する例としてあげられている país は、地図をもとに考えれば 2 次元でとらえられるのに対し、領空などを含めた国の空間を容器とみなして考えれば 3 次元としてもとらえることが可能である. つまり、en が表しうる空間的位置の範囲は、ランドマークを 1 次元ととらえうる「隣接」の意味に加え、より 2 次元らしいランドマークが有する「表面の上」から、より 3 次元らしいランドマークが有する「内部」まで連続的であるといえそうであり、それはランドマークの形状のとらえ方によって変化し、その変化に応じて空間的位置も変化するのである.

さらに、ランドマークが 2 次元か 3 次元かという観点に加えて、平面的であるかモノ的であるかによっても en の共起しやすさに差が生じると考えられる. つまり、ランドマークが平面的な場合には en と共起しやすく、モノ的な場合には sobre と共起しやすい. このことに関して、Moreno y Tuts (1998)と Cifuentes Honrubia(1996)は第 4 章でも確認したように、sobre と encima de の意味的差異について考察をおこなっており、トラジェクターとランドマークがひとつのまとまりとみなされれば sobre が、そうでなければ encima de が用いられるという. 本論文で考察した、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている en と、そ

して先行研究において述べられている、トラジェクターとランドマークがまとまりとみなされる場合に用いられる sobre との差はランドマークがモノ的か平面的であるかによるものであると考えられる. 4.5.3.では、モノ的な名詞であると考えられる hombro(s)『肩』、tumba『墓』、caballo『馬』について CREA を用いて考察したが、検証した名詞は少ないものの、caballo を除く 2 つの名詞に関してはモノを載せることを表す場合、en よりも sobre が共起しやすいといえそうである. したがって、このことから mesa, silla, cama といった平面的な名詞とは en が共起しやすく、hombro や tumba のような平面が意識されないモノ的な名詞とは sobre が共起しやすいといえそうである.

本項では、ランドマークの形状が en の意味に影響をあたえることを述べてきたが、概してランドマークが 3 次元である場合には「内部」、2 次元である場合には「表面の上」の意味になる. しかしながら、2 次元であっても mesa のように、より 2 次元らしい名詞もある一方で、país や cielo のように 2 次元とも 3 次元ともとらえられる名詞も存在しており、とらえ方によっては「内部」とも「表面の上」とも解釈が可能であり、それはランドマークの性質によるものであると考えられる. また、「表面の上」であることを表す場合には、どのようなランドマークであっても en が共起するとは限らないことも観察した. すなわち、名詞が平面的ではなく、モノ的で「表面の上」が表される場合には en ではなく sobre が共起しやすいのである.

ところが、本項で検討したとおり、トラジェクターがランドマーク内のどこに位置づけられるかによって en の意味が変化するものの、ランドマークの形状だけでは en の意味は決定されない場合もある. というのも、en の意味をより明確にする要素には、ランドマークの形状のほかに百科事典的知識をもとにしたトラジェクターとランドマークの関係もあると考えられるためである. 次項では、このトラジェクターとランドマークの関係によって en の意味が変化する様子を観察する.

5.2.3. トラジェクターとランドマークの関係

先の項ではランドマークの大きさや形状が en の意味を明確にする要素のひとつであることを確認したが、en の意味を明確にするためにはさらなる要素が必要な場合も考えられる. というのも、たとえランドマークが 3 次元の物体であったとしても、トラジェクターが必ずしもその内部に位置づけられるとは限らないためである. すなわち、トラジェクターとランドマークの百科事典的知識に基づいた 2 つの物体の関係が、トラジェクターにとって最もふさわしい位置を定めるといえるのである. たとえば、(312)では botella『ビン』がトラジェクター、そして nevera『冷蔵庫』がランドマークとして表されているが、冷蔵庫は「内部」を有する 3 次元の物体であることから、この

en は「内部」と解釈されるのが自然であると考えられる．これに対して、(313)はトラジェクターを nota『メモ』と交替させた文であるが、ランドマークが 3 次元であるにもかかわらず、メモと冷蔵庫の百科事典的知識によって、メモを冷蔵庫の中に入れることよりも、メモを冷蔵庫の扉に磁石などで貼りつけることがよりふさわしいと考えられ、ここでの en は「表面の上」と解釈されると考えられる．

(312) He dejado una botella en la nevera. 『私は冷蔵庫にビンを置いた．』

(313) He dejado una nota en la nevera. 『私は冷蔵庫の扉にメモを残した．』

もちろん、このことは「表面の上」と「内部」の意味だけに限られたことではなく、以下の(314)および(315)においてみられるように、en は常に一定の空間的位置を示すとは限らず、トラジェクターとランドマークの関係に応じて、「表面の上」あるいは「隣接」を表す．つまり、(314)では estatua『像』の上に paloma『ハト』がのることは可能かつ自然であると感じられることから、この en は「表面の上」と解釈される．それに対して、(315)では señor『男性』が像の上にのることは物理的に可能であるものの、不自然であるため、この en は「表面の上」よりも「隣接」と解釈されやすいと考えられる．

(314) Las palomas están en la estatua. 『ハトは像の上にいる．』

(315) El señor está en la estatua. 『その男性は像のそばにいる．』

同様のことが、(316)および(317)でも当てはまり、puerta『ドア』に対して niños『子ども』を「内部」や「表面の上」に位置づけることは不自然であると考えられるため、(316)の en は「隣接」を表す．その一方で(317)では、ドアに対して llave『カギ』はカギ穴にいれるものであるという百科事典的知識によって、先の(313)の冷蔵庫とメモの例のようにドアの表面に接触しているのではなく、ドアのカギ穴にささっている様子が表される．

(316) Los niños están en la puerta. 『子どもたちはドアのところにいる．』 (=(38))

(317) La llave está en la puerta. 『カギはドアにささっている．』 (=(39))

以上で確認されるように、ランドマークが同じであってもトラジェクターとの関係性によって、位置づけられる場所が異なる場合がある．さらに、ランドマークとトラジェクターに対する百科事典

的知識が人によって異なることで、第 4 章で引用した(318)のように解釈が異なる場合も考えられる.

(318) A: ¿Has visto mis gafas?
B: Me parece que están en la mesa de la cocina.
A: Ya he vaciado el cajón, pero no las encuentro.
B: Yo no decía en el cajón, creo que las vi encima de la mesa.

『A: 私のメガネ、見た？
B: ダイニングテーブルの上にあると思うけど.
A: もう引き出しの中を見たけど、見つからないよ.
B: 引き出しの中ではないよ、テーブルの上にあるのを見たと思うよ. 』 (=(146))

mesa は机の表面に焦点があてられるため、en la mesa は「テーブルの上」と解釈されることが多いと考えられるものの、A のように「テーブルの中」すなわち「引き出しの中」ととらえられる場合がある. これはたとえば A はいつもメガネをテーブルの中に保管していることとため、「テーブルの中」と解釈している可能性があり、それぞれの人が有する百科事典的知識、ここではメガネを置く場所とテーブルの関係性によって解釈が異なるといえそうである. 言い換えれば、トラジェクターが異なれば、en の解釈が異なることがありうるということである. いずれにしても en の意味が曖昧になる場合は、Cifuentes Honrubia(1996)も述べているとおり、その空間的位置が明確になるように別の表現を用いる必要があり、(318)の B では en を encima de に変えることで「テーブルの上」であることを明確にしている. また、トラジェクターとランドマークの百科事典的知識から導き出される位置関係とは異なる位置関係を示す場合には、en ではなくその類義語が用いられると考えられる. たとえば、先の(313)は「メモは冷蔵庫に入れるものではない」という百科事典的知識によって、メモは冷蔵庫の扉の表面に位置づけられる一方で、(319)のように en を dentro de に交替させることによって、メモを冷蔵庫の内部に位置づけることが可能となる. 同様に、ビンが冷蔵庫の中に位置づけられるのは自然であるため、(320)ではビンが冷蔵庫の内部に位置づけられるが、中には入れずにたとえば冷蔵庫の上に置く場合には(321)のように sobre や encima de と共起させることで位置を明確にすることが可能であると思われる.

(313) He dejado una nota en la nevera. 『私は冷蔵庫にメモを残した. 』

(319) He dejado una nota dentro de la nevera. 『私は冷蔵庫の中にメモを残した. 』

(320) La botella está en la nevera. 『ビンは冷蔵庫にある. 』

(321) La botella está sobre / encima de la nevera. 『ビンは冷蔵庫の上にある. 』

4.5.では en と sobre の対立について、トラジェクターがヒトかモノかで前置詞の選択がおこなわれるのかどうかを検証したが、cama や silla のようにヒトを位置づけることがふさわしい名詞では、ヒトと共起する場合には en、モノと共起する場合には sobre と共起する傾向があることを明らかにした. このように、ランドマークに対する百科事典的知識に基づいて、トラジェクターが位置づけられる場所としてふさわしい場合、ランドマークは en と共起しやすく、可能ではあるもののふさわしくない場合には sobre と共起する傾向があると考えられる. これはヒトとモノとの対立だけではなく、4.5.では検証をおこなわなかったものの、モノを載せる物体である bandeja『トレイ、お盆』についてもいえ、en の場合には(322)や(323)のように食べ物あるいは食器やナプキンなど食事と関連のあるものが共起する傾向があるのに対し、sobre の場合には(324)に見られるような食事とは関係のないものと共起する傾向が観察された[90]. これは、これまでの名詞と同様、bandeja の「食事などをのせて運ぶためのもの」という百科事典的知識によるものであると思われる.

(322) De modo que, cuando ella entraba en la habitación trayendo la comida humeante en la bandeja, a César le embargaba la gratitud; [...]

『だから、彼女がトレイに湯気の立った食事を持って部屋に入ったとき、セサルは感謝の気持ちでいっぱいだった. 』

(323) Toma de la bandeja cuatro tazas con sus platos. Las coloca fuera de la bandeja. [...] Toma una de las tazas y la vuelve a poner en la bandeja.

『トレイからお皿と一緒に 4 つのカップをとる. それらをトレイの外に置く. (中略)カップを 1 つとって、再びトレイに載せる. 』

(324) Casualmente, la placa contaminada con Penicillium estaba encima de las demás y, al colocarlas todas sobre la bandeja donde recogían el material para esterilizar, observó cómo la colonia de estafilococos se descomponía en contacto con el moho.

『ペニシリンで汚染されたプレートが他のプレートの上にあり、消毒するために集められた器具があったトレイの上にそれらすべてを置いたとき、ブドウ球菌のコロニーがカビと接触することで分解される様子を偶然彼は観察した. 』

—CREA

ここまで述べたとおり、前置詞 en の空間的意味を明確にする要素として、そして en が選択される要素として、en が結びつけているトラジェクターとランドマークに対する百科事典的知識が大きな役割を果たしているのである.

[90] CREA での検証結果は以下のとおりである. en la bandeja では 51 件中食事あるいは食事に関連のあるものと共起しているのは 34 件に対して、sobre la bandeja では 20 件中 8 件であった.

5.2.4. ランドマークと動詞の関係

トラジェクターとランドマークの関係に加えて、ランドマークに対する動作がプロトタイプ的か非プロトタイプ的かによっても共起する前置詞が変化しうると考えられる. 4.5.で述べたとおり、ランドマークに対して en と sobre のどちらも共起可能な文脈において、共起する動詞によって表される行為がランドマークに対してプロトタイプ的である場合には en が共起する一方で、非プロトタイプ的である場合には sobre が共起する傾向が観察される. たとえば、(325)では cama『ベッド』に対して tumbarse『横たわる』というプロトタイプ的な行為がなされる一方で、(326)では cama に対してモノである pantalones『ズボン』と camisa『シャツ』を arrojar『投げる』という非プロトタイプ的な行為がなされているため、sobre が共起していると考えられる.

(325) Estoy tumbado en la cama con la mejilla derecha apoyada en la almohada y la mano debajo de la almohada.

『私は、右頬は枕の上にのせ、手は枕の下に入れて、ベッドに横たわっている. 』

(326) Teresa, ajena a él, arrojó los pantalones y la camisa sobre la cama y se detuvo dudosa, observando con atención su guardarropa, cubierta tan sólo con unas ligeras bragas de seda.

『テレサは彼にはお構いなしに、ズボンとシャツをベッドの上に投げ、迷った様子で立ち止まった. そして、シルクのショーツ姿で自分の衣服を注意深く観察していた. 』

—CREA

このように、ランドマークに対する行為がプロトタイプ的であれば en と共起しやすく、そうでない場合には en の類義語と共起しやすい. ただし、これはあくまで傾向であり、非プロトタイプ的な行為であっても en が共起する場合も観察され、反対にプロトタイプ的であっても sobre などが共起する場合も観察されるが、どちらの場合も例は少ない. また、本来プロトタイプ的な行為が想起されない名詞、たとえば suelo については en と sobre の使い分けが観察されず、このような場合にはもっぱら en と共起するようである. なお、2.5.4.において述べたとおり、同様の現象が日本語でも観察され、「上」のような場所を表す相対名詞が共起する場合には、その名詞がない場合に比べて、その行為が非プロトタイプ的であることがいわれている. つまり、(327)はプロトタイプ的な行為であるのに対し、(328)は椅子に対する非プロトタイプ的な行為、たとえば座面であぐらをかく、正座をしている様子などが表されると考えられる.

(327) 椅子に座る

(328) 椅子の上に座る　　—本多 (2013: 113)

以上は、en と sobre の対立において観察されることであるが、en と dentro de に関しては様相が異なり、名詞によってはその差異が認められない場合が多く観察された. というのも、4.5.で確認したとおり、共起する名詞が 3 次元の物体である場合、すでにその名詞自体が「中」の概念を含んでいるためであり、実際に CREA で出現数を観察すると、en と共起する頻度が「中」を表す dentro de に比べてずっと高い. これは日本語でも同様に観察され、荒川(1992)および本多(2013)が「クズカゴニ捨テル」と「クズカゴノ中ニ捨テル」(=(237))をあげながら指摘しているとおり、「～に」と「～の中に」では指し示す状況に差が出ない場合もある. このことに加え、dentro de は空間的意味よりも時間的意味として用いられることが多く、時間を表す表現と実際に共起しやすいことも、dentro de が en に比べて頻度が少ない原因のひとつであると考えられる. しかしながら、ランドマークに対する行為がプロトタイプ的であれば en が、非プロトタイプ的であれば dentro de が共起しやすいことが見受けられた. 本論文ではランドマークのひとつとして coche『車』をとりあげて検証したが、この名詞は「ヒトを輸送するためのもの」であり、(329)のように移動を含意する動詞や(330)の meter のように「入る」、「乗る」にあたる動詞、さらには(331)のように存在、所在を表す動詞が用いられる場合には、en と共起しやすいことが明らかになった. 特に、(330)や(331)は空間的意味として「入る」ことや「存在している」ことが表されているだけではなく、移動することが示唆され、車に対してプロトタイプ的な行為をおこなっているといえる.

(329) Mi amigo se ofrece a llevarme a casa en el coche.
『私の友人はその車で家まで私を送ることを申し出てくれる. 』 (=(288))

(330) Me metí en el coche que había dejado en el parking cercano, y enfilé hacia la avenida Pearson.
『私は近くの駐車場に置いておいた車に乗り、ペアルソン大通りに向かった. 』 (=(291))

(331) Hoy vamos a ir al Taj Mahal. Hay sitio en el coche, ¿os apetece venir?
『今日、私たちはタージマハルに行くつもり. 車に席があるけど、君たちも行きたいかい. 』
(=(296))

その一方で、dentro de と共起する場合は(332)のように coche に対して非プロトタイプ的な行為がおこなわれている例が多くみられ、また、先にあげたような en と共起しやすい動詞が用いられているにもかかわらず、(333)のように移動を示唆しない例もみられた.

(332) Lo vi pasar por la Via del Corso una mañana, a mediodía. Iba de pie dentro del coche descubierto y saludaba con la mano a un lado y otro. Pero a un lado y otro la gente pasaba indiferente, desentendida.

『私はある正午に(イタリアの)コルソ通りを彼が通っているのを見た. オープンカーの中で立っており、あちこちに手を振りながら挨拶をしていた. しかしながら、人々は無関心で、気付かないふりをして通り過ぎていった. 』

(333) -Hice así y metí la mano en el bolso. Pero él ya estaba dentro del coche y sentí una navaja en el cuello.

『「そう言って、ポケットに手を入れたんだ. でも彼はすでに車の中にいて、僕は首にナイフがあるのに気付いた. 」』

(=(299)から一部抜粋)

このように en と sobre だけでなく、en と dentro de についても、両者に差異がみられる場合には en が用いられる場合はランドマークに対してプロトタイプ的な行為がおこなわれるのに対し、sobre あるいは dentro de が用いられる場合は非プロトタイプ的な行為がおこなわれると考えられる. これは日本語における現象について言及している本多(2013)の主張と一致する. すなわち、スペイン語において、en かその同義語である sobre あるいは dentro de が共起するかどうかで差異が生じる場合には、en の場合にはプロトタイプ的な行為であり、sobre や dentro de の場合には非プロトタイプ的な行為を表すが、その逆の現象はみられないのである.

もっとも,「中」がつくかつかないかで指し示す状況に差が出ない場合もあります。
(中略)
しかしながら,「上」「中」がつくかつかないかで差が出る場合には, つかないほうが「ふさわしい行為」を表し, つくほうが「単に可能なだけの行為」を表すことは揺らぎません。
これが逆になる例は見つかっていません。

—本多(2013: 114–115)

ここまで、動詞が en を要求する場合、ランドマークの形状、トラジェクターとランドマークの関係、そしてランドマークと動詞の関係という en の意味を明確にさせる主な 4 つの要素について観察をおこなった. そして、それぞれの要素がどのように en の意味を明確にするのか、そして en が共起せずその類義語である前置詞あるいは前置詞句が共起しやすい場合はどのような場合か、第 4 章でおこなった CREA での検証に基づいて考察をおこない、まとめた.

次節では、本論文の結論として、en の類義語である前置詞あるいは前置詞句と交替する場合を含めて、en の空間的意味の範囲を定める.

5.3. en の意味範囲

最後に、先の 5.2.の内容をもとに en の空間的意味を定め、ここまで比較した a, sobre, dentro de がどのような場合において en と交替しやすいのかをまとめる. 前置詞 en はランドマ

ークに対してトラジェクターを位置づける語であり、その空間的意味は 1. 隣接、2. 表面の上、3. 内部の 3 つに分類可能である. これらの空間的意味は連続的であると考えられることから、これらをまとめて空間的意味とすることも可能であるものの、それぞれの場合において a, sobre, dentro de と交替可能である文脈が存在するため、これら 1〜3 の意味は別義として定める. en が有する 1〜3 の意味は、en を要求する動詞、ランドマークの形状、あるいはランドマークとトラジェクターに対する百科事典的知識といった要素によっていずれかに選択されると考えられる. そして、文脈によって en は a, sobre, dentro de と交替可能な場合が存在するが、en が用いられやすいのかあるいはその類義語が用いられやすいのかについても同様に、ランドマークの形状あるいは、ランドマークとトラジェクターに対する百科事典的知識が大きくかかわっている.

en の意味が明確になる要素のひとつに動詞が en を要求する場合があるが、この場合にはその動詞の意味に共起する前置詞の意味が含まれる、あるいは動詞の意味に類似した前置詞が要求されることが多いため、en 自体の意味は希薄になると考えられる. たとえば、(334)は動詞 meter『入れる』が用いられているが、この動詞の意味自体に「中」が含意されているため、en 自体が意味を有しているというよりはむしろこの場合 en が動詞とランドマークをつなぐ役割を果たしていると思われる. もちろん、ここでの en の意味は「内部」であるが、このように en 自体の意味が希薄になるとみなされることから、これまでの先行研究ではたとえば「meter や entrar のような『〜の中に入れる』を表す動詞と共起することで、en は『内部』を表す」といった記述のように、en と共起する動詞の意味によって前置詞の意味を記述しているものが多くみられた.

(334) Lo metió en el saco. 『彼はそれを袋に入れた. 』 (=(242))

本論文ではこれまでの先行研究とは異なり、動詞よりもむしろ前置詞と共起するランドマークに注目して、前置詞の意味は動詞に限らずランドマークに対する百科事典的知識もまた大きく関係していることを主張している. 前置詞の意味に影響をおよぼすランドマークの要素に、その形状があげられる. ランドマークの形状が 3 次元の場合、トラジェクターがその中に位置づけられることが考えられ、このとき en は「内部」を表し、さらにランドマークがトラジェクターの全部を含む場合と、一部を含む場合で分類が可能である. (335)のようにトラジェクターの一部がランドマークに含まれる場合には en と共起する一方で、(336)のようにランドマークがトラジェクターの全部を含む場合、Hernández(2013)が指摘しているとおり、en は dentro de と交替することが可能である. しかしながら、(337)のように一部を含む場合であっても dentro de と共起している例が、わずかではあるが CREA において確認された. なお、Hernández (2013)は(338)を提示し

ながら、(337)のような例に対して懐疑的な態度を示している.

(335) La lámpara está en el portalámparas. 『電球はソケットにある.』 (=(28)')

(336) La botella está en/ dentro de la heladera. 『ビンは冷蔵庫の中にある.』

—Hernández (2013: 83)

(337) Hay que adentrarse hasta, que el agua llegue al pecho e incluso el cuello, caminar con el agua a esa altura y dar un saltito cada vez que llegue una ola. Se puede permanecer dentro del agua unos 10 minutos, entonces se sale y se recupera calor al sol durante por lo menos 15 minutos.

『水が胸、そして首に浸かるまで進み、水がその高さにある状態で歩き、波が来るたびにジャンプしなければならない. 約 10 分水の中にとどまり、それから水から出て、少なくとも 15 分間は太陽にあたって体を温める.』

(=(280))

(338) ?La lámpara está dentro del portalámparas. 『電球はソケットの中にある.』

—Hernández (2013: 89)

さらに、ランドマークに対する百科事典的知識に注目すると、トラジェクターの位置や行為がプロトタイプ的である場合には en と共起しやすく、そうでない場合には dentro de と共起しやすいことがいえる. たとえば、(339)と(340)は 4.6.5.2.でとりあげた coche『車』がランドマークである例だが、前者のように車に乗って移動することが示唆される場合には en と共起し、一方で後者のように車の内部にとどまって他の行為をし、移動が含意されない場合には dentro de と共起する傾向がみられる.

(339) Tomás se metió en el coche rojo aparcado unos metros más adelante, Cecilia comenzó a seguirle sin ningún disimulo. En Vallecas, Tomás dejó el coche en una plaza y se metió en el primer bar de la esquina, Cecilia hizo lo mismo.

『トマスは数メートル先に停めてあった赤い車に乗った. その彼をセシリアは堂々とつけはじめた. トマスはバリェカスのとある広場に車を停め、角にある最初のバルに入った. セシリアも同じようにした.』

(340) Sus carcajadas y gritos me martillean el cerebro, me encierro dentro del coche después de cambiarme de ropa y quitarme el bañador todavía ligeramente húmedo. ¿Cuánto tiempo habrá pasado desde que ocurrió el percance?

『彼の大笑いと叫び声で私の頭はがんがんする. 私は服を着替えて、まだほんのり濡れていた水着を脱いだ後、車に閉じこもる. あの災難が起きてからどれくらい時間が経っただろう.』

—CREA

もっとも、先の例のようにランドマークが 3 次元である場合には、すでに「中」の概念がランドマークである名詞に含まれており、「中」を表す dentro de を共起させると冗長になりうるため、dentro de の出現数は en に比べて著しく少なく、さらに共起するランドマークによっては意味的差異が認められないものがあった. また、dentro de の出現数が少ない要因として、dentro de が空間的意味よりも時間的意味を表すことが多いこともあげられる. ただし、ランドマークが 3 次元であってもトラジェクターが内部に位置づけられない場合、あるいは内部に位置づけられると不自然になる場合があり、その場合にはランドマークは 2 次元であるとみなされ、トラジェクターは「内部」ではなく、「表面の上」と解釈される.

一方で、ランドマークが 2 次元である場合、あるいはそのようにみなされる場合、トラジェクターはランドマークの表面に位置づけられるため、en は「表面の上」を表すと考えられるが、その際には大きな物体であるのか小さい物体であるのかという物理的な大きさを考慮する必要がある. 大きい物体とされるのは ciudad『都市』、país『国』、cielo『空』などの広がりを有する名詞で、このうち前者 2 つの名詞のように境界が明確に示されるランドマークは dentro de と交替可能である. それに対して、cielo や aire『空気』のように境界が明確でないランドマークは(341)と(342)にみられるようにもっぱら en と共起し、dentro de とは交替できない. このことは dentro del cielo と dentro del aire が CREA において例がみられないことによっても裏づけられる.

(341) Las nubes flotan en el cielo.『空に雲が浮かぶ』

—小池他(編) (2014: s.v. 浮かぶ) 太字は筆者による

(342) El helicóptero se desintegró en el aire.『ヘリコプターは空中分解した』

—小池他(編) (2014: s.v. 空中) 太字は筆者による

このような大きな物体に対して、mesa や cama といった小さい物体がランドマークである場合、トラジェクターはその表面に位置づけられ、en あるいは sobre と共起し、dentro de の場合と同様に、ランドマークに対するトラジェクターの位置やトラジェクターの行為がプロトタイプ的な場合には en と共起しやすく、そうでない場合には sobre が共起しやすい. たとえば、(343)は cama に対して「ヒトが寝る」というプロトタイプ的な行為が表されているため、en と共起している一方で、(344)における「ヒトが立つ」という行為は可能ではあるが cama に対して非プロトタイプ的であるため、sobre と共起している. また、cama や silla のように特定の用途がある場合にはこのような使い分けが認められるものの、suelo のように特定の用途が想定されない場合には前置詞の選

択が cama や silla のようにはっきりとした形では表れず、もっぱら en が用いられる.

(343) Me tumbé en la cama, abrí un libro y emprendí su lectura.

『私はベッドに横たわり、本を開いて、その本を読み始めた. 』

(344) Fatigosamente, pero arrebatado por su excitación, el viejo se pone en pie sobre la cama con el niño en brazos.

『疲れてきって、興奮してばたばたしながら、その老人は子どもを腕に抱えて、ベッドの上に立っている. 』

—CREA

さらにランドマークの大きさだけではなく、ランドマークが平面的であるか、あるいはモノ的であるかによっても en か sobre あるいは encima de の選択がおこなわれることが観察される. ここで平面的な名詞とは、cama, mesa, silla のように平面が際立つ物体を指し、モノ的な名詞とは hombro『肩』や caballo『馬』のように先の名詞に比べて、平面が意識されない物体を指す. このとき、ランドマークが平面的であれば en と共起しやすく、モノ的であれば sobre あるいは encima de が共起しやすいと思われる. そこで、実際に CREA によって、hombro(s)が用いられている例文を検証すると、(345)のように en が共起している例よりも(346)のように sobre と共起している例が多く観察された.

(345) Doña Gloria estaba sentada en un sillón de orejas, con un chal en los hombros y envuelta en una manta blanca desde la cintura hasta los pies.

『グロリア夫人は、ショールを肩にかけ、腰から足にかけて白いマントにくるまり、そでいすに座っていた. 』

(=(212))

(346) Se volvió a colocar la chaqueta sobre los hombros y pasó las manos por los cabellos para alisarlos repetidas veces.

『彼女はジャケットを再び肩にかけて、手ぐしを入れて何度も髪をとかした. 』 (=(213))

この点にランドマークとトラジェクターの関係を加味すると、ランドマークが平面的であり、かつトラジェクターのランドマーク対する行為がプロトタイプ的である場合は en が共起しやすい一方で、非プロトタイプ的である場合には sobre が共起しやすい. これに対して、ランドマークがモノ的で、トラジェクターのランドマーク対する行為がプロトタイプ的である場合は sobre が共起しやすく、そうではない場合には encima de が共起しやすい. この sobre と encima de の関係は Moreno y Tuts(1998)および Cifuentes Honrubia(1996)が主張しているとおりである.

そして、ランドマークが 2 次元かつ、トラジェクターがそのランドマークの表面に位置づけられない場合、あるいはランドマークが広がりを有しない 1 次元の物体である場合、en は「隣接」を表す. このときランドマークは参照点とみなされ、その参照点を中心とした一定の範囲内にトラジェクターが位置づけられる. この「隣接」を表すためには a を用いることも可能であるものの、a が共起可能な名詞は限られることに加えて、「隣接」することでランドマークを利用することが示唆され、メトニミー的解釈がなされることが多い. たとえば、(347)では「ピアノを弾くこと」が示唆されるため a が共起しているが、それに対して(348)におけるバス停は単なる参照点であり、ピアノとは異なって、バス停を利用して何らかの行為をしているわけではないため、a ではなく en と共起していると考えられる.

(347) Julián se sent**ó** al piano del salón y, frente a una intrigada audiencia de quince putillas adolescentes en paños menores, interpret**ó** un nocturno de Chopin.

『フリアンはサロンのピアノに座り、興味津々な聴衆である下着姿の 15 人の若い娼婦たちを前に、ショパンのノクターンを演奏した. 』

(=(122))

(348) Te esperaré en la parada. 『停留所で君を待っているよ. 』

(=(116)) 太字は筆者による

このように動詞が en を要求しない場合には、ランドマークの大きさと形状に加えて、トラジェクターとランドマークとの関係によって en の空間的意味はより明確になり、en の類義語と交替するのである.

本章では、en を決定づける要素について、動詞が en を要求する場合、ランドマークの大きさおよび形状、トラジェクターとランドマークの関係、そしてランドマークと動詞の関係という 4 つの点に注目して考察をおこなった後、実際にそれらの要素が en の意味にどのように影響するのか、en の類義語が交替する場合も含めて観察した. これまでの考察をまとめたものが本章の最後に記載した図 13 である. 図 13 は動詞によって en が要求される場合を除いて、ランドマークの大きさや形状、トラジェクターがどこに位置づけられるのか、そしてトラジェクターとランドマークの百科事典的知識に基づいて en の空間的位置が明確になる様子、そして a, sobre, dentro de と交替しうる場合を表している. en の空間的意味は主に動詞の意味で定められることがこれまでの先行研究で述べられてきたが、動詞の意味だけではなく、前置詞と共起するランドマークやトラジェクターの性質によっても表される意味が変化しうることを本論文では指摘した. これに加えて、en の類義語とされる前置詞や前置詞句は en と常に交替可能であるとは限らず、交替

する場合にはこれまで観察してきたさまざまな要因が考えられ、さらには同じ空間的位置を表している場合であっても意味的差異がみられることを本論文において主張した.

en: ランドマーク(LM)に対してトラジェクター(TR)を位置づける語で、動詞やランドマークとトラジェクターの関係により意味が定められる.

下線は百科事典的知識を反映. ( )内の表現と交替可能であることが多い. [ ]の数字は次ページに記載した例文番号に相当.

- LM が 3 次元
  - TR が LM の中に入る
    - 全部含む
      - LM に対してふさわしいモノ／ヒト／行為『～の中に』[1]
      - LM に対してふさわしくないモノ／ヒト／行為(dentro de)『～の中に』[2]
    - 一部のみ『～に』[3]
  - TR が LM の中に入らない／入るのがふさわしくない ―― 2 次元としてみなされる
- LM が 2 次元
  - TR が大きい物体
    - 境界が明確(dentro de)『～(の中)に』[4]
    - 境界が明確でない『～に』[5]
  - TR が小さい物体
    - TR が LM の上に載る
      - LM が平面的である
        - LM に対してプロトタイプ的な行為『～に』[6]
        - LM に対して非プロトタイプ的な行為(sobre)『～(の上)に』[7]
      - LM がモノ的である
        - LM に対してプロトタイプ的な行為(sobre)『～に』[8]
        - LM に対して非プロトタイプ的な行為(encima de)『～(の上)に』[9]
    - TR が LM の上に載らない
- LM が 1 次元 ―― TR が LM の上に載らない
  - 隣接(近接)
    - メトニミー的解釈あり(a)『～に』[10]
    - メトニミー的解釈なし『～(のそば／のあるところ)に』[11]

図 13　en の意味範囲

[1] La nota está en la nevera. 『メモは冷蔵庫(の扉)にある.』(222a)[91]

[2] La nota está dentro de la nevera. 『メモは冷蔵庫の中にある.』(222b)

[3] La lámpara está en el portalámparas. 『電球はソケットの中にある.』(28)'

[4] A partir de mañana, volar dentro del país será más caro
『明日から、国内における飛行機の運賃はより高くなるだろう』(256a)

[5] El helicóptero se desintegró en el aire. 『ヘリコプターは空中分解した』(342)

[6] Cuando el secretario hubo cerrado la puerta encendió un cigarro, se recostó en la silla.
『秘書がドアを閉めた途端、彼はタバコに火をつけ、イスにもたれた.』(163)

[7] Gregorio arrojó el periódico sobre la silla y se puso en pie.
『グレゴリオはイスに新聞を放り投げ、立ち上がった.』(165)

[8] Pondré flores sobre tu tumba. 『君のお墓に花を供えるつもりだ.』(154a)

[9] Pondré flores encima de tu tumba. 『君のお墓の上に花を置くつもりだ.』(154b)

[10] Julián se sentó al piano del salón y, [...], interpretó un nocturno de Chopin.
『フリアンはサロンのピアノに座り、(中略)ショパンのノクターンを演奏した.』(122)

[11] La vi en la estatua del perro. 『私は犬の像のところで彼女に会った.』(117)

---

[91] ( )内の数字は本論文における例文番号を指す.

6. 総括

本論文では、スペイン語の前置詞 en の中心的意味である空間的意味をとりあげ、en が表しうる空間的意味の範囲に関する考察をおこなった. この前置詞が語彙的意味を有していることは認められるものの、前置詞の意味はそれ自身で表されるのではなく、共起する動詞や名詞などの語句が有する百科事典的知識によってより明確になるものであることを主張した. そして、en とその類義語とされる a, sobre, dentro de とそれぞれ比較しながら、空間的位置の違いおよび交替可能な場合に生じる意味的差異について考察をおこなうことで、en の空間的意味の範囲を明確にした. 本章では各章の内容の要点をまとめながら、本論文の総括をおこなう.

6.1. 第 1 章のまとめ

第 1 章は本論文の導入部分にあたり、本論文の目的を述べた. en の空間的意味は大きく 3 つ、すなわち「内部」、「表面の上」、「隣接」に分けられ、これらの解釈は動詞だけではなく、共起する名詞の性質、つまり百科事典的知識によってなされると考えられる. これらの意味は連続的であると考えられるため、「空間的意味」というひとつの意味にまとめることはもちろん可能であるものの、en の 3 つの意味に対して、dentro de, sobre, a が交替可能である場合がみられることから、これら 3 つの意味を多義的別義として認めることを述べた. これまでの先行研究のなかには、en と dentro de、en と sobre、en と a といったそれぞれの表現の意味に関して比較考察している研究が存在しているが、en が有する空間的範囲が広いことから、その空間的位置をより明確にするために dentro de や sobre が用いられると述べるものがほとんどであった. 言い換えれば、en が類義語と交替する場合、2 つの表現の間には空間的位置の差異しかみられず、それ以外の意味的差異に言及した研究はほとんどみられない. そこで、「形式が異なれば、意味も異なる」という認知意味論の立場に基づいて、en の空間的意味と en と交替可能な前置詞あるいは前置詞句を比較し、交替可能な場合の意味的差異およびその要因、そしてそれらをふまえて en が示しうる空間的意味を体系的に記述するという目的を示した.

6.2. 第 2 章のまとめ

第 2 章では、本論文における理論的枠組みとして認知言語学、とりわけ認知意味論を援用することを述べ、そのなかでも認知言語学の基本となる考え方であるカテゴリー化、プロトタイプ理論、そして本論文で最も重要な概念である百科事典的知識について概観し、スペイン語においてもこれらの理論が援用可能であることを先行研究の記述をもとに確認した. さらに、多義語

の意味分析に必要な概念とされる、メタファーとメトニミーの理論、トラジェクターとランドマークの概念、そしてイメージ・スキーマの概念についても同様に確認をおこなった. 前置詞の意味を視覚的なイメージ・スキーマで表すことは特に英語の前置詞の意味に関する先行研究において盛んにみられる. しかしながら、en のように空間的意味が広い場合にはさまざまなイメージ・スキーマが考えられるため、少なくともこの en の意味をイメージ・スキーマで視覚的に表現するのは難しいと考えられる. そのため、前置詞の意味をこのような幾何学的意味ではなく、機能的意味としてとらえた Vandeloise(1991)の主張を確認した. Vandeloise(1991)のイメージ・スキーマに依拠しない点、そして機能的意味がトラジェクターとランドマークの性質から生じると考察している点については本論文と立場は類似するものの、Vandeloise(1991)をはじめとした一連の研究は同一の前置詞に対しておこなわれており、交替可能な前置詞との比較考察をする場合の方法論ではない. さらに、Vandeloise(2003)では英語の in と on、フランス語の dans と sur の意味に基づいてスペイン語の en の機能はランドマークがトラジェクターを control(支配)するものであると主張しているが、en の意味は英語の in と on やフランス語の dans と sur の意味を単純に合わせたものではないことを考慮していない点に問題があると思われた. そこで本論文では、en の意味を考察するにあたって、視覚的なイメージ・スキーマに依拠することはしないものの、en の意味は幾何学的意味であることを認め、前置詞と共起するさまざまな表現によって、その意味がさらに明確になることを提案した.

続いて後半部では、前置詞の意味分析をおこなうにあたって、前置詞は語彙的意味を有するのか否かについて、スペイン語の前置詞の意味について記述されている先行研究のなかから Alarcos Llorach(1994)と RAE(2009)をとりあげ、本論文でもこれらの先行研究と同様に、前置詞は語彙的意味を有するという立場をとることにした. というのも、前置詞の意味を分析するためには前置詞に意味的内容が含まれていることを前提で議論を進めていく必要があるためである. そのことをふまえて本論文では、前置詞の語彙的意味は共起する表現の百科事典的知識をもとに変化すると主張し、その主張に対するひとつの根拠として、荒川(1992)が考察をおこなっている日本語の「トコロ性」の概念をとりあげた. 荒川(1992)によれば、たとえば「イスに座る」は自然であるのに対し、「イスの上に座る」は「上」がない表現に比べて容認度が下がる. このような荒川(1992)の主張に対し、本多(2013)はモノに対する行為を「ふさわしい行為」と「単に可能である行為」に分類し、ふさわしい場合には「上」などの相対名詞とは共起せず、単に可能である場合には相対名詞と共起しやすいと述べ、荒川(1992)の見解が正しいことを述べている. この日本語の「～に」と「～の上に」の対立は en とその類義語である sobre や dentro de の対立に類

似すると考えられたため、本論文では前置詞と共起するランドマークおよびトラジェクターの百科事典的知識に注目した. そして、トラジェクターのランドマークに対する行為がプロトタイプ的な行為のときには、ランドマークは en と共起するのに対し、非プロトタイプ的な行為のときには en ではなく sobre や dentro de などの類義語と共起するという仮説を提示した.

6.3. 第 3 章のまとめ

第 3 章ではスペイン語の前置詞の意味について体系的に記述された López(1972)および Morera Pérez(1988)を確認し、その方法論について検討した. 前者の López(1972)は各前置詞の空間的位置をイメージ・スキーマに類似した概念を用いて図示しながら、前置詞の意味を体系的に記述している. それに加え、2 語の前置詞のペアをつくり、文法的対立、意味的対立、交替可能な対立という 3 つの点から考察をおこなっている. このように en とその類義語と比較しながら意味分析をおこなう点においては、本論文と方法論が合致しているものの、個々の意味がどのように関連づけられているのかに言及していない点、そして、意味的対立がみられないペアの場合には交替可能な対立なペアと判断し、意味的差異がないものとして考察をおこなっている点が López(1972)の主張にみられる問題点であることを指摘した.

もうひとつの先行研究である Morera Pérez(1988)は、前置詞の意味を意味素性によって定義し、各前置詞の中心となる概念をまとめたうえで、前置詞の意味や用法を詳細に記述している. たとえば en であれば[-sentido] [+ubicación] [+absoluta]『[-方向性] [+位置性] [+絶対性]』の 3 つの意味素性で定義され、その定義に基づいて定められた 41 項目の意味がそれぞれ詳細に記述されている. この意味素性による定義によって他の前置詞との意味的差異が明確になりやすくなるものの、意味素性の組み合わせだけでは意味の記述に限界が生じる点、さらに大量の意味がただ列挙されているのみで、それぞれの意味の関連づけがされていない点に問題がみられた. これに加えて、Morera Pérez(1988)は前置詞と共起しやすい動詞の意味に基づいて前置詞の意味を分類および考察しているため、前置詞の意味というよりもむしろ各前置詞がどのような意味の動詞と共起しやすいのかを記述している点にもまた問題があると考えられた. 以上 2 つの先行研究にみられた問題点に対して、本論文では前置詞の個々の意味が関連づけられること、そして複数の前置詞あるいは前置詞句が交替可能な場合、それぞれの前置詞がどのような状況において用いられるのかを明らかにすることを提案した. さらに、前置詞の意味を分析する際には動詞よりもむしろ en に後置される名詞を中心とした動詞以外の語に注目し、前置詞と共起する名詞や別の語句の百科事典的知識によって前置詞の意味が明確になること

を主張した.

続いて、後半部では en の意味が記述されている 7 つの先行研究をとりあげ、そのなかでも空間的意味に注目し、その記述内容を確認した. いずれの先行研究においても、en の意味として空間的意味が最初に記述されていることが確認されたため、プロトタイプ理論に基づいてこの点を考慮すると、en の中心的意味は空間的意味であることがいえそうである. そして、その空間的意味をどのように記述しているか分類すると、A.「表面の上」の意味を最初に記述し、その後に「内部」の意味を記述しているもの、B. A とは反対に、「内部」の意味を最初に記述し、「表面の上」の意味を記述しているもの、C.「表面の上」と「内部」の意味を曖昧としている、あるいは特に区別せず、単に「場所」の意味として記述しているもの、という 3 つのパタンがみられた. この分類をもとにして、空間的意味のプロトタイプ的意味がどの意味であるかを検討しようと試みたが、A の立場も B の立場もみられ、単純に en の空間的意味のなかでより中心的な意味は「表面の上」あるいは「内部」であるのかを容易に判断がすることができなかった. そこで、本論文では en の意味を C の立場のように「表面の上」と「内部」の意味をあえて区別せず、これらの意味は連続的であるととらえ、前置詞と共起する他の語句によって「表面の上」、「内部」あるいは「隣接」のいずれかの意味に定められることを主張した. なお、これらの先行研究では前置詞の意味のみが記述されており、その意味が共起する語句によって変化するといった記述は確認されなかった.

6.4. 第 4 章のまとめ

第 4 章では、まず en の空間的意味が多義的別義であることを籾山(1993)の記述をもとに確認したのちに、en と a、en と sobre、en と dentro de の 3 つのペアを比較し、ペアにおけるそれぞれの表現の間にみられる意味的差異を明確にすることを試みた. まず、en と a については、先行研究とりわけ Roegiest(1977)の記述を確認し、同書の主張をもとにしながら、a が位置を表すときの特徴を考察したうえで、どのような場合に en と交替可能であるのか、また交替した場合、どのような差異が見受けられるのかを観察した. a は ir『行く』や venir『来る』などの移動動詞と共起する頻度が高い前置詞であるが、このときの a は「方向」を表す. この「方向」の意味はランドマークとの距離がなくなると「隣接」の意味で解釈可能となること、そして、この意味で用いられる際に共起するランドマークは限定的であることを確認した. そのことをふまえて、a が「隣接」の意味の場合に共起しやすいランドマークのなかから、平面を有する名詞である mesa『テーブル』、入り口や出口を表す名詞である puerta『ドア』、隣接することで利用することを示唆する

名詞である piano『ピアノ』と volante『ハンドル』、そして作用性を有する名詞である sol『日光』と fuego『火』という 4 種類の名詞をとりあげ、a と共起可能である要因、そして en と共起する場合と a と共起する場合でみられる差異について考察をおこなった.

まず最初の mesa については、共起させる動詞を sentarse『座る』に限定し、sentarse a la mesa と sentarse en la mesa を比較しながら観察をおこなった. 先行研究では、前者は「隣接」を表す一方で、後者は「表面の上」を表すだけではなく、「隣接」も表すことが可能であると述べられていたが、ヒトがトラジェクターの場合には、sentarse en la mesa はテーブルの上に座ることよりも、テーブルに向かって座ることがほとんどであることを CREA による検証で明らかにした. なお、en la mesa については sobre と比較する際に再度とりあげている.

次に、puerta『ドア』、entrada『入り口』、salida『出口』といった名詞が a と共起可能である要因を考察した. これらの名詞は部屋や空間の境界に存在するものであり、トラジェクターが puerta に位置づけられることによって、puerta を有する部屋や空間に隣接していることを表すことができるため、テーブルに隣接していることを表す a la mesa と同じ空間配置としてみなすことが可能となる. これが puerta や entrada といった名詞が a と共起し、「隣接」が表される要因であると考えられる. この a は en と交替することも可能であり、その場合は部屋などの puerta を有する空間は関係なく、puerta 自体に隣接するととらえられる. つまり、a と en ではランドマークに対するとらえ方が異なるだけで、a でも en でもその空間的位置に差はみられないと考えられる.

続いて、a と共起しやすい名詞の例として piano や volante をあげたが、これらは物理的に隣接していることによって、メトニミー的拡張が生じ、隣接している物体を利用することが示唆される名詞である. このような名詞は a と共起することで、「隣接」という空間的意味に加えて、piano であれば「ピアノを弾く」、volante であれば「運転する」といった隣接しているものを利用した行為を示唆する. 一方、en と共起する場合には概してメトニミー的意味は示されず、もっぱら空間的意味が際立ち、単に隣接していることが示される.

最後の fuego や sol といったとりわけ自然に存在する名詞は、piano や volante とは異なり、「作用性」を有している. たとえば fuego であれば物を燃やす性質や熱を有していることから、al fuego のように a と共起させることで隣接を表しながら、火を使って温める、燃やすという火の性質を利用することが示唆される. この場合の a も en と交替することが可能であるが、en と共起する場合には piano や volante と同様に空間的位置が強調され、「隣接」が表される.

以上のことから、前置詞 a は「方向」の意味から「隣接」の意味を表すようになり、そこからメト

ニミー的意味が拡張し、共起する名詞を利用することで何らかの動作を示唆することが可能になったと考えられる. ただし、隣接していれば a が共起可能であるとは限らず、隣接している名詞を利用することが前提としてあるものと思われる. これまでの先行研究では、a は動的であり、en は静的であるというように共起する動詞の意味が前置詞の意味として記述されていると思われる研究がみられた一方、a にも en にも位置の意味を認め、本論文で述べた「隣接」の意味や「メトニミー」の意味が記述されている研究もみられた. しかしながら、「方向」から「隣接」、「隣接」から「メトニミー」のように、意味間の関連づけがおこなわれている研究、そして「隣接」を表す場合に共起可能な名詞が限定的であり、なぜそれらの名詞は a と共起可能であるのか考察をおこなっている研究は管見によれば確認されなかったため、本論文ではこれまでの先行研究における a の意味に関する記述をまとめながら、それぞれの意味の関連づけをおこない、mesa や puerta といった名詞が a と共起しやすい理由について考察をおこなった. そのうえで、a と en の差異として、a は空間的意味を表しながらもメトニミー的解釈がなされることが多いと述べ、これは共起するランドマークの百科事典的知識によるものであると主張した.

続いて、en と sobre が交替可能である場合の意味的差異について考察をおこなった. 先行研究である Moreno y Tuts(1998)および Cifuentes Honrubia(1996)はこの 2 つの表現と encima de に言及しており、とりわけ sobre と encima de の意味的差異の考察をしている. Cifuentes Honrubia(1996)によれば、sobre はトラジェクターとランドマークが習慣的な関係、つまりこれら 2 つの要素が常に一緒に存在するような関係であれば sobre が共起し、そうでない場合には encima de が共起する. たとえば、Cabalgar sobre el caballo と Cabalgar encima del caballo では前者は馬に乗り慣れていることが示唆され、後者は馬に初めて乗ることが示唆される. このように、sobre と encima de については空間的位置の差だけではなく、意味的差異にも言及している一方で、en と sobre については空間的位置の差に言及するにとどめている. これはおそらく Cabalgar en el caballo という表現も可能であるものの、en と sobre が意味的に等価であるとみなしているためであると思われる. そこで、本論文では第 2 章で提案した仮説が有効であるかを確認するため、ランドマークとして cama『ベッド』、silla『椅子』、mesa『テーブル』、suelo『床』を選択し、en と sobre の選択要因および 2 つの前置詞が交替可能である場合における意味的差異に関する考察をおこなった.

まず前者 2 つの名詞がランドマークの場合、ヒトを位置づけるためのものであるという百科事典的知識によって、ヒトがトラジェクターである場合には en と共起しやすい一方で、モノがトラジェクターである場合には sobre と共起しやすい傾向がみられた. ただし、ヒトがトラジェクターであ

っても、cama や silla に対して「立つ」あるいは「飛び跳ねる」といった非プロトタイプ的な行為をする場合には sobre と共起しやすいことが観察された.

そして、3 つ目の mesa は先の 2 つの名詞とは異なり、mesa が有する平面にトラジェクターを位置づける行為だけではなく、ヒトがその平面に隣接することで食事などの行為も表すことが可能である. この隣接の意味の場合には、a と共起するほうが自然であることは先に述べたとおりであるが、en と共起することも可能である. このとき en が「表面の上」を表す例はあまりみられず、ヒトがテーブルの上に載っていることが表される場合には、もっぱら sobre や encima de が共起する. その一方で、トラジェクターがモノの場合には「置く」にあたる dejar や poner などの動詞が用いられやすく、さらにモノに注目すると、食事に関するものがトラジェクターである場合に en と共起しやすいことが明らかになった. それに対して、sobre や encima de と共起する場合にはその用途や目的に限らずさまざまなモノが位置づけられ、さらに「置く」行為であっても sobre や encima de と共起する場合は「積み上げる」あるいは「広げる」にあたる表現や、「置く」以外の「落とす」あるいは「投げる」といった動詞が共起する例が観察された. したがって mesa についても、mesa に対する行為がプロトタイプ的である場合には en と共起しやすく、そうでない場合には sobre あるいは encima de と共起しやすいことを主張した.

最後にあげた suelo は cama や silla とは異なり、en と共起する例の数が sobre に比べて著しく多いことがコーパスによって明らかになった. また、これまでの名詞と同様にトラジェクターをモノかヒトかで分類すると、en については総数の半分がヒト、半分がモノと分類された一方、sobre についてはモノよりもヒトのほうが共起しやすいことが観察された. しかしながら、モノにおいてもヒトにおいても共起する動詞の意味にしたがって観察したものの、en と sobre の間に大きな差異は認められなかった. これは suelo が mesa などとは異なり、特定の用途が想定されず、プロトタイプ的な行為が見いだしにくいためであると考えられる. この考察によって、en と sobre の間に意味的差異がないというよりはむしろ、同じ動詞が用いられているにもかかわらず、共起する名詞によって en と共起しやすい名詞と sobre と共起しやすい名詞がみられることから、動詞ではなく、共起する名詞が前置詞の選択に大きな影響をおよぼす場合もあると考えられる.

本章の最後では、以上の CREA による en と sobre に関する考察と、Cifuentes Honrubia (1996)および Moreno y Tuts(1998)の sobre と encima de に関する考察を比較した. en と sobre、sobre と encima de というそれぞれの対立をみた場合、それぞれの前者はトラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっているのに対し、後者は非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合に用いられやすいようである. そこで、トラジェクターがランドマー

クに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合に用いられる en と sobre の差に関して、ランドマークが cama や mesa のように平面的であればランドマークは en と共起しやすく、モノ的である場合には sobre と共起しやすいという仮説を提示し、モノ的な名詞であると考えられる hombro(s)『肩』、tumba『墓』、caballo『馬』を選択し、CREA を用いて検証をおこなった. その結果、ランドマークが平面的かつトラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合、ランドマークは en と共起しやすい一方、非プロトタイプ的な行為をおこなっている場合は sobre と共起する傾向がみられた. それに対して、ランドマークがモノ的かつ、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をおこなっている場合、ランドマークは sobre が共起しやすく、非プロトタイプ的である場合には encima de が共起する傾向がみられた. このことから、前置詞の選択は動詞のみによって決定されるのではなく、ランドマークの形状もまた大きく影響すると結論づけた.

最後に、「内部」を表す en と dentro de が交替可能な文脈において、どのような場合に en あるいは dentro de が用いられやすいのか、共起するランドマークに対する百科事典的知識に基づいて考察をおこなった. まず最初に en と dentro de を比較考察している Slager(2010)と Pavón Lucero(1999)の記述を確認した. これらの先行研究によれば、dentro de は en に比べて境界の概念、すなわち内部と外部の境界明示の度合いがより大きい語句であるため、空間的意味において微妙な差異がみられる. このように、en の示す空間的範囲が広いため、dentro de と共起させることでその範囲を制限することが可能であることが述べられているが、いずれの場合においても空間的意味の差異に言及している場合がほとんどであった. 続いて荒川(1992)の述べる日本語の「中」の概念をもとに、スペイン語の「中」の概念について観察すると、日本語と同様にスペイン語の名詞でも「中」は名詞自体にその概念が含まれていることが「平面」に比べると多い. つまり、「中」を有する名詞が en と共起することで「内部」の意味を表すことが可能であり、「内部」の意味がより明確に表れる dentro de と共起すると冗長的になりうる. そのため、前置詞自体が意味を表しているというよりもむしろランドマークの性質が前置詞の意味に大きな影響を与えているといえそうである.

次に、en と dentro de の意味的差異について考察をおこなっている Hernández(2013)の記述を確認した. Hernández(2013)は país『国』、restaurant『レストラン』、avión『飛行機』をランドマークとして選択し、Google によってこれらの名詞と en あるいは dentro de が共起している例を抽出し、en の例であれば dentro de と、反対に dentro de の例であれば en に交替させ、その文が容認できるかどうかを検証している. そして結論として、dentro de が用いられる主な要

因を、境界が明示される場合、また文中において内側と外側の対立を想起する表現が存在している場合に求めた. ただし、この考察はネイティブが有する言語感覚による分析であったため、本論文では Hernández(2013)と同様にランドマークをあらかじめ限定しながらも CREA における出現数に注目しながら、CREA から抽出した例文をなるべく多く検証することで、どのような文脈で en あるいは dentro de が共起しやすいのか考察した. 具体的には、en と dentro de の使用頻度およびその意味的差異について、ランドマークとして用いられている名詞の百科事典的知識と、共起している動詞やその他の表現が見合うものであるかどうかを観察した. 使用頻度の差については、空間的意味で用いられる dentro de の件数は en の件数に比べずっと少ないことが CREA による検索によって明らかになった. このことに関しては「中」の概念がすでに名詞に含まれていることがひとつの要因として考えられ、「内部」が意識される 3 次元の物体に対して「内部」を表す dentro de を共起させると冗長的になるため、dentro de の使用が避けられ、en の使用頻度が高くなると考えられる. また、dentro de は概して空間的意味よりも時間的意味で用いられることが多いことも、dentro de に比べて en の頻度数が高い要因であると考えられる.

しかしながら、件数が少ないことと意味的差異がないことは等価ではないため、本論文では agua と coche をランドマークとして選択し、CREA を用いて検証をおこない、en と dentro de で意味的差異が認められる場合があることを示した. まず agua については内側と外側を想起させる表現、共起する動詞、水中での位置、そして水中で実現する行為あるいは現象としてふさわしいものであるかどうかという、4 つの観点から en と dentro de の差異を観察した. agua もまた dentro de に比べて en のほうが共起しやすいものの、dentro de と共起する場合には en との差異が認められた. まず、dentro y fuera といった表現のように、内側と外側の対立が想起される場合には en ではなく dentro de と共起しやすいことが観察され、Hernández(2013)の主張があらためて確認された. 次に共起する動詞に注目し、「入れる」にあたる動詞と共起している場合には、動詞の意味自体に「中」が含まれると考えられることから、もっぱら en と共起しやすいことが明らかになった. また、水は水面と水中という 2 つの空間的位置を有しているため、水面を表している場合にはもっぱら en と共起する一方で、水中であることを明確にするためには dentro de と共起しやすいことも確認された. そして最後に、水中でおこなわれる行為や水中で生じる現象に注目すると、このような場合にも概して en が共起しているものの、水中でふさわしいと思われない行為、水中で生じるには不自然な現象の場合には dentro de と共起している例が観察された.

一方で、coche についても agua と同様に en と dentro de で使用頻度に大きく差が認められ

たが、そのうえで移動手段の場合、「入る」にあたる動詞と共起する場合、「存在や所在」を表す動詞と共起する場合に分類して、それぞれの観点から考察をおこなった. en と共起する場合には移動が示唆される一方で、dentro de と共起する場合には移動の概念は示唆されず、「内部」という空間的位置を示すだけであることが多い. つまり、これまでの名詞と同じく、車を移動手段としてとらえ、プロトタイプ的な行為をおこなっている場合には en と共起しやすい一方で、移動をともなわない非プロトタイプ的な行為に対しては dentro de と共起しやすいといえるのである. なお、日本語では「中」が付加されるか否かで差が生じる例として、「病院に入れる」と「病院の中に入れる」、「家に入る」と「家の中に入る」という例が本多(2013)においてあげられていたため、スペイン語においてもたとえば en la casa / en el hospital と dentro de la casa / dentro del hospital で同じような意味的差異が観察されると予想されたが、2 つの表現の間に日本語と同じような差異は認められなかった. スペイン語でこのようなメトニミー的解釈がされるのは a と共起する場合であり、en ではそのような解釈がなされないため、en と dentro de では日本語の「病院にいれる」と「病院の中にいれる」と同様の対立がみられないと考えられる.

6.5. 第 5 章のまとめ

第 5 章では、第 4 章で得られた結果に基づいて、本来 en がどのような空間的意味を有していて、それがどのように明確になるか、さらに類義語と交替可能な場合はどのような場合であるのかまとめた. 前置詞 en はランドマークに対してトラジェクターを位置づける語であり、その空間的意味は 1. 隣接、2. 表面の上、3. 内部の 3 つを有していると定義される. この 1〜3 の意味は en 単独ではなく、en と共起しているランドマークや動詞などによって明確になるものと考えられたため、本論文では en の意味を明確にする主な要素として、en を要求する動詞、ランドマークの形状、ランドマークとトラジェクターに対する百科事典的知識をあげ、それぞれの要素について詳述した.

en を要求する動詞にはその動詞の意味に「内部」の意味が含まれていることが多いため、共起する en に意味があるというよりもむしろ動詞がその意味を担っており、en の語彙的意味は希薄になると考えられる. つまり、このときの en は動詞に要求されるだけではなく、動詞の意味によって前置詞の意味が明確になっているのである. これまでの先行研究ではこのように、動詞の意味にしたがって前置詞の意味が記述されることがほとんどであった. しかしながら、動詞の意味だけが en の意味を明確にするのではなく、共起するランドマークやトラジェクターなどの動詞以外の語句もまた en の意味を明確にする要素であると考えられる. 本論文では、動詞以外の

要素に注目して考察をおこなったが、管見によれば少なくともスペイン語の分野において、この観点から考察をおこなっている研究は確認されなかった. 一方、動詞が en を要求しない場合において、en の意味が明確になる要因のひとつにランドマークの大きさがあげられる. このときランドマークが 3 次元であれば「内部」と解釈され、2 次元であれば「表面の上」あるいは「隣接」と解釈されるのが自然であるが、ランドマークの大きさによってその解釈が異なる場合もみられる. いずれの場合においても en で表すことが可能であるものの、空間的位置を明確にするために「表面の上」であれば sobre、「内部」であれば dentro de と交替させることが可能である. また、ランドマークの形状も大きな要素であり、ランドマークが平面的であれば en が、モノ的であれば sobre が共起する傾向があることを明らかにした. ただし、ランドマークの大きさや形状だけでは en の意味が明確にならない場合もあり、その場合にはランドマークとトラジェクターに対する百科事典的知識によって en の意味が変化する. すなわち、トラジェクターがランドマークに対してプロトタイプ的な行為をしている場合には en と共起する傾向があるのに対して、プロトタイプ的な行為ではなく単に可能な行為をしている場合、「表面の上」であれば sobre あるいは encima de と、「内部」であれば dentro de と共起する傾向がみられるのである. また、トラジェクターとランドマークが接触しない場合には、en は隣接を表すが、このとき a と交替する場合がみられる. しかしながら、a と共起可能なランドマークは限定的であり、その場合には空間的位置を表すというよりはむしろメトニミー的解釈がなされることが多い.

前置詞 en の空間的意味は動詞の意味だけで定められるものであるとこれまでの先行研究で述べられてきたが、本論文では動詞の意味だけではなく、前置詞と共起するランドマークやトラジェクターの性質によっても表される意味が変化しうることを指摘した. これに加えて、en の類義語とされる前置詞や前置詞句は en と常に交替可能であるとは限らず、交替する場合にはこれまで観察してきたさまざまな要因が考えられ、さらには同じ空間的位置を表している場合であっても意味的差異がみられることを本論文において主張した.

7. 参考文献

Alarcos Llorach, Emilio (1994) Gramática de la lengua española, Espasa-Calpe.

Bosque, Ignacio y Violeta Demonte (dirs.) (1999) Gramática descriptiva de la lengua española, 3 vols., Espasa-Calpe.

Bruyne, Jacques de (1999) "Las Preposiciones" en Bosque y Demonte (1999) pp.657–703.

Butt, John and Carmen Benjamin (2011[5]) A New Reference Grammar of Modern Spanish, McGraw-Hill.

Cabezas Holgado, Emilio (2015a) La preposición I, Arco Libros.

——————————(2015b) La preposición II, Arco Libros.

Cerrolaza Gili, Óscar (2005) Diccionario práctico de gramática: 800 fichas de uso correcto del español, Edelsa.

Cifuentes Honrubia, José Luis (1988) "Acerca de sobre, encima y arriba: análisis de las condiciones de su empleo", Revista Española de Lingüística Aplicada 4, pp.61–90.

—————————————— (1996) Usos prepositivos en español, Universidad de Murcia.

Company Company, Concepción (dir.) (2014) Sintaxis histórica de la lengua española. Tercera parte: Adverbios, preposiciones y conjunciones. Relaciones interoracionales, 3 vols., Fondo de Cultura Económica y Universidad Nacional Autónoma de México.

Company Company, Concepción y Rodrigo Flores Dávila (2014) "La preposición a", en Concepción Company Company (2014) pp.1195–1339.

Correa-Beningfield, Margarita et al. (2005) "Image schemas vs. Complex Primitives in cross-cultural spatial cognition" in Beate Hamp (ed.) From perception to meaning, Mouton de Gruyter, pp.343–366.

Croft, William and D. Alan Cruse (2004) Cognitive Linguistics, Cambridge University Press. [Trad. cast. Lingüística cognitiva (2008), Akal]

Cuenca, María Josep y Joseph Hilferty (1999) Introducción a la lingüística cognitiva, Ariel.

DRAE(2001): Real Academia Española (2001) Diccionario de la lengua española 22ª edición, Espasa-Calpe.

DRAE(2014): Real Academia Española (2014) Diccionario de la lengua española 23ª edición, Espasa-Calpe.

Espinosa Elorza, Rosa María (2010) Procesos de formación y cambio en las llamadas "palabras gramaticales", San Millán de la Cogolla: Cilengua.

Evans, Vyvyan and Melanie Green (2006) Cognitive Linguistics: An Introduction, Routledge.

Fernández López, María del Carmen (1999) Las preposiciones. Valor y usos. Construcciones preposiciones, Colegio de España.

Fernández Jaén, Jorge (2014) Principios fundamentales de semántica histórica, Arco Libros.

Fillmore, Charles (1975) "An alternative to checklist theories of Meaning", Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, pp.123–131.

García Yebra, Valetín (1988) Claudicación en el uso de preposiciones, Gredos.

Gili Gaya, Samuel (1980[13]) Curso superior de sintaxis española, Biblograf.

Haiman, John (1980) "Dictionaries and Encyclopedias" Lengua 50 (4): pp.329–357.

Hernández, Patricia C. (2013) La locución prepositiva dentro de como marcador de bordes. Una descripción según el enfoque cognitivo-prototípico, Lingüística 29 (1) pp.81–114.

Hernández Díaz, Axel (2014) "La preposición en y entre", en Concepción Company Company (2014) pp.1629–1721.

Ibarretxe-Antuñano, Iraide (2003) Entering in Spanish: Conceptual and semantic properties of entrar en/ a Annual Review of Cognitive Linguistics 1 (1) pp.29–58.

——————————— (2004) "Diferencias semánticas en la alternancia a/ en" J. Varela Zapata, J.M. Oro and J. Anderson (dirs.) Lengua y sociedad: Lingüística aplicada en la era global y multicultural, Universidad de Santiago de Compostela, pp.323–340.

Ibarretxe-Antuñano, Iraide y Javier Valenzuela (dirs.) (2012) Lingüística Cognitiva, Anthropos Editorial.

Johnson, Mark (1987) The Body in the Mind: The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason, University of Chicago Press.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) Metaphors We Lived By, University of Chicago Press. [Trad. cast. Metáforas de la vida cotidiana (1986) Cátedra]

Lakoff, George (1987) Women, fire, and dangerous things, University of Chicago Press.

Langacker, Ronald (1987) Foundations of Cognitive Grammer, vol. I, Stanford University Press.

——————— (1993) "Reference-Point Constructions" Cognitive Linguistics 4 (1) pp.1-38.

López, María Luisa (1972) Problemas y métodos en el análisis de las preposiciones, Gredos.

Maldonado, Ricardo (2012) "La gramática cognitiva", en Ibarretxe-Antuñano y Valenzuela (2012) pp.213–247.

Matte Bon, Francisco (1995a) Gramática comunicativa del español, Vol. I: De la lengua a la idea, Edelsa.

Matte Bon, Francisco (1995b) Gramática comunicativa del español, Vol. II: De la idea a la lengua, Edelsa.

Moreno, Concha y Martina Tuts (1998) Las Preposiciones: valor y función, Sociedad General Española de Librería.

Morera Pérez, Marcial (1988) Estructura semántica del sistema preposicional del español moderno y sus campos de uso, Excmo. Cabildo Insular de Fuerteventura.

Osuna García, Francisco (1991) Función semántica y función sintáctica de las preposiciones, Editorial Librería Ágora.

Pavón Lucero, M.ª Victoria (1999) "Clases de partículas: preposición, conjunción y adverbio", en Bosque y Demonte (1999) pp.565–655.

Peña Cervel, M.ª Sandra (2012) "Los esquemas de imagen", en Ibarretxe-Antuñano y Valenzuela (2012) pp.69–96.

Pottier, Bernard (1966[4]) Introduction *à* l'*é*tude de la morphosyntaxe espagnole, Ediciones Hispanoamericanas.

——————— (1968) Lingüística moderna y filología hispánica, [Versión española de Martín Blanco Álvarez], Gredos.

Real Academia Española (2005) Diccionario panhispánico de dudas, Santillana.

——————— (2016[3]) Diccionario del estudiante, Taurus.

Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2009) Nueva gramática de la lengua española, Espasa-Calpe.

Roegiest, Eugeen (1977) “Hacia una nueva definición semántica de las preposiciones espaciales a y en en español contemporáneo”, Jacob, Daniel et al. (eds.) Romanisches Jahrbuch, XXVIII, Universität Hamburg, pp.225–282.

SALAMANCA: Gutiérrez Cuadrado, Juan (dir.) (1996) Salamanca: Diccionario de la lengua española, Santillana.

Salvá, Vicente (1988) Gramática de la lengua castellana según ahora se habla II, Arco Libros.

Santos Domínguez, Luis Antonio y Rosa María Espinosa Elorza (1996) Manual de semántica histórica, Editorial Sintesis.

Seco, Manuel (2011) Nuevo diccionario de dudas y dificultades de la lengua española, Espasa-Calpe.

Slager, Emile (2010) Las preposiciones en español, Castalia.

Valenzuela, Javier, Iraide Ibarretxe-Antuñano y Joseph Hilferty (2012) “La semántica cognitiva”, en Ibarretxe-Antuñano y Valenzuela (2012) pp.41–68.

Vandeloise, Claude (1986) L'Espace en français, Paris, Seuil.

——————— (1991) Spatial prepositions: A Case Study from French, The University of Chicago Press.

——————— (2003) “Containment, support, and linguistic relativity” in Hubert Cuyckens et al. (eds.), Cognitive Approaches to Lexical Semantics, Mouton de Gruyter, pp.393–425.

——————— (2005) “Force and Function in the Acquisition of the Preposition in” in Laura Carson and John R. Taylor (eds.), Functional Features in Language and Space, Oxford University Press, pp.219–231.

荒川清秀 (1992)「日本語名詞のトコロ(空間)性—中国語との関連で—」大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集 上』くろしお出版 71–94.

上田博人 (2011)『スペイン語文法ハンドブック』研究社.

大堀寿夫 (2002)『認知言語学』東京大学出版会.

河上誓作(編著) (1996)『認知言語学の基礎』研究社.

國廣哲彌 (1982)『意味論の方法』大修館書店.

小池和良他(編) (2014)『和西辞典』小学館.

高垣敏博(監) (2007)『西和中辞典(第 2 版)』小学館.

辻幸夫(編) (2003)『認知言語学への招待』大修館書店.

———— (2013)『新編 認知言語学キーワード事典』研究社.

寺村秀夫 (1968, 1993)「日本語名詞の下位分類」『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』くろしお出版 3–20.

長縄祐弥 (2013)『スペイン語多義語への認知的アプローチ』大阪大学修士論文.

———— (2015a)「時間表現と共起する en と dentro de に関する一考察」Estudios Hispánicos 39: 93–120.

———— (2015b)「前置詞の選択とアフォーダンス」EX ORIENTE 22: 109–132.

———— (2016)「dentro de の空間的意味から時間的意味への拡張について」Estudios Hispánicos 40: 65–82.

野村益寛 (2003)「認知言語学の史的・理論的背景」辻(編) (2003) 17–61.

———— (2014)『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房.

深田智、仲本康一郎 (2008)『概念化と意味の世界』研究社.

本多啓 (2005)『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学からみた文法現象—』東京大学出版会.

——— (2013)『知覚と行為の認知言語学—「私」は自分の外にある—』開拓社.

松本曜(編) (2003)『認知意味論』大修館書店.

松本曜 (2003a)「認知意味論とは何か」松本(編) (2003) 3–16.

——— (2003b)「語の意味」松本(編) (2003) 17–72.

籾山洋介 (1993)「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐって—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』1: 35–57.

———— (2009)「百科事典的意味観」『認知言語学論考』9: 1–35.

籾山洋介、深田智 (2003a)「意味の拡張」松本(編) (2003) 73–134.

———————— (2003b)「多義性」松本(編) (2003) 135–186.

山田善郎 (1995)『中級スペイン文法』白水社.

山梨正明 (1995)『認知文法論』ひつじ書房.

8. 資料体

CREA: REAL ACADEMIA ESPAÑOLA: Banco de datos [en línea] Corpus de referencia del español actual. Disponible en <http://www.rae.es> [Fecha de la

consulta: 1/XII/2017]

Davies, Mark (2002-) Corpus del español [en línea] Disponible en <http://www.corpusdelespanol.org> [Fecha de la consulta: 1/XII/2017]

2017年度博士論文 『スペイン語前置詞の認知意味論的分析ーenを中心にー』 長縄祐弥

本論文に誤りがございました．不注意をお詫びするとともに、以下のように訂正をいたします．
他にもございましたら、お手数ですがご教示ください．

頁	個所	誤	正
7	12-13行	構造が実際に存在していることを示すためにとても明解な例	構造が存在していることが実際に意味することのとても明解な例
7	24-25行	最初に、そして一番頻繁に言及される要素	あるカテゴリーの成員をリストにする作業において、最初に、そして一番頻繁に言及される要素
7	25行	子どもが以前から習得している	子どもが最初に習得している
7	28行	子どものときに習得した要素	子どもが最初に習得する要素
12	19-20行	多義とは、～多義語(polisemia)とよばれている	多義(polisemia)とは、～多義語とよばれている
17	(12)	生産コストの上昇	高い生産コスト
30	15行	if *b* prevents a from moving	if *b* prevents *a* from moving
33	22-23行	状況補語をもたらすという同じ機能を有している	同じ機能の状況補語を有している
40	(c)	妥当な	関連する
43	19行	類義性	類義
45	10, 14行	妙め	炒め
53	17行	プロトタイプ的理論	プロトタイプ理論
60	脚注34	figuraとbase	baseとfigura
61	1行	意味を有することからによって、	意味を有することから、
61	26行	the preposition a to indicate	the preposition *a* to indicate
63	11行	un *localización*	una *localización*
67	脚注38	イスパノアメリカのスペイン語話者たちは	イスパノアメリカでは
73	11行	«Hay un mendigo a (en) » la puerta»	«Hay un mendigo a (en) la puerta»
73	29-30行	とりわけ	個別に
76	21-22行	腕の直接スコープはひじや手であり、さらに手のスコープは指やその関節	腕はひじと手の直接スコープを構成し、さらに手は指とその関節の直接スコープを構成する
76	25-26行	腕の直接スコープはひじや手であるが、手の直接スコープは指とその関節、	腕はひじと手の直接スコープを構成し、さらに手は指とその関節の直接スコープを構成する
76	32行	「指先」や「爪」が「指」の直接スコープ	「指」が「指先」や「爪」の直接スコープ
97	29行	マットレス台や板が置かれた、概して脚がついており、骨組み	概して脚がついている、マットレス台や板が置かれた骨組み
98	22行	camaは	camaには
110	(180)	自分の夕食の残りの中に	自分の夕食の残りに囲まれたテーブルの上に
112	(185)	正午、	正午ごろ、
118	脚注67	彼のテーブル	彼はテーブル
119	(199)	彼女に	彼女は
134	1行	構文で容易に確認ができる	構文が容認されることで容易に確認ができる
136	23行	それぞれ共起する名詞によって活性化させる解釈において	それぞれの前置詞によって活性化された解釈の指示において
146	7行	コーパスを用いて	コーパスを用いて調べ、その結果として
158	1行	件数が別の要因	件数が少ないことに対する別の要因
160	18行	まとめたながら	まとめながら
161	25-26行	特定の用途が想定されるないため、～生じないと考えられた.	特定の用途が想定されず、～生じないためであると考えられた.
166	6-7行	その前置詞の意味	その意味
166	18-19行	補語はベースの意味的条件、～を提供する.	被制辞補語は基本となる要素の意味的必要条件、～をもたらす.
172	13行	保管していることため	保管しているため
183	図13	TRが大きい物体	LMが大きい物体
183	図13	TRが小さい物体	LMが小さい物体